

スの部

ステイ

ステイ

ステイ

始と缺點なし。『淨世の榮は我れ望まじ』(Father, w hater of earthly bliss) は其の一なり。

ステイル リチャード Steel, Richard, 人名 一六七二—一七二九 英國の論

文家。ダブリンに生る。アディンと同じくアイン女王朝の散文壇に一世の指導者なり。一七〇七年『倫敦ガゼット』の主筆となり、〇九年『タットネル』を發行し、一二年『スペクター』を出で、一三年『ガーディアン』を出す。此等の雜誌に於て彼はアディンソンの有力なる補助を得たり。初めスワイフトとも親密なりしが、スワイフトの政見を變更するに及び之を断ちぬ。當時社會の風紀壞亂し、其弊を好尚浮華淫靡に非ずんば殘忍殺伐、世を擧げて風雅人情の何物たるを解せざる有様なりき。ステイルは爲らく、斯る時弊を矯正するの道、唯滑稽戯論の語を以て次第に世人の心理に入り、以て内部より之を感化するに在り。以上の諸雜誌は斯くの如くして出でたる者にして、一世の風化を助けたることを少からず。彼は文思豊にして才氣溢るゝが如く、其説く所よく俚耳に入れり。其爲人稱や激し易くアディンソンの如く圓滿ならざりしが、其熱心専注の性質は彼をして種々の改善的企業に従事せしめたりき。

ステイル Rudolf Ewald 人名 一八〇一—一八六二 獨逸の聖書解釋學者。法律學のため一八一五年イェナ大學に入りしが、翌年轉じて神學を修め、ヤーン及びワグネルを理想とし、ゴッセルを以て文通せり。一八年ハルレに行き學生會の長に選ばれしが、一九年に至り其の愛せし女子の死に遭ひ始めて身を基督に獻ぐる心となり、眞の動機より神學を研究し、柏林大學に入り、出でヨウイツテンベルヒ、カウレ

キにて教師たり、又パーセルの宣教會社にて地位を得、一八二九年フランクレーベンの教師となる。三八年ワグネルのワイヒリンゲンガハツセンに招かれ、四六年之を退き、三年間ワイツテンベルヒにて文學事業に従ひし後、シュコイテイツの管理長とせられ、五九年アイスレーベンの管理長となる。妻はニツチエの女なりき。彼は獨逸譯聖書の研究に趣味を有し、『新舊獨逸譯聖書』(ルター譯聖書の誤謬點)等を著し、四二年にはフォン、マイエルの翻譯の最後出版を助け、五六年には自己の訂正版を出せり。重なる著作は『主耶穌の言』七冊(英譯九冊)にして傳道者に多くの知識を給す。解釋書には『詩篇』より選びたる七十篇の解釋をイザヤにしてイザヤに非ず天使の言、天使の言等あり。論争的著述も存す。

ステイルリング 本名ヨハン ハインリヒ ユング Stilling (Johann Heinrich Jung) 人名 一七四〇—一八一七 獨逸の著述者。神學者見解の一人なりしが、而も小兒の如く單純清濁の心を有し、周囲の苦痛に同情あつきにより、最も平民的な信仰的著作者となれり。ナッザウワグテンに於けるゲルンドに生れ、家甚だ貧しく、少くして一週に二日學校を教へ、四日裁縫業に従ひ、困苦の裡に學問し、數學、拉丁、希臘、希伯來學を修む。或る天主教の僧より一種の眼病を患すの秘法を授けられ、生活の針路一變し、或る富める紳士を治して之に知られ、後其女と婚す。七二年ストラスブルグに行きて醫學を修め、精神學的研究所をなし、醫學士となり、此地にてゲーテ及びヘルデルと相知り、其の見解を得く高くするを得、其より眼科醫としてエルベルフに任じ、此にてゲーテの

助を得つゝ、『ハー』(ステイルリングス、ユーゲンデ)を公にせしが、其の詩趣と事實と處々眞との錯綜を得忽ち第一流の著者の名を得す。彼は眞實を作る癖ありしが、其の生活を眞實に對する事と貧者の眼病を治することと信仰的著作をなすこととに分ち送れり。七八年カイセルスラウテルン中學の財政學教授となり、八二年ハイデルベルヒの、八七年マールブルヒの同教授となる。一八〇五年バーテン大侯の樞密官に任ぜられ、始めて財政總より免れ、眼科醫及び信仰的著作者たる才力を發揮す。彼は三回結婚せしが何時も幸福なりき。老いては實業の生活の中に凡ての幸福向きする暇ありたり。著書の最も成功せしは神學的物語なり。『モルケンタウの傳』(リンデンのテオドル)、『フアーレンドルンのフロレンチン』等にして、文學的に價値大なるは自叙傳的文書なり。神學者には『黙示録解釋』、『勝利の歴史』、『スウェーデンボルグ説を幾分基礎せざる』(『靈知』あり)。

ステイルリングフリード エドワルド Stillingfleet, Edward 人名 一六三三—一六九〇 英國の監督。劍橋にて教育を受け、一六五三年其フエローとせらる。王朝回復後直ちに『イレニクム』、即ち教會の齋戒を教ふ『武器』を著す。教會の分争を治するに足るべき思想にして、公同の精神にて充つ。翌年『オリギネス』、『サクレ』一名聖書の神學的權威に關する基督敎信仰の合理的議論を著し、聖書を異敎文書と比べ、異敎文書の信するに足らぬを論じ、モーセの知識と信仰との差を掲げ、預言者の神氣を受けたる事、預言的的中せる事及び天地創造、人類歴史等に關することを論ぜり。其論既に多くの點に於て廢れたりと雖も尚思想の大、知識の博、取るべきもの少からず。六五年『プロテスタン

スの部

ステバ

ステフ

ステル

ト宗教の基礎の合理的論議』を出して當時上流に天主教が浸染し居りし風潮の中に屹立し、其他にも天主教攻撃の文書を著す。『分離の悲劇』は以前の如き調和の精神なく、オーエン、パックスター等の非國教徒の議論を起せり。されど彼は直に其非を悟りワグネル、ホーの言を是とせり。九五年非國教徒間には非道徳律法に關して議論の分裂あり。或者はステイルリングフリードに訴ふ。以て彼が其の性格に應じたる調和者の行動を再び取りしを知るべし。彼は心意活潑なりしが、凡て當時の大論争に就ては默する能はず、之に加はりぬ。九七年『三位一體の教義の表示に就て』を著す。彼は又形而上學者たり。ロツクの『人間理解論』を批評し、ロツクの反駁を受けて又再駁す。彼は一六八九年ワグネルセスタ一の監督となり、又新舊改訂委員となり、其他教職として多くの名譽を得たり。

ステバノ Stephen 人名 基督教最初の殉教者。エルサレムの幼稚なる教會に於て、希臘方言の猶太人等その宣講等日々の篤信に遺漏されしを以て、希伯來方言の猶太人に向ひ不平を洩したる事ありければ、此事を適當に司ごらざんがため七人の兄弟を選びたりしが、ステバノは其の一人なりき(徒六の五)。而して彼は其の職分の外、道の宣教師並に奇跡を行ふ人として最も拔群の人物なりき。彼は基督教の七十人の弟子の一人なりしと稱する者あれ共、果して其然るや否明ならず。又彼の名は希臘名稱を表はせりと雖も、彼が果して希臘人なりしや否明ならず。彼の品性と才能とは使徒行傳六章に記載せられ、信仰と聖靈に満てる人、智慧並に實に依りて語りし人』と稱せられ、保羅は『爾の証人ステバノ』と云へり(徒廿二の廿)。彼は奇跡を行ひしため敵對

者を惹起し(六の八)。其智慧と其強き主義とは敵をして彼を誹謗せしめ、遂に捕へられて集議所に引渡され、聖書と律法とを誘役する人、ナデレの耶穌は此所を毀ち又モーセの我等に授けし所の例を改革すべしと云へる人にて小理由によりて訴へられたり。彼は此等の告發を受けて少しも騒ぐことなく、泰然自若として衆人の前に其の面天使の面如く輝きしといふ(六の九—一五)。祭司長の質問に對する彼の論議は雄大にして、彼は先祖アブラハムの召よりモーセ、モーセを経てダビデに至り、ダビデよりソロモン神殿の建築に至る迄の由來を述べ來りて、選民の歴史を概論し、最後に大膽に『強項にして心と耳に割禮を受ざる者』として猶太人の頭頂を責め、彼等は多くの預言者をして祖沈痛なる斷言をなすや(七の一—五十三)。一層敵の憤怒を激發して、衆目悉くステバノに向ひけるが、彼は天開けて神の右に人の子の立てるを認めたることを告白せり。於此民衆益々怒り彼を邑より逐出し石を以て彼をうてり。彼れうたる時祈りて『主耶穌よ、我が靈魂を受け給へ』と云ひ、又跪きて『主よ此罪を彼等に負はしむる勿れ』と云ひ畢りて息絶たり。是れ實に教會史上に於ける最初の殉教者なりき。

ステファン Martin 人名 一七七七—一八四六 獨逸の宗教師。卑賤の出にして早くより職業者に奉公す。一七九八年アレクサウラに行き敬虔派と親しみ、終に大學豫備校に入り、一八〇四年より九年迄ハルレ及びライプツヒにて終途に由りて神學を研究し、而も精力をあらはし、一〇年ドレスデンにてゴヘミヤ道放者の教會の教師とせられ、説教及び教會組織に非凡の力ある

を顯はす。彼はモラヴィア同教會との關係を絶ち、且つ其の運動は分離的性質を示せしも會衆は激増し、英才の人々及び眞面目なる人々非常に彼を崇拜するに至る。ムルチ穀谷には到る所傳道地あり。彼は己が教育せし青年宣教師を送り出し、ワグネル、ムルヒ及びバーテンにすら其徒起るに至る。されどドレスデンの普通の教職者等とは屢々争を起し、其の個人的習慣や方法のため警察吏と衝突するに至り、一八三八年の春には彼がもて教師たりし教會公然彼を不潔罪及び詐欺罪にて訴へしかば、彼はほそかに市を去てアレクメンに免れ、アレクメンにて七百に下らざる同志を得たり。此の徒はステファン徒と呼ばれ、彼は其の首長として十一月米國に渡航せり。此時彼の性格の底深く惡の滯み居りしこと愈々分明となりぬ。彼はニウカレアンズ到着前に自ら任命して監督となり、移住資金の管理者となり、一行がセントルイスに二月滞在せし間に自らは全く監督の生活をなせり。ミソリ州ペリー縣ワイツテンベルヒにて終に地面を買ひ、三九年の四月監督一行の大部分は之に移りしが、僅に一月を經し時曾て訴へられし事件よりは外の事にて、又ドレスデンの他の會員より訴へられ、其の訴の正當なる事明となりて監督より落され除名せらる。去れど種々の困難にも拘はらず其徒は増し、ルーテル派高派教會のミソリ型を中心となり、記號書に拘泥する特色とし、セントルイスのコンコルディア學院を本部とせり。ステファンは基督教信仰と我等の時代に與へられしもの』等を著はせり。

ステルリイ Peter 人名 一六七二—一七二九 英國清敎徒神學者。タルレーに生れ劍橋のイムマヌエル、カレッジにて教育を

スの部

ステン

受け、一六三六年其のフェローに選ばれる。...

ステンネット

人名 一六六三—一七二三 英國の讃美歌作者。...

ステンネット

人名 一七二七—一七九五 英國の讃美歌作者。...

宇宙の理性、換言すれば神の宿れる者といふも可也。...

美歌三十四を添ひたり。我が救ひ主を思ひ見れば。...

ストア學派

Stoicism. 希臘哲學

の一派。ツェノノン(前三四二—二七〇)の創立に係る。...

ストア學派

に著しくなれり。羅馬帝政時代には此學派は盛に羅馬に行はれたる。...

ストア學派

に從ひ、其生角を去るの必要を感じ、所謂無常の者をば、無記の者、或る條件の下に多少の價值を置きて然るべきものとの二に分ら、健康、地位、名譽の如きは道徳を害せざる限りを求むべき多少の價值ある者を見るに至れり。...

に從ひ、其生角を去るの必要を感じ、所謂無常の者をば、無記の者、或る條件の下に多少の價值を置きて然るべきものとの二に分ら、健康、地位、名譽の如きは道徳を害せざる限りを求むべき多少の價值ある者を見るに至れり。...

ストイデル

人名 一七九一—一八三三 獨逸神學家。...

ストイデル

人名 一七九一—一八三三 獨逸神學家。...

ストイデル

人名 一七九一—一八三三 獨逸神學家。...

ストイ

に至れり。羅馬のストア學派中にて最も有名なる者セネカ(前六—後六)エピクテタス(六〇—一〇二)マルクス、アウレリウス(一二—一八〇)とす。...

ストア學派

Stoicism. 希臘哲學

ストア學派の特色は、希臘の他の哲學派が主知的なるに反し、主意的なるに在り。故に此派の學者は學問の目的を以て純理思辨の考究に在りてならず、實踐に在りてなり。...

ストア學派

に著しくなれり。羅馬帝政時代には此學派は盛に羅馬に行はれたる。...

ストア學派

に從ひ、其生角を去るの必要を感じ、所謂無常の者をば、無記の者、或る條件の下に多少の價值を置きて然るべきものとの二に分ら、健康、地位、名譽の如きは道徳を害せざる限りを求むべき多少の價值ある者を見るに至れり。...

ストイデル

人名 一七九一—一八三三 獨逸神學家。...

ストイデル

人名 一七九一—一八三三 獨逸神學家。...

ストイデル

人名 一七九一—一八三三 獨逸神學家。...

ストイ

に至れり。羅馬のストア學派中にて最も有名なる者セネカ(前六—後六)エピクテタス(六〇—一〇二)マルクス、アウレリウス(一二—一八〇)とす。...

スの部

ストア學派

宇宙の理性、換言すれば神の宿れる者といふも可也。...

に從ひ、其生角を去るの必要を感じ、所謂無常の者をば、無記の者、或る條件の下に多少の價值を置きて然るべきものとの二に分ら、健康、地位、名譽の如きは道徳を害せざる限りを求むべき多少の價值ある者を見るに至れり。...

に至れり。羅馬のストア學派中にて最も有名なる者セネカ(前六—後六)エピクテタス(六〇—一〇二)マルクス、アウレリウス(一二—一八〇)とす。...

スの部

ストラ

臨時教授たり。次で伯林に於てシユライエルト...

ストラ

ツケ。ラング其他も明白にストラウスの説を否認し...

ストラ

サムエル、ライマウス、ゲオルク、ア六演説等あり...

スの部

ストリ。ストル

なり、六〇年父に繼いでロズニースの牧師となる...

ストロ

ヨーハン・ゲグンの丁法宮廷に行き、八九年には丁...

スバル

たる原因となり、後の二十年間は彼は信理復興...

スノ部

スバル

學及び基督教論の教授たり。三十年間邊會にて...

スパン

たると共に敬虔深く、節制及び謙遜の人にして、實...

スピノ

作ること與り、其の統治局長なる。テイツツエ...

スバルローは米國監督教會内の福音派の最も有能な...

スパンゲンベルヒ アウグスツス ユン トリープ...

スピツタ カール ヨハン フィリップ Spitta, Karl Johann Philip...

スノ部

スピノ

スピノザ パール ユック デー Spinoza, Baruch de Spinoza...

スピノ

れば存在の絶対的肯定なればなり。實體は其の在り...

スピノ

し。此に於て natura naturans とは世界の原因なり...

スビノ

スビノ

スビノ

スビノの スプ

相當の思想を有する場合、即ち感識の力の下に在る場合に心は受動的なり。之より脱離し完全境に達せんとする努力が意志と稱せらる。肉體に就て言へば欲求なり。心が一層の完全に移るが喜にして、之に反するが悲なり。外部的原因の思想に由て作られたる喜が愛にして、外部的原因の思想を作らざる悲が憎なり。他の情は皆之より出づ。人の奴隷状態は其の情を制する能はざるより存す。善惡に關する普通の觀念は誤れり。善惡の語は極端的に自存するものを指せる名に非ず。我等が事物を比較するより起る觀念なり。善と惡とは極端のならず、何とされば何物も神の意に反して起らざればなり。故に善惡は我等の觀念内のみに存する一否定なり。神の中に惡の思想なし。若し即何等かの實在ならば之を作りしは神なり。善は我等が我等に有用なりと確知するもの、惡は善に違つるを妨ぐと我等の確知せるものなり。善と惡といふは我等の天性にかなへるものをせずる力に外ならず。我は凡そ法律に背きて罪を犯さず、又罪を償せず、是れ我が性に反すべきなり。理性は天性に反するものを求めず。人を一層の完全に進むるものは眞實有用のものなり。されど理性の眞性質は知識なれば、知識のために設立つもの、外には要なし。最高の善は神を知る知識なり。善は幾分善きものなり。悲は幾分善きものなり。凡て悲を含むもの即ち憐憫和懐憐憫等又同じ。受動的の情は其の明白なる思想の得らるる時受動たらざるに至る。凡ての人は此の受動より脱離し得べし、何とされば其の身體の受動に就て明白なる思想を有するを得ればなり。事物を必至なりと見れば、此境に達し得べし。自己の受動を知る人は喜が有りて、同時に神の思想を有す。即ち神を受す。此の愛即ち神に就ての知的

愛は第三種の思想様式なり。之に由て人は永遠の存在として神を知る。神は凡ての受動を超越するが故に、押し詰めて言へば愛も情もなし。神より愛せられんと思ふは、神を神ならざらしめんとするなり。去れど人の思想は實は神の思想なるが故に、人が神を受するは神の無限の自愛の一部なり。祝福と自由は神に對する此の永遠の愛に於て成り立てり。此の意味にて人は永遠(不滅)なりと言ひ得べし。永遠の思想は時と空間とに關係なし。識の第三種にて物を知れば受動より脱離し、死を恐れざるべし。彼の精神は永遠なり。精神の此の永遠なる部分の理性なり、此部無くなれば感識となる。トラスコフ以上は「エチカ」に在る哲學なるが「神學政治小」著にては、思想の自由を辯護し、人の意見は面の異なる如く異れば、宗教意見をば其が益を生ずる限りは之を本人に委せ置かざるべからず。國家の之を愛ふるを要せず。信仰、宗教、神學は實際的目的を有し、理性に由て支配せらるるなり。哲學の從、徳義、祝福に至らんとせんとするものなり。哲學の目的は眞理を示すにあり。哲學と神學とは共通の所なし。宗教の對象としての神は人間の存在者にして、人との關係に由て考へらる。哲學の對象としての神は人間の存在者に非ず、神自身との關係に由て考へらる。聖書は神の定義を與へず、唯だ義と愛の屬性を啓示す。神は聖書に於ては治者とし、正しく、慈あるもの等として感識に示さる。哲學にては斯かる屬性を用ふる能はず。故に神學は哲學を支配する能はず。若し然らば平和なき妄信とならん。かくせば勿論國家危ふく、國家は神學の優越權を許さるべしと論ぜり。同書中の聖書批評と基督人格論また面白し。彼の眞實の思想は近世哲學に大變化を及

ぼし、フイヒテ。ジェリシカ。ジュライエルマツヘル。ヘーゲル等は皆な彼に負ふ所多し。一時は彼の哲學を以て無神論なりとまで非難せし者も少かりしが、漸くにして其の説は理解せられ、其の多くの部分は容れらるるに至れり。

スビノラ クリストヴァル ローハース **人名** Spinola, Christoval Lopez de 一六九五死 西班牙の教會合同論者。マドリードにてフランシスコ派に入り、西班牙より嫁せしレオポルド一世の妻の告白師として進納に行き、一六八五年進納的ノイスタットの監督とせらる。平和を以て羅馬教會とプロテスタント諸教會を合同せしめんことを一生の思想とし、一時は獨逸プロテスタント諸宮廷の宗教に無頓着なること、告白上の論争を上流が嫌厭せしこと、ヘルムシュタットの性格が温和なりし等のため彼の靈力も望める如く見ゆ。一六八三年會合同せしスビノラを以て見ゆ。神學者等相會し、皇帝も法王も此の計劃を賛し居りしし、眞面目なる羅馬教徒はスビノラを一愚者と目し、プロテスタント徒はモラウクスを嘲罵し居たり。されど交渉はスビノラの死後まで繼續したり。

スプラーグ ウィリアム ビュエル **人名** Sprague, William Buell, D. D., I. L. D. 一七五五—一八七六 米國の教會傳記者。一八一五年優等を以てエール大學を卒業し、一年間家庭教師をなし、一六年の暮アインズワース神學校に入り、九年卒業し、直ちに八十八歳の老教師博士ウィセフ、ラスロフの同僚者としてマサチューセツ州アインズワースの會衆教會を執し、翌年ラスロフ死して正教師となる。二九年アムハニ一第二長老教會より招かれて之に應じ、四十年同教

スプ

スプ

スプ

スプ

會して六九年辭職し、ロードアイランドのフラックンガに移り退き、八十五歳に達して死す。一八二八年コロムビア大學より、四八年ハーバード大學より神學博士を贈られ、六九年プリンストンより法學博士を贈らる。彼は説教者として名高く、屢々公の席にて演説をなし、其の百五十回以上の演説は人に讀はれて公にせられたり。著書又頗る多し。されど其の文學的の大事業は「米國諸聖年表」なり。一八五二年彼の五十七歳の時に始まり、八枚折大の大部にて出版し、第十冊は死する前に完成す。同書は三位一體派會衆教會、長老教會、監督教會、浸禮教會、メソヂスト教會、ユニテリアン協會、キリシタン教會、協同教會、協同改革教會、改革長老教會といふ順にて米國諸民初代より一八五五年に至るまでの各派の有名な牧師の傳記を集めたるものにて、千五百項に及び、各項には能ふ限り其人を知れる人々の紀念の書状を添へたり。彼は之がために各派の牧師及び信徒の助を得、多くの友人を得たり。尙此の大事業は未定に終り、クエーカー、獨逸改革、モラヴィアン、カムハイランド長老、自由意志浸禮、スウェーデンボルグ、ユニテリアン各派は未出版のまゝ残り居たり。此の事業が多勞たりしだけに益多く、殊に米國教會に一重寶を加へたるものにて、彼は「教會の傳記者」の名を得たり。

スプリング サミエル Spring, Samuel, D. D. **人名** 一七四六—一八一九 米國の神學者。一七七年のプリンストン大學卒業後、大統領ジェームズ、マティソンと同級生たり。終まで友交を續く。去れどスプリングは熱心なる聯邦主義者にして、マティソンの行政には斷乎として反對せり。スプリングは神學の研究をば友人にしてナッソ

一學館總理たりしウィチースプーンに由て始り、ウィセフ、ベラミート、サミエル、ホプキンズ、スチーブン、ウエストと共に之を續け、殊に此の三人及びナッソ一學館にて師たりしウィチースプーン、エドワルドと之を續けて親しくなり、尙最も神學意見の合へる所より其義兄弟ナニエ、エモンスとは何人よりも親しく相結びたり。一七七五年大陸軍軍師としてベネディクト、アノルドの指揮する千百人の義勇兵軍隊に従ひ、曠野を過してケネベックに進み、將軍モントゴメリーが戦死せし時には、アブラム平原に於て大佐アルと共に在りたり。アルとはナッソ一時代より學友として友たりしが、此に於て一層親くなれり。されど一八〇四年ハミルトン死後、スプリングはアルの遺族なりしに拘はらず決闘の非を鳴らし、死者をも生存者をも容赦なく咎めたり。スプリングはマサチューセツ州ニワホリーホルトの第二會衆教會牧師たること四十二年七月月なりき。按手續を受けしは一七七七年にして、革命戦争及び一八二二年戦争には愛國者として著しかりき。教義説教者としては活氣あり、威風あり、威風人を壓するものあり。彼は又神學教育に功あり、少くも四個の重要な學校の創立に與りて力あり。アンドーヴァル神學校、マサチューセツ州傳道會社(宣教師を養成せし所)の創立の功も彼に歸すべく、アマースカン、ホルドを起すの思想も彼がキルセスターの立案に由れり。説教集あり。神學的著作には「義務の性質と青年の助」等を出し、又雜誌へも多くの寄稿をなせり。

スプリング ガーディナルの Spring, Gardiner, D. D., I. L. D. **人名** 一七八五—一八七三 米國長老派の牧師。一八〇五年エール大學を卒業し、一七七年説教者となり、一八八年神學博士となり、志を轉じてアンドーヴァル神學校にて神學を學び、一八一〇年アット長老教會の牧師として就任し、死に至るまで之を執す。初め四年は教會の成長遅たりしが、其の信仰篤き説教は祝福を受け、一四年より三四年迄屢々信仰の復興あり。此の間に米國聖書會社(一六年)米國小冊子會社(一五年)米國內國傳道會社(一六年)の成立に與りたり。其後は著しき事なりしも、教會は堅固に成長し、自己は説教に益々力を有するに至れり。彼は著書をも公にす。六一年以後は同僚牧師ありき。其の牧會期の長きと力ありしとは著しきものなり。重要な著書は「基督教性格の差別」(牧師の研究の断片)三巻、書に對する世界の服従(十字架の引力)聖書は人より出でず(講壇の力)聖書の第一の物(二巻)「基督の光榮」(二巻)「善人聖人の矛盾」(二巻)「諸聖任務」(二巻)「自叙傳」二巻等なり。

西班牙 又エスパナ Spain. **地名** 基督教は北亞非利加より西班牙に入れり。使徒保羅が其の密志を實行して西班牙を訪ひしやは明ならず。最初の基督教徒はアンダルシヤに在りしを見る。使徒雅各がコムカステリヤにて殉教せしといふ物語は、第九世紀以後より起りし傳説なり。第四世紀の終りに近き頃には、全國は既に基督教化せられて、數多の教會の區區に別たれたり。三〇六年のエルグイタ會議には、十九の監督廿六の長老並列し、ホシウス之が長たりき。大小の會議は年長の監督之を司り、後には其地方の大都監督之を司れり。羅馬教會との交通はアスキニアンス從論争の間に始まり、四五六年の西ゴート人西班牙征服後ますます親しくなれり。ゴート人はアールヤ人なりしが、教會は自

スの部

西班牙

然外部より助を求めたり。されどゴット人ハ五八九年のトレド第三會議にて公教會(羅馬教會)信仰を採用するに至るや、西班牙教會は直ちに羅馬に對して傲然たる態度を取り始めぬ。彼等は大都監督の製裝を羅馬に求めしことなし。アレゴリウス大法王之をレアンタルに送りし事ありしも、此は單に親友の間柄なりしに由れり。

第七世紀の終に近き頃には、西班牙には六十六人の監督ありき。其等は初は會衆の選舉する所にありしが、後には教區の諸教會の推戴する者か王が任命することとなり、終には王が唯だトレド大監督を同意して任命することとなりたり。其等諸監督の廢職は唯だ總會議の權に由ること、猶一教區の免職も唯だ大會の權に由りしが、ごくなくなりき。最傷の僧院は第九世紀より存し、各自其の規則を有し、天主教會の勝利後は迅速に其數を増したり。僧院は初め監督等の絕對支配權下に在りしが、屢々不平起りしため監督の權威は其後漸削減せられたり。教區等は凡ての場合に於て國家の裁判權の下に在りしが、勿論教會内部の事は監督の裁判權下に決せられたり。一體に西班牙教職人物の標準は低き方なりしが、而しアンタル。イスパリスのインドルス。イルテアフォン及びトレドのフーリアン等有名な人物起らざるにあらざりき。

州にまで之を揮ひしが、而も其の貪慾深きは他の僧む所なりき。然るに基督勢力を得るに至りて直ちに迫害行はれ、一四九二年即ちグラナダ征服の年には、猶太人は西班牙より逐ひ拂はれたり。多くは基督教に改宗して國に留まりしも、是れ表面のみなりしが、其の虚偽の意見せらるるや、難しき罰を受けたり。亞利比亞人統治中基督信徒は信仰を繼續することを許されしが、其の代りに無抵抗にて服従せし者は收入の十分の一の租税を課せられ、武力に由て服せられし者は五分の一を課せられ、又「コーラン」を讀しむる如き言語を吐ひざるべき事、マホメット教婦人結婚せざるべき事、マホメット教徒を基督教に改宗せざるべき事、マホメット教の教と同盟を結ばざるべき事を命ぜられ、又マホメット教徒と同一の服裝をせざるべく、マホメット教の家より高き家を建てざるべく、街上にて鐘の音を立てず、十字架をあらはざるべく、公所にて酒を飲み、豚肉を食はざるべしと要求せられたり。國の東北部は、シヤールマンニエ地方の時より基督教統治の下に在りし所なるが、同地方にてはモザラベ式文と稱せし特殊の式文を用ひ居たり。されど一〇七一年羅馬教會式文アラゴニアに採用せられ、一〇八六年カスチルに採用せられて之に代りたり。第十二世紀より第十六世紀まで僧院主義國內に蔓延し、フランシスコ派は一二〇六年西班牙に來りしものなるが、一四〇〇年には百二十一の僧院を有し、一五〇六年には百九十の僧院を有したり。

西班牙

西班牙

間に存在すること現はれ、種々の聖書翻譯は公にせられたり。一五四三年に於けるフランシスコ、エソシナス(ドリアンタル)の翻譯、五六年に於けるフーアン、ヘレズの其れ、六九年に於けるカシオドロ、デ、レイナの其れ、九六年に於けるキプリアノ、デ、アラレラの其れ等これなり。されど國王マエカベ二世、法王バウカ四世は、檢教院とイエスイト徒の助に依り終に全く此の運動を壓迫し終りたり。彼等が之がために取りたる手段は、史上無比の慘酷なるものなりき。一五五九年五月二十一日アラドリッドに起りし檢教院判は其の最初のものにして、一六七九年カカロス二世がオレアンソのルイスと結婚の式の時には、檢教院判結式の一部として行はれ、新郎新婦は十四時間坐して二十三人の異端者の焚かるるを觀たり。第十八世紀の後半より第十九世紀にかけて僧自由なる方針となり、一七八〇年には檢教院は其の最後の裁判をなし、其の權威は文書の原稿檢閲に限らるるに至れり。一八三五年イエスイト徒は國より追ひ拂はれ、十二人未満の僧の住める僧院は皆閉鎖せられたり。然るに一八五一年の協約ありて反動起り、五四年聖母は西班牙軍隊の總司令官に任ぜられ、六一年アラバルタルを根據地としてプロテスタント主義を宣傳したる運動に關係したる人々を捕へ、之を罰して懲罰に送ることせり。されど此の協約の實行は不能に罷し、女王イサベラは終に之がために位を失へり。七六年の新憲法は宗教を寛容し民法上政治上の權利をば宗派に拘はらざることをせり。

スの部

スベール

自由を許せるのみにして、其禮拜及び傳道其他の活動を公許せず、彼等は唯獨之を爲すを得るのみなりき。然れ共自由主義を有するものは此政策を喜ばず。保守黨と自由黨との間に教會問題に關する争論常に斷へず。一九〇六年自由黨内閣成りモナレット。フィンクス等政權を握るに及び、集會法の制定を試み、之に依りて非國教徒禮拜の自由を公許せんとせしが、羅馬教會の反對に違ひて内閣の瓦解を見るに至れり。然れ共自由黨の羅馬教會反對運動は爾後依然として繼續し、一九〇八年十一月モナレットは保守黨内閣の羅馬教會保護政策の大演説をなして大に人目を惹きたり。一九〇九年自由黨内閣成るや、首相モナレットは先づ保守黨内閣の定めたる學校監督を廢し、以て非國教會に加へられたる迫害を除きしなり。一九一〇年二月自由黨内閣の結成カナルス、モナレットに代りて首相となりしが、彼は其政策を繼ぎて排羅馬主義を決定し、其六月を以て非國教徒禮拜に對し禮拜及其他の活動を公許したり。之がために羅馬教徒の反抗を惹起し、國內頗る騒然たるものあり。現今羅馬教會は八監督(トレンド、アルゴス、グラナダ、サンチアゴ、ヤゴツサ、セウイル、タラゴナ、ヴァレンシア、及びヴァラドリッド)及び凡そ五十人の監督を有す。今尙教即券を發行し、教會書肆之を發賣す。一般に迷信にして科學的進歩に反對し、新思想の壓抑に努む。人民の教育を羅馬教會の手に置きたるがため、讀書力なきもの國民の六割八分に居るといふ。

スベール **人** **名** **Philip Jakob** **人** **名** **一六三五一七〇五** **獨逸ルター派教會の勢力ありし神學者。上アルサイスのラッザルツライエルに生る。父母共にストラ**

スベール

スベール

スベールより來り、自己ももに同市にて教育を受けしかば、ストラッスアルヒヒと呼ばれたり。スベールは幼時洗禮を受けて其の成長して基督教生活を發達したる一人にして、天性敬虔なりしが、生れながらの家族的關係や、ラッザルツライエル伯爵夫人の親戚的關係や、アルントの隱者的著作の研究、ワンスホム、ペール、ゲイグス、パワクスター其他當時ライオン河時にて多く讀まれたる英國著者の書を研究したること等由て、一層深く敬虔の心を養はれたり。彼の指導者たり又「スベール時代」の先驅者たりしが、ラッザルツライエル宮廷説教者ヨアキム、ストルなるが、一六四五年スベールと義兄弟の間となりぬ。スベールは人々の中に於て我に基督教の最初の閃光を見せしめしは彼なりきと言へり。スベールは斯が個人的準備を経て、一六五一年ストラッスアルヒヒ大學に入り、退きて讀書に耽りぬ。ドルシエ、ダン、ハウエル、ヨハン、シュミット、セバスタアン、シュミット等は其師たり。ドルシエは嚴密なるルター派神學者、シュミットは當時最も有名なりし聖書解釋者にして、スベールは特に彼等より受くる所多かりしを自證せり。學校を卒へてパルセルに行き、希伯來學の大家バグスターの下に學び、次で一年間シュネツァに在りて大に學界を廣くし、レフォルムド教會の組織に敬服し、ラバデアの能辯に感じて「新りの方法を獨逸語に譯せり。六年己が弟子たるラッザルツライエル少年伯爵と共にウニルテンベルヒに遊び五月を送り、ストラッスアルヒヒ及びチッペンゲンにて多くの友を得、ウニルテンベルヒにて閑居なく用ひられ、之がため六三年にはストラッスアルヒヒより牧師に招かれしも應ぜずして留り、閑の多きに乘じて大學にて歴史及び哲學に關

する多くの講演をなせり。六六年ライオン河時アラバルタルの牧師兼牧師長に招かれ、政治上の上官及び教會の上上に謀りたる上に應ず。三十一歳の彼に取りては最も名譽の地位なりき。赴任してはアラバルタル諸教會に一層確實にして活ける基督教の具はらんことを企てしが、議官及び市政府のために牽制せらるる所少からざりき。先づ其居りし信仰問答教育を全然復興せんとせしが、之は器械的罷主義なりとて攻撃せられ、七七年之がために「基督教の簡短なる説明」を、八三年に「ターアレー、カテケケ」を公にしたり。説教にては教義の純潔を印象することを重なる目的とせしが、會衆はやがて彼の注意によりて聖書全體に通曉するに至りしが、説教を聖書の句の抄出に限るを要せざるに至れり。彼は次で聖信禮と共に受くる最初の聖餐のため一層徹底せる準備をなすの計を立てしが、之は田舎の外には成功せざりき。教會戒規の改革に就ては彼は成功せし所なし。説教は聖和なる感化を與へ、教義的なりしも經驗より出で、聖書を熟知せるを示し、アラバルタル以外にも感化を及ぼしぬ。器械的基督教に對する論争は花やしからざりしも、六九年にはバウサの爲れる義に就て説教せしため己が教會内には熱心なる一派と冷淡なる一派との別を起し、熱心なる方は七〇年互に相結合し、初にはスベールの私宅に集りて實際的宗教を養ひしが、他の家にも所々に開かるるに至り、八二年には多少性質を變へたる上教會にて期かる會合を開くの許を得たり。アラバルタル生活は愉快なりき。二十年間牧師長として同輩の間に平和と調和あり。是れ彼の性格の致せし所なり。七五年有名なる「ヒア、アシアア」

スの部

スパー

を公にし、福音教會の腐敗を嘆き、其の治癒策六個を述べた。その熱情ある聲は忽ち反響を起せしが、...

スパー

忘却せるを遺憾すること高等教職會議に提議したるにも由るべし。やがて『コレギウム、フィロソフィ...

スパー

大學へはブライトハワプト、フランケ、アントン等敬虔派の人々を入れた。伯林のみならず各地にて...

スの部

スパー

鉄點たる所即ち『オプス、ナベラタム』の通信、告白の誤用、信仰と信仰に由る表とせらるるいふ偏したる主義の如きをば非難したり。...

スパー

を兼ね、一五二五年普魯士侯アレクサンドロの宮廷説教者となり、多くの讚美歌を創作し又翻譯す。...

スパー

詩を興へられしが、九年タイコーンの運命の時一擧のために逐はれ、不幸を以て倫敦にて死せり。...



ルセゾストルメルヘ

スの部

スペイン

新聞の一記者となりて、専ら倫理學、社會學に關する研究を事とし、一八五〇年を以て其處女作なる『社會學概論』を出版したり。此書の目的は彼が實際觀察し得たる社會學の結果を、哲學の原理の上に攝へんと欲するにあり。彼の進化論的思想は此時に於て已に著し發達して、其意見を新聞雜誌に發表したる事一再に非ざりしが、一八五五年には『心理學の原理』(Principles of Psychology)を出版して、其進化論を人間心理の發達に適用したり。ダルウインの『種原論』を出版して學界の一新紀元を開きしは一八五九年の事にして、スペインセルに於ては事實に四年なりとす。但しスペインセルの進化論は多くは理論にして、ダルウインのは實驗に基くものなりしが故に、前者は後者を待ちて其理論を實際に證明せられたりと云ふべし。一八六〇年スペインセルは始めて総合哲學の體系を世に發表し、進化の法則が生命、心意、社會、道德に順序に萬有を發展せしめ來りしを説明せんことを企てたり。則ち一八六二年には『哲學の原理』(Principles of Philosophy)を出版し、一八六二一六七年には『生物學の原理』(Principles of Biology)を、一八七〇一七二年には『心理學の原理』(Principles of Psychology)を、一八七六一九六六年には『社會學の原理』(Principles of Sociology)を、一八七九一九九三年には『倫理學の原理』(Principles of Ethics)を出版して、遂に総合哲學の大事業を完成せられたり。彼は大學の課程を履まず、又大學の講壇に立たず。終生樂らず。性清潔潔白にして、研究と著作とに其一生を終れり。

スペイン

る所は唯現象界に限らる。彼は此の如く可知界と不可知界とを區別し、現象界は可知界に屬し、實在界は不可知界に屬す。萬物は實在の顯現にして、吾人は實在の顯現たる萬有を知得すれ共、萬有の後に伏在する本體若くは實體は其何物たるかを認識すること能はず。實在は絕對にして遠く人智の外に超越す、之を知らんと企つるは徒勞にして、之を知ると思ふは迷謬也と説けり。然れ共彼は現象の根底に何物か存在することを否まず、屬々之を不可知なる勢力と名けたり。而して彼は現象界を説きて、可知なる現象は凡て進化の法則に従ひ行く者にして、所謂進化の法則とは分化 (Differentiation) と統一 (Unification) とが相並びて進み行く、この謂也。混沌たる星雲の狀態より始めて太陽系統の形づくられ、地球上に於ては地質上の變化を初めとして生物の進化に至り、終には人類の社會的進化に至るまで凡て同一なる進化の法則に従ふ者也。而して此等は何等かの目的を具へ之に向ひて進むに非ずして、物質と其運動との自然に然らしむる所也と云へり。然れ共進化の或る段階に於て、物質及び其運動より如何にして意識作用の生じ來るか、スペインセルの説き難しとする所也。

スボル

疑ふ能はず。是れ宗教的情操の必然に起り來る所以の原因にして、公平直實なる精神 (人々) が不可思議者の面前に於て喚起する敬虔、畏怖、服従の諸感情は是れ正に宗教の本領也。

スボルジョン

ハットドン Spurgeon, Charles Haddon 人名 一八三四一九二 英國バプテスト派の説教家。エセックスのケルグエドンに生る。一八五二年ケムブリッジのウヰルキョービーナ、バプテスト教會の牧師となり、五四年倫敦サウスウヰルキョービーナ、パーク街バプテスト教會の牧師に應ず。此教會は當時増々荒廢の



スボルジョン

有體に在りしが、スボルジョンの赴任後一年ならざるに會衆非常に増加し、新教會建築の必要を感ずるに至り、未だ新教會の落成せざるに、更に廣大なる會堂設立の必要起り、遂に宏壯なるメトロポリタン會堂 (Metropolitan Tabernacle) 建設せらるるに至り。スボルジョンは其死に至るまで此會堂にて説教し、死後遺子トマス、スボルジョンの之を繼ぎ、今現に之が牧師たり。彼は青年なりし事、新聞紙が觀ふて彼のために廣告したりし事とは、彼が成功の一原因となしたれ共、彼の眞實謙遜にして且篤くベキユーモアを有し、其清教徒風の神學と並進なる風

スの部

スマイ

果とを有したりし事は、蓋し其成功の重要な原因也。彼は所謂福音主義に依りて立ち、神と人との調和は彼が説教を一貫せる思想にして、彼は終始此大眞理を離れず。宛も『今予は基督の大使として愛に在り、神は予に依りて諸君に求め、予は基督に依りて諸君に答ふ、諸君願くは神と和げよ』といふが如し。彼は頗る嚴格なるカレグレン派の神學を奉じたれ共、凡ての人類に對して深き同情を有せり。其説教は毎週出版せられ、其死後數年に及べり。彼は The Sword and Trowel といふ宗教雜誌を創刊し (一八六九) John Ploughman's Talks (一八六九) John Ploughman's Pictures (一八八〇) Commentaries and Commentaries (一八七六) 及び Letters to My Students (一八七五、七六) を著せり。彼の二書は彼が教役者養成のため一八五六年創設したる牧師學校に於ける講演也。彼は又ストウツウヰルに無宗派的孤兒院を設立し、一八六七又宗教書類派協會を立てたり。其晩年バプテスト派同僚教師が果して正統教義を奉ずるやを疑ひ、終に其派と分離するに至れり。彼の傳記にはバインの『スボルジョンの傳及び事業』(一八九二) レーの『スボルジョン傳』(一九〇五) ヒョウの『スボルジョンの家』(一九〇六) 等あり。

スマイス

ジョン・スマイス John Smayth, John 人名 一六二二死 セネラルバプテスト (一般浸禮派) の祖。生年明ならず。一五七七年都橋クワイスト、カンマヤの受買者として記録せらる。七九年フェローとせられ卒業學費を受く。後リンドンに講演者たり、次でリンドンシヤのゲーンズボローの司牧たりき。時代精神に動かされて熱烈進歩の傾向を有し、大學に在る時日曜を辯護せしめ次長の前に呼び出

スマル

され、ゲーンズボローにては英國教會を辯護して分派に對して戦へり。然れども烈しく敵對するに從ひて分派の理を認め、終に清教徒に歸し、浸禮派に入る。クローの古教會に在る者にして、彼は一六〇六六年夜中にドン河にて長老のジョン、モルトンより浸禮派を受くに記せり。同書は信すべからずとデキスターは言ふ。去れど敵は彼を以て自ら浸禮を行ひたるものとせしめて責めたり。終に其の少數の徒と共にアマステルダムに移住し、『アマステルダム第二英國教會』を造り、自らを牧師を以て生活す。是より先一五九一年以來アルミニウスはゴーマルスに反對して神學意見を發表し、フランシス、ウヰンソム牧師とヘンリー、エーンズワルスを教師とせる第一英國教會は時代の活潑たる見ゆる教會のこゝを議論しつゝありしが、スマイスは之に就てアルミニウス説を取り、小兒洗禮不可説に與みし、トマス、ヘルウィスと共に之を一般浸禮派の信條の第六條に入れたり。スマイスは和蘭にて死にしが、ヘルウィス等は倫敦に行き英國一般浸禮教會を起せり。スマイスは人となり真率謙遜にして慈愛深く、學者として一塵の人たり、説教者として善き説教者なりき。

スマルカルドの同題

The Smalcaldic Treatise, Smalcaldic Articles の條を見よ。

スマルレー

ジョン・スマルレー John Smalley, John, D. D. 人名 一七三四一八二〇 米國新英州神學者。一七五六年エール大學を卒業す。幼年の時改心し、六歳にして深くキリスト信仰の神學に感動せしが、エール在學中己が改心の眞なりしやを疑ひ、絶望の體となりしを、終に『エドワーズ意志論』を讀んで自ら言ふ所の實際の信心をなせり。是れ

スマス

彼が終生宗教教義の感化に出でたる宗教的情熱に反對するに至りし原因なり。是れ又自派派の妄信に對し中途契約に對する争の首領となり、新英州神學の擁護者となるに至りし原因なり。ウヰセフ、ヘラミーと神學研究を共にせしめ、一七五八年四月ニワブリーチの會衆派教會牧師として接手續りを受け、五十五年間在任す。講壇にては目を原稿より放さず、粗き聲にかゝれる聲にて之を讀み、稀に手標を示すのみなりしが、而も其の教義を極のよゝ説明する事に出で聽衆の注意を引きたり。故に教會上の成功は實に史上の明白き事實なり。されど神學教師としての成功は一層著しき、其の弟子の二十人は今も世に記憶せらるる人々なり。其の中に一人の信仰復興活動者あり、スマルレーの説教の印刷せる讀み、殆ど噂に聞かぬのみにしては信ぜられぬ程の感動を與へたり。フランクリンのナサニエル、エモンズ及びアンドリューアル神學校にて感化ありしエベネゼル、ゴーターと弟子なりき。神學より法律に移りし者も二人、即ち合衆國司法大臣となりしジョージ・エルスワルズ及びセレイマイア、メーソン其なり。スマルレーは一日十四時間働せしが而も學問を怠はざりし。自説を信すること確く、矛盾を忍ぶ能はざりし。信仰深遠にして且つ正直なりしが、人の尊敬を受けた。『自然的及道德的不能』基督によりて義とせらるる事、自由意志の行動』及び『信者の外基督の十分なる満足に由て救はるる者なし』は時代を作りし一勢力となりし説教なり。其他の説教集及び論文あり。

スマス

アダム・スマス Adam Smith, Adam 人名 一七二三一九〇 蘇國の經濟學者。キルトカカデーに生る。一七四八年エケンバラの文學者の仲間に入

ス の 部

スミス

り、文學及び批評學上の講演をなす。五一年グラス...

スミス

スミス

博士アアシダイク其の業を補へり。スミス ウイリアム...

スミス

スミス

の總理せられ、任に在りて個人的勢力に由りて十...

スミス

スミス

の總理せられ、任に在りて個人的勢力に由りて十...

ス の 部

スミス

人名 一八三三—一九一〇 英國の歴史家、文學者...

スミス

スミス

人名 一八五五— 英國の東邦語學者。印度カルカッタに生る...

スミス

スミス

人名 一八八八— 英國の神學者、東邦語學者...



スミス ウィリアム

に彼の博識を示せるは一八九四年に出でたる『聖地...

の總理せられ、任に在りて個人的勢力に由りて十...

スの部

西利亞

パメラ、ゲラヤ、ゴストラ、アスカロン、カイザリ
アなど大都會にて充ちたりしが、マホメットの感
化は之を陥らして何れも真教、ダマスコのみ獨り
榮わたり。七五〇年アバシテスの時、此のマホメ
ト首長はクファに移り、次でバグダッドに移りした
め、西利亞は單に帝國の一角のみなり、第十世紀の
中頃には埃及のファチマ朝の取所となり、第十一
世紀の終に近づきては、セルジウク族土耳其人
に侵入して之を其の國に併せたり。十字軍の時代は
一〇九九年より始まり、一二九一年埃及のマムル
ク首長のアッラを取りし時に終り。其より後二世紀
以上、西利亞は種々牧民族の戦争と、同族たる埃及
の種々アラブ首長等の戦争とにて苦みしが、一四〇
一年種々人アムルが西利亞を併しアンタオケ、エメ
サ、パルメク、ダマスコ諸市を焼き、其住民を屠り
若くは奴隷に賣れり。一五七一年西利亞をパレスチ
ナはオトマン族首長セリム一世より征服せられ、爾
後今日に至るまで土耳其治下に在り。富も繁榮も衰
へ果て、内地人民は知力道徳最下等の程度に墮落
したり。一八三二年イブラヒム、パチャは其父ハ
メド、アリに代りて西利亞を征服せしが、四一年英
國人のために逐ひ出され、西利亞は土耳其帝國の領
に復せり。

西利亞

方に向ひカルメル山の脚に至るもの一なり。カルメル
山脈の北にはエスドラエロン平原ありて、ヨルダン
河まで開けり。エスドラエロンの北は山脈廣くなり
て斷續し、シロに近き海に落つるリタニ河の深凹地
に至れり。リタニ河の北にレバノンの大山脈あり、
北の方に三百哩續き、高さ四千呎乃至一萬一千呎
なり、トリゴリの東北に至りて下り、絶て平原とな
り、此の平原地中海より東の方アムス及びハマテの
オロンテス河まで亘り、民衆三百四十の八に記さ
れたるハマテの入口をなし居れり。平原の北にエベ
ル、エル、フス山あり、ヨサイリエ山脈の南方突
出端にして、同山脈は北に横り、オロンテス河口の
圓錐形のカシウス山に至りて盡けり。オロンテスの北
の山脈ガラルダフはブトレミウスのアマムスとして
知られ、北へ五十哩亘りてタウルス山となり。對
レバノン山脈はレバノン山の北端より東に距る二十
哩程にしてハマテ平原より起り、レバノン山に進行
して走り、高さ一萬呎ほどのヘルモン山に至りて最
秀で、ヘルモン山より次第に不規則なる低き山脈と
なり、ヨルダン河及び死海の東岸を沿ふて走り、エ
ドム山脈となり。

西利亞

政治のためレバノンは土耳其帝國中の最も繁榮せる
所となり、學校獎勵せられ、道路作られ、土地開拓
せられ、生命財產安全となり。

(三) 人民、西利亞は人口凡そ二百萬、内マホメ
ト教徒シナ教徒メタウレイ教徒合せて一百萬人、
ヨサイリエ教徒、マロン教徒、希臘正教徒各二十五萬人、
ドルーズ教徒十萬人、天主教徒八萬人、其他猶太教
徒、アルメニヤ教徒、ヤコブ教徒等一萬五千人乃至三
萬人あり。此外六萬のペドワイン族亞利比亞人、六
千人のアラブ人あり。

(四) 土着人の教會、は希臘正教會、マロン教徒、天
主教希臘人、ヤコブ教徒、アルメニア人、天主教アルメ
ニア人の諸教會なり。希臘人は二十三萬餘也と思は
る、彼等は代々西利亞に生れ來りたる者にて、亞
利比亞語を語る者のみ。其の教儀儀式は希臘及び露
西亞と同じく、天主教會とは異、聖靈の發出、宗教建
築に繪畫を用ひて像を排すること、煉獄説の否定戰
艦にパンと葡萄酒を共用する事、及び在家僧の結婚
に關して相異れり。教會はアンタオケとエルサレム
との兩教長に別れ屬せしが、此の兩教長は名義は編
立なれども、實際はコンスタンツブル教長の下
に在る者なり。アンタオケ教長の下にペーレルト、ト
リゴリ、アカル、ラダキエ、ハマ、フムス、サイドナ
ヤ、シロの諸監督管區あり。エルサレム教長下には
ナザレ、アタカ、ルツダ、ガザ、セバステ、ナブル
ス、ヒラアルヒア、ハトラの諸監督管區あり。アタ
カの監督のみは任地に住すれども他はエルサレムの僧
庵に住めり。希臘教會は聖書を讀むを許すを以て、
其信徒は同地方他の宗派信徒より多し。

西利亞人即ちヤコブ教徒は基督合性論のために東方教
會より別れし者にて、禮拜には人民の解せぬ西利亞

スの部

西利亞

語を用ひ居れり。其の長はマルティン教長なり。此
徒は少數にして散在し、貧しくして勤勉なり。聖書
を反對せずして受く。

マロン徒は七世紀に於て基督一意識を唱へたるより
起り、ペーレルト監督アブス勉めて其の異端なる
を論明せし甲斐なかりしに、僧ハチス、マ
ロン(七〇一年死)の名より斯く呼ばれしが、一
八〇一年一意識論を棄てて法王に服し、最も忠實なる羅
馬主義者となり、レバノン山の自己等に向へる部を
聖山と呼び居れり。されど尙其の固有の特色の幾分
を維持し、禮拜に西利亞語を用ひ、羅馬教會用にな
きマロンを守護聖者と崇め、自己等の教會を一個の
政體と信じ、人民は其教長を羅馬法王に劣らずと信
じ、在家僧は結婚せり。其僧院は一百に近く、レバ
ノン中の善き所を領有し二千程の僧尼を支へ、三十
五萬弗以上の歳入あり。人民は獨立剛毅勤勉なる
が、無知にして迷信多く、僧侶の教育はアイン、ウ
エルカにて行ひ、會々羅馬に留學せし者は大學者に
して他の多くの者は無學極まり。

天主教希臘人、天主教西利亞人、天主教アルメニア人
と稱する宗派は、第十八九世紀に於ける羅馬教會僧
侶及びイエズイト徒の宣教に由りて生ぜし者なり。
天主教希臘人は僧侶の結婚、亞利比亞語の禮拜、東方
曆、兩元素晚餐を續用す。アルメニヤ人はアンタオ
ケ及びアレクソ附近に住し、土耳其語及び亞利比亞語
を語れり。パレスチナの猶太教徒は、諸國より來れ
る外來者にして、一萬五千人あり。されどダマス
コ、アレクソ、ペーレルトの猶太人は土耳其人にして
亞利比亞語を語り、多くは其富あり。

(五) 近世のアラブ系キリスト傳道、アラブ系キリスト
にて近世始めてパレスチナに傳道せしはアメリカ

西利亞

ン、オールドにして、其の宣教師アビーニー、アムス
及びレベ、アーツニスは一八一九年一月スルカに上
陸し、アーツニスは二年二月エルサレムに達した
り。二年アムスとアーツニスとを教師アムス、キンド
と倫教猶太人のウエーニとをペーレルトに達し、斯
くてエルサレムとペーレルトとを長く相並んで傳道
の中心たりしが、一八四三年英國宣教師はエルサレ
ムを引上げ、パレスチナ傳道は英國の教會傳道
會計に讓れり。全年愛蘭長老教會も西利亞に傳道を
始め、ダマスコ及び其附近に對レバノン山の南部と
に傳道し、英國合衆國の一致長老教會も一時之を協
力せしが、二三年にして之は去て埃及傳道に力を集
申したり。有名の處女ありし一八六〇年より編譯
のカイセルウエルトの女執事會の女教師もレドンに
て孤兒養育、高等教育、病院看護等の業を始めしが、
後ペーレルトに移れり。七一年英國の兩派の長老教
會合併したるに由り、アムカン、ゴードの傳道は長
老教會傳道局の手に移れり。宣教師等は初は土着の
東方教會を改良することを謀り、改宗者なば東方教
會會員たるまゝとなし置しが、間もなく必要起り
て東方福音主義教會を立つるに至れり。

英國の此の傳道局は二百萬の西利亞住民教化を謀り
しのみならず、遂んで亞利比亞語聖書及び同基督教
文學に由りて一億七千五百萬の全マホメット教世界に
活動せんとし、一八四八年より聖書の亞利比亞語翻
譯を始め、博士エリ、スミス先づ之に當り、其の一八
五七年に死するや、博士シ、ゲイ、エ、ヤン、
ダイク之を繼ぎ、一八六五年聖書全體大成して之を
世に公せり。活字の字母の型は、スミスがホーム
ン、ハロウの助に由りて三七年亞利比亞語最良の書
體を型として作り、獨逸ライプツヒのタウフニンに

西利亞

て之を轉送したり。此の活字は北方諸國の宣教師
等の視所となりしも、後には土耳其政府公報を始め
めモリスのドミニコ派印刷物、其他希臘人西利亞
人の活版に採用せられたり。此の印刷に由りて聖書宗
教書及び有益なる百科の書を印刷頒布したるなり。
マロン教會より改宗し、スミスの聖書翻譯を助けた
るアトルス、ピスターニーは立派なる亞利比亞語字書
をも編纂したり。

英國の傳道局は又教育にも力を盡し、彼等は初め
人民の無知識にして、學校にては唯だモスタ(マ
ホメット教會堂)附屬のメドレーとレバノン山の
アイン、ウエルカのマロン派僧侶教育學校のみなるを
見、博士トムソン、博士グアン、ダイクは一八四六
年アベイブに男子學校を起し、四年より七六年まで
カセハウン之を監督したり。ペーレルトには又西
利亞アラブ系キリスト、カレツヤ起され、六五年より
開かれ、後醫科本料醫科の三部完備せり。女學校小
學校も亦所々に立てられ、神學校もカレツヤに接近
して立てられたり。英國宣教師以外の者も亦教育に
盡せし者あり。バウエン、トムアソン夫人と其の姉
妹メントル、モット夫人は女子教育の學校を諸市に
立て大英國西利亞學校と呼べり。

以上擧げたる諸教派の外、蘇格蘭自由教會、英國及
び米國の友會なども宣教師を派遣し、且學校を起し
て西利亞の教化を勉め、此外在亞利比亞猶太人教化の
宣教師や専ら女子教育のための宣教師や兼職宣教師
團など其れも活動し來れり。一八八三年には英國
宣教師の力に由りて成れるものも、十四の土
着人福音主義教會、土着人の教師四人、傳道者二十
七人、信者約一千人内婦人約四百、日曜學校百
八十四、其生徒四千、カレツヤ生徒百六十八、女學校

スの部

西利亞譯聖書

西利亞譯聖書

セント

三、其生徒四百、小學校三百、其生徒五千あり。プロテスタント信者は四千ありたり。
 (六) 天主教宣教 十字軍の時拉丁教會僧侶は、東方教會を羅馬教會に改革せしめんと勉めし事ありしが、第十八世紀第十九世紀となりては其の傳道の結果、第十八世紀第十九世紀となりては其の傳道の結果、異前に言ひし如く希臘人天主教、西利亞人天主教、アルメニア人天主教と稱する宗派起り、更に降りてはイエズイット、フランシスコ派及びウラゴ派等プロテスタント傳道と對抗して傳道を勉めたり。イエズイットはペルシアにカレドニアを立て、他の地方に小學校を立て、又印刷所を設け、ウルガマ聖書の亞利比亞語譯其他の出版をなしたり。其他の諸派また附院、教育、學校を立て、婦人慈善團も學校、孤兒院を起し、マロン派主教アイヌのカレドニアを希臘天主教會學院の如きは其の最も大なるものなり。プロテスタントのより多かるる、其生徒も亦數倍せり。斯く基督教新舊教會の宣教及び教育の盛なるや、國民も亦覺醒して教等も所々に男女の學校を起せり。

西利亞譯聖書 Syriac Versions 書名

ひ、又舊約の翻譯は更に早く、即ちソロン及びピラムの時代、若くは伴因時代に成りたりと爲す者あり。此等の傳説は信するに足らざれば、此書の翻譯が西利亞教會の最も古き時代に爲されたる者なるは疑なく、第二世紀の終り以後に成りたる者も亦なし。之に種々の解説あり。通常の解説に従へば、註解又は比喩的解釋なく、單純なる如字の翻譯也との義也。トレゲルはアラのバウラがオリゲンの「ヘキザプテ」より翻譯せる者に比し、後者がオリゲンの改譯せる場所を示すため、星標や十字形標を附し、且録書を有するに反し、此譯が單純也との義也と云へり。此書の舊約が希伯來語及びカルデア語より翻譯せられたりとのことは諸學者の共に一致する所也。但し譯者が希臘語七十人譯を目前に置き之を參考したりしは明なるが如し。ヘンリットは如字の翻譯には非ざれば、原書に忠實にして苟もせず、此點に於て古代翻譯中第一位を占む。而して其古き、之に於ては古拉丁譯と仲す。經句批評及び聖書の註釋に於ける其權威は頗る高し。然れ共其經句批評の形狀に於て傳へられざりしを以て、經句批評に於ける其價值は稍減少せり。
 (11) キヤレドニアの經文 (Circassian Text) ニト
 ア附院より持ち來りて、英國博物館に藏せる寫本の中に、西利亞語四福音書の大部分を有する古代の翻譯あり。一八五八年博士キヤレドニア此寫本に英語及び序言を附し、四福音書古代西利亞語校本の遺物也として刊行せり。寫本は第五世紀のものなれ共、聖書學者の推定に依れば、翻譯はヘンリットよりも更に古代のもの也といふ。果してヘンリットよりも早き他の翻譯なりや、又はヘンリットは此翻譯の改

セントケ Sentyche 人名

譯なりや誤訳一ならず。此翻譯が批評的目的に向て大なる價值を有するは一般の承認する所也。
 (三) レヴィスの經文 (Levi's Text) 一八九二年レヴィス夫人がシナイ山にて發見したる者にして、キヤレドニアの經文と相同じ、二者の間には密接の關係あること疑なし。
 (四) ヒロツタセメス譯 (Philistean version) 五〇八年西利亞ヒロツタセメスの監督ヒロツタセメス管理の下に成りたる翻譯也。ヒロツタセメスは一性論派に屬せし人なりしを以て、此翻譯も亦其學派のため爲されたる者也と信せらる。譯者はオリゲルにしてヒロツタセメス管下の監督の一人也。此翻譯は或るものを除きては其原狀に於ては吾人に傳へらず。吾人の有するものは六一年ハークレルのトマスが改譯せるもののみ也。故に又之をハークレル西利亞譯 (Harkel's Syriac) と稱す。此翻譯の特質は其極めて如字的なるに在り。希臘語を一字一字に翻譯し、其詞調までも傳へんとせざる譯者の目的にして、從て其文體粗野なるを免れずと雖も、經句批評の上には其如字的なる所大なる價值を有す。
 (五) 「キザプテ」 (Hexapla) ハークレルのトマスが新約のヒロツタセメス譯を改正したりし頃、テラのバウラは舊約のヘキザプテ西利亞譯と呼ばれたる者大成せり。之をヘキザプテと稱するはオリゲンのヘキザプテより翻譯せるに依る。此翻譯は其特質に於てもヒロツタセメス譯と同じく極めて如字的にして、此二書は合して一書を爲せり。

人は教會に在りて重要な地位を占めたる婦人なりしなるべく、或は羅馬教會のフイアの如く女執事なりしなるべし。チロウゲン派は此二人を以て猶太派異邦派を代表せる譬喩的人物也と解釋すれば、牽強附會たるを免れず。

セの部

聖火式 又は新火聖別式 Holy Fire

聖火式 又は新火聖別式 Holy Fire
 慣例 基督の復活を表すために、羅馬教會及び希臘教會にて復活前土曜日に於て儀式にして、其起源最も古し。即ち金曜日に教會内の凡ての燈火を消し、土曜日に至り鐘石を以て得たる新火を點する式を行ふ。金曜日に凡ての燈火の消さるゝは、世の光なる基督の死を表し、新火の點せらるゝは基督の復活を表す也。

聖金曜日 Good Friday 行事

聖金曜日 Good Friday 行事 耶蘇の苦難及び死の記念日にして、初代教會にては又「十字架の祭」(The Festival of the Crucifixion) 教の日 (The Day of Salvation) 等と稱せられたり。初代教會は斷食及び悲哀の日として之を守れり。是れ十字架は基督贖罪の最後の業なりしと雖も、之がために基督に苦痛を與へ、且一時也と之がために弟子等に失望を與へたれば也。此日の祭は凡て嚴肅と悲哀の調を以て行はれたり。コンスタンチン大帝は此日に審問を爲し、物を賣買することを禁じ、西班牙にては教會をさへ閉鎖したりしが、トレドの會議(六三三)は此の極端なる禁制を釋きたり。現時に

セの部 聖火式。聖金曜日

誓願

正經。清教徒

於ても羅馬、希臘の二教會は最も嚴密に之を守り、此日には鐘の鐘を鳴らさず、常燈明を點せず、十字架を初め聖壇の諸具は凡て黒布を以て蔽ひ、僧侶の外一般の人々はマスに與らず。
 誓願 Vow 慣例 危險又は災厄に遇ひし時神の助けを求むるため、又は宿願成就のため、神に成る物を献げ又は神のため或る事を爲さん誓約することにして、古代の宗教に廣く行はれたる慣例也。其誓願の中には交換的の性質を有する者あり、又は敬虔なる信心を表せる者あり、快樂を斷ち生活上必要のものも、斷たんとす約束をなす者あり。此等諸種の誓願は何れも希伯來人の中に行はれたるを見る。此事に關する法律は「古典中」に之れなけれ共、最も古くより行はれたること明也。即ちヤコブはベテルに於て誓を立て、神も彼と共に在り、彼の往く道を守り、マンと衣とを與へ、其父の家に安全に歸ることを得せしめば、立てたる柱を神の家となし、且所得の十分一を獻ぐべしと云へり(創廿八の廿一廿二)。士師の時代に在りてはエフタ神に誓願を立て、エホバもしアンモン人を其手にわたし給はば、其凱旋の晩初めて彼を逐ふる者か燔祭となして獻げんか云へり(士十一の卅一卅二)。ベンナはエホバもし男子を授け給はば、之を一生涯の間エホバに獻げて剣を其首にあつまじと云ひ(母前十一の十一)。サムエル生るゝに及びて其の如くなせり。又アブラハムはゲシムルに在りし時誓願を立て、四年の後に之を果せりと傳へらる(母後十五の七、八)。此等の誓願は何れも交換的の性質を有する者なれ共、デビダが「我れエホバの爲めに處を尋ね出し、ヤコブの全能者のために居所を求め得るまでは、我家の幕屋に入らず、我臥床に上らず、我目を睡らし

めず」と云ひたりしと云ふは(母前卅二の二一五) 聖なき誓願の例として見るべし。以色列人がカナ人アブラハムに攻められし時「エホバもし此民を我が手に付し給はば我れ其城邑を悉く滅さん」と云へる誓願を立て、之を果したりしは(民廿一の一三) 最も極端なる誓願の例也。申命記には誓願に關する律法極めて少く(十二、廿三) 其處には誓願を以て宗教的義務となすが如きことなしと雖も、一旦誓ひたることは必ず之を果さるべからずと云へるを見れば、當時誓願に關する考の幾分弛緩し居たりしを知るべし。祭司典には之に關する法律頗る多く、殊に利未記廿七章には之に關する多くの規定を録す(利廿二、民十五參照)。現代の猶太教に在りては誓願を立つること一般に行はれたる者の如く、耶蘇は此問題に關し當時の宗教家と争ひたり(可七の十一一十三)。保羅は此點に於ては猶太人とは猶太人の如くなしたり(徒十八の十八、廿一の廿三一廿六)。
 正經 經 「カノンの條を見よ」。
 清教徒 Puritans 宗派名 (一) 名稱「ピウリタン」(清浄者の意) なる名は元々嘲弄的稱呼なり。普通一般の宗教的行狀に満足せず、一層嚴格に信仰を勵行する者として、反對黨が嘲弄のため付したるものなるが、遂に宗教上の一大運動を標榜せる名稱となりて今日に傳はれり。去れり所謂「ピウリタン」なる人々の間には、神學上政治上又教會の儀式に於て初めより意見の一定せるものありしにばあらず、種々多の人々を網羅せし稱呼なり。唯だ彼等全體の同意せし一點は、羅馬教會より傳はりし教會内の弊害を一掃せんことを欲する熱心なるプロテスタントなりし一事なり。

七の部

清教徒

(二) 起程、若し詳かに其起程を深らんとせば、少くも宗教改革以前に遡らざるべからず。ウィリアム、チンダル、ウォン、ウィリアムズ等の聖書翻譯者を始め、羅馬教會に反抗して立てる宗教改革者等は即ちピウリタンの前驅なりしなり。然れども明かに一個の運動として目すべきものなりしは、第十六世紀英女王エリザベス治世の後半にありと云ふべし。是より先き宗教改革の氣運歐洲大陸の天地を震動し、餘波は延いて英國に及び、ヘンリー第八世の治世に當り羅馬法王の權下を脱するに至りし、其所謂改革は歐洲大陸の改革とは大に趣を異にし、單に教會政治上に羅馬法王との關係を斷ちしと云ふに止り、羅馬法王に代りて教會の主權となり凡ての教權を掌握せしは即ち英王なりしなり。後女王エリザベスの代に至り、英國キリスト教の基礎鞏固となり『宗教規程』を布きて國教の統一を謀り、茲に宗教的專制の端を發せり。然るに一方に於ては英國上下社會の腐敗は極度に達し、人心浮薄、奢侈其勢を恣にし、心ある者をして憤然として世の墜落に眉を蹙めしめたり。此時に當り憤然として社會に立ち、宗教的所信を勵行し、俯仰天地に恥ぢざらん進行を確守すべしと唱道せる清教徒とす。彼等は國立教會が俗權を握りて專横を極むこと、其教義禮典の甚だしく羅馬教會に彷彿たることを深しとせし、教會に列席せずして私に私宅に會合を催ふし、禮拜を行へる者多かりき。彼等の中には歐洲大陸の宗教改革の餘波を流んで、カッゲインの長老主義を執らんことせし者あり。又は個々獨立の會衆政治を主張せし者もありしが、必ずしも國立教會より分離して一派を創立せんことば彼等の初志にはあらずき。彼等の多くは其當初に於ては國立教會の中において之が改

清教徒

善端正を實行せんことを企圖せし者なりしが、遂に其目的を達せずして勢の趨く所奈何ともし難く、國立教會より分離するに至れり。其の會衆主義を採りし者は現今の英米コングレガーションナル(會衆)教會となり、長老主義を採りし者は同じくプレスビテリアン(長老)教會となり、其他國立教會以外の新教諸派は多く清教徒の流を流む者云ふも不可なし。(三) 歴史一斑、ヘンリー第八世の代に始りし宗教改革は、メリー女王の代に一旦退却して羅馬教會の復興となりしが、更に女王エリザベスの即位と共に、新教徒の勢力大に加はり、英國教會は全然羅馬法王の權下を離るに至れり。新教徒の女王を歓迎したるも宜なり。然れども女王は羅馬教會を離るるに共に、一方には英國教會の統一を計劃し、羅馬教會に習ふて新舊書を編製し、教會の儀式禮典を一一定し、敬之に違ふを許さざることをなせり。又高等委員、廳を設け、宗教に關する最高の權威を授け、教義式典等を規定し、異端者を裁判せしめ、以て國立教會の勢力を擴張せんことを期せり。然るに其禮式慣習の中には羅馬教會の弊習を其儘に傳ふるもの甚だ多し。例之十字架を祭ること、白色の法服を穿ふこと、一定の祈禱にあらざれば捧ぐる能はざること、其他舉ぐるに違あらず。加之監督以下國立教會に關する教師の品行に就て徹らざる者多かりければ、清教徒主義の人々が陰に陽に反對を試みしは實に已むを得ざることなりき。彼等は歐洲大陸に於ける同主義の人々を氣取を通過し、相往來し互に聲援を與へたり。斯くて清教徒の勢力次第に隆盛にして、監督又は大學教授の間に於て之に賛同する者少からずなりければ、政府に於ても極力之を抑壓せんことを極めたりき。

清教徒

一五六七年六月十九日清教徒中の熱心者凡そ一百名倫敦のブルームフィールドに會合し、其所信に従ひ禮拜せんに、國立教會以外に於て禮拜所を設くるの外なしとし、一團體を結ぶに至れり。是れ恐らくは英國に於ける最初の分離教會ならん。然るに此事有司の耳に達するや其重なる者等は直ちに捕へられて獄に投ぜられぬ。當時清教徒中において傳學の名ありし者なトマス、カートライトとす。彼は劍橋大學の出身なり、メリー女王時代の迫害の時に逃れて大陸に赴き、エリザベス女王の即位後本國に歸り、神學教授に任ぜられたり。然るに其説く所は大陸の改革者等と同意見にして、殊に教會政治上に就き痛く國立教會の制度を非難しければ、教授の職を奪はれて再び歐洲に逃れぬ。一五七二年『教會制度の改善に關する國會への警告』と題する一書出版せられしが、此は清教徒主義の信仰と主張とを闡明せしものなり。其筆者はジョン、フィールド及びトマス、ウィルコックスの兩人なるが、忽ち獄に投ぜられたり。然れども同書は度々印行せられて民間に普及せり。其他清教徒の主義精神を唱道せる著書の出版は益々盛んなりき。國立教會にても亦ウィットヤットの如きあり、之が辯駁に善く兩相對して火花を散せり。一五七四年女王は分離主義の益々熾んたるを見て驚て置かれしことなし、監督及び官吏の忠告を責め『對一令』の勅令を命合したり。然れども人心の趨く所法令の能く制する所にあらず。教師も信徒も教會堂に出席せざる者益々多くなりぬ。彼等は其信仰に關しては自己の所信に従ひ、其信任する教師の説教を聽き、又は其著書を讀み、自ら快しとせざる清教徒の中にても尙教會を務むることなせり。而も清教徒の式にても尙教會に留り内部より改善の方法を見出さんことを務め、斷

七の部

清教徒

然教會を脱することを敢てせざる者も多かりき。去れば其真心を重んずる者にして、英國教會の教師たる者益々減少し、倫敦市中に於てすら半數以上の教會は無教とな、偶主牧師として留る者も多くは衣食のためにして其修行修らざる者多かりき。英國に於ける最初の長老教會はジョン、ワウクスに設立せられたるものなりき。之に續きて同一の教會組織を作る者次第に増加せり。彼等の手に依りて教會政治に關する一書は出版せられたり。書中に教師は教師の團體に於て承認を受くべきこと、信仰及び聖禮典に就ては國立教會に従ふべきこと、其他の簡條及び祈禱書には同意すべからざることを、其他は國法及び教會の平和を妨害せざる範圍に於て適宜變更するも妨げざることを等記したり。此書に署名したる教師は五百名に達し、其一人ジョン、ワウクスは捕へられて獄に投ぜられ、遂に死刑に處せられたり。右の運動は後の長老教會の萌芽なるが、清教徒の間に於て更に一步を進めて各個教會の獨立を主張したる者あり。其主領をロバート、ブランチンと云ひ、其他はブランチンと云ひて知られたり。是れ即ち會衆派の濫端なり。此運動に關しても亦投獄又は死刑に處せられし者少からず。(會衆派)の條を看よ。エリザベスの後を襲ふて王位に即きしジェームス一世とす。王は元々蘇格蘭王として在位中長老派の教會を贊助し、尙固守すべきよしを誓はれたれば、英國清教徒等は大力を得、其即位早々八百二十五人の教師等の連署にて一書を奉り、先づ彼等は浸りに教會の平和を破り分離を謀るものにあらざるを述べ、運んで教會に存在せる諸種の迷信及び陋習を排除せられんことを請願したり。王は初めの程は尙清教徒の主張を容るゝ傾ありしが、忽ち國立教會派の爲

清教徒

めに化せられ、先代よりも一層嚴重に統一主義を勵行しければ、外國に移住する者益々多しと起り、其多數は當時最も信仰自由なりし和蘭國に逃れたり。其中にてライデン市に於ける一團體はウーモン、ロベリンソンの牧師をその長となし、其百餘名は米國へ移住せり、之を米國新英州の祖先セルゲイム、フアトザースとす。チャールス一世も亦長老派の賛成者にして教育せられしが、其皇后は佛王アンリ第四世の女にして、熱心なる羅馬教徒なりければ、其感化に依りて羅馬教徒を寛容せり。而して國論の反對に抗して清教徒其他の自由主義者に壓抑を加ふることを前代に譲らず。斯くて民心益々王室に背き、國會亦命を奉ぜざるに至りければ、王は兵力を以て壓迫を加へ、其重なる者をして國事犯人として嚴重に處分せんとするに至りける。其極一六四二年國王自ら兵をノッナムガムに起しけるが、國民軍に敗られ遂に無慘の最後を遂ぐるに至れり。王政廢れて共和政治となりしが、クロムウェル大保衛官として政治を執るに及んで、彼は衆議を容れ長老主義の教會政治を以て國立教會の主義とせし、分離派に對する罰則は廢せられ、凡ての宗派を公平に保護せり。殊にウエストミンスターには長老會衆兩派の人を聘して講壇に立たしめぬ。是と同時に凡て演説、淫亂、其他社會の秩序を推亂すべき行為を嚴禁し、安息日の營業旅行等を禁止したり。去れば監督政治の人々も長老派も隨意に其真心に従ひて禮拜を許され、獨立派、浸禮派等自由を得て隆盛の機運に到來せんとせし、元の國立教會派は勿論長老派の人々も亦共和政治に對して反抗の態度を執りたり。クロムウェルの治政は現日に至り、其子チャールド

聖週

は數ヶ月にして其氣を靜し、ヤコブ、第二王位に即くに及んで、長老派の人々の熱心反對せしに俾らす、宗教對一令は又しても公布せられ、凡ての教師は皆此の儀式に據るべき誓言を要求せられ、監督より按手續を受領せし者ならざれば聖禮典を司るを許されざることなりき。此時對一令の發布と共に約二千の教師等は其職を辭し、號泣せる會衆派に對して訣別の説教を爲したり。斯くて國立教會内に於ける清教徒の運動は、悉く失敗に歸したる姿となれり。去れば熱心なる清教徒等は國立教會を離れ別な教會を結ぶの已むなきに至りぬ。清教徒なる名稱が分離派又は獨立派と變りしは其頃よりのことなり。現今の會衆、長老、浸禮等の諸派即ち是れなり。清教徒が往々嚴格に過ぎ、其行為時に其陰に流るゝが如きの弊ありしに否定すべからざることをなれども、其真心を重んじ清教徒を固守し、超然として一世に卓立し、以て其所信を遂行したる愈氣精神に至りては誠に敬慕すべきものありと謂ふべし。有名な歴史家マコーレー其英國史にピウリタンを評して曰く『清教徒は神を識り神に事へ神を愛むを以て其存在の大目的と爲したり。彼等は純潔なる禮拜に代へて儀式的崇拜を爲す者を見て之を輕蔑したりき……彼等には人類の最も大なる者と敬しき者の別あらざりき。何となれば彼等の常に仰ぎ見る神は人類との間に存する無究の隔離を感じたればなり』と。(參考書として、ダブリア、エッチャ、ストウエルの『英國の清教徒』、フィッシャー博士の『教會史』、マコーレー、ハナム、グロウソン等の『英國史』、増野悦典の『英國清教徒記事』を推す)。

聖週 The Holy Week (Helomus Mognu, or Sanda, or Nijna) 衛 譯 四

セの部

聖書

旬節の終りの一週にして、枝の主日(耶蘇のエルサレムに到着したる日)に初まり復活日の鷓鴣時に終る。基督教會が一般に聖書を記念したりしこと、は、第三世紀の中期に成りたる書に記さる。此週には断食を守り、パン、鹽、植物性の食物及び水の外一切肉類を用ひず、金曜日及び土曜日、少くとも土曜日には全断食をなせり。テオドロスの時代には凡て公私の業務を休み、法廷を閉鎖し、負債又は其他の小過失に依りて禁獄せられたる者を特赦し、奴隷を解放し、馬太傳より約翰傳に至るまでに記されたる福音受難の歴史を毎日讀み、以て信仰上の教訓を與ふることを爲せり。羅馬教會にては今日も尙此週を守り、業務を休止し断食齋戒の心を爲せり。プロテスタント教會の中にも英國教會及びスカンディナヴィヤのルーテル教會は此週を記念することを爲せり。

聖書

聖書

聖書 Bible 聖書 聖書は「バイブル」なる語は希臘語より來りたる者也。古昔の書物はピラサス(Biblos)又はパピラス(Papyrus)を稱する草より製したる紙に書きたるより、希臘語にて「書物」の義を Biblos 又は Biblion 稱せり。而して基督教の文籍が神の默示の記録として承認せらるるに及び、希臘の基督教徒は之を ta biblia 稱するに至れり。また「バイブル」は「卓絶せる書物」の義也。此名稱はグレメント第二書を稱せられたる第二世紀の中期に成りたる書中に初めて見たりと稱せられ、爾後一般に採用せられたり。尤も普通通するに「聖書」又は「經」なる語を以てせり。拉丁語にては Biblia 稱し、中世の頃には Bibliotheca なる名稱一般に用ひられたるが如し。舊約及び經外聖書の中には、猶太人の經典を「書」(但九の二)「聖書」(マカベエ一書十二の九)「律法」(一の五

聖所

十六、三の四十八)等と稱せり。新約にては一般に *the Synagogue* (拉丁語 scripturae anglicanae) 即ち「聖書」を稱せり(太廿一の四十二、廿二の廿九、路廿四の廿二、約五の卅九、徒十八の廿四)。猶太人の經典は全體として「聖書」名をばらばらに、特殊の聖句を引く場合には *verses* なる單數を用ひたり(路四の廿一、約廿の九、雅二の八)。聖書は分ちて二大部と爲す。舊約及び新約是也。此二大部のことに就ては各々其條下に詳説す。又聖書の言語、正經、經文等も舊約並に新約に分ちて之を詳説せり。聖書の翻譯、インスクリプション、天啓は別に其條を設けて之を説す。各々其條下に就て之を見よ。

聖所

聖所

聖所 Sanctuary 聖所は神を崇拜する場所の義にして、古の神聖の教會皆廣義に於て聖所と稱せられ得べし。聖所、爰には唯以色列人民が當時より新約時代に至るまで、禮拜のため聖別したる場所に就て其大略を叙す。以色列人は聖所なる語を廣義にも狹義にも使用せり。廣義に於てはホセアが迦南の地を指して「エホバの地」(何九の三)又は「エホバの家」(一、九の十五)と云ひしが如し。狹義に於ては特種の場合に祭壇を築き、又は他の方法を以て神を拜し之を以て聖所となしたるが如し。此意義に於て猶太人が聖所となしたる者左の如し。

聖所

アカバ灣と死海との中央にカデシ又はカデシパルチアと稱する地あり。此處はモーセが數十年間以色列の軍勢と共に陣營を張りてエホバに奉仕せし處也(民廿の一、十六)。カデシとは「聖」の義にして、創十四の七にはエンミシパテ譯すれば「判決の井」なる異名を附せり。又カデシとヘレデとの間にペエラハイロイと稱する地あり。「我を見る活る者の井」の義にして、此泉(又は井)の傍にてエホバの使者ハゲルに現はれたるより斯く名けられたる也(創十六の七、十四)。

聖所

聖所

(一) 泉又は井戸、創廿一の廿三に「アブラハム、エセルシに柳を植へ水道に在りし神エホバの名を呼べり」とあり。エセルシとは聖約の井の義にして、アブラハムがアビメレク王と神を指して誓へる場所也。アモスの時代に至りては以色列人は此處に於て神を崇拜したりと云へば(摩五の五、八の十四)以て此地が永く神聖視せられたりを知るべし。又

セの部

聖所。聖書會社

等の如きも亦神の禮拜の行はれたる場所なりき。(四) 高所又は崇邱、然れ共此等の聖所の中最も著しきは崇邱にして、天然の高地又は人爲の高所に壇を築きたるより此名あり。崇邱の中最も著名なるはエテル(摩七の十三)、ギルガル(摩四の四、何四の十五)ギヤオン(王上十三の四)、シニヤ(摩五の五、八の十四)等にして、唯に一般の人民のみならず、預言者及び王侯等に至るまで是等の崇邱にてエホバを崇拜せり(母前九の十二、十三、十九、王上三の二、三、十四の廿三等)。而して崇邱にてエホバを拜するは唯に一地方に限られたることに非ずして、廣く一般に行はれ(王上十二の卅一、卅三、十三の卅二、王下廿一の三、結六の十三、廿の廿八等)且律法に違ふこと信ぜられたり。

聖所

聖所

聖所 The Holy Place、エルサレムの神聖の地を見よ。聖書會社 Bible Societies 結社名 聖書を廣く頒布せんことを目的を以て立てられたる者にして、最初の聖書會社は一七二〇年コンスタイン侯がハレルの孤兒院内に設けたるコンスタイン聖書館と

聖書會社

聖書會社

稱する者にして、此會社は一七一九年以前に於て既に四萬六千部の聖書と十萬部の新約聖書を頒布せしが、一八七九年に於て此會社の印刷したる聖書の部數は六百十萬部に達したり。大英及び外國聖書會社(The British and Foreign Bible Society)は英國の内外に廣く聖書を頒布せんことを目的を以て、一八〇四年に設立せられ、其最初の年に於て資金として寄附せられたる金額五千五百鎊に上り、歐亞巴大陸に於ては殆ど是と同時に數萬の聖書會社起り。即ちハメルに於ては一八〇四年、柏林及びラチスホーンに於ては一八〇五年に聖書會社設立せられたり。米國に於ては「米國聖書會社」なる者一八一六年を以て創設せられたり。此外亞非利加に二箇、亞細亞に五箇、加那太ノグアスソヤ及び西印度に各一箇の聖書會社と前後して設立せられたり。大英及び外國聖書會社とは世界最大の聖書會社にして、タモールカ派を除き新教各派を包有し、凡そ千二百の支社を世界の各地に有す。之に次げるは「米國聖書會社」にして、此會社も亦許多の支社を有す。蘇格蘭國民聖書會社(The National Bible Society of Scotland)は一八六一年の創立に係り、其重要なることに於て第三に位す。米國に於ては又一八三六年「アメリカン・アンド・フォリゲン・バイブル・ソサエティ」(The American and Foreign Bible Society)なる者創設に於て創立せられたり。此聖書會社の目的は「聖書の原語の正確なる意義をたしめ、其意義を聖書の翻譯せらるる國語の性質の許す限り直譯的に言ひ顯はし、直譯的に翻譯すること能はざる言語をば翻譯せし原語のままに保存せんことを在り。一八五〇年又「米國聖書共同會社」(The American Bible Union)なる者設立せられたり。其目的は

「米國聖書會社」は「元來聖書の語彙、即ち聖書中の聖辭をいはば分けに配列し、其語彙の何書、何章、何節に在るやを發見するやう作りたる索引の名なりき。初めて完全せる拉丁語聖書の語彙を編纂せるは、カレディナル、ヒューゴにして、彼は一二四四年五百人の僧侶を用ひて拉丁語聖書の語彙を作れり。一五二三年ラビ、モルテカイ、ナヤン初めてゲニスに於て希伯來語聖書を編纂せり。一六二一年カラシアスは希伯來、拉丁及び希臘語の聖書語彙を編纂せり。一六二一年長老バクストルプの希伯來語聖書語彙又出版せらる。然れ共最も有益なる希伯來語聖書語彙は一七五四年英國及び愛蘭の監督守護の下に成りたる博士フロン、デーロルの撰に係る者也。又最も完全に最も精密なる七十人譯聖書語彙はトロム・アモスの編輯に成れる者にして、希臘語新約聖書

セの部

聖書辭典

聖書辭典 Dictionary of the Bible

聖書に關する一切の知識を網羅せる者にて、其中に...

(一) 聖書辭典、此種の書の初めて出版せられたる...

聖書總論

聖書總論

デーヴィース、シュルバウム等あり(原本獨逸語、...

聖書の寫本

聖書の寫本 Manuscripts of the Bible

聖書各卷の性質、結構、内容、作者、著作の時...

聖書の寫本 Manuscripts of the Bible. 舊約聖書の寫本の...

セの部

聖書の寫本

最も重要な材料は、埃及に於て生ずるパピルス...

聖書の寫本

が有する印刷せられたる希臘語聖書の文字に類する...

聖書の寫本

Image of a manuscript page with Greek text and decorative elements.

セの部

聖書の寫本

に成りたる證據也。四折大にして一頁を三欄に分ち、小き美しき大字形の文字にて、言語と言語との間に區別なく、連続的に書かれたり。元來箇の終りに一字若くは半字大の小さき空所を存したりしが、裝飾的の頭文字なく、句讀及び音節の符號も亦之れあるなし。其之れあるは後人の附加せしものに係る。箇の終りに殘されたる空所は此寫本のみに限り、其他の寫本には之れなし。此寫本は元來舊約聖書全體及びクレメントが哥林多人に贈りたりといふ書翰の知き經外聖書を包含したりしが、今は舊約に在ては創世記の大部分及び詩篇の一部、新約に在ては腓利門書、提摩太前後書、提多書、希伯來書の末尾、及び黙示録を缺けり。新約諸篇の順序は若し全體揃ひしならば、亞歷山寫本と同じく、公共書翰に保護の書翰の前に來り、希伯來書は帖撒羅尼迦後書と提摩太前書との間に在りしなるべし。此寫本は第四世紀の產物也と一般に信ぜらる。其證據確實なれ共此書の保存者は近年之を他に示さざるを以て聖書學者も之を利用するを得ず。カルティナル、マイ

ΤΟ ΔΕ ΕΤΙ ΑΠΙΣΤΑΝΤΙ
ΤΗΝ ΤΩΝ ΣΑΛΕΥ
ΟΜΕΝΩΝ ΜΕΤΑΘΕ
ΣΙΝ ΩΣ ΠΕ ΠΟΙΗ
ΜΕΝΩΝ ΙΝ ΑΜΜΗΝ
ΤΑΜΗ ΣΑΛΕΥΟΜΕΝΑ
ΔΙΟΒΑΣΙΛΕΙΑΝ ΑΣΑ
ΛΕΥΓΟΝ ΠΑΡΑΛΛΗ
ΒΛΗΘΟΝ ΤΕ ΣΕΧΟΜΕ
ΧΑΡΙΝ ΔΙ Η ΣΑΤΡΥ
ΟΜΕΝ ΕΥΑΡΕΣΤΩ
ΤΩ ΘΩΜΕΤΑ ΕΥΑ
ΒΙΑΣ ΚΑΙ ΔΕ ΟΥΣ ΚΝ
ΤΑΡΘΟ ΣΗΜΩΝ ΠΡ
ΚΑΤΑΝΑΛΙΣΚΟΝ

本寫イッソ

聖書の寫本

フはシナイ山に遊びたりしに、聖カトリナの僧庵に於て未だ曾て世に知られたることなき七十人譯聖書に屬せる四十三葉の美麗なる羊皮紙を發見したり。彼は一八五九年再び同庵に遊びたりしに、更に希臘新約書の全部、舊約書の一部、パルナボの書、及びヘルマスの牧者と稱する書の一部の併せて三百四十六葉、十三萬二千行に記されたるものを發見したり。彼は之を希臘教會の守護者なる露西亞皇帝

聖書の寫本

て、古代に成りたる證據凡ての點に於て顯はる。書中の諸篇は初めに福音書、次に保護の書翰(希伯來書を含む)、帖撒羅尼迦後書の次にあり、次に使徒行傳、次に公同書翰、次に約翰默示録の順也。此寫本の壯麗なるもの一八六二年聖ペテロスアルプに於て出版せらる。文字の形狀、欄の區別其他凡て原書のまゝになせるもの也。ライプツヒ版は公衆用のため出版せられたる者也。

一八五八年に此寫本の本文を出版し、翌年之が改正版を出したれ共信用するを得ず。テイッセンドルフは其新約全書の一部を出版せり。
(11) シナイ寫本 (The Codex Sinaiticus) 此寫本は希伯來文字アルフ(Α)を以て表す。テイッセンドルフの發見する所にして、聖書文學の部門に於て第十九世紀に起りたる最も興味ある出來事の一は蓋し此發見なるべし。一八四四年テイッセンド

歴山に就じ、今聖ペテルスアルプに在り。此寫本は第四世紀に成りたる者也と學者の一般に承認する處にして、ゲアチカン寫本と共に最も古く最も確實なる證據となる者也。美質の羊皮紙を用ひ、大にして明瞭なる大字形の文字を以て一頁四欄に書ける。其中には後人の手に校正せられたるものあれ共、其原筆記者の手に出でたる者には裝飾的の頭文字、音節及び音節間の區別一切之れなし。書體頗る明白にして

年の文化的作用に依りて或る程度迄之を回復し、留後著者なる學者に依りて熱心に對校せられ、一八四二年テイッセンドルフは其結果を印刷に附したり。此寫本の有する二百九葉の中百六十五葉は新約にして、新約全書の三分の二に足らず、諸篇の順序は亞歷山寫本と同じ。
以上四箇の寫本の外尚二三のものを見れば、
(五) エブロン寫本 (The Codex Bezae Cantabrigiae) 此寫本はイギリスの都市トリニチー、カレツヤの圖書館に在り。Gなる文字を以て表せられたる再寫の寫本にして、批評上重要な價值を有す。此寫本は馬太傳世二葉を有す。一八〇一年博士ジョン、パーレット其讀み得るだけを印刷に附したりしが、一八五三年博士トレグセルは更に此寫本を精査し、化學的作用に依りて同福音書全體を讀み得べからしめたり。此寫本は第六世紀の作也と信ぜらる。
(六) ヴァッ寫本 (The Codex Bezae Cantabrigiae) 希羅、拉丁二語にて記せる本文を有する有名なる寫本にて、劍橋大學の公衆圖書館に在り。Dの文字を以て表せられ、四福音及び使徒行傳を包含す。此寫本はテオドル、マヤが一五六二年佛國內亂の際リオンに於て、レニウス寺院にて發見したる者にて、一五八一年彼は之を劍橋大學に獻じたり。此寫本は其本文が多くの附加と變化とを有するに在り。四福音、恐らくはゴッラの南部にて生じたる者なるべし。

セの部

聖書の寫本

ΕΝ ΑΡΧΗ Η ΝΟΛΟΓΟΣ ΚΑΙ Ο ΛΟΓΟΣ Η
ΤΙΡΟΣ ΤΟΝ ΘΕΟΝ ΚΑΙ ΘΕΟΣ Η ΝΟΛΟΓΟΣ
ΟΥΤΟΣ Η ΝΕΝΑΡΧΗ ΤΙΡΟΣ ΤΟΝ ΘΕΟΝ
ΠΑΝΤΑ ΔΙΑΧΥΤΟΥ ΕΓΕΝΕΤΟ ΚΑΙ ΧΩ
ΡΕΙΣ ΚΑΥΤΟΥ ΕΓΕΝΕΤΟ ΟΥ ΑΕΝ
Ο ΓΕΓΟΝΕΝ ΕΝ ΑΥΤΩ ΖΩΗ Η Η
ΚΑΙ Η ΖΩΗ Η ΝΤΟ ΦΩΣ ΤΩΝ ΑΝΘΡΩ
ΚΑΙ ΤΟ ΦΩΣ ΕΝ ΤΗΣ ΚΟΤΙΑ ΦΑΙ
ΝΕΙ ΚΑΙ Η ΣΙΚΟΤΙΑ ΑΥΤΟΥ ΟΥΚ ΑΤΕ
ΛΑΒΕΝ

本寫山歴亞

ΕΝ ΑΡΧΗ Η ΝΟΛΟΓΟΣ ΚΑΙ Ο ΛΟΓΟΣ Η ΤΙΡΟΣ ΤΟΝ ΘΕΟΝ ΚΑΙ ΘΕΟΣ Η ΝΟΛΟΓΟΣ ΟΥΤΟΣ Η ΝΕΝΑΡΧΗ ΤΙΡΟΣ ΤΟΝ ΘΕΟΝ ΠΑΝΤΑ ΔΙΑΧΥΤΟΥ ΕΓΕΝΕΤΟ ΚΑΙ ΧΩΡΕΙΣ ΚΑΥΤΟΥ ΕΓΕΝΕΤΟ ΟΥ ΑΕΝ Ο ΓΕΓΟΝΕΝ ΕΝ ΑΥΤΩ ΖΩΗ Η Η ΚΑΙ Η ΖΩΗ Η ΝΤΟ ΦΩΣ ΤΩΝ ΑΝΘΡΩΚΑΙ ΤΟ ΦΩΣ ΕΝ ΤΗΣ ΚΟΤΙΑ ΦΑΙΝΕΙ ΚΑΙ Η ΣΙΚΟΤΙΑ ΑΥΤΟΥ ΟΥΚ ΑΤΕ ΛΑΒΕΝ

聖書の寫本

聖書の寫本

輪傳の一部
(六)の五十
一八の五十
二)及び哥
林多後書の
一部(四の
十三一十二

の六)を缺けり。而して終末にクレソソトが哥林多人に贈りたる書翰を附せり。
(四) エブロン寫本 (The Codex Bezae Cantabrigiae) 有名なる再寫の寫本(再寫の寫本とは一度書きたる、文字を削り、其上に又文字を書したる者にして、古昔紙料の高價なりし時には此の如きことを爲せり)にして、巴理の帝國圖書館に保存せられ、Gなる文字を以て表せらる。元來舊約聖書の全部を包含せる者にして、薄き羊皮紙を用ひ一頁一欄に記さる。音節なく、連續的に書かれ、文字は亞歷山寫本に於けるよりも稍や大きく、各節の最初の文字は其他のものよりも大也。此寫本は第五世紀初年に成りたるものにして、後三人の手に依りて改正せられたるもの也。批評的價值頗る高くして、トレグセルは其確實なることゲアチカン寫本に次ぐと云へり。此寫本の世に出でし次第左の如し。第十三世紀の頃此寫本は最早不用なる反古也と誤想せられ、此寫本の書かれたる羊皮紙を用ひて其上に新なるものを書かんとの目的を以て、もとの順序に拘はらず亂雑に綴り合せ、之に第四世紀の有名なる古西利亞教會の神學者エフレム(Εφραίμ)の說教を記載せり。第十七世紀の終りに於てアマタス(Amatus)なる者初めてエフレム(Εφραίμ)の說教の書かれたる其下には更に古き文字あるを見出したれ共其不明了にして讀み難く、其何物なるやを知らずして打過きたりしが、一八三四一五

セの部

聖書の友

ふ。 (七) 紫色寫本 (The Codex purpureus) 古代の寫本の断片にして、其四葉は大英博物館内のコットン圖書室に、六葉はワシントン、二葉は維納帝國圖書館に在り。紫色の楮皮紙、銀字にて書かれ、神及び基督の名は金字にて記さる。一頁を二欄に分ち、大なる闊き文字を以て書ける。第六世紀の終り、又は第七世紀の初の所産也と信せらる。

聖書の友

The Scripture Union. 結社名

聖書の友とは、日課として定められたる聖書の小部を毎日讀む人々の團體也。一八八〇年英國に小兒特別禮拜會なるもの起りしに、此は上流社會又は中流社會の少年に傳道する目的を以て起りし者にして日曜學校以外の事業也。此傳道會にては、Our Own Magazine と題する雜誌を發行し聖書の日課を一頁半位宛掲げ、又各地より集めたる實話をも載せたり。此雜誌は純然たる福音主義にして、且全く宗派以外に立てり。是れ英國に於ける聖書の友日課の起源にして、次で學堂傳道會なる者起り、此傳道會にては、Our Boys' Magazine と題する雜誌を發行し、之にも主として聖書日課の註解を掲載せり。此の如く聖書の友は小兒のために單純なる福音を教ふる目的を以て起りたる者にして、大人のために神學を讀むが如きは素より其目的に非ず。此傳道會は後漸次發達し、巡回幹事を置き、又地方には地方幹事を置き、少年のために集會を開く等の事をなし、現時會員の數五十萬人に達せり。日本に聖書の友の創立せられたるは明治十五年(一八八三年)にして、東京本橋町明治會堂(厚生館)にてルーサー誕生四百年紀念祭を開き當り當日之を發表し、其年の末入會せる者八百人あり。但我國

聖書の翻譯

に於て聖書の友會員たるものは小兒に非ずして、多くは大人也。之が創立に最も力を盡し、爾後今日に至るまで終始其使命に努めつゝあるはドクトル、ホイトニーにして、津田仙、本多庸一、平岩實保等も亦與りて力あり。巡回教師を置き、リーフレットを發行し、又月刊雜誌を發行す。月刊雜誌は今日二百七十餘號に達し、浮田和良、竹田三郎、高木王太郎等も一時主筆たりしことあり。現今會員の數二萬に達す。

聖書の翻譯

Bible Versions. 雜語

國語に翻譯せられたる聖書は、世界各種の人民に聖書の使命を傳ふる者なるが故に、其れ自らに於て重要なものならず、聖書學者に取りては、原語聖書の寫本及び教父等の引用文と共に批評上最も重要な材料を供す(殊に古代の翻譯に於て然り)。又其多くは其書かれたる言語の最古の記念とも稱すべき者なるが故に、文學上言語學上最も有益なる者也。今左に古昔の譯の重要な翻譯を示す。(一) 古代の翻譯 (A) 舊約全書 (B) 希臘譯(約聖書の最も重要にして且最古の翻譯を七十人譯 (Septuagint, LXX) となす。トラーミー、フィラデルフスの請に依り、エルサレムの祭司長が埃及の亞厘山に送りたる七十二人の學者之を翻譯せりとの傳説より此名あり。此翻譯は紀元前三世紀より二世紀の間に成りたる者にして、遅くも前一三三年には大成せしなるべし。此外にアキラ譯 (Aquila's Version) シンケラス譯 (Symmachus' Version) テオドーシウス譯 (Theodosian's Version) 其他尚二三の希臘譯あり。七十人譯の如く重要な譯に非ず。希臘譯聖書の條を見よ。(C) カルデア譯、カルデア譯の舊約は Peshitta (Aramaic) と稱せられ、猶大人

聖書の翻譯

が巴比倫に俘囚となりし時希伯來語を忘失せるため(厄八の八卷)必要上成りたるものにして、初め久しき間は口傳的に傳はりしものなるべし。現存するものの中には舊約全書を包有するものなし。最古のものなオンケロス (Onkelos) 及びヨナサン、メン、ワウ (Jonathan ben Uziel) となす。(F. Max Müller の條を見よ。(D) 西利亞譯、Peshitto (Peshito) と稱せられたる西利亞譯は紀元第二世紀の頃希伯來語より直接に翻譯せる者也。此等古ヘキザブラ (Hexaplar) と稱せられ、七十人譯より重譯せられたるものあり。(E) 西利亞譯聖書の條を見よ。(二) 拉丁譯、古拉丁譯又は「イタリヤ」(The Old Latin or Italic) と稱せられたるは、紀元第二世紀に於て七十人譯より爲されたる直譯的翻譯にして、エロムが三九二一四〇四年の間希伯來語を参照して之を改譯せる者「ヴェルゲート」(Vulgate) と稱す。(三) 拉丁譯聖書の條を見よ。(F) 此外尙サウヤ譯、埃及譯、エテオピア譯、エチオピア譯、亞利比亞譯、ゲオルギヤ譯、彼斯譯、古スラヴ語、ニヤ譯等あり共、比較的其價値少し。(四) 新約全書 (A) 西利亞譯、Peshitto (Peshito) は舊約と同じく第二世紀の頃成りたる者にして、希臘語と最もよく一致し、且其文章明白高雅にして翻譯の王と稱せらる。レウイスの經文 (Lewis Text) は一八九二年レウイス夫人がシナイ山に於て発見したる者、キワレトンの經文 (Curreton's Text) はキワレト博士がニトリアの僧院に於て発見し、英國博物館に納めたる者にして、レウイスの經文と殆ど相同じ。ロウツケス譯 (Philoxenian Version) は五〇八年ロウツケスの監督ヒロツケス管理の下に成りたる翻譯也。(B) 西利亞譯聖書の條を見よ。

セの部

聖書歴史。聖心會

(一) 拉丁譯、其重なる者は古拉丁譯と稱する第二世紀に成りたる者、第四世紀の終りにエロムが改譯したる「ヴェルゲート」と稱する者也。(二) 古拉丁譯聖書の條を見よ。(C) 埃及譯、其重なる者はコプタク又はメンフィタク譯 (Coptic or Memphitic Version) と稱する第三四世紀の頃成りたる下埃及語の新約「セ」イック又はサロアイック譯 (Thebaic or Sahidic Version) と稱せられたる上埃及語の新約也にして、後者は前者より稍の後に成りたるものと如し。(三) 右の外、エテオピア譯、サウヤ譯、アラビア譯、亞利比亞譯、スラヴ語、ニヤ譯等あり。(二) 近代の翻譯、近代の翻譯と稱するもの中最も早く成りたる者は、英、佛、獨、蘭、以、西、葡、ス、カンテイナツイヤ等の諸國語にして、最近數十年間傳道の門戸世界の各國に於て開くるに及び、聖書に至る所の國語に翻譯せられ、今日聖書の翻譯せられたる國語は既に三百廿餘箇の多きに達せり。(英譯其他の重なる翻譯の詳なることは其條下に就て之を見よ。邦譯聖書の由来は「日本譯聖書」の條に詳也) 聖書歴史 Biblical History. 學科名 歴史神學の一科にして、聖書中に記載せられたる事實を表明するもの也。分ちて舊約聖書歴史、新約聖書歴史となす。各々其條を見よ。

聖心會

The Society of the Sacred Heart of Jesus. 結社名

佛蘭西のニワーガ、メー、アラコク(一六四七-九〇)がマルガレターのバレーレモニアルにて異象を見たりしより起る。後イエズイット徒は聖心會を設立するに努力し、一七二六年には佛、獨、以、チテラランド、波蘭等に於て三百十箇を有するに至り、第十八世紀の終りにイエズイット派の後身として組織せられたる結社

聖數

は、之を基礎として起りたりき。更に重要なるは猶人の聖心會にして、一八〇〇年巴黎にて設立せられ、一八六六年には凡そ一萬の會員を有するに至れり。其組織及び規則はイエズイット派のそれと同じく、其目的は女子教育に在り。イエズイット派の放逐せられたる諸國より聖心會も亦放逐せられたり。聖數 Holy Numbers. 雜語 聖書の中に記せられたる數には、修辭上概數を示したるものあり。又は神聖の意義を附せられ、若くは表號的の意義を有する者あり。後者は以色列國民の歴史に重要な出来事、又は宗教思想と關係するを常とす。(一) 十二、以色列國民は十二分派を有せりとの事實より、十二の數は高貴の性質を附せられ、且屢々使用せらる。(出廿四の四、廿八の廿一、利廿四の五、民七の三、書四の二、王上十八の卅一、爾六の十七、八の卅五、太十九の廿八) 祭司の廿四班(代上廿四の四) 廿四人の長老(黙七の四) 四十八のレビの邑(民卅五の七) 七十二人(十一の廿四、廿六) 十四萬四千の印せられたる者(黙七の四) であるは「十二」の數を倍せる者也。出十五の廿七の「十二」の井は修辭的數を示したる者にして「十二」の數は思ふに一年の十二ヶ月(王上四の七、代上廿七の二) 又は十二星宿(王下廿三の五、伯廿八の卅二) より來りたるものなるべし。(二) 十、以色列國民宗教的經驗の根本的要素は、シナイ山上にて十誡を神より與へられたるに在り(出廿の二、七、申五の六、十)。左れば誠の神聖なることより此數が神聖の意義を生じたるに依りてを要せず。世界創造の物語には「神言ひける」を十回反復せり。創世の一七、利廿六の廿六、民十四の廿二、母前の一八、賽六の十三、摩五の三、亞八の廿

聖數

三、伯十九の三、申七の十九、女廿五の一、詩十五の八、黙二の十に記せられたる「十」の數は概數を示したる者にして、蓋し十指より起れる者なるべし。(三) 七、七の數は以色列人の宗教的生活、思想及び習慣と密接の關係を有す。例之祭司はエホバの前にて罪祭の血を七たび灑ぐべしと云ひ(利四の六、十七、八の十一等) 流出ある者其流出止みて深く六らば、己の成潔のため七日を數へ、其衣服を洗ひ體を灑ぐべしと云ひ(十五の十三) エリアムは七日の間祭の外に禁欲せられたりと云ひ(如き是也) 民十二の十四。又小羊は七の角を有せりと云ひ、教會は七の燈臺を以て表せらる。此場合に「七」は完全の義を有す。族長中の聖徒なるエノクがアダムより七代に當れりと云ひ、ヨアが種ゆるに七子を以てせられたりと云へる場合に「七」は善良の義を表す。其他「七」の數の聖書に用ゐられたることは頗る多く、多くは精確の數に用ゐらるれ共、單に概數を示すに過ぎざる者あり。例之創四の十五、七の四、卅一の廿三、卅三の三、出七の廿五、利廿六の十八、賽四の一、詩十二の六、太十二の四十五等の如し。蓋し「七」の數は七曜より起れり(四十二) は「七」の六倍「七十」は「七」の十倍にして、其意義「七」と同じ。(四) 三、創世記に三たび「神を祝して曰く」を反復せり(一の廿二、廿八、二の三)。幕屋は五聖所、聖所、庭の三部より成れり(出廿六の卅三、廿七の九、王上六の十六等) 書廿二の廿二、耶七の四、第一の二には、神の名を三たび呼び、賽六の三には「聖なる哉」を三たび反復せり。向此類の事あれ共、「三」の數が以色列國民の宗教的思想と如何なる關係を有せりや之れ以外明ならず。「三」の數が全

七の部

成 聖

體を表す數として用ゐらるゝに示すは、蓋し古人が樹木の根、幹、枝葉、身體の頭、脚、四肢、物品の左、右、中央、一日の朝、晝、夜の如き者を觀察し、此處に其比を發見せしに由れり。

(五) 四十、以色列人が四十年間荒野に漂泊せし經驗に起り「四十」の數は屢々悲惨なる出來事の繼續せる間の義を表するに至れり。例之四十日の刑罰、四十日の斷食、四十日の悔改の如し(創七の四、十二、十七、八の六、出廿四の十八、卅四の廿八、申九の九、十一、十八、十の十、申前十六の十七、王上十九の八、拿三の四、太四の二)。又「四十」の數の概數として使用せられたる處頗る多し。イサヤ及びエサウが四十歳にして婚姻せりと云ひ(創廿五の廿九、廿六の卅四)モーセが四十歳にして其兄弟に往けり(徒七の廿三)といふが如し。其他以色列の士師が四十年世を治めたりといふが如きも亦概數に過ぎず。

成 聖 Sanctification. **術語** 外部の宗教的行為に對し、神聖となりつゝある主觀的狀態をいふ。此觀念は舊約に在りては預言者に至りて發達し、賽十一の二、詩五十一の十一及び「我れ聖ければ爾曹も亦聖くすべし」と云へる語に依りて最も能く言ひ顯はさる。而して新約に至りて此觀念更に大にして且漸なる發達をなしたり。一言にして之を云へば、成聖とは出來事に非ずして經過也。即ち人の中に在る神的生活が完全に向て進みつゝある進歩的過程にして、耶穌が「天に在り爾曹の父の完全さき」如く爾曹も完全くすべし(太五の四十八)と云ひし語を實現せんとする努力の階梯也。此過程に二方面あり、一は消極的にして罪より救はるゝこと、他は積極的にして人の性質の中に在る神性を發達し實現する

聖 體 共 在 論

こと也。然れ共此二は一にして相離す可らず。保羅は基督教徒の建し得べき此狀態を記して「主耶穌其凡ての聖徒と共に來らん時……我佛の神なる父の前に潔くして責むべき所なき事」也となし(撒前三の十三、五の廿三)「我佛を召し給へる神は忠信なる者なれば、我佛をして必ず之を爲さしめ給ふべし」と云へり(五の廿四)。而して神は我佛をして聖ならしめんために、靈を以て我佛の裏の人を剛健ならしめ、又基督をして信仰に由りて我佛の心に居らしむ(弗三の十六、十九)。換言すれば人聖なる域に達するは、聖靈の働に依りて然れ共之を人の方面より見れば、我佛が聖なるは「其身を神の意に遣ふ聖き活る祭物となして神に獻ぐるに(羅十二の一) 依れり。而して所謂聖なる狀態とは、一言にして云へば愛に歸するが如し。耶穌が神の完全なるが如く完全なるべしと云へる完全は、愛に於ける完全也。保羅は約翰と同じく、愛を以て最も優れたる賜、衆徳の帯也と云へり(哥前十三、弗一の四、四三の十四、壹約三の廿一、廿四等)。斯くの如く成聖は信仰若くは献身に始り愛に終る。即ち己を獻ぐる所の對象となるが如く完全なる、是れ即ち聖なる也。(神聖)の條參照。

聖體共在論 Consubstantiation. **教義** 主の晩餐に關する羅馬教會の化體說に反し、ルーテラの唱出せる說にして、羅馬教會の晩餐のパンと葡萄酒は僧侶之を聖別する時基督の肉と血とに變化すべしと云ふに反し、ルーテラはパンと葡萄酒の實質は聖別に依りて變化する中に非ず、然れ共聖別の實質は基督の眞の血肉其元素の中に之と共に存在すべしと唱ふる也。又羅馬教會は祝福せる元素を保存せる限りは、基督の肉體も其中に存すと云ふに反し、ルーテラ

聖 地

は派は基督の肉體の現存は禮典を實際行ふ時にのみ限ると唱ふ。(化體說)の條參照)。

聖地 The Holy Land. 「パレスチナ」の條參照。

聖地誌 Pilgrimage. **慣例** 宗教的義務を果し又は特殊の恩恵を得んがため、神聖視せられたる場所に參詣するをいふ。(英語 Pilgrimage は拉丁語 peregrinatio 即ち「旅行者」なる語より來る)。此は多くの宗教に普通行はるゝ慣例にして、其起源は有史以前種族的宗教の行はれたりし時代に溯るを得べし。元始の人民は神の勢力範圍を全然地方的也と思惟し、且宗教的團體を以て同一種族間の重要な髓となしたりしが故に、屢々聖所に詣りて、禮拜するを以て習慣となしたりき。然るに後此等の人々の中より異邦に離散する者を生ずるに及び、彼等は自ら神の保護を斷たれたるが如く感じたりしより、遠く故國に歸り自ら聖所に詣りて、親しく神に祈り、又一には斯くして其種族的關係を保持せんとしたりき。是れ聖地誌の起りたる所以にして、親ら聖所に詣る時は神に單に其祈を聽くのみならず、此宜其他の方法に依りて直接の答與へらるべしとの信仰行はれたりし處には、參詣の度數もいよまさりたりき。後強大なる種族起りて他の種族を滅ぼし、斯くして種族的神の變じて國民的神となるに及びては、彼等は其國民的神の聖所に詣るを常としたりき。後文化漸くに進みて宗教が歴史の基礎を有するに及びては、其宗教の祖師又は其宗教と密接の關係を有せる人々の生涯に最も重要な事件の起りたる場所を神聖視し、此處に參詣するを例としたりき。更に文化の進みて人々の自意識の發達するに及びては、聖地誌の目的は主として主觀的にして、特殊なる地方を聯想

七の部

聖 地

すること依りて或る感情を喚起せんとするに在りき。然れ共其何れの段階に在りても聖地誌の根本的思惟は同一にして、要するに神の國を認むること能はずして之を地方化するに外ならず。

前云へる如く聖地誌は多くの宗教に普通行はるゝ慣例にして、埃及、アッシリア、巴比倫、波斯、フェニキヤ、西利亞、希臘、羅馬、サウテン、スラブ、印度、支那、日本等諸國民の中に均しく行はれたるものなれ共、此等諸國民の中に行はれたる風習を一々記載するは此書に非ず。故に爰には唯猶太人及び基督教徒の中に行はれたる聖地誌の概略を叙述するのみ。

猶太人は古代に在りては泉(又は井)森林、高山、崇邱等を神聖視し、土師及び列王時代に於ては、尙オブラ、シツパ、ダン、メセル、メルシエパ等の如き地方的聖所に詣るの風ありしが、後ソロモン王エルサレムに神殿を築くに及び、各地に在る聖所を毀ち以て禮拜の統一を謀りたり(「聖所」の條參照)。禮拜の統一の全く行はれたりしはヨシア王の治世なりしが、申命記に定められたる律法には明にエルサレムを以て唯一の聖地となし(申十二の十一)エルサレムを以て國民の遵奉すべき義務也となしたりき。然るに後エルサレムが羅馬のために滅ぼさるゝに及びては、エルサレム神殿恢復の企圖も、パレスチナ以外に禮拜の中心を設くるの企圖もなく、從て聖地誌は政治的又は宗教的動機より非ずして、單に感情的歴史的性質を帯ぶるに至れり。

基督教徒の聖地誌は其初めエルサレム及び其附近の地に限られたりき。エルサレム教會が福音史上に著名なる地、殊に耶穌苦難及び復活の場所を神聖視したりしは自然のことにして、エルサレム市の尙存在

聖 地

したりし時より多くの人々來りて此等の聖所を訪ひたりしが、其滅亡後彼等は此處に聖意を立て奉を築きたりき。使徒時代より基督教徒は既に聖地誌をなしたりしこと事は、第四世紀の終りに於て一般に信ぜられたりし事なれ共、初代教會の事は明ならず。エルサレム諸の最初の明白なる例はカパドキアの監督アレキサンデルに於て之を見るべし。彼は夢告を受けたるがためエルサレムに來り(二二)監督ナルシサスの補助者に選ばれたりしといふ。アレキサンデルの友カイゲンは二一六年エルサレムに來り、二二一年カイゲリアに往きて此處に神學校を建てたりしが、彼のエルサレム諸の目的は寧ろ學術的研究の爲めなりしが如し。皇后ヘレナは三二六乃至三二八年聖地誌をなしたりしが、是れより以後漸く聖地誌の風行はれ、之に宗教的意義を附するに至りしが如し。當時又著名なる殉教者の墓に詣るの風盛に行はれ聖地誌を以て宗教上必要な條件となし、其處にての新婦は一解雇に聽かるべしとの信仰漸く勢力を得るに至れり。去ればエロームはパウリナスへ贈りたる書翰(三九三)に於ては、エルサレムに於ける生活の状態は決して敬虔に資する者に非ざるを云へりしに拘はらず、彼れ自らはペンレヘムに住したりき。カイリノストモスも或る時は聖地誌の無益なることを述べたれ共、或る時は自ら羅馬に在る保羅の遺物を見んことを欲する旨を述べたり。アウガスタンも亦或る事件を決せんため奇蹟の行はれんことを望み、二人の使者を聖フェリックスの廟に送り(四〇四)たりき。此の如くして此等の人々の示したりし模範は聖地誌の風を助長したりしが、當時の此傾向に反對してエルサレム諸を廢し非難したりしは、ニツサのアレゴリーにして、彼は其友人に贈れる

聖 徒

書翰に於て、エルサレム諸を以て神の命令に非ずとなし、之に伴ふ諸多の道徳的危險を論じたり。聖徒と共に漸次神聖視せらるゝに至りしは保羅及び彼得の墓なりしが、羅馬帝國の分裂し東西の交通漸く減じ、加ふるに回教徒の西利亞及びパレスチナ地方に侵入し、同地方に於ける旅行を危険ならしむるに及び、又一方に於ては羅馬法王の宗教的主權を握るに至りしより、羅馬は遂にエルサレムに代はりて西方諸國基督教徒參詣の目的地となるに至れり。尤も神學上其他の立脚地より此風に反對する者あり。八一三年のカロルスの會議及び一〇二〇年のセリゲンスタットの會議に於ては、羅馬諸を禁するの法律を通過したれ共、此風は容易に抑止す可らず。中世期は羅馬諸の最も盛に行はれたりし時に於て、法王ロベール・フエイス八世は千三百年を以て參詣者に教鞭の特權を與へたりしが、其恩典に浴せし者二十萬人の多きに達したりしといふ。エルサレム諸は第九世紀に至り、復活祭の夜聖墓に於て天火の奇蹟行はれたりとのことより再び其勢を回復し、基督教徒のエルサレムに詣る者甚だ多かりしが、一〇一八年土耳其帝國に依りて抑壓せられ、續て回教徒のために西利亞其他の地方を略せらるゝに及びて、爰に所謂十字軍なる者起り、歐洲の大亂を醸生したりしが、十字軍は遂に失敗に終り聖地は長く回教徒の手に歸するに至れり。斯くて聖地誌は宗教的意義を失ひ、今日にては單に研究的又は觀光の意義を有するのみとなれり。

聖徒 Saint. **術語** 舊約に於ては神聖なる以色列國の民たる特權を表する名にして、新約に在ては基督教會の會員たる特權を表する名也。基督教徒は斯く「神に選ばれて聖潔」なりたる者(四三の十二、弗一の四、哥前一の二、羅一の七)にして、

セの部

聖徒

其聖徒たることは彼等が信徒として基督に對して有する關係に依りて定めらるる(弗一の二、四一の二)...

正統説及び異説

Orthodoxy and Heterodoxy. 此等の語は聖書の中に發見せられず...

聖とせらるる聖徒。聖バルトロマイ

時代の必要に應じて教習の信仰を再説し、神學を改造し、以て基督教の眞理を明にするは實に異説家の目的...

セの部

聖晚餐。聖別

七二年八月十八日アロアのマイグレットとセザア王アンニとの結婚巴里に行はれしが、此時ユーゲン...

聖靈。世末論。聖油。聖靈

十九の六)は神の用に於て區別せられたり。教會に於ては此語の意義を人及び聖き物にのみ限れり...

聖靈

の靈(創四十一の廿八、廿九の三、卅一の三)として顯はれたり。神の靈の活動の方面を更に少しく詳に述べれば...

七の部

聖靈

聖靈

聖靈

預言者に至り、神の靈の倫理的方面明となり、詩五十一の十一には『汝の潔き靈』とあり、耶卅一の卅一以下、結卅六の廿六以下、耳二の廿八にはメシヤ王國の來らん日神の靈の道德的活動あるべきを預言せり。

(三) 神の靈の人格神の靈は神の活動の力として顯はされたりしが故に、舊約は之に人格的行為、人格的性質を附し、神の靈を云ひ、神の靈を云ひ、或は導くこと云ひ、治むること云ひ、生かすこと云へり。而して神の靈の言を對照せる場合には、殊に其人格的性質の明に顯はれたるを見る。然れ共此相違は單に神の力の外部的活動を區別したるまでにして、勿論後世に至り發達したる神の性質内に於ける人格的區分の觀念あるに非ず。

(四) 神の靈の教義の發達 舊約に於ける神の靈の教義には發達ありたるが如し。モーセ六經の最も古き部分には、之を以て人の中の最高の生活の根據及び之を保持する力、智識的才能に預言の賜の原因として記せり。此思想はエホバ、エロヒム古典に關し、祭司典は更に之に加ふるに、神の靈は初め宇宙に生氣を與へたりとの思想を以てせり。伴因以前既に神の靈は人及び世界に於ける神の力とせられ、前第八世紀の大預言者は既に神の靈を以てメシヤの上に止まれりことを承認せり。然れ共神の靈に倫理的性質を附するに至りしは、更に後の時代のことにして、之を人の性質中に於ける、新しき神の力となし、又其活動を一般の人々及び以色列人以外の國民にも及ぼしたるは、伴因及び其以後の時代也とす。

は、神の靈の事を種に記せるのみ。而して其之を記せる場合を見るに、多くは單に舊約教訓の反響に過ぎず。即ち敬虔なる人は聰明の靈に滿ちたる者として記され(シラク書卅九の六)不敬虔なる人には神の靈を遣はれりとなせり(ソロモン詩篇八の十五)。又ダニエルが義の怒を發したるは、聖靈を有せるが爲めなりしとせられ(スザンナ四十五)デビダの子は聖靈に依りて力あるべしと云へり(ソロモン詩篇十七の四十二)。パレスチナ所産の經外聖書に神の靈の事を記せるは以上の例に過ぎず。パルサイ派の天使の思想は、自然及び人の中に於ける神の靈の活動の觀念の發達を阻害したりしが如し。斯くエノク書は、自然の力を諸靈の働に歸せり(六十の十二)。晩代の猶太人は聖靈を以て主として預言の靈也となし、ダビデは聖靈に依りて語れる也となしたる共、基督の事業をば聖靈の所作に歸したり(可十二の卅六、三の卅)又彼等は聖書のインスピレーションを堅く信じたり。

(二) 亞歷山の思想 亞歷山に在りては之に異り、神の靈を以て不斷の活動となすの信仰保存せらるゝと共に、希臘思想の影響を蒙りて更に發達せり。即ち智慧の書には舊約と同じく、神の靈を以て宇宙に遍在し、自然世界を維持保護し、人に對しては其靈性の附與者、知的才能及び宗教的智識の根據として特殊の關係を有する者となすの思想を見るべしと雖も、亞歷山の猶太人は更に之を發達して、或は神の靈を智慧と同一視し、或は之を其内住的の力となせり。其最も發達せるはフィロソフにして、彼に依れば、神の靈は區分す可らざるものなれ共、火棍より火棍に火をうつし得るが如く分配し得べきもの也。又或る意義に於て神の靈は萬人に來るものにして、惡人

も尙時々其光明に接するを得べし。然れ共神聖靈を得る者は僅少の善人、賢人のみにして、彼等は之に由りて同祭、教師となるを得べし。フィロソフは預言者を以て單に神の聲の通譯者に過ぎずとなし、神の力を受けつゝある間は、毫も自己の理性をばたらかすこと能はずと云へり。神の靈の活動の倫理的方面に就ては、人の心を高潔ならしめ、神に關する智識を得る力を與ふる者也と云ふの外フィロソフは何事をも云はず。

【新約に於ける聖靈】(一) 名稱 新約は七十人譯に用ひられたる聖靈の名稱を用ひ、即ち『聖靈』と云ひ、『神の靈』と云ひ、『主の靈』と云ひ、若くは單に『靈』といふが如し。然れ共新約は之に加へて七十人譯になき名稱を用ひ、父の靈(太十の廿)其子の靈(加四の六)耶蘇の靈(又)『基督の靈』(徒十六の七、羅八の九、腓一の十九、彼前一の十二)と云へるが如し。又新約は之に新なる屬性を附せり。即ち聖靈は智慧の靈(徒六の三、十)なるのみならず、又真理の靈(約十四の十七、十五の廿六、十六の十三)生命の靈(羅八の二)恵の靈(來十の廿九)子たるもの靈(羅八の十五)也。殊に聖靈は新約に入りて明に人格的名稱となり、神の子と共に神の歴史的顯現に與れり。

(二) 聖靈の歴史的顯現 基督教が聖靈に關する主意に與へたる新光明は主として歴史的也。(イ) 預言の復活 エブラ、チヘミヤ以來久しく止みたりし預言の賜は、福音の歴史の初めと共に復活し、先づパテスマのヨハネが母の胎より生れ出で、聖靈に充るべきを預言せられ(路一の十五、八十)ヨハネの父ザカリヤが母エリサベツも亦共に聖靈に充されたり(路一の四十一、六十七)。シメオンの上にも聖

七の部

聖靈

聖靈

聖靈

靈來り(路二の廿五)ヨハネの女アンナも亦預言者と稱せられたり(路二の廿六以下)。(ロ) 耶蘇に於ける聖靈の活動 福音書は耶蘇の上に聖靈の活動せることを記せり。先づ第一は其胎及及び生誕にして、馬太、路加二福音書は之を以て聖靈の働に歸せり(太一の十八、廿、路一の廿五)。此處に所謂聖靈とは蓋し舊約の意義に於て神の力の活動と解すべきものなるべし。斯く聖靈の力に依りて生れたる耶蘇は、やゝ成長して精神強健に智慧を蒙り、神の恩寵の上に居れり(路二の四十一)凡そ三十歳にしてパテスマのヨハネの所に來り、ヨルダン河にてパテスマを受け水より上れる時、ヨハネは靈の賜の如く其上に降るを見たりといふ(可一の十及び其他の福音書共に之を載す)。此パテスマは蓋し耶蘇がメシヤの事業に其身を聖別せるを表せるもの也。爾後耶蘇の生涯は聖靈の活動の生涯とも目すべし。福音書記者は彼の教訓、奇跡及び其事業全體の根據を聖靈の働に歸せり(可一の十二、路四の一、十四、十八、太十二の廿八、徒一の二)。例之耶蘇はパテスマを受けたる後、聖靈に導かれて野に過き靈に試みられたり云ひ、彼は神の靈に依りて鬼を逐出せり云ひ、又主の靈彼に在りしが故に福音を宣べ傳ふこと云ふが如し。(マ) 教會に於ける聖靈の活動 耶蘇が聖靈のパテスマを受けたるは、之を以て世に聖靈のパテスマを施さんためなり(約一の卅三、太三の十一、可一の八、路三の十六)。此事は初代信徒の經驗に實現せられ、信徒は基督より聖靈を注がれ(壹約二の廿)又基督と共に在るが如く、聖靈と共に在り(二の廿七)。教會に於ける聖靈の活動を示すべき大なる出來事として記されたるは、基督復活の後彼が弟子等に顯はれ、氣を鳴きて聖

靈を受けよと言ひたりし事(約廿の廿二)ヘンテコステの日に聖靈の降りし事(徒二)是也。前者は耶蘇の弟子等が其特殊の使命を果さんために要する特殊の賜を與へられたる事にして、使徒の後繼者たる教役者が必要する特殊の賜を與へらるべしとのこと亦可能的に其中に含まる。後者は基督の約束成就し、人類の靈的歴史に一新紀元の開かれたることを示す。此日天より迅風の如き響ありて弟子等の坐せる室に充ち、婦の如きもの現はれ破れて彼等各々の上に止まりしといふは、聖靈の働の何處より來り何處に往くを知らざるが如き(約三の七、八)又火の濁る力あるが如き(太三の十一)とに擬したるものなるべし。使徒等が聖靈の言はしむるに従ひ、諸國の方言を語れり云へるは非歴史的也との説もあれ共、保羅の書翰に依れば、當時哥林多教會には此種の賜を受けし者ありしが如く、而して此は單に一時的のものに過ぎざりしが如し(哥前十二の廿八、十三の一、八、十四の二以下)。

(三) 聖靈に關する新約の教訓 (イ) 耶蘇の教訓 共觀福音書に記されたる聖靈に關する耶蘇の觀念は、舊約に顯はれたる思想と大差なし。彼は舊約聖書のインスピレーションを認め(太廿二の四十三、可十二の廿六、路廿四の廿五、四十四)又自己が聖靈を受けてメシヤとなりしことを信じ(路四の十八、太十二の廿八)彼の事業をパテスマに歸するを以て聖靈を演ずることとせり(可三の廿九)又彼は時として聖靈信徒の上に臨るべしとの事を云へり(太十の廿、路十一の十三)。此の如く共觀福音書中に記されたる聖靈の觀念には(太廿八の十九を除く)新しき要素なしと雖も、第四福音書に記されたる耶蘇の教訓には、聖靈の個人、教會及び神に對する關

係の新なる觀念の顯る明白に顯はれたるを見る。先づ耶蘇はニコマエの談話に於て、人の靈的生命的根據は神の靈に在りとなし、新生を以て聖靈の作用に歸し(三の五十八)サマリヤの婦人の談話及び據應節に於ける教訓とに於ては、自己を以て汲めど盡さざる靈の泉也となせり(四の十、七の卅七以下)然れ共此主意に關する最も明なる思想は、彼が苦難を受くる前に弟子等に語りたる教訓に於て、之を見るべし(十四の十六、十七、廿六、十五の廿六、十六の七、十三)彼が此教訓に於て『我れ父に求めん、父必ず別に慰むる者を爾曹に賜ひて、宛りなく爾曹と共に居らしむべし、此は真理の靈也』と云へるは、蓋し聖靈を以て彼に代はりて來るものとなしたる也。彼の場合に於て『我れ爾曹を棄てて去らざれば、爾曹に見じ、又暫くして我を見るべし』と云ひ(十八の十六)又『爾曹今愛ふ、去れど我れ又爾曹を見ん、其時爾曹の心喜ぶべし』(十六の廿二)と云へるも同義にして、此の場合に彼が再び來るべしと云へるは、蓋し聖靈に於て來るをいふ也。然れ共彼は又聖靈を父及び子と區別し『我れ名に託りて父の道はさんとする訓慰師』と云ひ、『我れ訓慰師を父より遣らん、即ち父より出づる眞の靈也』と云へり。何れにしても此處に言ひ顯はれたる耶蘇の聖靈の觀念が、單に舊約及び經外聖書に記されたるが如きものに非ずして、明なる身位のものに附せられたるを知るべし。聖靈の働に就ては、彼は之を以て其弟子に基督の言ひし事を思ひ出させ、新なる真理を悟らしめて基督の事業を遂行せしむる事(十四の廿六、十六の十三)教會に基督を示して其榮を顯はす事(十六の十四、十五)也となせり。然れ共聖靈の活動は

七の部

聖靈

聖靈

聖靈

信徒の間にのみ止まらず、又舊く世にはたらず、教會と共に基督のために證をなし(十五の廿六、廿七)即ち就き義に就き審判に就き世をして即ちありと曉らしめんと云へり(十六の八)。太廿八の十九には聖靈に一個の身位を附し、之を父と子とより區別せり。然れ共此一句が耶穌の言に非ずして後世の挿入に係るべしと學者の概ね一致する處也。

(コ) 初代使徒の教訓、ペンテコステ以後聖靈の現存は基督教徒生活の事實となれり。使徒等は之に依りて基督の約束成就し、靈界一新の紀元開けたるを確信するに至りしが(徒二の卅三、卅八以下)年々共に其經驗の進むに従ひ、彼等は各々自己の經驗より基督の教訓を説明することを得るに至れり(徒五の卅二、九の卅一、彼前四の十四、雅四の五)。且彼等は使徒として特に聖靈を受け居る事、彼等を欺くは聖靈を欺き神を欺かんとするものなる事(徒五の三、四、九)教會の規律に關し彼等及び教會の役者が會同協商せる場合には、聖靈も亦其商議判斷に與る事(徒十五の廿五)彼等は使徒として按手に依り、バプテスマを受けたる者に聖靈を與ふる力を有する事(徒八の十五以下、十九の六)を信じ、且彼等は各自聖靈直接の交通を受け居る事を自覺したり(徒十一の十二、十三の二、十六の六、七)而して彼等も又聖靈は全教會及び教員各自に與へられ得べきものなることを承認したり(徒二の廿八、十の四十四、四十七、十一の十五、十六、十三の五十二、十五の八、九)此は基督教徒の新生活に依りて證せられ、當時に在りては智慧及び喜樂に充ちたる生活は聖靈の結ぶる果也とせられ(徒六の三、十三の五十二)經驗の漸く熟するに及び、聖靈を以て深き生活の根源(彼前一の二)新約の讀み(論廿)基督

と信徒との間の融合の方法(壹約三の廿四、四の十二)未來の榮光の證據(彼前四の十四)也となすに至れり。

(シ) 保護の教訓、然れ共新約に於ける聖靈の教義は、保護に至りて最も充分なる發達となせり。而して彼の經驗及び事業の進歩に従ひ、其觀念にも亦進歩あり。其最も早き時代に書かれたる書翰(彼前)には別に新奇なる思想なく、彼は靈の能力、喜樂、潔きこと及び靈の潔めを以て聖靈の賜となし(前一の五、六、四の八、後二の十三)又人性の中に神の靈に符合し、神の靈の活動に適する要素あることを認めたり(前五の廿三)。次の時代に書かれたる書翰(羅、哥前後、加)に於て、吾人は此主意に關する彼の教訓の中心に入るべく、爰に新なる思想を發見すべし。彼は此等の書翰に於て、一方には人性を神の靈と對照し、他方には之を一致協同する者となせり。前者の例は之を羅八の十六、廿六、哥前二の十一、加四の六に發見すべく、此處には神の靈の人格最も分明に顯はれ、聖靈人の靈と共に證し、人の弱きを助け、言ひ難きの愉快を以て人のために祈り、又神之人の心に送りてアバ父と呼びしむと云ひ、又神は其靈を人の裏に寓らしむ、靈は萬事をなすべし知り又神の深き事をなすべしと云へり。保護に依れば、神の靈は神の本質に備はり、創造せられたる者に非ず。靈の寓る處に神も亦寓り、靈の働く處に神も亦働く(哥前三の十六、六の十九、哥後三の十六)。神が人に内在するは靈に凭れり。然れ共神と神の靈とは全く同一視すべからず。聖靈は基督を死より蘇らせし者即ち父の靈也(羅八の十一)彼は又基督の靈(八の七)子の靈也(加四の六)而して最後に父、子、聖靈は最も明白に三位の人格又は實在と

して顯はさる(哥後十三の十四)。然れ共此等の書翰に於て保護が聖靈に關し最も多く言ふ所は人の心に於ける其活動也とす。保護は其當時の思想に従ひ、預言し方言を語る等の事を以て聖靈の働に歸したりしが(羅十二の六、十五の十八、十九、哥前十二、十四章、加三の五)之を以て永遠的の者又は最も優れる者となさず、其永遠的のものに信仰、望及び愛也となせり(哥前十三の十三)而して聖靈の結ぶる果を以て基督教徒生活を圓滿ならしむる處に在りとなして之を數へたり(加五の廿二、廿三)聖靈は又身體を以て聖の體となして生かし(羅八の十六、六の十九)之を基督の形狀となして生かし(羅八の十一)變つべからざる靈の體として蘇らすべし(哥前十五の四十二、四十四)然れ共聖靈活動の特殊なる範圍は人の靈にして、聖靈内在する時新なる生活初まる。此の生活は人をして神の子たらしめんとする生活にして、斯る生活を繼續する者は神の子たる特權を與へられ、基督と共に神の後嗣となり、基督の兄弟となるを得べし(羅八の十四、十七、廿九)而して既に神の子となりたる者は、心變りて新になり、神と基督とに對する新關係に適合する資格を造ることを得べし(羅十二の二、八の廿九、卅)然れ共此等は後來らんとする更に大なる働の預表に過ぎずして、聖靈は吾人を蘇らしめ、吾人をして遂に神の子の榮なる自由に入らしむべし(羅八の廿一)。此等の書翰より轉じて、保護が羅馬の獄中に於て書きたる書翰及び所謂教會書翰と稱する者を見るに、彼が聖靈に關する思想は漸く變化し、四大書翰に於て聖靈を以て主として個人生活上に活動せりとなせし者、爰に在りては主として教會の上に働くりとなせし、聖靈は教會の公同一致の證據(弗四の三、四、

七の部

聖靈

聖靈

聖靈

弗二の一) 教役者能力の根源(弗四の七、十二、提後一の六、七)及び聖靈與恩恵の泉(多三の五)也とせられたり。

(三) 約翰黙示録の教訓、此書が聖靈を以て預言の靈となせるは(一の十、二の七、四の二、十四の十三等)舊約の思想と同じけれ共、又間々保護的の思想に似たる處あり。即ち聖靈教會に語れり云ひ(二の七、十一、十七、廿九、三の二、六、十三、廿二)又聖靈教會と共に基督の證をなし、新婦と共に新郎來れと叫びたりと云ふが如し(廿二の十七)然れ共此書は又聖靈の個人に於ける働を看過せず、廿二の十七に之を云へり。

以上略述する所に依れば、聖書の記者が聖靈に關し教へたる所は大略明なるべし。彼等の云ふ所に依れば、聖靈は嚴密なる意義に於て神の靈にして、天使の如き被造物に非ず。然れ共聖靈は一個の人格なりや。此點に關する聖書の思想は發達的にして、舊約に於ては聖靈の人格的觀念明ならず、之を神と同一視し自然及び人間世界に現存し活動せりとなせる場合にのみ之を一個の人格となせる者の如し。然れ共耶穌及び其使徒に至りて其人格的觀念漸く明となり、遂に之を父、子と區別し、一個獨立せる存在となすに至れり。聖靈の働に關する思想も亦進歩的にして、舊約は之を以て自然及び人間を維持保護する力、智的及び靈的能力殊に預言の賜の根源、道徳的清潔、宗教的敬虔の泉となせり。而して最後にメッシャの來臨及び聖靈其上に瀝するべしとの預言となり、新約に至り、共觀福音書は舊約の理想が耶穌基督に於て實現せられたる次第を述べ、第四福音書は教會に對する聖靈の使命を預言し、使徒行傳及び書翰は此預言の使徒時代の教會に實現せられたる證を

語れり。而して保護に至り聖靈の教義は發達の頂上に達し、之を以て個人新生命の源泉となすと共に、公同教會一致の靈となせり。

(四) 歴史的發展、以上述べたる如く新約聖書は父子聖靈顯現の事實を認識し、之に各々獨立の身位を附したれ共、三重の顯現は神の性質に其基礎なる可らすとの確信を生じ、斯くして三位一體の教義の發達せるは過か後の時代也。從て最初三百年間の教會は聖靈が神格の第三位に在るを認識したれ共、之に關する議論は極めて少なく、子の教義に比すれば稍や曖昧なり。アリウス論争の起るや、アリウス派は聖靈に神性を附するを拒み、之を以て子の次位を占むる被造物となせり。中アリウス派は聖靈が子の下に在るの度は、子が父の下に在るの度に均しとなし、或は之よりも大也となせり。ニカヤ信條には單に「我れ聖靈を信す」とあるのみ。コンスタンチノール信條は之に加ふるに「聖靈は生命の主又授與者にして父より生じ、父及び子と共に禮拜と榮光を受け、又預言者に依りて語れる者也」との語を以てせり。然れ共正統派の學者等が聖靈を確信したるは疑なし。アタナシウスを初め子の神性及び同質論を主張せる人々は、又聖靈の神性及び同質論を主張せり。コンスタンチノール信條には聖靈を父より出づと云ひ、希臘教會は之を以て其信仰となせり。然れ共羅馬教會は聖靈の父と子とより出づるを唱へ、遂に兩教會分離の一原因を爲せり。聖靈神性の教義は三八一年コンスタンチノール會議に於て遂に全く斷を制し、三位一體の教義は是完全せり。斯くして發達せる三位一體の教義は、アリウス派に至りて更に一步を進め、子及び聖靈の次位説を全く放棄し、神の三身位を以て神

の働の證として併用せらるべし。福音書學者の多くはアリウス派の教義を踏襲し、ルイテル派及びプロテスタント派の神學者も亦之を繼承したれ共、アルミニウス派は子及び聖靈の次位説を主張せり。ソートヌス派は三位一體説に反對し、聖靈は神より人に附與せられたる靈又は勢力に外ならずと爲せり。過去二百年間に於ける自由思想の運動は、三位一體に關する従来の思想に對して反對を惹起したりしが、神格に三位の區別ありとのことは尙教會の信仰として一般に承認せらる。三位一體説を否認せるユニテリアン派は聖靈の身位に反對せるは勿論にして、チャンニングは聖靈を定義して、道徳的照明的發達の勢力也と云ひ、ヘッペは聖靈は神の特殊の活動力にして、直接間接に人間の宗教的、道徳的教育を管理す、即ち特殊の方法に於て働く神也と云ひ、又ヘーゲル派の語法に従ひ、聖靈は常に流出し發出する所の神也と云へり(聖靈の三位一體に於ける地位に關しては「三位一體」の條を見よ)。

(五) 現時に於ける教會の教義、(イ) 定義、聖靈とは人の中に在る神也。人の靈の中に働かし、基督の使命及び事業の結果を實現せしむる所の神也。聖靈は三位一體の第三位を占む。即ち神は聖靈として、聖き交通をなし、變化を與へんため、人の靈に内在し、第二位の神のなしたる事業を成就す。然れ共聖靈は單に勢力に非ず、靈として人靈と接觸する神自身也。且神格の次位に在るが故に之を以て劣れりとなす可らず。或る意味に於ては次位に在りし雖も、實際の生活上に於て人を神と交通せしめ、基督が世に來り、且死したる所以の目的を成就せしむるは、聖靈の働なれば、或る意味に於ては聖靈は救済の事業に於ける最高の働をなす者也といふを得べし。

セの部

聖靈

聖靈

聖靈

(ロ) 基督の關係、聖靈は基督が送るべしと約束し、而して約束に従て送られたる賜也。基督は聖靈に託りて永遠に弟子等と共に現存すべきことを語れり。彼に依れば、聖靈は神を識り彼を受け得る者とのみ信に在り、其裏に在る真理の靈、基督の教を思ひ出さしめ、新なる意義を發見せしめ、且凡ての人をして基督を榮めしむる記憶の靈、人を導きて凡ての真理を悟らしむる導きの靈、祈りに依りて神に近づかしめ父子相愛せしむる現愛の靈、基督のために自ら證をなし又弟子をして證をなさしむる證の靈、世をして聖、義、審判に就き罪ありと曉らしむる教訓の靈也。此靈は父より出で、基督之を父より送り、父之を基督の名に依りて送る。此靈は世の初めより現存したりしが、ペンテコステに至り靈界の歴史に一新紀元を開き、爾後今日に至る迄聖靈は常に働きたる也。

(ハ) 人類に於ける聖靈の働、聖靈の活動の最も著しきは個人に於ける働なり。聖靈は又人類一般の上に廣く活動す。基督が「彼れ來らん時に就き義に就き審判に就き世をして聖ありと曉らしめん(約十六の八)」と云へるは即ち是也。人類を愛し之を救はんために其獨子を世に遣はし給へる神が、人類をして其罪に沈めることを曉らしめ、正義の何物たるやを解し、善惡正邪の間に義しき判斷をなさしめんがため、聖靈をして斯く其心に働かしむるは惟しむに足らず。凡そ神を離れて善なし。人の真心が斯く警醒せられ、善を愛し惡を憎むの心が常に強くせられ、社會の生活が漸次改良せられ、人類の道徳が次第に進歩して止まざる所以のもの、是れ實に人に在る神、即ち聖靈の働に依りてなり。

(ニ) 教會に於ける聖靈の働、聖靈は普く人類一般

の上に活動せり。聖靈は、更に深き意義に於て教會の中に働く也。爰に教會と云ふは組織せられたる或る特殊の教會の義に非ずして、基督敎徒全體の義也。基督敎徒の中に活動する聖靈の働が、廣く人類の上に活動する聖靈の働と異なるは、基督敎徒が世より異なるが如し。基督曰く「世之を受くること能はず、そは之を見ず且識らざるに因る、去れど爾曹は之を識る、そは彼爾曹が信に在り且爾曹の裏に在れば也(約十四の十七)」と。世の受くる能はざるは真理の靈にして、世は未だ明に真理を知らず、然れ共基督敎徒は既に之を教へられたり。是れ聖靈の世の人に對する働と基督敎徒に對する働との間に自ら深遠の相違ある所以也。斯くて聖靈は基督敎徒を導きて、基督の教へたる真理を思ひ出さしむ。使徒等が新約の文籍を書きたるは、聖靈彼等を導きて基督の教へたる所を思ひ出さしめたる也。然れ共此は唯に初代の使徒のみに限れるに非ず、聖靈は何れの時代に在りても忘れられたる真理を思ひ出さしめ、有力に基督の教訓を再説せしむる也。ペテロの時代に於て然り、パウロの時代に於て然り。今日も尙聖靈は均しき働をなすつゝある也。基督は又言へり。曰く「真理の靈の來らん時爾曹を導きて凡ての真理を知らしむべし(約十六の十三)」凡ての真理とは科學、哲學及び歴史上の凡ての真理を云へるに非ず、神及び神の事に關する凡ての真理の謂にして、此等の真理は一時に明となるに非ず、其時代の智識、信仰に從て漸次に開發せらるる也。神は完全なるが故に神より來る者は凡て完全也と思ふは誤れり。神が自らを顯はすは一時的に非ずして漸次的進歩的なる也。

(ホ) 個人に於ける聖靈の働、個人に於ける聖靈の働を見よ。以上は人の方面より云へば、人の活動なれ共、凡そ善き事、義しき事、聖き事は神を離れて存在せず。故に之を神の方面より見れば、悉く神の活動にして、即ち個人各自の中に働ける聖靈の活動なる也。(ハ) 聖靈の働、所謂インスピレーションと稱するは聖靈の働也。基督敎の歴史は又インスピレーションと稱する信仰復興の運動を有す。此運動も亦之を其真正なる限り聖靈の働に歸すべし。

於ける聖靈の活動は、之を教會に於ける活動に比すれば更に深く更に強し。人には神的生活あり。是れ即ち人の中に於ける聖靈の働に比して、吾人が助護せられ教育せられ完全せらるるまは之に依りてなり。吾人は聖靈と經驗せしむりて此真理を學ぶを得べし。

(ア) 神的生活の性質、人に在る神的生活とは基督と友たる生活、神自らの生命基督に依りて人類の中に注がれ、人をして神の性質を分有せしむる生活也。新人は基督に依りて父と交りて生活す、是れ即ち神的生活にして、此生活は愛に依りて成立す。何となれば神は愛にして、基督は愛の最高の顯現なれば也。而して此愛は分ちてこそならず。神に對する愛及び人に對する愛是也。(三) 神の性質(ハ) 神的生活の普遍なる事、神は凡ての人々を招きて之に神的生活を與へ給ふ。故に此賜は普遍的にして、或る人或る人種に限れるものに非ず。換言すれば、福音は萬民を召して教へらしめんとする神の恩寵の真理也(太十一の廿八、約三の十六、羅三の廿二、廿三、十の六十三等)。然れ共聖書には又神が特別に或る人、若しくは或る人種を選び給へることを記せり。即ちアブラハム、アブラハムの一族、以色列國民、ダビデの家、預言者、基督、使徒及び基督敎徒は各々に選ばれたる者として記されたり(申七の六、約十五の十六、弗一の四、彼前二の九等)。此に於て所謂預定説なる者起り、神は特に或る人々を選びて之を救ひ給ふ也と説くものあり共、聖書に所謂「選ぶ」は救はんために選ぶの意に非ずして、特に救の事柄をなす器となさんために選ぶの意也。故に神が人を救はんとして聖靈に依りて働か給ふ活動は普遍的にして彼の人此の人の區別あるなし。(四) 選の事に關しては預定説を見よ。(イ) 神的生活の發端、去らば

セの部

聖靈

聖靈降臨節。精靈説

聖靈發出論争

人に於ける神的生活は如何にして初まるや。聖書は之を比較的の言語に依りて顯はせり。先づ第一は新生(Regeneration)にして、聖書には之を「神に由りて生まる」と云ひ「新に生まる」と云ひ「遣はる」と云ひ「蘇へる」と云へり。神的生活の發端は基督に依り神と融合するの生活に入ることを指し、道徳的變化、即ち其品性、性情に於ける變化を指す。此は神新に能力を創造すといふに非ず、此生活に入ることを得るや、其心を警發し其性癖を轉じて神に向はしむる也。故に又改心又は同心(Conversion)と稱す。然れ共人は既に同心し新生すること能はず。故に新生に先き立つものなからず。神は唯に聖靈に依りて其心に働か給ふのみに非ず、又外より種々の方法に依りて改心に至るの準備をなさしむ。基督敎的社會又は家庭に置くる事、敬虔なる信徒の感化を受けしむる事、世界觀人生觀に關する真理を聞かしむる事等は即ち改心を促す最も重要な要素也。而して人の改心に至るには人の方面に於ける活動なからず。悔改(Repentance)及び信仰(Faith)是也。悔改とは過去の罪惡を悔みて之を棄つる也。信仰とは見えざる神、殊に基督に顯はれたる生活及び其隨の事業を認めて之に信賴する也。斯くして人は其罪を赦され、義の生活に入るを得る也。之を稱義又は義とせらるるといふ。以上は即ち人の中に於ける神的生活の發端也(新生、改心、悔改、信仰、義とせらるる等)にして各々其條を見よ。(イ) 神的生活の發達、斯くして初まりたる神的生活は漸へて完全に向て進歩しつゝある也。聖書に成聖又は聖めらる(Sanctification)と稱するは即ち是也。成聖とは新生に依りて與へられたる聖き性情を益々強め、其全身全靈を聖化するの義也。(ロ) 成

聖の働を見よ。以上は人の方面より云へば、人の活動なれ共、凡そ善き事、義しき事、聖き事は神を離れて存在せず。故に之を神の方面より見れば、悉く神の活動にして、即ち個人各自の中に働ける聖靈の活動なる也。(ハ) 聖靈の働、所謂インスピレーションと稱するは聖靈の働也。基督敎の歴史は又インスピレーションと稱する信仰復興の運動を有す。此運動も亦之を其真正なる限り聖靈の働に歸すべし。

【参考書】 監督モレルの「基督の身に於ける聖靈の任務」ハッチンガスの「聖靈の地位及び働」アッカンの「聖靈の職務及び働」スミットンの「聖靈の教義」大監督ヘンソンの「七の賜」カンテットの「聖靈の働」スワイトの「聖靈の教義の初代史」モウエル、クラーク、パーソンズ及び其他の「基督敎義綱要」等。

聖靈降臨節 Whit Sunday 行事

ペンテコステの日(基督復活後第五十日即ち第七日曜日)聖靈の降臨(徒二)を記念せる祝節にして、當日を聖靈降臨日(Whitsunday)と稱し、爾後一週間引き續きて之を祝し、之を聖靈降臨節(Whitsuntide)と稱す。然れ共此祝節は復活節又は降臨節の如く處に於て行はれず。

精靈説 Spiritualism 學說名 精靈説とはその主唱者エフ、ダブリウ、エツナ、メーヤルに從へば「死者の靈魂が生者と交通すべし信仰を基礎とせる宗教、哲學若しくは思想の一形態なり」とす。彼は三十年間の研學及び経験を基とする事實及び理論を枚舉論述したり。彼曰く「多くの欺騙、自欺、魔術、迷信あるに拘はらず、確實なる顯現は意の

向ふより吾人に現はれ來る」と。其意則ち死者の靈魂が生者と交通するの事實の確實なるものあるをいふなり。彼は「物質の法則より全く獨立して働く心性作用」例せばテレマシー(五官の媒介に依らず心と心とが直ちに交通し得る事)及び「潜在自己」即ち「意識の表面に現はれざる自己」ある事は、吾人の間に未だ人間の知らざる「隠れたる世界」が存在し居るの證據なりとなし、而して此「隠れたる世界」は「外界に存する見へざる世界を吾人に顯現したり」となし。有名な進化論者ウォルレスは其著「奇蹟及び近世精靈説」中言へらく「幾多の事實は予をして之を事實として承認するを已む可からざらしめたり」と。精靈説の事實に關しては之を辯證せんと欲する著者甚だ多し「サイ」ワイアム、クルーターも其一人なるが、彼は著「靈的現象の奇蹟」に於て彼が自己の家に於て多くの朋友と共に目撃したる所のものに記述したり。猶ほ此説に關して詳しく知らんと欲せば以上の書物の外にはフロレンス、マリアットの「其處に死なし」教授ダブリウ、ウェーラムの「宗教的經驗の種々」を見よ。

聖靈發出論争 Filioque Controversy

事蹟 羅馬教會と希臘教會との間に起れる重要な相違の一は、聖靈發出の教義にして、使徒信經には單に「聖靈を信す」とあり。ニカヤ信條は之に「父より出づる」と云へる語を加へ、希臘教會は之に止めたりしに、羅馬教會は世界宗教會議の准允を得ず、又希臘教會の同意を得ずして、更に之に「子」となりたる語を加へ「父と子とより出づる聖靈」となりたり。希臘教會は之に抗議し、爾後屢々全てられたる兩教會の合同は此語の爲めに常に頓挫せり。此語の初めて加へられたるはトレドの第三會議

セの部

聖靈發出論争

(五八九)にして、西班牙より佛蘭西に弘まりシヤールマン子、エーラスラハルに召集せし會議(八〇九)は此追加の語の使用を准許し、法王レオ三世は之を信條中に加入することをは拒否したれ共、教義上其正當なるを認めたりき。於是フオチヌスは其回文に於て、此語を用ゆることの大過誤なるを論じ、コンスタンチノーブルの會議は之を宣明し、爾後法王との間に争論あり。初めて之を信條中に加へたるはベネディクト八世にして(二〇一四)是より法王は羅馬教會の所爲の正當なるを辯護せり。抑も此争論の起りたる所以は、約翰傳十五の廿六に「父より出づる眞理の靈あり。此處にも又其他の處にも、二重發出(即ち父と子とより)の教義なきより、希臘教會は聖書並にニカヤ信條の原文よりのみならず、又父は唯一の源、根拠也との思想より、二重發出説に反對せり。彼等は父よりのみ出づる聖靈の永遠的形而上的發出と、父と子とに依れる聖靈の一次的使命とを區別し(約十四の廿六、十六の七)前者は本質上の三位一體に屬する者にして、後者は顯現上の三位一體に屬し、ペンテコステの日に初まれりと爲せり。羅馬教會は之に反し、聖靈の二重使命及び父と子との本質的合一に基きて二重發出説を主張し、聖靈し父の本質より出づれば、又子の本質より出でざる可らず、父と子とは其本質同一なれば也と論ぜり。希臘教會は此點に於て羅馬教會が異端を持せりとの理由を以て、一八七〇年のツアチカン會議に列するを拒みたりき。ダマスコのヨハンは聖靈は子に由りて父より出づとの説を唱へ、調和を試みたりしが、舊カトリック派、東方カトリック派及びプロテスタント派が一八七五年ボンに開きたる會議は此説を採用し「子」なる語を信條の中に加ふるは適當な

聖禮典

キリシタ教の事を評決せり。聖禮典 Sacrament. 術語 拉丁語サクラメントム Sacramentum)より來る。原語の古典に於ける慣用の意味は誓ひふことなり。殊に軍隊の誓ひに用ひたり。聖書にも此の語を用ひし所なし。去れど拉丁語聖書は希臘語の *μυστήριον* (即ち奧義(弗一の九、三の三、九、五の廿二、提前三の十六、黙一の二十)の譯字に此の語を充てたり。教會の專用語となりしは第二世紀の終第三世紀の初テレチウスに始まり、初は希臘語 *μυστήριον* の如く凡ての聖なる教義儀式を言ひ表はすに充て、次で洗禮、聖餐及び禮拜に關係ある少の儀式を言ひ表はすのみとなりたり。希臘教會にては今尚其等を奧義と稱せり。然るにアウグスティヌスは聖禮典に更に奧義の定義を下し、見ざる惠の見ゆる表體となしたり。プロテスタント教は之に第三義を加へ、聖禮典は教會の定めたるものたるのみならず、基督自身が定め新約に於ける基督の徒に課したるものならざるべからずとなしたり。聖禮典は又公告白の表體、印、及び手段とも稱せらる。新教は此等の制定の印章的性質に重きを置き、天主教は其の基の通路たる聖禮典の數を二に限り、洗禮と晩餐となせり。以て舊約の割禮と論議に照應せしむ。基督自身が定めて世の末まで守れし命じたるは此の二のみなりしを以てなり。天主教は希臘教會には此の外五種あり。堅信、懺悔、終極塗油、職任、結婚の五種なり。かく聖禮典を七と定めしは中世教會學者のなせし所にして、彼等は之を主張するに七といふ數の神聖なる各種の點より説明し

聖列加入

て爲せり。トレント會議は七禮典より多數若くは少數の禮典ありと教ふる者をば凡て宣明したり。聖禮典の功徳に關しては、プロテスタント諸教會は信仰を第一に要するを説き、天主教は聖禮典が *ex opere operato* (外形の作用)にて用をなすを説けり。即ち僧侶の品性の之を受くる者の精神状態が如何にあるに拘はらず、此の行をなすに由り此の儀式の力に由りて結果あることを説けり。洗禮と教職任命按手禮とは永久抹すべからざる力ありと思はれ、之を幾度も受くべからざる者たり、一たび僧となれば常に洗禮を受けたる者たり、一たび僧となれば常に僧たりたり。されど此の功徳を失ふの危險はなきに非ず、而して之を失へば破門となり免職となりき。聖禮典に就ては議論多し、殊に晩餐に就て然り。プロテスタント教徒は天主教徒、ルーテルとツウィンギー及び其徒との間に議論激しかりしは著しき事なり。カルヴァンは此點に於ては中間説を取り、其の意見はレフォルムド教會信仰告白に採用せられたり。カールは聖禮典を外形の儀式として斥け、内部の洗禮即ち聖靈に由る更生と基督との靈の交を主張せり。詳なることは「プロテスタント」及び「主の晩餐」の條に就て見よ。聖列加入 Alex. カノニゼーションの條を見よ。セウエロス Alex. 羅馬帝。二〇五年に生れ二二二年羅馬帝とせられ二二五年マインツにて歿せり。治世中基督信徒は公然禮拜をなすを得たり。彼は汎神論者、英雄崇拜者たり。其の私拜堂にオルフアロス其他の半身像と並べてアブラハム及び基督信徒の半身像を安置したり。

セの部

セウエロス

セブチミオス Severus, Apollinarius 人名 一四六一—一四六二 羅馬帝。亞弗利加レプタスに生れ、一九三年ヘルナナグス時殺後羅馬帝となる。人として公正なりしが多少嚴峻に傾けり。宗教的感情を具へ神格的なりしが、又偏して異教の妄信に陥り易き性質なりき。其の家に基督信者の家臣を用ひ、異教農民の狂妄を制して基督教徒の保護を保障し、其の長子に基督教徒の子弟と自由會議するを許せり。されど東方征軍の間に何故に心感情一變し、法律を教して猶太教基督教への改宗を廢止したり。異教徒有司は此に於て基督教徒反對の舊法を復興して服従を強ひ、迫害は此に起り、殊に亞弗利加及び小亞細亞の局部は最も甚だしかりき。去れど基督信徒は一般に此迫害の帝の意に非ざるを信じたり。

セウンスデー

アドヴェンチスト Seventh-day Adventist. 『サタデー・アドヴェンチスト』の條を見よ。

セウンスデー

アドヴェンチスト Seventh-day Adventist. 『サタデー・アドヴェンチスト』の條を見よ。

セウンスデー

アドヴェンチスト Seventh-day Adventist. 『サタデー・アドヴェンチスト』の條を見よ。

セウンスデー

アドヴェンチスト Seventh-day Adventist. 『サタデー・アドヴェンチスト』の條を見よ。

セウンスデー

アドヴェンチスト Seventh-day Adventist. 『サタデー・アドヴェンチスト』の條を見よ。

七の部

説教

也云云。Preaching or Sermon. 術語。英

又曰時者の義。より来り、英譯聖書にては希臘語 Kyriakos の譯語として用ゆ。聽衆の心を感動せしめ之を説服するの目的を以て爲されたる宗教的使命宣佈の義にして、使命其物を sermon といふ。今共部分に占め、プロテスタント教會に於ては最も之を重す。

(一) 聖書に於ける説教。基督教會に於ける説教の由来を考ふるに、其端を舊約の預言者に發したりしが如し。預言者は説教者にして、彼等が舊約聖書の中に遺したる預言なる者は、其初め多くは當時の人々に向て説教したる者、又は説教せんとして書きたる者也。然れ共預言者の説教は今日吾人の説教と稱するものとの間には二の重要な相違あり。即ち(一)預言者の説教なる者は特殊の危機に際し、又は特殊の啓示を蒙りて、市朝何れの處を問はず必要に應じて爲されたる者にして、今日の説教の如く教會に於て神を禮拜するために恒例として爲さるる者とは異れり。(二)預言者の説教は大抵國民の罪惡、審判及び救済等凡て公の課題に關する事柄を必要に關して、今日の説教の如く個人の行爲及び必要に關する事柄を論ずる者に非ず。今日の説教と稱す近頃する者の行はるるに至りしは、以色列人が存因より歸り來りし以後の事にして、此時に方り律法は以色列宗教の中心となりて、普く人民に教へられ、會堂(synagogue) 起るに及びて、説教は禮拜の一の務となるに至れり。フィロソフの云ふ處に依れば、當時平易なる説教は會堂に於ける禮拜の主要なる部分を占め、別

説教

説教

に定まりたる説教者になりしと雖も、祭司又は長老の中より或人進み出でて聖書を讀み之を説き明したりしといふ。バプテスマのヨハネ出づるに及びて預言者の説教の方法を再興し、會堂に於ける恒例の説教以外に野外にて説教をなし、且バプテスマを施したり。彼の説教の主意は「天國は近づけり、悔改めよ」と云ふことなりしが(太三の一、可一の四) 耶穌最初の説教も亦之に外ならざりしが(可一の十四、十五) 彼は初めガリラヤの會堂に於て説教したりしが(可一の廿九) 諸加傳の記する處に依れば、彼は其讀みたる聖書の一部分を取りて之を説明せり(四の十六以下) 此は當時安息日に會堂にて一般になしたる慣例なりしなるべし。然れ共彼は後野外にて説教するに及びて、此等の慣例に従はず、舊約をば引ききたれ共、之を説明せず、直ちに自己の大論題たる「神の國」を擧げて之を説明し敷衍せり。彼が弟子の少なき團體に向て爲したる教訓は、公衆に向て爲したる教訓とは同じからず。後者在ては多く譬喩を用ひ、前者に在ては直接にして且會話的也。福音書に傳へられたる耶穌の説教なる者は其要點を示したる者にして全體を傳へたる者に非ず。且種々の場合になされたる者は一箇處に纏めたる例亦少ざられ、吾人は何處にも耶穌の説教を全體として見ることは能はざれ共、其方法の如何なるものなりしやは之に依りて推知するを得べし。即ち彼の説教は(一) 清新にして創始的なりき(可一の廿七)。(二) 彼は權威を以て語りたりき(可一の廿二)。(三) 彼の説教は恩恵の言なりき(路四の廿二)。(四) 彼は聽衆の聽き得る處に從ひ譬喩を以て語りたりき(可四の廿二)。

は多少説教の方法に光明を與へたりしと雖も、概して論ずれば説教を俗語ならしめたるに過ぎざりき。斯の如く衰頹したりし説教は、宗教改革に至りて再び其地位を回復したりき。宗教改革は實に説教の結果にして、ルーテルが講壇に立ちて説教し初めたりし時に改革の事業は初まり、改革事業の初まりし處には説教も初まり、説教の初まりし處には改革の事業も廣まりたりき。當時エラスムス、モリア等の學者ありしが、彼等は思辨を旨として衆人を相手にすることなせざりき。改革家は之に異り、衆人を相手にして説教し、斯くして改革の實を擧げたりき。ルーテルの説教は其初期に於ては神學的にして、實際的なざりしが、其體験的の進歩すると共に説教も亦實際的となり、信仰に依りて義とせらるるべしと云へる思想を中心として實際の問題を論ぜり。彼は説教を以て公拜の最も重要な部分を占むべき者也となし之を奨励したりしが、彼が説教に關する意見の大要を擧ぐれば、説教は神の言に基きざる可らず、智識的なるのみならず、個人の経験に適應せざるべからず、説教の大題目は耶穌基督に於ける神の善と榮光とならざる可らず、人類の罪と之がために死せる基督を常に説教せざる可らずと云ふに在りき。ルーテルの以後凡そ一百年間は政治上の争亂相續きたる派との間に争論ありしこと、新教獨斷説の發達したりしこと、之に依り、説教は復た衰頹したりしが、第十七世紀の終に至り漸進に敬虔派なる者起り、福音的宗教を説き個人の経験を重じ、説教の復興を見るに至れり。殊に注目すべきは英國に於けるメソヂスト運動の起りたることにして、此に至りて説教は又光明の歴史を有するに至れり。ワニスレーの説教は

れば、彼等は常に舊約を引きて自己の所言を確證したりき(徒二の十四、廿五、廿四、七の四十二、八の廿二) 保羅は猶太人に對しては他の使徒と同じく舊約を引きて之に訴へたれ共、アセンサに於て異教徒に語りし時は希臘の古典を引用したりき(七の廿八) 内容より之を云へば、猶太人に對する使徒等の説教は、復活と舊約の預言とに依りて耶穌のメソヂヤたることを宣佈するを以て主となし、之に次ぐに罪の赦と基督に依れる故とを以てせり(二の廿八、三の十九、四の十二)。使徒行傳の記録の眞實なるは、之に記せる使徒等の説教の中に、保羅の後に至りて發達したる福音の教義を有せざるに依りて明也。異邦人に對しては、疑人的多神教、偶像禮拜及び魔術の非理なる事を示し(十四の十五、十七の廿九、十九) 神の靈なること及び其父なる事を明にし(十七の廿四以下) 罪と來るべき審判の恐るべきことを告げ(十七の卅一) 耶穌基督を信するに依りて救はるべきことを宣べたり(十六の卅一) 彼等の説教には耶穌の語を引くこと稀にして且簡短なれ共、其生活、死及び復活の事實に關する詳細に言及したりしが如何し。新約時代の教會の説教は概して自由にして、何人にも才能を有するものは説教するの特權を有したりき。殊にコリントの教會に在りては信徒の中に預言の賜を有する者ありて自由之を用ひることを得たりき(哥前十四の一、卅一) 然れ共後教會の漸くに發達して所謂教職なる者の設けらるるに及び、説教は教職の専ら任すべき者となりたり。

(二) 教會に於ける説教。初代教會に於て所謂説教家と稱せられたる者は、何れも有力なる説教家なりしこと疑なしと雖も、最も雄辯なる説教家の出でたりは第四世紀以後のことにして、マリクセン、テラチヤ

七の部

説教

アン・ラウテンシウス。エロム・カイル。アマプロス。パウル。ナウ・アンズスのアレゴリー。タリウス。トモス。アラウカスチン等は其最も著名なる者也。殊にタリウストモス及びアラウカスチンは説教の歴史に於て異彩を放てり。前者は其雄辯の故を以て金口の稱を得、其名聲デモセチスの如く天下に播れり。而して彼は「祭司」と題する其著書に於て、説教家の資格を論じ、雄辯、巧に聖書を用ゆる事、何時にても信仰を擁護する事、よく準備する事及び人の譽よりも神の譽を求むる事に在りしとせり。アラウカスチンは其改宗前雄辯の教師なりしが、彼は雄辯術と説教とを區別し、説教は雄辯を排せずと雖も、説教家は聖書より其智慧と其説教の三目的即ち教訓、興味、説服を以て説教の要素となされ共、殊に説服に重を置けり。然るにアラウカスチン以後凡そ一千年間即ち中世紀は説教衰頹の時期にして、第十一世紀に至り煩瑣哲學起りたれ共、此は單に神學を固定せしめたるのみにして、説教には何等の効果を與へざりき。中世紀に於て説教が斯く衰頹したりしは、蓋し僧侶が階級を設け、民を教ふるよりも之を支配せんとしたりしこと、教會が拉丁語を用ゆるに至りしこと、儀式に不當の重を置くに至りしこと、教會の教義獨斷説と變じたりしこと、聖徒及び其遺物の崇拜行はれたりしこと、寺院主義の流行したりしこと、大人物大説教家の出でざりしこと、及び回教の侵入したりしこと等が原因を爲したりしに依るなるべし。當時の説教は單に聖徒の生活を人民に知らしむるに過ぎず。僧侶は一般に無學にして聖書を讀むこと能はず。故に其風調の如きも聖書より取らずして、アリストテレスより取りたりき。古典の研究

は多少説教の方法に光明を與へたりしと雖も、概して論ずれば説教を俗語ならしめたるに過ぎざりき。斯の如く衰頹したりし説教は、宗教改革に至りて再び其地位を回復したりき。宗教改革は實に説教の結果にして、ルーテルが講壇に立ちて説教し初めたりし時に改革の事業は初まり、改革事業の初まりし處には説教も初まり、説教の初まりし處には改革の事業も廣まりたりき。當時エラスムス、モリア等の學者ありしが、彼等は思辨を旨として衆人を相手にすることなせざりき。改革家は之に異り、衆人を相手にして説教し、斯くして改革の實を擧げたりき。ルーテルの説教は其初期に於ては神學的にして、實際的なざりしが、其體験的の進歩すると共に説教も亦實際的となり、信仰に依りて義とせらるるべしと云へる思想を中心として實際の問題を論ぜり。彼は説教を以て公拜の最も重要な部分を占むべき者也となし之を奨励したりしが、彼が説教に關する意見の大要を擧ぐれば、説教は神の言に基きざる可らず、智識的なるのみならず、個人の経験に適應せざるべからず、説教の大題目は耶穌基督に於ける神の善と榮光とならざる可らず、人類の罪と之がために死せる基督を常に説教せざる可らずと云ふに在りき。ルーテルの以後凡そ一百年間は政治上の争亂相續きたる派との間に争論ありしこと、新教獨斷説の發達したりしこと、之に依り、説教は復た衰頹したりしが、第十七世紀の終に至り漸進に敬虔派なる者起り、福音的宗教を説き個人の経験を重じ、説教の復興を見るに至れり。殊に注目すべきは英國に於けるメソヂスト運動の起りたることにして、此に至りて説教は又光明の歴史を有するに至れり。ワニスレーの説教は

先づ罪惡の危險を説きて且懼むべきことを勧め、次に信仰に依りて救はるべきことを説き、自己の経験に依りて之を説明せり。彼の説教の著しき特點は論理的にして、聖書に其根據を置けること、及び道徳的意識に訴へ、眞理を直ちに實際に應用せることに在り。彼は其當時の生活を學び、神學諸説の誤謬を知り、凡て之を聖書に照して批判し、時代の要求を満足せり。ワニスレーと共にメソヂスト運動に興り、殊に説教家を以て顯はれたりしはホイットフィールドにして、彼の説教は偉大、詩人、哲學者等皆喜で之を聽きたりしと云へば以て其力を想見すべし。彼の力の秘訣は其感情の鋭きこと、其音聲の美なることとに在り。其説教は論理的ならざりしと雖も、説教家としてハニスレーの上に在りき。メソヂスト説教家の特質は教義を明にし、實際的方法を用ひ、多数の人民に説教し、直接に罪人を悔改せしめんとするに在り。メソヂスト運動の起りし以後新教諸派は一般に其影響を蒙り、説教は益々重要視せられ、第十九世紀に於ては多くの大説教家を輩出せしめたり。其最も重要なものを擧ぐればテイソン、スタンレー、カノン、フアーリッガ、カノン、モッドン、ニワマン、モリス、フレデリック、ロボルトソン、スガルジョン、ウエス、マイカ、ヒウ、ブライス、ヒウ、セチル、アリス、セオドル、マイカ、ピイチアル、ヒリッパス、ブルークス、ホレス、ブツチル、ムーデー等に指を屈すべし。

説教學

説教學 Homiletics. 學科名。實際神學の一科にして、説教の目的、特質、結構、運用等を科學的に講究する學問也。説教に關する注意はオリゲノス、グリアマス、ラクタンチウス、アルノビウス等の書に散見すれ共、最も詳細に此主意に關することを論じ

七の部

拆衷説。攝理

攝理

攝理

たるは、クリソストモス及びアウグスチヌスを以て初めとなす。近世に於て此主意に關する著書としてハグイネー(一八五八)ブレキー(一八七三)の論文、スガレウロンの『學生に對する講義』、ヒートナ、ヒートナ、アール、アール、ストーカー等の『エール講義』を推す。

折衷説。折衷説とは哲學の諸系統中より其最良なる部分を選出し、是等を一團となして包容調大なる完美の哲學を案出せんと欲するものをいふ。然れども此折衷説なるものは古來多くは淺薄姑息の偏見に留まり、一も其目的を達したるものなし。去れば折衷説は論者任意の折衷を事とする淺薄説を稱呼するの名稱とばなれり。學者がシエロを古代哲學の折衷論者なりと稱呼するは此輕蔑の意味にていふなり。近世哲學に於てはカウレンが折衷論者なり。然れども此兩者は高等なる哲學に非ず。但し折衷論者たりしフイブニツツのみは高等論者たる第一の哲學者なりき。

攝理。Providence (Tobson, providentia) 此語は神の預知及び保護の意義に於て、舊約經外聖書に二回用ゐられたるのみにて、聖書の語には非ざれば、舊約共に此思想に満ちて、舊約に依れば、神に依りて創造せられたる世界は又神に依りて保護維持せらる(創二の十七、六の三)人の生命は全く神に依り(賽十一の三、伯世四の十四、詩百廿九の十六、百四の廿九、神より離れて力なきこと草に均し(詩九十の五、賽四十の六)神は人を助け又之を滅し給ふ(詩十八の十七、創八の一、廿二、七の廿三、十九の廿九、出十二の廿九)彼は人及び獸に食物を與へ、又自然の勢力を以て統御し給ふ(耶三の三、詩廿九、百廿六の七、九、百四十五の十六、

伯世八の廿八、四十一)自然は神の目的を爲し、又其智慧と力を顯はし、其榮光と善を示す(詩八、十九、百四十七)自然の現象の秩序正しきは實に神の意志に依り(詩百四の九、耶世三の廿、廿五)故に奇蹟も驚くに足らず、神は其恵の儘をなし給へば也(賽五十五の十一)神の攝理人の自由の意志との關係は頗る困難の問題也。舊約は人の自由と責任とを強調し(創十七の二、詩一、賽一の十六、耶廿一の八)又人の祈は神を仰ぐ力あるが如く云へり(詩一八の廿三、廿四の十二、廿五の廿一、出八の八、九の廿八、十の十七)他方に在りては又神は幽匿にして人は泥土に外ならず(耶十の八の六)神は人に福をも福をも共に送る者也云へり(歴三の六、賽四十五の七)個人及び國民の運命は應報の法則に依りて定められ、人の動作は凡て神が自己の目的を遂げんがため、殊に其民の利福を進めんがために導く所のもの也とせらる(創五十の廿、出三の廿一)人は心に己の道を考へ謀る、左れど其步履を導く者は神也(箴十六の九)神は世の勇者の謀を嘲り給ふ(詩二の四)神の攝理に於ける斯る信仰は希伯來人民宗教的特色の一にして、彼等は此信仰に依りて高ぶる者を責め(詩四十四の四、七、百廿七の一)畏怖と失望とに誇り(詩百三十三の十、十一、十六、六十の十二)勇氣と希望とに満ちて(詩百廿一の四、百廿七の二)己の民を救はんの神の目的の成就することを神の直接の働と思惟せられ、異邦人の歴史に於ける出来事も亦均しく神の働と思考せらる(歴九の七、申二の廿二、賽四十六の十一、四十八の十五)然れ共神の攝理の問題は全く疑惑なかりしに非ず。例之遺傳の事實承認せられ(申五の九、出廿の五、六、耶世二の十八)其之を解

する困難の論ぜられたりしが如し(耶世一の廿九、結十八の一)又神は果して自ら人の心を頑ならしめ給ふ者也とせば、如何にして彼は人を罰し得べきやとの疑問ありき(賽六の九、箴十六の四)而して之に對する答は罪の刑罰也とのことなりき(結十二の二、詩十八の廿六)義人の苦むことあるは應報の法則に當り道徳的秩序を亂せる者也とのことは、更に他の疑問にして(耶十二の一、伯廿一の七、詩廿二、七十三、哈一)約百記は此問題を解説せんために書かれたる者なりき。苦難は試練のため也との答にして(申八の二、何二の十四、耶世五の十三、賽廿七の八)晩代に至りて書かれたる書には、個人的復活の希望に依りて此困難を解説せんとしてたりしが、第二以賽亞書の記者は、代理的苦難の説を提出して之を解説せんとして試みたり(賽五十三)詩七十三篇の作者は、神の攝理を疑ふ者は賦に均しと云ひたれ共、傳道書の記者は、此點に關しては殆ど懷疑に陥れり。

新約は攝理に關する舊約の教訓を繼承せり。耶蘇は凡ての人に對する神の攝理に就て語り、神は善人にも惡人にも均しく日を照し雨を降らせ給ふと云ひ(太五の四十五)神を父として之に頼りて祈るべしと教へ(六の九)神は野の花、天空の鳥と(賽一)給へば況して人をや(六の廿五)一羽の雀も神の許なくば地に墮つることなく、頭の髮亦皆數へらるれば懼る勿れと云ひ(十の廿九、世)又信仰を以て祈る祈禱には應驗あるべしとのことを教へたり(七の七十一)可十一の廿三、廿四)保護は神の人に爲し給へる道を説きて、神は預め知り給ふ所の者を其子の狀に似せんと預め之を定め、其定めたる者は之を預きて之を養ふと之に愛を賜へり云ひ

七の部

セナカ

セネカ

セネカ

(創八の廿九、世)又攝理の法則を説きて、凡ての事は神を愛するものために悉く働きて益を爲すと云へり(八の廿八)彼は又其歴史哲學ともいふべき者に於て、猶太人の要てられたるに依りて異邦人の召されたること、異邦人の召されたことに依りて終に猶太人の教はるべきことを説き、神の目的の人類救済に在る所以を論ぜり(九一十一)默示録は其表裏の文字に於て善惡の戰爭を描き、眞理の終に勝利を得べき所以を説きて、當時の迫害を蒙れる信徒に慰藉と希望とを與へたり。

セナカリヤ

Sennacherib. 人名

アッスリヤ國王

アッスリヤ國王。サルゴンの子にして、紀元前七百五年に即位す。先づ彼は巴比倫に向つて戰役を試みたりしが、巴比倫王メロダクバラダンは六月治世の後退走したりしが、彼はヘルイブニを立て、巴比倫王となし、次でエラムの西北山地を征服し、七百一年にはパレスチナを襲へり。當時エテオピヤ人の支配を受けし埃及人等はヘセキヤの援助を請ひ來り、共にアッスリヤ軍に當りしが、彼等は敗北して退却するに至りしが、セナカリヤは進んでエドムを征服し、四十六ヶ所の要塞を掠奪し、二十萬人を俘囚となしたり。彼れラキシヤを攻圍しつゝありし際、ヘセキヤは彼の攻撃を避けんと欲して多くの贈物を捧げたり。即ち金三十マラント銀八百マラントを初めとして、寶石、馬車、婦人、宦官、男女の音樂者等を贈りたるも悉く空望に歸し去り、ラキシヤは奪はれ、尙ほ彼の市色を擧げて降服すべきを勧められたり(王下十九の八)。然るにセナカリヤは父サルゴンの死後復讐せし地方を悉く征服するに至らずして、中途エドムを去らざるを得ざるの不幸其の身に及びたれ共、其の不幸に關する報道に就ては沈黙の幕を以て

覆はれたり。翌年彼は再び巴比倫に入り、其の子アサナタンサムを王となし、メロダクバラダンを國外に驅逐したり。數年後彼はユフラト河に船艦を浮べ、是れにイオニヤ及びフェニキヤ人を乗込せしめ、彼斯處を越へて、メロダクバラダンの從者等の避難したりしイウラスの口に航行し、カルデア人の喧嘩を熾き且之を掠奪したり。之れがためアサナタンサムはエラムに移され、エラム人は彼の代りにナルゲルムセウアを王となしたり(前六九四)。去れ共前六九一年セナカリヤは再び巴比倫に進み、二ヶ年の後全く之を征服し、六八九年巴比倫は遂に全滅に歸したり。彼は六八一年その子アタランメレクとシヤレセルとのために殺さる(王下十九の三十七)彼は父サルゴンの如き軍略上の熟練及び忍耐に乏しく、徒らに虚榮自負に強き人なりき。彼はニネベ市に長さ一千五百呎、廣さ七百呎の宮殿を建立し、チグリス河の兩岸に沿つて機巧の塹防を築造し、而して殆んど破壊せし古代の溝渠を修理したり。周圍八哩に亘るニネベの大城壁は彼の構造せしものなりといふ。

セネカ

Lucius Annaeus Seneca. 人名

第一世紀の羅馬の哲學者

哲學者。紀元前八年頃西班牙コルドバに生れ、紀元六五年自殺す。少くして父の業たる修辞學を教へられしが、後之を棄てて哲學を修め、希臘を旅行せし後羅馬にて演説者となり、討論に由て成功せしが、ゲルマニウスの女ユリアと私通の科を以てコルシカに流され、八年間留まり「デ、コンソラチオネ、アド、ヘルウィウム、リベル」及び「コンソラチオネ、アド、ボビウム、リベル」を編す。アグリヒナミクラウディアオスとの結婚ありて召還せられ、

未來の帝キロの師とせられ、之に由て大なる財を得へ、却て彼の清滅の基を作る。キロに疑はれて宮廷を退きしが、ヒソアの教団に與ふと訴へられ、キロより自殺を命ぜられ、之に従ひ自ら血管を切り湯浴に入て死す。

セネカの基督教に對する關係は、興味を引き議論を起せしこと多き問題なり。イエロニムに讀まれたりて保護と交換せる書翰ありて多くの人に讀まれたりて傳へ、アウグスチヌス亦書翰のこを言へり。此外羅馬のソノスの著と稱する『保護、彼得行傳』なる經外聖書に又同じ事を言へり。第八世紀までの文書にてセネカと基督教との關係に言ひ及ぼせるものは以上の者のみなるが、而もテラチウ・マヌス、ラタモンチウス、ペダの書には又尊敬を以てセネカの事を記しあり。然るにリウカスのフレカルフ(八五〇年死)の年代史に至り、前のイエロニムスの言を引くあり。十二世紀後に至りてオーチユンのホノリウス、ケルニーのペテル、サリスボリーのジョン等一致してセネカの基督教者なりしを言へり。宗教改革時代の批評的風潮は之を疑ひ、殊にエラスムスは右の書翰は偽書なりと論じ、今日は何人も之に同意す。セネカの文書中より基督教的思想を抄集せし人は古來數多く、近代にてはアメデー、フリュアリーの『聖保護とセネカ』(一八五三年)二冊あり。オーベアマンは一八五七年基督教とセネカの關係に就て精密なる書を著し、五八年フェルゲナンド、クリスチアン、パウル又之を論ぜり。保護とセネカとの書翰と稱するものは、保護の四書翰セネカの八書翰を取めたる者なるが、其の論題は基督の事ならず、カストル及びボラタスの事に言ひ及び、重に社會的功益を説きて宗教又は哲學の大思想少し。然るに何故にイエロニ

セの部

聖彼得大會堂

聖彼得大會堂

千福年説



堂 會 大 聖 保 聖

聖彼得大會堂の記念碑あり。羅馬帝國時代には此處にアイアナの神殿立ちたりしが、第七世紀の初め僧院となり、一〇八七年焼失し、次で教會を再建し、一二四〇年落成せしが、一六六六年再び焼失せり。故に現時の會堂は第三次のもの也。

聖彼得大會堂 St. Peter's Cathedral (San Pietro in Vaticano) 建築物 羅馬教の大本山。以太利國羅馬市の西に、曾てカリクラス、サルカスの立ちし處に在り。初めコンスタンチヌス大帝の公會堂として建設したりし處なりしが、法王ニコラス五世(一四四七—一四五五)の時拉丁十字架型に改め再建に着手せり。ニコラス二世の時アラマン

て之を彫琢修飾し、且之に壯大なる圓頂を添へたり(一五四九年)。然るに不幸にして保護五世の加へたりし正廳は此圓頂の美を損し、且再び希臘十字架型を擬し、もとの拉丁十字架型に變へたり。斯くして廿代の法王を経て、十四人の建築家を使用し、凡そ一八八十年を経て、一六二六年竣工せられたり。現時聖彼得大會堂は世界第一の大物體にして其廣さ一萬八千方碼、中央に在る圓塔の高さ四百三十五呎に達す。徑七呎有餘の石柱を用ゆること七百四十八本、其最も高きは七十七呎に及ぶ。而して是れ皆大理石、花崗石、花崗石にして、圓なるあり、方なるあり。方柱の側、左右壁の間隔に名工の手に

テ之を希臘十字架型に改めたりしが、一五〇六年に至り礎石を掘ふるに至れり。ミカエルの、アングロマンテの設計を襲ひ

成れる畫、彫刻又は鑲嵌を以てす。圓塔の上に十字架あり、高さ廿三呎。塔下に壇あり。壇の下に使徒彼得の遺骨を納む。聖彼得大會堂の名蓋し之に基く。其結構壯麗一々名狀す可らず。參詣の者踵を絶たす。ツァチカン宮殿は此會堂の北に位せり。

千福年説 Millennium, Millenarism, Millennium. (獨逸語 Chiliasmus). 教義 千福年説とは、基督が其再來の時凡ての聖徒を集め、平和の王國を建て、自ら之を統治すべしといへる教義をいふ。此説の中には、地上に王國を建つるため基督が見るべき形を取りて再來する事、基督に敵する者の滅亡、二の復活(聖徒は千福年の喜を享受せんために蘇り、其他の死者は審判を受けんために蘇る)幸福の完成及び義人の勝利を含む。此説は一千年の時期を基督の再來と此時期の終末との間に置く。而して此一千年の王國を以て教會發達の終極とみなす。不完全なる地上に特に將來の榮光を移植したる者も也。此説の直接の根據は、約翰黙示録に、惡魔は千年の間縛られて底なき坑に投げ入れられ、基督の聖徒は蘇りて基督と共に一千年の間王となり、其他の死人は千年終るまで蘇らず(廿の一—六)斯くて後新天新地來るべし(十九—廿一章)といへるに在りて、此等の語を如字的に解釋し、千福年は基督の再來と共に來るべしとの希望と結びて、此説を生ずるに至りし也。然れ共此説の更に深く根據は之を舊約に淵源を得べし。以色列の預言者等は以色列國民の勝利を預言し、此勝利の時期はメッサヤの來ると共に初なるべしと云へり(賽九の六、亞九の九以下、但二の四十四)。經外聖書記者、經外聖書記者、及びキレムド記者等は此預言を敷衍し、附するに詳細の說明を以てし、間々相互に矛盾せる言さへ爲したり

セの部

千福年説

洗禮。洗禮盤

洗禮服。ゼデ



堂 會 大 得 彼 聖

千福年の休息あり、第八千年を以て永遠の幸福の目録あるべしとの預言あり(卅三の一、二)。思ふに約翰黙示録に在る千福年なるべしとの思想は、愛に其淵源を發したる者なるべし。又哥前十五の廿三以下に記せる保護の語には、人々蘇り基督再來せん時と、彼が終りに其國を父の神に付さん時との間に、基督が自ら世界を統治すべき一千年の時期ありと解釋するものあり。斯くて千福年説は初代教會に於て多くの教父の採用する處となり、近代に至りても亦堅く此説を取る者ありたれ共、遂に教會の正統説となるに至らず。(終末論)の條下『千福年』の項を見よ。又此説の詳細を知らんとせばホルターの『千福年説』(一八六九)ボナルの『主耶穌の王國の來る事』(一八四六)デー、アラウソンの『セコンド、アード、エント』(一八四六)サイスの『終末の時』(一八七八)サルモンドの『基督教義不滅の教義』(一九〇二)等を見よ。

入るト容易にして、通常石にて造り直徑凡そ二尺六寸あり。古の洗禮場に代り、宗教改革時代まで小兒浸禮のために用ゐられたり。中世の教會の洗禮盤は通常堅き石材又は大理石を穿ちて造り、蓋の上に載せたる者にて、其形狀圓きあり、八角なるあり、又方形なる者も稀に之れあり。最も古代の洗禮盤は平たき木造の蓋を有せしが、漸次裝飾を施せる美麗なる蓋之に代はるに至れり。洗禮盤の内部は美麗に彫刻せられ、其外部及び蓋も浮上げ彫り又は黄金を以て裝飾せられたり。稀には黄金又は鉛にて造れる者もあり。通常洗禮盤は教會の兩端に備へらるる者也。

洗禮服 Chiton. 物名 羅馬教會にて幼兒に洗禮を授けたる後、其頭に被らしむる白布をいふ。

ゼデキヤ Zedekiah. 人名 『ヘブライの義』の意味を有し、舊約書中此の名稱を有する者數人あり。(一)ツナアナの子、アハブの宮廷預言者四百人の一人(王上廿二の十一、廿四、廿五、代下十八の十、廿三、廿四)。(二)エホヤキムと共に巴比倫城へ追放せられたる俘囚の一人なる預言者にして、アハブと呼ばれたる預言者及びゼデキヤはエレミヤのために阿贊せられたり。不徳なる行爲を爲し、且偽りの預言をなしたれば也(耶廿九の廿一、廿三)。(三)エホヤキムの治世中皇族の一人なるハナニヤの子(耶卅六の十二)。(四)エダの國の最終の王。彼はシアの末子にしてエホヤブズの兄弟也(王下廿三の卅一、廿四の十八)。ゼデキヤ治世の十一年に至りてバビロン王の末路となりて、埃及及び巴比倫は突も之が勝利を争ひたり。而して遂にエルサレム城は巴比倫王のために攻め取られければ、ゼデキヤは其の一

洗禮盤 Font. 物名 洗禮式に用ゆる水を

セの部

ゼバ。西番雅書

西番雅書

西番雅書



盤 禮 洗 の 名 有

家者等と共に夜に集りて、過走を企てたるも、申述にして敵軍のために追撃せられ、エリコの平地に於て捕はれたり。...

處なし。此處に記されたる處に依れば、彼はヒセキヤ四世の孫にして、ユダの王ヨシヤ王の治世に預言したるに似たり。...

二三の八一廿、是也。 (一) 威嚇 (一章) セパニヤは先づ地上の萬物の滅亡すべきことを初め、...

ゼパニヤ Zephaniah. 人名 ヌダの預言者。西番雅書の著者。...

ゼバニヤ Zephaniah. 人名 ヌダの預言者。西番雅書の著者。...

ゼバニヤ Zephaniah. 人名 ヌダの預言者。西番雅書の著者。...

セの部

西番雅書

ゼム

ゼルの部

西番雅書 The Apocrypha of Zephaniah. 西番雅書。西番雅書中の一書。...

ゼムレム Zephaniah. 人名 ヌダの預言者。西番雅書の著者。...

ゼムレム Zephaniah. 人名 ヌダの預言者。西番雅書の著者。...

ゼムレム Zephaniah. 人名 ヌダの預言者。西番雅書の著者。...

ゼムレム Zephaniah. 人名 ヌダの預言者。西番雅書の著者。...

ゼムレム Zephaniah. 人名 ヌダの預言者。西番雅書の著者。...

ソの部

僧院。僧院及び僧院主義。僧官會議。總會。僧會。ソクラ

はれたる月籍調査に反対して一揆を起し、又エルサレムが羅馬軍のために閉ざられたりし時、最も勇猛なる精神を顕はして之を奮戦せり。エルサレムの最初の基督教徒の中には皆て此派に屬したる者多くありしが如し(徒廿一の廿)。

ソの部

僧院

英語 Kloister. 雜語

は拉丁語 Chastrium より來り、元來僧院の周圍に在る僧堂の義なりしが、漸次僧院全體を意義するに至り、後又更に僧院奥室の周圍に在る道持橋、即ち僧侶が讀書、黙想の場所として用ゐる處を指す名となり、今一般に其意義にて用ゐらる。故に之を修道院と譯せり。

僧院及び僧院主義

『寺院及び寺院主義』の條を參照せり。

僧官會議 Convocation. 『フランスキリシヤ』の條を見よ。

總會 General Assembly, General Conference. 『オランダ、アッセルムブリー』の條を見よ。

長老教會の最高府也。『長老教會』の條を見よ。『ソクラテス、コンフェレンス』はメソヂスト教會の最高府也。『メソヂスト教會』の條を見よ。我國の組合教會にて總會と稱するは、地方教會全體の代表者集りて共同事業に就き協議する總會の謂れ共、長老教會又はメソヂスト教會の總會の如き教會の法律的權力を有する者とは異れり。

僧會

羅馬教會の大會議。Chapbar. 雜語

又は大學附屬の教會に於て、禮拜の規律を司らんとす。特に組織せられたる僧侶の團體也。元來監督の顧問又は相談に與らんとす。其側面に在りし長老の團體より發達せる者にして、第四世紀の頃寺院的生活が僧侶に移りしより一層明白なる形を取るに至れり。僧會の會員は二種に分れ、其第一種に入る者は十四歳以上、身體健全なる者にして剃髮するを要し、第二種に入る者は更に高尚なる資格を要す。僧會の頭に立ち之を總轄するはティーン也。

ソクラテス

前四六九

一三九九 希臘の哲學者。アテナのペーニア區に生る。父は彫刻師、母はフェネレテといひ産婆を業とす。ソクラテスも壯年の間彫刻業に従へり。ソクラテスは博學。ソクラテス、テラクム、アマフィオリスの三處に、市民兵として従ひて勇を現はし、六十歳に至りて議員となり、人民の勳品を磨練して道徳的政治的の力を示せり。是れ公職に就きたる始にして終りたり。七十歳にして國の少年を腐敗せしめ又國の神々を非せす。七十歳にして國の少年を腐敗せしめ審問せられ、投票に於て僅の多數に由り罪せられ、毒杯を與へられて死す。

ソクラテスの哲學は體系をなすといふよりも、究求の精神及び真理探求の法式といふべきものなり。此の法式は彼に獨特にして生氣と力あり、凡ての弟子の多少づゝ傳ふ所となり。プラトンの『問答』は其の完全せるものにて、理想化したるソクラテスの理想化したる會話なり。彼の哲學の主題は物理より區別せる倫理なり。其の目的は空虚なる思想を排して實際的なり。自覚せる無知、謙遜、博識、清高の道徳、卑しき人間の事に関する神の宣託の護衛を意味す。善は單純なる事實の報道にして、原本よりの抄出多く、誤謬もあれど多からず。材料に批評的の選擇を試みざるを以て不思議の物語も多し。

素祭

舊約時代に於ける宗教上の慣例。燔祭に伴ふて獻ぐる所にして(利二の一)十一の素祭は、燔祭より製したるパンに油、乳香及び食鹽を添へて供す。素祭は獻者其身を神に獻じ、凡て其有する能力及才能共に神に捧ぐることを表す。其如く、素祭は人其勤勞の結果を神に捧ぐることを意味す。其最も充分なる意義に基きて考ふれば、人は其生命の全力を擧げて之を神の事に供し、凡そ正當の義務に於て神に聖なる服従を致すことを表す。

組織神學

Systematic (or Dogmatic) Theology. 學科名

基督教の教義を研究し定義し組織する學問にして、基督教の經驗に基き、聖書の教訓及び歴史的の依りて證明するもの也。其聖書神學と異なるは、聖書神學は聖書に教へられたる教義を歴史的に表明するものなれ共、組織神學は教會の把持する教義を表明するものなるに在り。換言すれば聖書神學の問題は『以色列の族長、モーセ、預言者、基督及び使徒等は何を信じたりしや』に在り。組織神學の問題は『吾人は何を信すべきや』に在り。其教義歴史と異なるは、教義歴史は基督教義の歴史的發達を尋ねるものなれ共、組織神學は現在成立せる基督教の信仰を表明する者なるに在り。組織神學の区分は學者に依りて一ならざれ共、大體に於て一致するは之が大區分也。即ち(一)神に関する教義、愛には神に関する基督教の觀念、神の存在、神の宇宙との關係、及び三位一體等の問題を論ず。(二)人に關する教義。愛には人の肉體、道徳的存在を以て

ソクラ

る研究なり。ソクラテスの説に依れば、人の目的即ち主善は幸福なり。然れども多くの人の幸福とする富や名譽や權力や幸運の賜より發する快樂に非ず、神の意に従ひて天の祝福を以て善をなすことより起る『善くあること』なり。眞善美は根本は一なり。タセノフォンはプラトーンと共に、ソクラテスは正を知る人は正なり、徳を解する人は有徳なりと言ひしを傳ふ。即ち凡ての徳は知識に由ることを也。されど此の知識といふは普通の意味と異り、高く汎く意味に用ひられしなり。

ソクラテスは一の至上なる神、即ち宇宙の創造者、計劃者、人類の造主又父、國民の治者、目見るべからざれど凡ての事をなし得る力あり、全知また道に在りて、賢く正しく善きこと至れる者の存在を信ぜり。之が存在を論証する法式は全くペーコン流にして、タセノフォンの書に在るソクラテスの神の存在と其の慈愛に関する論を見れば、ヘーレーの『自然神學』を讀む心地し、人心に不文の法律ありて自ら執行し、人にして不正不純無徳に陥る時は必ず之を罰し、人類の遣れる法律よりは高にして善なるを証すと論ずる邊り、パットールの書を見る心地せしむ。彼は又劣等の諸神の存在を信じ、其の働きを認め、人の事を護ること能はざる處、基督教の天使の信仰と異なる。唯だ基督教に於ては天使は神に仕ふる者せられ、之を拜するを偶像崇拜とせし點に於て此の大哲學者の信仰を淺げり。彼は絶えず神の聲に導かれ、惡に陥らんとする時に戒められ、斯くて間接に正道に導かるるを信じ、凡ての人類が知るべしと教へ、人々此の誤り無く又今も後にも後にも知らるものに向つて盲目的に導き來むるを怪しみ、自ら

ソの部

ソクラ

ソクラテス

前四六九

一三九九 希臘の哲學者。アテナのペーニア區に生る。父は彫刻師、母はフェネレテといひ産婆を業とす。ソクラテスも壯年の間彫刻業に従へり。ソクラテスは博學。ソクラテス、テラクム、アマフィオリスの三處に、市民兵として従ひて勇を現はし、六十歳に至りて議員となり、人民の勳品を磨練して道徳的政治的の力を示せり。是れ公職に就きたる始にして終りたり。七十歳にして國の少年を腐敗せしめ又國の神々を非せす。七十歳にして國の少年を腐敗せしめ審問せられ、投票に於て僅の多數に由り罪せられ、毒杯を與へられて死す。

素祭。組織神學

組織神學

リ

リシオノステ。祖先崇拜

ソグメ。ソーチ

ソーチ

一八八八/九〇。は此主意に關する最も完備せるもの也。

リシオノス派。又はソーチノス派。Socians of Socialism. 學派名。フワウスト

リステチ。Sachteres. 人名。此名新約に二回記されたれ共同一人なりや否明ならず。

祖先崇拜。Ancestor Worship. 雜語。祖先の靈を崇拜する者にして、魂魂崇拜と同じ多數の魂魂の存在を認むるものなれ共、其崇拜の對象となるものは人間の靈魂に限り、人間の中にも祖先のみに限るものなれば、一般の魂魂崇拜とは其趣を異にする。歐羅巴に於て祖先崇拜の最好例也とせらるるは古代の羅馬にして、Marsなる拉丁語は近代語に於て祖先神の名となれり。支那宗教の基礎が尙祖先崇拜に在ることは人の皆知る所也。スベンセル。リッヘルト等は祖先崇拜を以て一切の宗教の根

源也と主張すれ共、多くの學者は之を否定す。ソグメノス。サラマネス。ヘルミアス。Zozmenes, Saluantes Herms. 人名。教會史家ソグメノスと同時代の人にして、同じくコンスタンチノポリスにてニコラスチカスとなり、又同じく三二三年より四三九年までの教會の歴史を著す。一六五九年ワレンスは之をユワセビウス及びソグメノスの教會史と共に出版せり。彼はソグメノスの著書を知りて之を用ひしものと見ゆ。彼自身に加へし聖者退隱僧の事はさほど重大ならず。されど文體はソグメノスより善し。

を許さず。然るにソーチノスは之に従はず、却て自己の感化を以て規則の此の點を改めしめんとし、筆にて大書にても活動せしかば、一六〇三年の會議にて終に其の意見を容れられたり。彼は八三年波蘭の貴族の女と結婚す。非難と迫害は固より彼に至れり。九八年の事なりき、彼れ病に臥せしに天主教の僧侶に教唆せられしラスコト學生は彼を床より引き出し、半裸體のまま市中を曳き廻し、之を鞭打ち辱めしが、大學教授マーチン、グアドグイタより救はれたり。然れ共書籍も原稿も此時皆な焼かれぬ。波蘭にて死す。

祖先崇拜

雜語

祖先の靈を崇拜する者にして、魂魂崇拜と同じ多數の魂魂の存在を認むるものなれ共、其崇拜の對象となるものは人間の靈魂に限り、人間の中にも祖先のみに限るものなれば、一般の魂魂崇拜とは其趣を異にする。歐羅巴に於て祖先崇拜の最好例也とせらるるは古代の羅馬にして、Marsなる拉丁語は近代語に於て祖先神の名となれり。支那宗教の基礎が尙祖先崇拜に在ることは人の皆知る所也。スベンセル。リッヘルト等は祖先崇拜を以て一切の宗教の根

を許さず。然るにソーチノスは之に従はず、却て自己の感化を以て規則の此の點を改めしめんとし、筆にて大書にても活動せしかば、一六〇三年の會議にて終に其の意見を容れられたり。彼は八三年波蘭の貴族の女と結婚す。非難と迫害は固より彼に至れり。九八年の事なりき、彼れ病に臥せしに天主教の僧侶に教唆せられしラスコト學生は彼を床より引き出し、半裸體のまま市中を曳き廻し、之を鞭打ち辱めしが、大學教授マーチン、グアドグイタより救はれたり。然れ共書籍も原稿も此時皆な焼かれぬ。波蘭にて死す。

リ

ソーチ

ソーチ

ソーチ

イと説議し、法の執行に二年の猶豫を與へしかば、同教徒は多く移住し去れり。一六六一年の布告も前令を過ためたり。編述にてはアルトドルフの醫學生理學教授エルンスト、ゾーネル先づソーチノス説を教へて成功し、一六二二年死し、之より派生増加せしが、マレンベルグ會議は同説の公衆を禁ぜり。一六二一年六三年にクロイツアルヒにて大會あり。されど編述にては其の運動は常に力なかりき。和蘭にては稍成功し、迫害の中に其數を増せり。フエリンゲル。サント。ツワイツケル等は波蘭より來りて此國に住めり。後此徒はレモンストランフと合し了れり。英米の同教徒の事はユニテリアンとして其の條に在り。

其の教義。ソーチノス派の説は後代のユニテリアン派の説とは大に相違せる所あり。第十七世紀中頃までのソーチノス派の文書にては、基督教を特別の天啓とし、聖書を宗教的知識の唯一の源泉とし、新舊約共に神のインスピレーションを受け、記者等は神の靈の刺激のまゝに書けりとい説けり。されど理性と天啓との關係に就てはプロテスタント正統派とは稍見を異にし、理性は靈の目なり。疑問題の判斷者は法王にもあらず、信仰ある基督教徒にもあらず、理性なり、天啓の眞理は理性以上なれども、之と矛盾せず、奇蹟は理性以上のものにて信すべく、三位一體と基督教義は理性と矛盾せず、信すべからずとせり。ソーチノス派は其著にて眞哲學と宗教とは一致すと説けり。

を一々其の過りに知り居たりしならんには、罪は罪に非ずと言へり。神能説に就ては神の一なるを教へ、三位一體説に反對し、宛がら此を以てソーチノス説の眼目となすが如し觀あり。ソーチノスは舊約の複數語エロヒムは複數の意味し、聖なるかなを三たび繰り返せるは語勢を強めたるもの、アブラハムに三人の現はれたりといれど、主と呼ばれしは一人なりと説き、新約にて洗禮の式に子と聖靈とが父と同位に置かれるは、洗禮を受けて入れらるる名は必ずしも神に限らず、哥前十二にあるが如し。使徒の説詞にては子と聖靈とは父より區別せられざるを見る。約翰一書の三聖者の句は使徒の筆に非ずと言へり。

リと云ふは、福音の初めしは基督教の天下の初といふ意。約三の十三、三十一、六の二十六、十六の廿八などの句は、基督が保羅の如く或時の間天を取られしを言ふなり。基督は神に祈れり、父より送られたり、審判の日を知らざりき、是れ基督の神ならぬを證するものなり。されど基督は唯だ人には非ず、處女より生れ、全然聖なる絕對の力を有たされたり。基督は預言者、祭司、王なり。預言者として彼は紀念の宴たり、基督信徒の既に有せるものも宣言たる晩餐禮を起し、一の力たり活動たる聖靈を約束せり。祭司として彼は仲保者なり。されど其苦と死とが人を救ふと言ふは非なり。聖者は聖と教の根本なり。基督は法に従へり。されど自己のために従へるなり。基督と謂ふは他人の受け得るものに非ず。新約の讀てふ語は満足の意味なく解放の意なり。神人和解てふことは、基督が我等神の敵たりし者に悔ひ改めて神に歸る途を示せしといふ意味なり。基督は祭司の長として、其の神より受けし絕對の力に由て罪の罰より吾人を濟ふ。彼は罪の犠牲より吾人を放つてを爲すには、其の誘惑にも堪へて純潔なりし人格を我等の思想に示すに依て爲すなり。預定といふは、神が基督を信する凡ての者に永生を與へんといふ宣言に外ならず。信仰は基督教の教を奉じ、基督に依て神に信頼し、神の命令に従ふことなり。之に依て義とせらる。即ち義人として取扱はる。義とせらるるといふは基督の義の歸せらるることには非ざるなり。ソーチノス派の説は、聖書的非聖書的の合したるものにて、近世唯理説の先驅なりとす。

ソーチ。ドミニクス。Soto, Dominicus. 人名。一四九四—一五六〇。西班牙

ソの部

ソトロー・ソドム

の神學者。フランス及び巴里にて修學し、一五二〇年よりアルカラにて哲學を教へ、實有説を復興し、アリストテレス教書の註解書を著し、二四年ドミニコ派に入り、もとフランシスコスと云ひし教名をドミニクスと改め、三二年サラマンカの神學教授に任ぜられ、四五年カルロス五世よりソトロー會議に遣はされ、固く實有主義を主張し、『神恩の性質』、『神恩』を著せしが、四七年會議がローマに移されて彼は王廷に歸り玉の告白師とせらる。五〇年辭してサラマンカに退き、大學を教へ兼て僧院の院長として生を終ふ。晩年プロヴァンスタントの見反對せる羅馬書註解を著し、又馬太傳註解等を著す。

ソトロー

ペトルス・デ・セコ Petrus de Soto

人名 一五六三年死 宗教改革の激烈なる反對者。西班牙コルドバに生れ、一五一九年ドミニコ派に入り、カルロス五世の告白師として獨逸に往ひ、アイリッシュの神學教授に任ぜらる。後フィリッポと共に英國に行き牛津にて神學を教へしが、一五五八年メーデー死してアイリッシュに歸り、六一年ピウス四世より再度のソトロー會議に招かれ同地に在りて死す。拉丁語にて『基督教制度告白の法式』、『加特力教義一覽』、『教會制度小論』等を著す。

ソドム

Sodom. 地名 ソドムはアブラハム及びロトの時代に於て平原に存在せし市(ソドム、ゴモラ、アドマ、セモイム及びゾリアン)の市邑の一にして、一時榮光し其の民甚だしく罪惡に耽溺せしがため、天より大降りて之がたみ焼く亡せられたり(創十九の廿四)。此市はゴモラより遠らざる死海の北方アラバに在り。ソドム人の罪惡は諺となりし程極めて憎むべき者にして(創十三の十三、十八の二十、哀四の六、哀三の九)『ソドム人』なる語は教會主義者なりしが、内亂中斥けられし王朝回復の時復讐せらる。されどウエストミンスター院に列比亞字書を發行し、共和政府時代にはソドム人の萬國語書出版を助け、又オリゲネス文書出版をも計劃したる事あり。動搖時代には監督制復舊の企にも與かりぬ。六一年のサグアイ會議を助け、又同年新編書の改正にも與かる。六二年蘇格蘭に歸り住みしが健康優れず、六六年疾病を避けて蘇格蘭を去り、七二年チヌワイクにて死す。其文書に由れば彼は博學神學の人にして、第十八世紀英國羅馬教會神學者及び高教會派神學者の最も有力なる一人たり。英國教會悲劇の短詩は著書の中最も善く彼の思想を表はせり。

ソトマン

Robert H. D.D. 人名 一八〇六—一七

五 加那太の長老教會牧師。蘇格蘭のウエストカレダーに生る。兩親は高潔の人格にして、父は教會の長老たり、母は敬虔の婦人なりき。十四歳の時兄弟トリアの助手としてフォルカークの一學校を教へ、此にて克己して古典學を修めエディンバラ大學に入り、級の首席を占め、教授ウィルソンを始め他の諸教授の温かい稱讃を得たり。トマス、チャルモリスの名を慕ひ聖アンドリュウ市の會議に參預し、一八二九年グラスゴウの分會教會の神學館に入り、四年間アイツク及びミッチェルの講義を聴き、三三年按手禮を受けて加那太宣教師となり、同年七月より人煙稀なるオンタリオ湖北岸の地方にて宣教し、其の中心たるホイトビーの教會の牧師に擧げらる。傳道の活動湖岸に沿ふて五十哩に亘り勳勞玉れるものあり、到る所に團體を造り何れも後に至りて繁榮せる

ソの部

ソレン

ソロモ

ソロモ

供のパン

聖なる神聖に伴ふ人間自然の法則を適用する罪惡を記すために用ひられたり(申廿三の十七、王上十四の廿四、王下廿三の七を比較せよ)。ソドム及びゴモラの運命は耶蘇によりて福音の提供を拒絶する者に對する警戒として引證せられ(太十の十五)又黙示録(十一の八)に於ては此の語に靈的若くは記號的意味を附せり。

供のパン

Shewbread. 物名 供のパンは『聖きパン』と稱せらる。聖きパンなる名稱は『同断なきパン』なる名稱を附し、モーセ五經中祭司典に使用せらる。祭司典は『重負のパン』と稱せらる。祭司典の二重に卓上に置かれたるが爲なり。聖所の机上に供えられ、毎安息日に取り代へ、古きパンは祭司等のみ聖所に於て食することを許され、他の人の食ふ可からざる者なりき。

ソフィア

Sophia. 人名 ソフィアは希臘語にて智慧を意味す。基督教古女聖徒に此名の者多し。されど其の物語は何れも信じ難し、一人のソフィアは直達なりしが、一〇〇〇年頃アドリアヌスの朝に其の三女ソフィア(信仰スベス(聖)カリス(愛))と共に羅馬にて殉教せしと云ひ、一人のソフィア、セナトリウスはビザンチウム朝議官に嫁せしが、夫と六子の死後ソフィアのエウスの僧院に退き、尼となり慈悲の行に身を献げたりと傳ふ。

ソフィエ

Thornwell James Henley, D.D., LL.D.

人名 一八一二—六二 英國の神學者、教育家。母は敬虔の女、彼の性格は母に負ふ所大なりしを見る。少にして貧なりし善き教師の下に善き教育を受け、非凡の才を現はして二人の紳士に知られ、

ソロモン

Solomon. 人名 以色列王國

第三代の王、ダビデの子。彼の生涯及び治世に關する記事は列王紀略上下及び歴代志略上下に載せられ、列王紀略の物語(上—十一の四三)は撒母耳書(下—十)と密接の關係を有す。其記事は歴史的價值を有す。列王紀略の編纂はソロモンの死後四百年頃になり、歴代志略の編纂は少なくとも更に三世紀の後なる可しといふ。母後十二の廿四、廿五に依れば、ソロモンはダビデ及びベテシバの間に生れたる第二子なるが如くなれ共、母後五の十四、代上三の五、十四の四に依れば、彼は第四子且末子にして、シメア、ショバブ、及びナタンは彼に先ちて生れたりしが如し。此矛盾は充分に解説し難けれ共、思ふにソロモンはダビデの家族の中最も重要な者にして、且王位を嗣ぎたる者なれば、其名を最後に記したる者なるべし。預言者ナタンはダビデの罪過を責めたりしと雖も、依然彼をマテシバの上に勢力を有して、彼等の友たることを得たり。一般にナタンはソロモンの教育を監督したりしと思はせらるれ共確証あるに非ず。ソロモンが王位に即く迄の歴史に就ては別に記録の徴すべきものなく、唯其為人より推測するに、青年時代に於て其教育の恩恵に附せられざりしこと、及び彼が學問研究に熱

ソルン

其の助によりて高等の教育を受けるを得たり。十七歳の時南カロライナ學院に在りて辯論學の才を古典學の熱心と形而上學研究の専念とに秀で、且心意を集中し之を寢食さへ忘れて何時までも通用し行く力ありしは、既に彼の前途の頗る多望なるを顯はしめ。恩人等は彼の長所を見て法律家をせんせしめ、彼は自ら傳道者たらんと決心し、其より三年を経て後教會員となり教師として二年を過し、其よりアンドルー・ウェル・神學校に行きしも満足せず、ハーバード大學の神學校に入りて希伯來語及び聖書文學の研究を始めしが、風土身に適應せずして南カロライナに歸りぬ。一八三四年ハーモニー長老會にて准允を受けランカスターの教會の牧師となる。三七年コロムベア大學教授に選ばれ、一たび出でて牧師となりしも、四一年また招かれ其より十五年間教授又は總理として任に在り。五年の末神學校に轉じ、四八年教育學及び論争學教授となり、同時に『南方四季評論』の編輯者となる。二回歐洲に遊び十回長老教會を代表して總會に出で議長ともなりし事あり。六一年の南方總會組織の議に就ては主動者たりき。六二年の八月南軍に從ひ其子の戦傷せるに會はんとて、南カロライナ州シャーロットに行き、同地に於て五十五歳といふ最も壯なる齡を以て死せり。文書全集存す。

ソルンダイク

Thorncliffe, Herbert 人名 一六七二—死 英國の東邦

語學者。生年及び生地は明ならず。一六二三年蘇格蘭大學に入る。三六年ソルンダイクの『カノニア』とせられ、三九年レーセスター縣クレーブレットの司牧、四二年ハートフォード縣バートリーの司長、四三年ソドニー、カロリーの校長とせらる。英國聖羅馬的の國心を有して十分に之を受容せしこと等の點に關しては疑なきが如しと雖も、預言者が彼の上に感化を及ぼしたる形跡は更に之を認むること能はず。彼の治世中には預言者の活動は増んご全くなかりしが如し。彼は思ふに父の宮殿に於て教育せられたりなるべし。蓋しダビデの宮殿は其の相續者のために最真なる學校たりしと同時に、他方に於てはソロモンが其晩年に於て願はしたりし缺陷を發達するに與て力ありしなるべし。即ちダビデの宮殿に充溢せし壓制的勢力に加えて、多妻主義の惡弊は彼の健全なる道徳的發達の上に妨害を與へたりしこと疑なし。彼の母ベテシバが彼に及ぼしたる感化如何は詳にすること能はずと雖も、彼は單に美はしき婦人(母後十一の二)たるに止まらずして、又才智を有し深くナタンと結び、ソロモンも亦彼女を深く尊敬したりしを見れば、彼女がソロモンの品性樹立のために貢獻せし處少からざりしを推知すべし。ダビデの死後彼は其の位を繼げり。彼が統治の時日に就ては確定し難し。列王、歴代の兩書に依れば四十年間其位に在りしが如くなれ共、此は概數にして、更に精密に云へば彼の治世は凡そ前九百七十年に始まり、九百三十年其死と共に之を終れり。猶太人及び亞利比亞人等の傳説に従へば、ソロモンの即位は十二歳の幼なりしと云へり。是れ王上三の七に『我は小さい子にして出入することを知らず』とあるより起れるものなれ共、此の語は彼が王者の大事業に對する念慮より、自己の青年たること、又經驗に乏しきことを思ふ謙遜より發したる告白にして、之を如學的に解説するは誤れり。彼の王位に即きしは二十歳頃の時なりと一般に想像せらる。思ふに此想像は大なる錯誤なるべし。ソセファスはソロモンは十四歳の頃即位し、位に在る

ソロモンの部

ソロモ

ソロモ

ソロモ。俗世主義

こゝ八十年にして、九十四歳の齡を以て眠れり云
 びたれ共、此の設の起原に就きては記す所なし。
 ソロモン既に王位に即き其敵を亡ぼし、其智慧と勇
 氣とを示し、其地位の安全なるを感ずるに至りし
 や、エホバに感謝の祭を献げ、且其他の事に於ける
 如く、禮拜の事に於ても其の壯大華麗なる趣味を示
 さんとして、特士、判官、知事、及び家長をヤエ
 市の招き、自ら百官有司に圍繞せられて坐し、多
 くの饗宴を神に捧げたり。翌夜エホバ夢に彼に顯は
 れて其の求むる所を尋ね給ひしに、彼は彼を求めず
 て正しく民を審判すべき智慧を與へられんことを願
 ひたりしかば、神は其願を嘉し、會に智慧と知識との
 みならず、又富と貴さをも與へんとの約束をなし給
 へりとのことを夢み、之を以て神の告也と信じたり
 き。列王記略に於ける彼の傳記者の云ふ所に従へ
 ば、彼は間もなく神に向つて求め且與へられたる此
 驚くべき智慧を示すべき好機會に際會したり。彼れ
 ヤエオンよりエルサレムに歸會するや、二人の婦
 あり、一人の生兒と一人の死兒とを有し、生兒は我
 兒にして死兒は彼の兒なりと互に喧執して譲らざり
 しが、彼は一刀兩斷直に其の善惡を辯別することを得
 て、神の智慧の彼に伴へる證據を顯はしければ、イ
 スラエル皆王の審理し所の判決を聞いて王を畏れた
 り。其は神の智慧の彼の中において審理を爲さしむ
 るを見ればなり。王上三の十六―廿八。以上の物
 語の外彼に就きて驚くべき同種物語ありと雖も
 全く小説的假作に過ぎず。彼は富と智慧とに於て同
 時代の諸王中最も卓越せるものなり。父デビデは
 神殿を造るために『金十萬タラント銀百萬タラント
 (代上廿二の十四)』を、是れソロモンに對する遺贈

にして、彼の歳入は六百六十六タラント(王上十の
 十六、今日の四百萬弗に相當す)に上れりといふ。
 而して貨幣にて納むる外、内外より物品を献納せし
 額夥大なりしが故に、彼は人生の榮華を恣にするこ
 とを得たり。東洋の傳説中最も名高き彼の大なる象
 牙玉座は純金にて着金せられ、又護身用の櫃并に其
 の宮殿の什器は一切黄金より成り、銀の如きは石の
 如く多かりしといふ。亦以て其富の如何に大なりし
 かを推知すべし。
 聖書の記す所に據れば、彼の敬虔は父のデビデに及
 ばざりしと云へり。彼の信仰がデビデの如く熱烈に
 非ざりしは疑なれ共、彼は又デビデの如き缺點を
 有せず。或點に於てはデビデに優るものあり。即ち
 其信仰の一層合理的、倫理的にして、エホバに對する
 觀念の一層高尚なりしが如き也。彼が治世の一般
 の傾向は精神的啓蒙に一步を進め、彼は即位の初
 り其治世を通じて神に敬むべきことを意らざりき。
 彼がエルサレムに初めて神殿を築きしは、彼の治世
 に於て最も著しき出来事也。

十年の間に成りたるものにして、も番伯來語を以
 て書かれたるもの也。
ソロモンの智慧 The Wisdom of Solomon.
書名 舊約經外聖書中の一書。智慧を擬人化
 して之を讚美せる者にして、智慧は太初に神と共に
 在り、世界の造られし時彼に依りて在りきと云ひ、
 箴言(八、九章)及び約百記廿八の十二(以下)に記
 されたる智慧に關する觀念と同種の思想を表白せり。
 此書の作者はフィロソフ同型の猶太哲學者にして、
 猶太の宗教と希臘哲學の思想とを融合せり。書中
 ソロモンの作也とされ共(八の十、九の七)ソロモン
 の作に非ざるはいふまでもなし。キリヤル其他の人
 々は之を以てフィロソフの作なりとなしたれ共、思
 ふに『シラクの子イエスの智慧』の書かれたる時、フ
 イロソフの時代(前一二五〇―一五〇)の間に成りたる
 者なるべし。此書はもと希臘語にて書かれたり。初
 めて之を明白に引用せるはイレニウス也。
俗世主義 Secularism. **術語** 俗世主義
 なる語は、特殊なる一派の政勢的運動と、思想の一
 般的傾向の極めて相異れる二箇の事實に適用せら
 る。特殊なる一派の政勢的運動としての俗世主義は、
 第十九世紀の後半に起れる者にして、其重なる代表
 者をウー、ウー、キョー、キョー(G. J. Holyoake)と
 す。此一派の目的は人間の生活及び行為に關する善
 人の思想を、宗教及び神學的傳説的傳説より脱せし
 むること、傳説的の宗教的倫理の置き去りにし
 りし、一層の重なる生活の物質的狀態に置き去ることの
 二に在り。アッラフの如き人々は此第一の目的
 を率直なる無神論の告白と關係せしめたり。其他
 の人々は未だ斯る告白を爲すに至らず、又斯る告白
 を爲すは不適當也と思惟したれ共、尙道徳上の規則

タの部

待降節。タイネ

太陽及び太陽崇拜

タイネ

を根據なき神學説の上に置くの不當なることを論ず
 るを以て最も必要なる事と爲せり。此運動の歴史と
 之に對する批評とはフリーントの『非有神論的諸説』(一
 八七九)の中に記さる。思想の一般的傾向としての現
 俗主義と稱するは、近代科學進步の結果として現
 俗的領域著しく擴大し、之がため傳説的神學説の領
 分著しく縮少せられたる事實を指す。地質學及び生
 物學の發達は天地創造に關する聖書の記事の如字の
 説明を全然顛覆し、人類を以て六千年以前初めて世
 に出でたりとなす傳説を倒したり。又歴史的批評の
 結果は傳説的神學の根柢となり居たる、猶太教及び
 基督教の歴史に特殊の超自然的要素ありとの信念を
 覆し、聖書各卷の起源、成立、及び聖書に記された
 る各種の事實に新光明を與へ、從來基督教に關して
 有したりし教會の信仰を一變したり。此傾向を俗世
 主義と稱し教會は之を防止せんことを試みたり共、是れ
 現時の最も進歩したる知識的傾向にして、必ずしも
 悲むべき現象に非ず。

タの部

待降節 *アドヴェント* の條を見よ。
タイネル *アウガスチン* Theiner, Au-
 gustin **人名** 一八〇四―一七四 羅馬教會の
 神學者、教會史家。獨逸アレクサンドリアに生れ、同市の大
 學にて初め神學を修め、次で教會法を修め、其の兄
 弟と共に『基督教會傳』に由て強められたる獨身生
 活論二冊を著はせしが、禁讀書の中に入れらる。

其後羅馬を去りしてナポリに歸り入り、一八五五
 年ヒリス九世より法王廟保存所に任ぜられしが、ダ
 マスカン會議中イエズイト徒は彼が反對派の諸監督
 のために廟より古文書を取出したりと云ふに訴へ、終
 に罷免せらる。著作には頗る勉強し、マロニウスの
 『年代表』の新版を發行し、其の續編を作り、又『タ
 レメンス十四世傳』(エテラ、モメンタ、ボロニ
 エー、エト、シラフエニ)三冊、『アグダ、ゲニエ
 ナ、コンキヤリ、トリテンチニ』二冊等を著はす。
太陽及び太陽崇拜 Sun and Sun-wor-
 ship. **術語** 古代の番伯來人は其他の國民と
 同じく、太陽を東より出で西に入る者の如く思考せ
 り。又此考を推し廣めて之を詩的に言ひ顯はし、日
 月其『住處』に立ち止まりしと云ひ(詩三の十一)又神は
 『輿輪』を其のために設け、日は新耶がいはひの殿を
 出づる如く其處より出づと云へり(詩十九の四、五)。
 彼等に依れば、太陽は他の造られたる物と同じく、
 神の聖意に依りて動くものなるが故に、神日に命じ
 給へば日出でず(伯九の七)又其道を轉すべし。ヨシ
 ヌアがエホバの前にて日よ止まれ月よやすらへと云
 へば、其の如くなり(書十の十二―十四)イザヤがエ
 ホバに呼びければ、アハズの日昇の上に進みし日
 影十度退けり云ふは即ち是也(王下廿の八―十一、
 賽卅八の七)。以上の二箇處及び太十五の卅三(路廿
 三の四十四、四十五)に記されたる現象に就ては種
 々の説明ありと雖も、要するに神の力と神が人類の
 幸福に深き興味を有し給へることとを詩的に表白せ
 るに外ならず。
 太陽崇拜は善く古代の異教國民間に行はれたりし
 が、番伯來人も亦其周圍に在る異教國民の感化を蒙
 りて之を崇拜したりき。其崇拜の方法は手を目に接

くる事なりしと約百記一の廿六、廿七に記さる。
 太陽及び天體の崇拜を禁するの律法は申四の十九に
 記さる。申十七の二五に依れば、之を犯すもの
 刑罰は市の門外に於て石にて打ち殺さるゝ事なり
 き。然れ共王政時代に於て偶像禮拜の公に行はれた
 りしを見れば、此律法は一般に履行せられざりしが
 如し。太陽崇拜は以色列人が聖地に入りし時既に存
 在したりし者にて、當時太陽はバアルハムモンの名
 に依りて崇拜せられたりき。バアルが太陽と思维せ
 られたりしや否は明ならざれ共、太陽がバアル(即
 ち『主』と仰がれたりし)は明白にして、此は宛も巴
 比倫の日神ベルが『主』と稱へられたりしが如し。
 蓋し聖地に於ける太陽崇拜も亦巴比倫より來りし者
 なるべし。エルサレムに於て太陽の崇拜せられたり
 しことは、エゼキエル之を記せり。即ち彼は廿五人
 ばかりの人(祭司)其後をエホバの宮にむけ、面を
 東に向け、東に向ひて日の前に身を屈め居れり云
 ひ(結八の十)又彼等は此儀式を行ふ間枝を其鼻に
 つけり云へり(結八の十七)。思ふに此習慣は彼斯
 又は巴比倫より起りたるものなるべし。
タイネル Penney, Peter, Bennett. **人名** 一七三三―一八五八 米國會
 衆派神學者。コンネチカト州ミッドルボロに生
 れ、一八〇四年エール大學を卒業し、一年間ワレス
 トンにて教師をなし、ゴッシュンにてアサヘル、ファ
 ーに就て神學を研究し、一八〇六年説教者の准允を
 受け、翌年よりサウスアムステルにて説教し、〇八年
 按手禮を受け、二年ダートマウス、カレッジ長とな
 り、ミドルボロ、カレッジより神學博士號を與へら
 れ、二八年博士ハーソンに繼いでメーン州ポートラン
 ドの第二會衆教會牧師となり、三三年新設コネネク

タの部

タツパン。警諭

警諭

警諭

の一人也となし、歸てエテサのアアガル王に傳道したりとの物語出でたれ共、他の説に依ればタツパンはユダの支派に屬しエルサレムより出で、亞非利加語にて福音を説きたりと云へり。然れ共吾人は彼に關し何事も正確なることを知らず。

タツパン (タツパン) Tappan, Henry Philip, D.D., J.L.D. 人名

一八〇五年一 米國の神學者、倫理及び哲學の著者。紐育州ライオンベックに生れ、一八二五年ユニオン學院を卒業し、アインズトンにて神學を修め、初め紐育州シエネカデーのダツチ、レフォルムド教會の牧師たり。二八年より三二年迄マサチューセツツ州ヒツプフィールド會衆教會の牧師たり。其より三八年迄紐育市大學の倫理學教授たり。數年私立學校を設け居りし後、五二年ミシガン大學々長に選ばれ、六三年之を辭し餘生を歐洲に送り、瑞西ウエグエにて死す。有力なる哲學及び教育學上の著作者たり。五九年佛蘭西の同會の通信會員たり。『エドワールの意志論』、『良心への訴へ』等由て決定せられたる意志の論議道徳力及び責任に適用せられたる意志の論議『倫理學』等は重要な著書なり。

警諭 又は 諭話 Parable 雜語

何れの原始的の人民にも多く用ひられしが、殊にセミチツク人又は知力よりも想像と感情と強かりしため、最も多く之を用ひたり。希伯來語の『マシヤル』(字根)は比較するといふ意の語根より出で、凡て抽象的思想に假像の衣をさせたる言語の形を指して言へり。例之諺の一格言にして、其の中に兩面を有し、一面には假像を殆ど謎の形にて表はし、他面には之に相當せる道徳眞理を直接に言ひ表はせるものなどの如し。耶穌の教には警諭著しく多し。若し言

者首者の手引をせば相共に誘に陪らざらんやと云ひ、汝等は世の光なりと云ひ、地の鹽なりと云ひ、燈を點じて燭の下に置くものなし、燭臺の上に置かん」と云へるが如し。而して假像は單に一句に限られず、話の全體を警諭とせることあり。例之以賽亞書五章に在る葡萄園を造りし者の諭話の如く、又以西結書十七章に在る大鷲と高き香椿樹の樹の諭話の如く、撒母耳後書十二章のナタンがダビデに語れる諭話の如く、又士師記九章のヨラムの語れる諭話の如し。耶穌の語りし警諭は此の最後の諭話の種類に屬す。聖書に『警諭』とある希臘語は希伯來語の『マシヤル』を譯したるものにて、作話(例之エソップの)よりは高等なる種類の警諭を意味せり。作話は自然の眞理と實際上の訓誨とを心に深く銘せしむるため、若くは或る過失を嘲笑に附し去るために、假像を用ふ。此故に其の假像を廣き範圍まで推展し、有らねども此の如く有る如く語るもの也。例之動物や植物が物を解し、又は物語をなすが如し。故に此は一の戯なり。されど聖書の警諭は之よりも高尚なる目的を有し、其の教訓は神の國と聖の教とに關す。故に之が用ひて眞理を示さんとする假像は、嚴密に實在と合はざるべからず。各の物語は其の性に從ひて活動せざるべからず。各の活動は確に有り得べき活動ならざるべからず。代表する所の目的神聖なるが故に、假像を餘り自由に推展すること能はざる也。耶穌は常に其の思想を明白に言ひ顯はすために假像を用ひたり。舊き衣と新しき布片との結合はすべからざることを諭しては、舊き組織に入るより組織を異にせる他のものより幾分の新分子を以てしたることを維持し得るものに非ざるを説き(可二の)二種の衣を縫つる者の假像に依ては、屬て眞

理を知るのみにて満足する者と、之を日常の生活に實行するもの別を示したり(太七の廿四-廿七)。耶穌は其活動の最も盛なる時に於て、又大に警諭を用ひ、弟子等を案外に感ぜしめ、解釋を求めしめたり(太十三、可四、路八)。されど其の解釋は理會し難し。或人は太十三の十一-十七の此の解釋を解して、是れ耶穌が眞理を一層解し易からしめ、聽者の心に深く印象せしめんとすなりとす。一見甚だ自然なる説なれど、耶穌は『汝等には天國の眞理を知ることを與へらるれど、汝等には與へられず』と云へりあり。其時語りし神の語は弟子等々へ解せずして説明を求めし難なれば、聽衆は解せざりしならん。されば耶穌は人の解し得ざらんがために警諭を用ひしが、然らば考ふる人もあり。以爲らく悔改の心なくして耶穌の教を聽きし者は、神の審判を受け真理を聞きても解せぬに至るべし、警諭は悔ひ改めし者には一層明白に解し易からしめんと語りて語られたるものなれども、耶穌の教に動かしめし者の目には、眞理を隠すの用をなせり。此説は一層耶穌の言ふ所と一致せるが如し、尙然りと雖も言ひし。兎に角警諭を用ひずして語りしならば、之を用ひて半明半不明なるよりも一層不明ならざるべきは勿論なり。思ふに眞理は此等兩極端の中間に在るべし。耶穌は山上の訓誨を製せざる道徳的訓誨の後、天國の眞理、來るべき新世界の眞理を示すの要を認めしが、其事は神意と一般人民の希望せる所と正反對せる衝に當り居たり。人民は容易に其の道徳に服従せんとせし(太七の廿八、廿九)天國の基礎と發展とは耶穌の言ひし如く神の眞理なり。天の事と地の事とは別物なり(約三の十二)。故に耶穌は教主は全能の一舉を以て神國を立てず、神國は言と

タの部

警諭

警諭

除酵節。タボル山

聖書を以て餘々平和に立てらるべき事、新世界にても萬事は速に一變せず、進歩的精神に速次變化するが故に、聖人も亦忍容せられざる事、及び善惡を分つ審判は世の末まで來らざる事を明白に人民に告ぐることは能はざりしなり。當時の猶太人は、教主來りて羅馬の天下を顛覆し、以色列の覇權を立つべしと望み居たりしが故に、斯く明言するは、宛も耶穌は教主に非ず、其の事業は預言の完成に非ずと屋上より廣告するに等しかりしなり。而も新世界の事を示すの必要は迫れり。故に或者は示さざるべからざりしが、又或者は隠さざるを得ざりし也。斯くの如き二重の目的を達せしむるは唯警諭を以て語るの途ありしのみ。諭話の解し易きが如くして、又解し難かりしは蓋し之がためなりし也。耶穌の語れる警諭の數は三十以上あり。路十二の三十五-四十四と四十二-四十六と四十四の三十四、三十五等に在る如きは、警諭とも隱諭とも言ふべし。警諭の分類は種々の原則に由て種々にならざるを得べし。カヘナウム附近澤在中のもの(二)ガリヤヤリ(一)カヘナウム上京途中のもの(二)エルサレムに於ける最後の活動中のもの(三)第一は大體上天國に關し、第二は其の中の個人に關し、第三は現天地の終局と審判の事に關すせり。されどゴータデーは、三十箇の中六箇は天國の準備、六箇は其が教會の形を取りて實現せらるべき者、十八箇は會員の個人的生活に關するものなせり。此の第一類にては(一)葡萄搾りの諭(太廿一の三十三-三十四)は神に對する以色列人の犯罪を表はし(二)王子の婚禮の諭(太廿二の十一-十四)は、天國に入るべき耶穌と使徒の招に對する猶太人の行と異邦

人の招きと審判とを表し(三)大寶宴の諭(路十四の十六-廿四)は、前の譬と根本は同じ事を言ひ(四)眞直の門の諭(路十三の廿四-三十三)は、異邦人は謙遜の門より入れど、猶太人の多數は之を好まざるより天國より閉ぢ出さるべきを示し(五)果を結ばざる無花果樹の諭(路十三の六-九)は、以色列人の上に下らんとせる若くは教主の仲保に由てのみ最後の打撃より免れ得べきを示し(六)二人の子の諭(太廿一の廿八-三十二)は、神に従ふと稱して實は之に背けるパリサイ人は、表面神に反しつゝ内心之に従へる稅吏よりも惡しきを示せり。第二類にては(一)播種者の諭は此の種の諭の中に於ては勿論凡ての諭の中最も形の整へるものにして、神の國は神の言を聽くに由て起り、猶太人の望みし如く一時に神の國に由て成るものに非ざるを説き(二)神の諭は教會の中には善惡の分子並び存して發達するを示し(三)芥種の諭(四)麩の諭は同じ思想の兩面を説きしものにて、天國の勝利を意味し、一人の耶穌より全人類に及ぶ外部的の擴張と、人の靈性を化する内部的の活動あるを示し(五)投網の諭は天國の終には善惡の分子分たるべきを教ふ。以上は皆太十三にあり。(六)宴の諭(路十八の十一-十九)は基督の世を去りてより最後の救まで、教會の危険なる事と、之に處する唯一の力は新りに由て立つことなるを教へたり。第三類にては(一)迷へる羊(二)失へる銀貨(三)放蕩息子(以上路十五)は共に神の慈と人の信仰に由て天國に入るべきことを示し(四)パリサイと稅吏(路十八の九-十四)(五)夜半の友(路十一の五-十)は力ある新婦には聖潔と信仰とが必要の條件なることを示し(六)隠れたる室の諭(七)善き眞珠の諭(太

十三の四十四-四十六)及び(八)燈を隠す諭(九)賑を宣する諭(路十四の廿八-三十三)は何れも天國を取るために凡てを犠牲とすべきを示す。以上の九は天國に入らんとする心掛を教へ、以下の九は天國に入れる者どもの心掛を教ふ。即ち(十)首座の諭(路十四の七-十一)(十一)葡萄園の工人の諭(太廿一の十一-十六)とは共に謙遜を教へ、前者は同胞に對する謙遜、後者は神に對する謙遜を教ふ。(十二)王と僕との會計の諭(太十八の廿三-三十五)と(十三)善きサマリア人の諭(路十の廿九-三十五)とは共に慈愛を教へ、前者は靈的の、後者は實際的の其を教ふ。(十四)不義なる家宰の諭(路十六の十九)と(十五)富者ラザロの諭(路十六の十九-三十一)とは共に此世にて物を善用すべきを教へ(十六)富める人の諭(路十七の十六-廿一)また同じ。(十七)委託金の諭(太廿五の十四-卅)と(十八)人の童女の諭(太廿五の十一-十三)とは共に信者は謙遜と愛と惡とを兼ねるべきを教へ、併せて常に目を醒まして基督の用をなさるべきを教ふ。基督の語られたる警諭は斯くの如し。宗教的道徳的直覺は幾多に之に含まれたり。天國の進歩の階段は、舊世界に在て準備を始むるより、永生の入口たる其の終末に至るまで悉く示されあり。基督の教訓は時として一般人民の聽くに達せる演説あり、時として一種の哲學たり。されど基督の警諭は詩なり高なり。其の創作を吾人の眼前に展ぶるなり。耶穌には人間の凡ての才一致せり、人の教育と教のため皆な活動して用をなせしなり。除酵節 Unleavened Feast. 除酵節の條を見よ。タボル山 Tabor Mount. 地名

タの部

タルグム

タルシ

タルン

の感化如何は、オンケロスのそれよりも一層明白に顯はれたり。此點に於て、此タルグムはオンケロスと五經の断片的タルグムとの中間に在り。一四九四年初めてライプツに於て出版せられたり。

(III) 聖文學のタルグム (Targum on the Hagiographia) 約百記のタルグムは紀元第一世紀に存在せりと記載せらる。去れども其の時代の翻譯が吾人に傳はらざりしことは確也。吾人の有する聖文學のタルグムには、タルムド時代の終りより早く成りたるものなく、恐らくは何れも其れより以後に成りたるものなるべし。其初めて記されたるは第十一世紀のこと也。聖文學の翻譯は律法及び預言書と異なり、全く古き翻譯を模倣せしめて爲されたる個人の事業にして、アラマイク語翻譯を必要の時代過去より後編纂せられ、會堂若くは學校用に供せんがために翻譯せられたる者に非ず。便宜上之を三に區別す、即ち左の如し。(イ) 詩篇及び約百記のタルグムは一人の譯者の作にして、希伯來語を使用する方法相均しく、言語及び其他の事に於て二者共通の點多し。ロ一七五經のエルサレムタルグムと異り、原意に忠實にして其翻譯は極めて知字的也。其言語は後代に屬し、虚飾多し。第八、九世紀以後の作なること疑なし。諸言のタルグム特有の方言にはスリヤ語より來れるもの多し。此は思ふに聖文學のアラマイク語とヘブライク語を混交せる者なるべし。(ロ) 聖歌、詩、傳記、哀歌、及び傳道之書のタルグムは其甚しく意識的なることに於て顯著なり。此等の翻譯の或る部分には解釋の中に翻譯の埋却せし者あり、他の部分には古傳及び教訓の存在する者あり。又此の書には多くの比喩使用せられ、サンヘドリンのことも記載せられ、律法も引用せられ、原文に關係ある人々の家

系等に就ても細述せられたり。(ハ) 歴代志略のタルグムは數々の國の語にて記せる聖書 (Colophon Bible) の出版せらるる迄は其の存在知られざりき。一六八〇一八三年に稍不完全なるタルグムエルツァルトの寫本よりエム、エフ、ベツの翻譯及び註釋を附して出版せられ、一七一五年銀稿寫本より一層完備せる者、ア、ウ、リ、キ、ン、スによりて世に公せられたり。此二書の中には甚多の相違あり。此翻譯は多くの部分に於て直譯的なれ共、意識的の處全く之れなきに非ず。其の翻譯及び地理的名稱の近世的なるによりて此のタルグムの時代判知し得べし。エルツァルトの原稿によりて表はされたる原本の編纂は第八世紀にして、銀稿のそれは第九世紀也と一般に思惟せらる。

タルシ

Tarsish

地名

パレスチナ

の極西海岸に顯する國の名稱なり。聖書は之に就て次の事實を載ふ。創十の四、代上一の七に依れば、タルシ、はヤソンの子等の一人なり。而して其の後者の名稱の下には四方海岸の諸國民を包括する者の如し。創十にはエリシヤ、タルシ、キツテム、ドダニムの順序を以て記されたり共、此の配置より吾人は何等の結論に達せず。拿一の三にヨナはタルシへ逃れんとして起ちてヨソバに下りて舟に乘れりとあり。此は當時希伯來に知られし極端の地を代表する者なるべし。賽六十六の十九に於ては、タルシは最も遠隔せる亞細亞諸國を代表せり。結八の十三にはシバ、ダン及びタルシ、の商人をゴタ、マゴクと對照せりと雖も、之に依りてタルシ、の位置を卜す可らず。詩七十二の十にはタルシ、及び島の王等をシバ及びセバの王等と對照し、賽廿三の六に於てはイザヤはシロ人に向てタルシ、に通

れよとの勳をなせり。又タルシ、は遠隔の地に在るよりタルシ、の船なる語使用せらるるに至れり(結廿七の廿五、賽六十の九等)。思ふに此は長き航海をなすに堪ゆる強大なる船の義なるべし。然れ共此語は歴代志略には知字的に使用せられ(下九の廿一) 亞利比亞、亞弗利加の地方、若くは印度を指したるが如く見ゆ。タルシ、の産物に就ては、結廿七の十二に諸の貨物に富み、銀、鐵、錫及び鉛を産せりとあり。耶十の九にもタルシ、より銀を持ち來れりとのこと記さる。然れ共タルシ、は果して何れに在りや、是れ古來より議論の在りたる問題にして、古代の猶太人の中にはタルシ、は希伯來語の可解の義也と解説せし者あり共、此は取る可らず。又他の猶太人の傳説は、タルシ、を以てカルセウスの義とし、七十人譯は結廿七の十二及び賽廿三に於て斯く之を譯したれ共、此は其他の場合に於て適當せず。ヨセフアスは之をタルシと讀みキリヤのタルシと同一視したれ共、是れ單に想像に過ぎず。現今最も廣く承認せられたる解説はカカルトの説にして、彼はタルシ、は西班牙の南海岸に在るタルマタニアを指したる者にして、後西班牙全國の義とされる者也と云へり。チエーリはタルシ、は創十の二のナラスを指せる者也と云へり。マックス、ミラレルは後説を贊せり。

タルリ

Tarshish

地名

タルシ

徒保羅の生れたる處市民たりし處也として記載せらる(徒九の十一、廿一の廿九、廿二の三三)。而して彼は悔改後程なく此市若くは其附近に於て數年を送りたり(徒九の三十、三十一の廿五)。彼が此の地に於て生れしこと、幼時此處にて教育を受けしこと、及び彼が異邦の使徒たるべき準備として其の重要

タの部

タルン

タルン

タルナル



保羅の地キリヤのタル

平原に位せり。シドナス河は市の中央に流れて遂に市の下方、海に接近せる地に存するレガマ湖に注ぐ。此の湖水はタルソの爲に湛となりたり共、古昔の船舶は直ちに首府に洩り得られしなり。近代此の湖水は河の西側周圍三哩の大沼澤となり、河身は淺瀬となりて大船の過する便を失ひ、其の河口は砂洲を以て閉塞さる。タルソは一日にしてタルソミアンチアロスとを建設したりと傳へらるるタルダナパルスの創建せし所なりと云ひ、又ニネベの王セネケリアの創設したる所也と傳ふ。然れ共後タルソが希臘の一市となり、其文明の中心、大學の所在地となるに及び、此等の傳説を以て満足すること能はず。ヘルモリス又はヘラクルス之が建設者也との傳説生じたり。然れ共ヘルモリスはアッスリヤ神話の英雄にして、ヘラクルスはギリヤの神なれば、此は單にアッスリヤの傳説を希臘化する者に過ぎず。而して又此等の傳説は皆アッスリヤ帝國の盛なりし時に方り、タルソが其西方の首府なりし事を示す。後タルソは久しく東部の都邑として其特質を保存し、東西文明の會合地たりしに拘

はらず、全く希臘化するに至らざりしが、前一七〇年セルキアの時代に至り其歴史に一大變化を生じ、全然希臘市となるに至れり。後セルキア帝國の權力衰

タルナル

Tarnal

人名

Turner, Samuel Hulbert, D.D. 一七九〇一八六一米國監督教會の神學者。ヒラデルヒア市に生る。一八〇七年ペンシルバニア大學を卒業し、教職に就き、一二年メリーランド州チエスタータウンに住し、一八年福音一般神學校歴史神學教授となり、二一年より終生聖書學教授たり。監督ホワイチングハムとヤーンの『舊約聖書論』

タの部

タルムド

タルムド

タルムド

プラウダの『聖書言語學及び説明の理論』を翻譯し、希伯來書、羅馬書、以弗所書、加拉太書といふ順にて希臘原文を註解し、『創世記の探』最有名なる猶太ラビ等の一代記的小説及び其の註解其他の幾分の翻譯『聖書言語の起原性説明』主の教訓『聖書的事實の比較』一名編者書及び使徒行傳の對照的説明『アムモニアス分派の福音』ユウセビウスの表』等を著す。

タルムド

Talmud

書名

タルムド

タルムドは『教訓』若しくは『教義』の義にして、通常成文律に對し、傳説に依りて猶太人に傳はりたる不文律(口傳的律法)を集めたるものに適用せられたる語也。此傳説の起源は明らかならず。モーセの作りたるものにして、聖書に記載せられたる律法と同じく最古のもの也との説は信す可らず。然れ共聖書解釋學の歴史及び發達と密接の關係を有するを見れば、舊四時代猶太教會堂の制度の初めて立てられし頃其端を發せりと思惟するは誤謬に非ざるべし。會堂の重なる事業は神の言の解説にして、解説は希伯來語にてミドラシ(ミドリシ)といふ。ミドラシなる語は正經の或る部分(例之歴代志の如き)に適用するを得べしと雖も、古代のラビの文籍に依りて知らるるが如く、單に正經の語を説明敷衍するのみにして、聖書の權威を要求するが如きことなし。故にミドラシの大部分は明に經句と其解説とを區別し、説明敷衍の跡を明白ならしめたり。此方法に依りて得たる結果は經句の性質の異なるに依り、其性質も亦異れり。即ち聖書の律法的儀式的の部分を解説せる者をハラカ(ハラカ)と稱し、行為の標準、律法的判斷等の義を表し、慣例、風習、命令等も其中に含括す。聖書の靈的教訓的部分を解説せる者を

ハツケダー(ハツケ)と稱し、物語、説教等の義を表し、ラビの格言、聖書以後の聖徒の物語等をも其中に含括す。聖書解説の事業に従事せし學者は數世紀に渉り、諸種の名を以て知らる。其概略左の如し。(一)ソフエリム(ソフエ)即ち學者(ソフエ)エブラに初まりマツカビウス時代に至る(前四五〇一〇〇)。彼等の文學的所産は明らかならず。ソフエリムと言はるる語をハラコースに適用する者あれば、ハラコースは一時代の作に非ず、且其中には晩出のものあれば、此はソフエリムの作也との義に非ずして、ソフエリムに證據を有せりとの義なるべし。舊約正經の排列、完成に關する規則、及び一週の或日に律法を讀むこと、毎日祈禱する事、食後祝禱をなす事、禱禮節に水を濯ぐ事等の習慣は、ソフエリム時代に定められたるなるべしと思惟せらる。(二)ツラビム(ツラビ)マツカビウス朝(ヘロデ朝)の初(前二五〇一三〇)に出でたる重なる教師に與へられたる名にして『雙の義』を有し、ラビ文籍には五代に渉り五雙の教師を録せり。傳説に依れば、各雙は其時代のサンヒドリンの首領にして、一人は議長一人は副議長なりしといふ。此傳説は祭司長が職權上サンヒドリンの議長をりし云へるヨセフス及び新約の記者と符合せざり共、其當時に於ける宗教界の領袖にして、不文律の發達に最も重要な地位を占めたりしことは疑ふべからず。ハツケダー及びハラカ等の多くの部分、並に宗教上種々の規則命令は彼等に依りて製作せられたり。彼等の中最も重なるは『第五雙』に屬するヒレル及びシャムマイにして、律法の解説者及び其解説の適用者として最も名高し。

(三)タンナイム(タン)タンナイムは『教師』の義にして、基督紀元最初の二世紀間(前二〇一後二〇〇)に出でたる猶太教の大家をいふ。シャムマイ及びヒレルの二學派を以て初まり、ヒレルの孫エフダを以て終る。此時代の學者はラビ又はラビナなる稱號を與へらる。シャムマイ及びヒレル兩學派の相違點は明らかされ共、大體に於てシャムマイ派は保守的にして、傳説に拘泥し、ヒレル派は進歩的にして寛容を有し、ミドラシの發達を助けたること少からず。最初のタンナイム中最も有名なるはガマリエル。ヨハンソンの二人にして共にヒレル派に屬す。前者は使徒保羅の師にして、初代使徒の處分に對し寛容の態度を示し(徒五の卅四)卅九後者はヤムニア學校の創立者也といふ。ヤムニア學校はエルサレム神殿滅亡の後猶太人の思想及び生活の中心となりし者也。傳説發達の終極は此時期の終りに於て到達し、此時代の所産と前諸代の所産とを合せてミシナなるもの編纂せらる。

ミシナ(ミシ)は『教訓』或は『復讐』の義を有し、不文律内容の寶庫とも見るべきもの名稱にしては最も適當也。六級に分れ、各級更に六十篇(又は六十三篇といふ)に分れ、各篇更に又若干項に分れ、各項更に又若干節に分れ。新希伯來語を以て書かれ、間々交ゆるに希臘、拉丁二語を以て。文章流暢平易にして、紀元二二〇年頃教長エフダの編輯する處也。尤も之が編輯は既にヒレル。シャムマイの直弟子等に依りて着手せられ居りし事明にして、エフダは唯之を大成せるのみ。此書成りてモーセ五經が成文律の正經たりしが如く、此書は不文律の正經となりたり。(四)アモライム(アモ)アモライムは『説

出でたる大説教家と稱せられ、其著書、説教集は多大の興味を以て廣く讀まれたり。然れ共彼が英國に遊びし時其初め多くの聽衆を牽きたりしが、後聽衆に減じ失敗を以て英國を去りたり。要するに彼の説教は精巧に過ぎたるの據あり、晩年に至りては米國に於ても其名聲の如く盛ならざりき。説教集あり。

單一神教

Henotheism

單一神教は又交神教(Cathenotheism)とも稱す。其崇拜せらるる所の諸神人格を有し、一見多神教の如くなれ共、其諸神は特性を具へず、系統を作らず、其關係全く融通的にして、諸神各々特殊の名を有するも、實は單一の神に外ならざるものなり。單一神教の最好例と稱すべきは吠陀の宗教にして、吠陀の讚歌は天、太陽、曙光、風雨、水流等の如き自然の現象又は勢力を神格化し、之をヴァルナ、インドラ、ミトラ、アグニ等と稱し、之に祈り、之を讚美し、之を禮拜したれ共、吠陀の詩人が讚美せる種々の神は全く相異りたる種々の神に非ずして、實は一個の分つべからざる總全に對し種々なる名を附したるに過ぎず。即ち或る時代に於てはヴァルナを以て代表者となして之に祈り、他の時代に於てはインドラを以て代表者となして之を讚美し、更に他の時代に於てはアグニを以て代表者として之を禮拜せり。然れ共此等讚歌の作者は其崇拜の多くの對象の下に總然統一あるを認め、天、太陽、風雨等を一時之が表象として敬びたりしに過ぎず。是れ此種の宗教が單一神教又は交神教と稱せらるる所以也。

單意識論

Unitarianism

單意識論『一意派』の條を見よ。

タンクレッド

Tancred

タンクレッド『人』名 以太利の教會法學者。一

單一神教。單意識論。タンク

單一神教。單意識論。タンク

タの部

タルメージ

タルメージ

擔保法

明者。又は『辯論家』の義にして、紀元二二〇一五〇〇年に出でたる大家を指す。彼等の重なる事業はミシナの解説にして、其結果ゲマラ(ゲマラ)なるものを産出せり。ゲマラは『追加』若しくは『補遺』の義にして、ミシナ中難解の部分に説明し敷衍したるもの也。而してゲマラは主として國法に關する部分を解説したるものなれ共、其他の事をも包含し、寧ろ百科辭彙といふべきもの也。此ゲマラをミシナと併せたるもの、是れ即ちタルムド也。而して當時學問の中心は既にパレスチナのみならず、巴比倫にも諸處に學校起り、其教師をラバビと云へり。此等の人はミシナを別に説明敷衍したりして、パレスチナタルムドの外に巴比倫タルムドなる者生ずるに至れり。前者は第四世紀の初に成り、後者は第五世紀に完成せり。アモライムの後にはサボライム(サボ)と稱する者あり。『説明者』又は『靜想者』の義にして、第六世紀に出で、タルムドを説明したりし人々を指す。然れ共此人々は巴比倫に限られ、パレスチナには斯る人々なかりき。タルムドの最近に出版せられたるは、ワイルナ版にして廿五卷あり(一八八〇一八六)。詳なることを知らんとせば、ストラック、ミールツァイテルの『タルムド總論』ドイッチェの『タルムド』等を見よ。

タルメージ

Talmage

人名

タルメージ

タルメージ Thomas De Witt Talmage 一八一九〇一 米國の説教者。ニウ、ウエスチーのボウンド、アムステルダムに生る。想像力に富み、且巧に事實を描寫するの術に長けたりしを以て、無數の聽衆を牽引し、一八六九年より九四年に至る迄アメリカの大立物として名聲を擲し、ピーチヤル、スガルドン、ムーデー等と共に第十九世紀後半に

出でたる大説教家と稱せられ、其著書、説教集は多大の興味を以て廣く讀まれたり。然れ共彼が英國に遊びし時其初め多くの聽衆を牽きたりしが、後聽衆に減じ失敗を以て英國を去りたり。要するに彼の説教は精巧に過ぎたるの據あり、晩年に至りては米國に於ても其名聲の如く盛ならざりき。説教集あり。

二一〇年以後プロシアにて教授し、二六年同市大聖堂の大テアトロにせられ、二二〇年より一三三三年迄の間に『ユマ、デ、マツモニア』を著す。一四四年に書きたる『マルドレー、ユエイクアリス』は最も重要な著なり。

擔保法

Law of Guaranty (Lois des garanties)

擔保法 羅馬法王の特權を規定せる法律。佛帝ナポレオン羅馬に攻め入り、法王ピウス六世が法王領は自己一身の所有に非ずして神聖なる相續物也と云へる抗議を排斥したりし以來(一七九八)以太利及び法王領は佛國干渉の端を開き、遂に佛國に併呑せらるるに至れり。後ナポレオンの敗るるや一たび獨立するを得たりしも佛干渉を免れずること能はず。一八四九年佛國は名を法王の教團に藉り又羅馬に亂入せり。於是は以國愛世の士は外佛國の侵略を防ぎ、内法王を保護せんがために、當時數多の公國に分れたる以國を統一せんことを希望したりしが、サルジニヤ王ゲイクトル、エマヌエー一世は、カアールの輔佐に依り遂に統一の計を決し、一八六一年其志を達したり。然れ共佛國は尚法王の教團と稱して兵を羅馬に駐屯せしめ、一八七〇年普佛戰爭起り、佛國は其力を他に出すこと能はざりしかば、以國王は職失ふ可らずと合弁を宣告せり。斯の如く以國は他の聖蹟に乗じて羅馬を侵し、法王の權力を奪ひしを以て、外國殊に羅馬教を信する列國の怒に觸れんことを恐れ、一方に法王の實權を剝奪するに共に、他方に形式上法王を尊崇し、法王の不可侵權を承認するの必要を認め、七一年五月を以て所謂擔保法なるを公布し、法王及び法王國に大なる特權を附與せり。

タの部

擔保法

今擔保法の内容を檢せんに、其第一章には法王の特權を定め、(一)法王は神聖にして侵すべからず、法王に對して危害を加へ、若くは之を教唆したる者は、君主に對する犯罪と同様に處せらる。(二)法王は國內に於て君主と同様なる待遇を享受するの權あり、又他の羅馬教を奉ずる皇帝の政府より敬禮及び榮譽を受けるの特權を有す、此特權の結果として法王は近衛親兵を置くことを得。(三)政府の官吏が其職務上法王の宮殿若くは其他の行在所に入るには法王の許可を得ざる可らず。(四)外國政府より法王に派遣せる使節は、外國政府より以て法王に對しての特權を有す。(五)法王は三百廿二萬五千リラ(一リラは我三十錢)の年金を國庫より支給せしむ、此補給金は毎年の豫算に掲載して削減することを不得す。法王は又宮殿離宮等に其他附屬の建物莊園を有す、此等の所有權は永久法王に屬し、租税を徵收せらるることなし。(六)法王は其教職上の權能を行使するに何等の干渉を受くることなし、法王の僧職は其職務上の事項に就き以て國政府の指揮監督を受け又は召喚問答せらるることなし。(七)法王は其部下と通信するに就き何等の干渉を受くることなし、法王の消印ある郵便電信は凡て無税也。(八)カルテイナルは以て國の有位者官中最高級の職を受ける者にして、法王缺位の際有官者中最高級の職を受ける理由を以てす、其身體の自由を妨害するを得ずと云ひ、第二章には教會の自由行動の範圍を定め、(一)羅馬教會の僧職は諸社集會を爲すに全く國家の監督外に立つ者とす。(二)法王は其宗務に關し法令を制定發布するに方り、政府の認可を要せず。(三)教會は其宗務に就て自ら裁判するの特權を有す。(四)羅馬及び其附近に在る六箇の大

大監督の代贖説。大都監督のダヴ

校、中學校、神學校は全く法王の監督に屬し、政府は毫も干渉すること能はず、小學校の宗教や言は任意なれ共、もし父兄にして之を請求する時は其町村は之を行ふの義務ある者とす云へり。此の如く擔保法に定めたる法王及び羅馬教會の自由權は其範圍頗る廣大にして、殆ど之を國家主權の外に放任したるが如き觀あり。然れ共此法も亦一の法律なることは一八七八年の決議に依りて明にして、此法律の存否は以て國政府及び議會の管理に存す。

大監督 Archbishop. 監督の條を見よ。

代贖説 Vicarious Atonement. 贖罪説の條を見よ。

大都監督 Metropolitan. 職名 大都市の監督を呼ぶの稱にして、小都市の監督の上に位し、之を連み、之に按手禮を授け、之を總轄し、且監督會議を召集し、之が議長となるの特權を有す。此職の起源明らかならず、羅馬教會の著作者は之を以て使徒の時代に起れりとなせり。此稱の初めて記録に顯はれたるはニカラ會議の時也とす。

ダヴエンホルト Daventry, John. 人名 一五九七一—一七〇七。米國清教徒神學者。英國カウエンティンにて生れ、牛津にて教育を受け、十九歳にして倫敦にて説教を始め、終にコルマン街聖ステパノ教會の司長となり、信仰と學問とにて尊ばれる。一六二六年、イムプロブリエーション(普通信徒の所有に歸せる教會領地)を買ひ、其の利益を以て國內の窮き教會を維持するの計劃あり。彼は其計劃立案者の一人なり。然れども監督ロッド之を忌み、之を以て非國教を秘密に助長する憂あるものとし、法王に請ひ、朝廷より之を禁するの法令を發す。然れども此の計劃は一體に大なる實效を得

ダウプ

たる者なり。間もなく彼はワゴン、コトトンに由て清教主義に改宗し、之がためロッドの怒を買ひ、一六三三年の幕アムステルダムに行きヘウエットの同僚者となりしが、此にても非基督教告白者の小兒を洗滌することに反對意見を有せしため、又長く留まるを得ず、三五年倫敦に歸る。之より先きマサチューセツツ植民地の特許所有者の一人たり、唯だロッドの反對を恐れて公然名を列せざりしのみなりしが、此に於て英國に渡航し、三七年六月オクストンに着し、三八年更にクインニヤック(今のニウヘヴン)に行き新植民地を起し、三十年間牧師として勤職す。コトトン及びフリーカーと共にワニエズトミンステル會議に列すべく招かれしも、會員之を許さずして止みぬ。六七年オクストン第一教會に招かれ、其所にて卒中症にて死す。彼は新英州初代の大人物にして、敬虔と學問と親切とを以て秀で、當時の難問には悉く關係し、政府の事にも與かり、ニウヘヴン植民地の創設時代には政府を助くる「七の柱」の一人たり。烈しく「年途契約」に反對せり。其のオクストンに招かれしも舊精神の擁護者たりしが故なり。著書は多からず。『其の文學に現はれたる會衆主義』『凡ての暴風雨に』を固く下したる記述』等あり。

ダウフ Carl Daub, Karl. 人名 一七六五—一八三六。獨逸の神學者。カッセルに生れ、マールブルにて學び、一七九四年ハイデルベルグの神學教授とせらる。神學思想派の始祖にして、基督教義の學問的議論を哲學的真理の必然の一部分を奪ふ其の中心なりとし、近世神學史上に著しき地位を占めしが、而も個人的活動は殆ど結果なくして了れり。當時獨逸哲學は迅速に進歩しつつありしが、彼も其の教の基礎を固くめざるを得ず。

タの部

ダグラスのダ コスタ

一八〇一年の可憐即答教員書にては向カント説を採りしが、〇五年の『正統説と異端説』にてはフイヒテに移り、〇六年の『テオロギア』にてはシェンクに變じんとし、其後は暫くシェンクに留まり、一〇年の『教義研究論』尙然りしが、一六年の『イスカヤオテのユダ』に至ては、ヘゲルに傾き、終に之に止りて、三三年の『今日の教理的哲學』を出せり。

ダグラス Robert Kenway. 人名 Douglas, Sir Robert Kenway. 人名 一八三八。英國の支那學者。デヴォンシャーに生る。一八五八年支那の領事となり、六五年英國博物館の支那文庫副館長となり、九二年以來同館内東邦文書の保存掛となり、且同時に倫敦キヤンブス、カレッジ支那學の教授となる。『支那文藝及文學』(七五)『孔子教及び道教』(七七)『支那物語』(九三)『李鴻章傳』(九五)國民物語中の『支那』(九九)等の著あり。

ダ コスタ Costa, Dr. Costa, Ismael. 人名 一七九八—一八六〇。和蘭の詩人、基督教神學者。アムステルダムに生る。葡萄牙系の猶太人の富める名家の子なりしが、一八二一年基督教に轉じライテンにて法政學及び美文學を學び、又ピルデルアイクの感化を受けつゝ、和蘭の最も傑出せる一詩人となれり。然れども之と共に又近世基督教神學の大家として勢力を有するに至る。彼は其の非常なる博識と大なる批評的能力を顯はして、當時の非基督教的精神、殊にナウマン派に對して熱心に又持久的に戦ひ、國外に於て其の感化を及ぼせり。其の運動は講演を主とし、著作も大抵も講演せし者を出せしなるが、最も重要なものはストラウスの『耶蘇傳』に反對して出だせる『四見證者』なり。英譯

ダゴン

ダゴン Dragon. (Tib.) 龍名 ハヤシテ人あり。通常學者の説に依れば、ダゴンなる名はダグ(魚の義)より來れる者にして、魚形を爲せる神也と云へり。又ダゴンは一般に一部分魚形をなせる巴比倫の神と同じ思惟せられたり。聖書にはダゴンは脚と手を有する者として記され、七十人譯には又脚を有する者として記されたり(母前五の四)。巴比倫魚神の畫には頭、手及び時には脚を描けり。然れ共近時セイイス及び其他の學者は、ダゴンは魚神に非ず、其の類似は偶然の一致に過ぎざる事を主張せり。ダゴンの名目及び崇拝は巴比倫よりパルチナに輸入せられたる共、パルチナにては穀物の意義を有するダゴンなる語と同一視し、之を農業の神也となせり。此ダゴンは又フエニキヤにて崇拝せられたりしが、フエニキヤにては此神を以て穀物及び蠶桑の發明者となし、蠶神として之を拜せり。ヘリシテ人の神としてダゴンに關し記されたる舊約の語も亦之に一致せり。彼はガザ及びアシドゥに神殿を有せり(士十六の廿三、母前五の一、二)。其崇拝は國民的にして地方的に非ず(代十の十、母前五の八一六の十八)。又之と共に他のパアルを崇拝するを禁ぜず(王下一の二、三)。ヘリシテ人は彼を以て戰勝を與ふる神也と信じ、サウルの首級を其神殿に獻げて喜びたれ共(士十六の廿三、代十の十)彼の最も顯著なるは農業の神なるに在り。ヘリシテ人はエホバの力ダゴンに優るを知り、金の鼠を作りて之に獻げたり(母前六の四、五)。ガザに於ける其崇拝は現代まで繼續し、マツカピニス戰爭の時ヨナタン其神殿を破壊せりとの事『マツカピニス一書』及びヨセフの書に記さる。

ダッハ

ダッハ Ha, Dhah, Zimmon. 人名 一六〇五—一五九。獨逸の詩人。ケーニヒスベルグに生れ、同市ライテンベルグにてマゴテアベルグにて學び、一六三三年ケーニヒスベルグの大會堂學校の教師、三六年其の同僚司長、三九年同市大學の詩學教授となる。獨逸文學史上のケーニヒスベルグ派と稱せらる。派中の秀傑にして、多くの社會的宗教的の詩を作れり。宗教的の詩は非常に重んぜられ、ケーニヒスベルグ、アレンスラウ、伯林等の圖書館には彼が初め一つづつ出版したる詩の印刷を蒐集したるも保存せらる。一六六五年、七五年の普魯士讚美歌本には彼の作歌を載するもの多し。

ダッフ Alex. Alexanter, D. D. 人名 一八〇六—七八。印度人。の宣教師。蘇格蘭ヘルトン市のムーレンのオーチナホルスの農家に生る。聖アンドリュウズ大學にてチャルマウス等の下に學び、一八二九年准允を受け、廿三歳にして蘇格蘭教會派の最初の支那印度宣教師とせらる。カルカッタへ航せんとして破船し、悉く其の書物を失ひ、一層熱心に、唯だ神に頼るの心を起し、教育設備を設けて、一方には土人傳道者を養ひ、一方には印度宗教の暗黒を驅逐せんを企てぬ。然るにカルカッタには有力なる一團あり、古來印度人の襲奪せる所を其のまゝに進歩發展せしめんを謀れり。ダッフは之を思ひたりとし、印度人は泰西文明に従ひて發展し得る氣質ありと考へ、カルカッタ學校に於ては一に聖書を讀み得る者には悉く讀ましめ、之を以て學校の基礎動力となし、二には英語に依りて凡ての科學を教へ、印度の多くの事に革命を誘起するをも厭はざるべしと云ふ二大主義を取りて、其の意見を實行し、學校の初期より自ら之に勞せしに、其の結果

タの部

ダーテ

は著しく、東洋主義者は全く顔色なく、而して預期の如く革命は起り来れり。精神上にも結果著しく、集り来れる青年には勢力あり有る者少からず。後英國教會傳道會社其他は此等青年を用ひて印度に於ける傳道をなさしむるに至れり。一八三九年病のため歸國せしが、益々印度宣教の趣味を強し、總會にての演説は大なる感動を興へ、アマステイン大學は彼に博士號を贈れり。休養の後再び印度に渡り事業を續けしが、其の時一八四三年の蘇蘭教會分裂は起れり。ダーテは他の諸國への宣教師等と同じく自由教會に就けり。而も傳道會社の財産は法律上悉く獨立教會に屬せしむれば、ダーテの事情は一變せり。されど信仰の強き此に請み止まりて萬事を根本より改めし、終に舊の如く復せり。其の感化は益々加はり、青年受洗者起る毎に紛起りては頗り、基督教は次第に其の根を伸ばしたり。五〇年再び歸國して自由教會に傳道を續け、又米國を訪ひて加那太及び合衆國にて説教して深き感動を興へ、また印度に赴きし時、痛く健康を損して六四年蘇蘭に歸り、外國傳道委員長となり、南亞非利加傳道事業にも熱心し、ニヤッタ湖湖宣教團を作るの一人となり、六七年には自由教會福音主義神學の最初の教授せられた。内國傳道にも勿論熱心あり、自由、一致、改革、英國の諸派長老教會合同を勧めし一人也。蘇蘭書子配布會社に絶味を有して一時其の長たり。又エザンバラに於ける總長老會會議開會者の一人たりしが、之には病の爲め缺席したり。

ダーテ ヨハン アウグスト Däter, Johann August 人名 一七三二—一八一九 編譯の聖書學者、聖書批評學者、キリシヤンのロイセン

ダニエル

ダニエル

フェルスに生れ、一七六三年ライプツヒの東邦文學教授なるヨリブリ、ゲトス、テスタメンタム、エタス、レケンシヨネ、テキストス、ヘブライ、エト、ゲゼルシヨム、アンチクワラム、ラチネ、ゲエラシヨ六冊は最も有名の著にして其他著述多し。ダニエル Daniel 人名 以色列王ダビデの第二子(代上三の二)及びアルメシヤスタ王の時エブラと共に猶太に歸りたるイタマールの祭司(續八の二)もダニエルと稱せられたれ共、最も重要なものは但以耳書の主人公にして、其作者として傳へられたるダニエル也。但以耳書に依れば、彼は以色列の貴族にして容貌美しく智慧と才力に秀でたる少年也。ユダ王エホヤキム治世の第三年チアカドチザルのためエルサレムより巴比倫に携へ往かれ、他のユダの少年と共に巴比倫王朝にて教育せらる(一の二—一七)。ダニエル及び其三人の友は王の用ゐる酒と酒とを與へられたれ共、之を用ひて己の身を汚すまじと定め之を用ひざりしが、其結果を用ひたる他の少年よりも其美はしく又思慮し、且諸の文學と智慧とに顯くして、王の前に侍り、王之に諸の事を問ふに其智慧全國の博士、法博士に優れり(一の八—一廿)。チアカドチザル治世の二年にダニエルは他の博士等の解く能はざりし王の夢を解き、其實として巴比倫全國の總督せられた、又巴比倫の智者等と統る者の首長せられたり(二の二)。彼は又チアカドチザルの樹の夢を解きたり(四の四)。チアカドチザルの死後彼は其地位を失ひ退隱したりしが如し。然るにメルシャザル王が酒宴を設け大臣を賛成せし時、人の手の指漏れれて王の宮の粉壁に物書きされ共、巴比倫の智者等之を解く能はざりしが、又召されて其文字を解き、聖衣を着せられ、國の第三の牧伯とせ

られたり(五の五)。メデヤ人ダリヨスの時ダニエルは百廿人の牧伯の上に登られたる三人の監督の一人とせられ、三人の中最も優れたるより、ダリヨスは彼を立てて全國を治めしめんとせしが、他の監督及び州牧等之を妬み、彼を訟ふる隙を得んとして、王に勤め三十日の間何人も神又は人に願事をなす可らず、之を犯す者は獅子の穴に投ずべしとの禁令を發布せしめたり。ダニエルは之にも拘はらず一日に三度エホバに祈りしければ、彼等は彼を王に訴へ、遂に之を獅子の穴に投じたりしに、不思議にも獅子は彼を害せざりき。王は喜びて彼を出し、彼を讚美したる者を獅子の穴に投ぜしに、彼等は忽ちして獅子のために咬み碎かれたり。於是王は詔を下して、各州の人々ダニエルの神を畏れ敬ふべしと命じ、ダニエルはダリヨスの世に後斯人タロスの世に於て其身榮えたり(六の六)。

タの部

但以耳書

名の猶太人巴比倫に在りて、初めチアカドチザル、後後斯王の寵を得たる也と想像するも、又其智慧と正義のために、國人が以て西結書に記されたる古人に從て之をダニエルと名けたる也と想像するも爲し難きこと非ず。然れ共此物語に於て眞に歴史的也とせば、以色列列國復讐時代の舊約物語中にも、又マツカセエス時代前後の存因後文學の中にも、彼の名の曾て顯はざりしは頗る奇也と云はざる可らず。

第十一章は此書の作者がエホファテス及び其前王の治世に起れる出来事を熟知せる事を示す。即ち此處には後斯時代、亞歷山大王の征服、其帝國の滅亡、トレミー及びセキキア王朝相互の關係、及びセキキア王朝と猶太人との關係を記せり。古風の註釋家は之を以て預言也とせ共、斯る未來の暗示は聖書の他の部分に類例なきのみならず、道徳上宗教上又何等の意義なきを以て、今日にはダニエルを以て此書の作者となす者乏し、此部分のアンチオカス、エホファテスの時代に關する者なることを承認せり。第八章には亞歷山大王の勝利、其帝國の分裂及びアンチオカス、エホファテスの事を明記し、第七章には第四の歌を以て亞歷山の王國を表し、セルキア王朝之に次ぎ、アンチオカス、エホファテスに至り其極に達することを記せり。第九章にも亦アンチオカスの事を云へる處あり(廿六以下)。此の如く此等の部分には第十一章と同じくアンチオカス及び其以前の歴史を記せるを見れば、六十二第二章がアンチオカスの時代に關する者なること明也。而して第一章は他の部分の緒言にして之れなくんば第二章以下を領解すべからず。七章以下の異象はダニエル一身に關する歴史を要する。となれば、一—六章も亦同一作者の手に成りたること疑ふ可らず。

に依りて其年代を附せるを見れば、此書の作者が此等の王を以て見て王位に即きたる者となせるは明也。而して作者は更にメルシャザルを以てチアカドチザルの子となし(五の十一、十八)巴比倫がメデヤ人及び波斯人のために略せられたり時巴比倫王たり、彼殺されてダリヨス巴比倫を取れり(五の廿以下)との事を記したれ共、歴史上吾人はタロス以前メデヤ人ダリヨスの巴比倫王たりしことを聞かず。此時期の間巴比倫王たりし者はチアカドチザル、エゲイルメドドラク、チアキリツサル、ナブナヒッド及びタロスにして、ダリヨスの巴比倫王たりしは之より六十年以後の事也。作者がメルシャザルと記せるは疑もなくナブナヒッドの子ビルサルウスの事に於て、彼は其父治世の晩年巴比倫軍に將たりき。彼は父よりも活動的にして勢力を有せしが故に父に代りて王となりしが如く傳へられたれ共、事實王たりしには非ず。メルシャザルも亦チアカドチザルの子に非ず、其父ナブナヒッドは全く其家系を異にせり。又九の一にはダリヨスを以てアハシエロスの子也となしたれ共、彼は其父也。又一の一にはエホアキム治世の三年にチアカドチザル、エルサレムを圍みて之を取れりとのことを記したれ共、歴史上斯る出来事ありしを聞かず、耶廿五の一—九は斯る出来事の曾て在らざりし事を含むに似たり。又此書は博士法術士の階級をカルテヤ人と呼びたり(二の二、四、十、四の七、五の七、十一)此名稱の起りたるは巴比倫帝國没落以後の事にして、アハシエロス及び巴比倫時代には未だ之れなきなり。此の如く此書には存因時代の誤解に係る歴史的叙述少からざるを見れば、此書が頗る晩代に成りたる者なること明にして、蓋しアンチオカス、エホファテスの治世に成り

但以耳書

但以耳書

夕の部

但以耳書

たるものなるべし。

(三) 言語 此書の希伯來語は...

(四) 教義 天使及び復活に關する...

(五) 獎勵的なる事 此書の獎勵的なる事...

但以耳書

教訓も最も此時代に適合し...

(六) 外部の證據 舊約及び經外聖書の中にも...

【解法】 此書は互に相關係せる世界歴史を三種に...

【A】 二章 七章 八章 巴比倫帝國

但以耳書

銀の胸 卽ち 卽ち 卽ち

純金の頭 卽ち 卽ち 卽ち

又七の十三以下に『人の子の如き者』云々の語あり。

【B】 學者の中には『ゴリアテの兄弟ラミを殺せり』...

夕の部

ダビデ

ダビデ

David. 人名 以色列王。古來の...

【參考書】 總論としては...

ダビデ

從てダビデの歴史として...

【A】 學者の中には『ゴリアテの兄弟ラミを殺せり』...

ダビデ

ダビデ

タの部

ダビデ

(十七の廿八)ダビデ自らも自己の運命を意欲せざりしこと云へば(十八の十八)此記事は甚だ疑はし。ダビデがサウルに事へ其武器を執る者となりし時期に關しては、聖書に別に記す處なし。ダビデがヘリシテ人との戦争に於て勝利を得たりし事、其兵士の間に人望を有したりし事、サウルの女ミカルと婚したりし事、ナタンと密なる交情を有したりし事等に就ては一再ならず記されたれ共、サウルのダビデに對する不信任は如何にして生じたりしや明ならず。サウルがダビデを憤りに至りしは、ダビデが戦に勝ちて人望を得たりしを憤みしがためにして、婦等の彼及びダビデに就き歌へる語を聞きて一層其嫉妬の情を激したりし事、是に記されたれ共、ダビデの方面に於てサウルの怒を招くに至りし原因に就ては何事も記載せられず。兎に角サウルはダビデを殺さんと謀り、其生命を求めしかば、ダビデは難を避けて流涙の身となりたり(母前廿一、卅一)。サウルの死後ユダの支派ダビデを招きて王となさんとせしかば、彼は其招に應じて直ちにヘブロンに往けり。ヘブロンはユダ領の中央に在る邑にして、ダビデは此處にて王位に即き之を其首都となしたりしが、アチセル、マハナイムにてサウルの子イシボセテを立て、サウルの後を嗣がしめたり。斯くて以色列の王位は久しく此二人の間に争はれたりしが、凡そ七年の後イシボセテはアチセルと共に暗殺せられたりしかば、ダビデは初めて以色列王國を一統するを得たり。時にヘリシテ人はダビデが以色列の王となりしを聞き、之れを獲んとて大舉來寇したりしが、ダビデはバアルハラフム及びレバニムにて之を戦ひ全く之を擊退せり。斯くてダビデは都をシオン山上のエルサレムに移し、之を以て其首都となせり。是れ以色列國民

ダビデ

の發展に取りて最も重要な出来事にして、彼は獨り之を以て政治上の中心となしたりしのみならず、又之を以て宗教上の中心となし、爰に神の國を移置せり。ダビデの甥ヨアブは軍の長とせられ、ザドクはアビエタルと共に祭司長の職に任ぜられ、政治、軍事及び宗教上に關する綿密なる制度制定せられ、實行せられたり。斯くて又ダビデはアマモン、モアブ、スリヤ、エドム等の諸國民を服ひたりしが、何れも皆勝利を得て國威を外に輝すを得たり。然れ共彼の晩年の歴史は不幸にして雲霧を以て蔽はれたり。彼が其臣ワイヤの妻バテセバを取りて其妃となし、而してワイヤを殺したる事、彼の子アブサロムが其半兄弟アマモンを殺害し、且其父に叛きたる事、而してダビデは之がために蒙罪し、ために其王冠及び生命を危くするに至りし事、アブサロムがヨアブのために殺されたる事、及びシバがダビデに叛きたる事等は、即ち彼の晩年の歴史を汚したりし悲惨の出来事なり。

ダビデの作也と傳へられたる詩篇の多くが晩年の者にして彼の作に非ざれば、之に依りて彼の性格を論ず可らずの事は前記に之を云へり。而して彼の治世の歴史的記録より見るも、彼の作也と稱せられたる詩中に顯はれるが如き純潔、神聖の精神を有したりしことは顯はしむる。彼を以て「エホバの心に適ふ人」とも云へるは(母前十三の十四)思ふに單に適當なる王者の實を備へたる者也との意に外ならざるべし。彼の犯せる罪は頗る多く、且其中には頗る兇惡なるものあり。例之彼が其戦争に於て顯はしたる残忍、ナカラゲに於ける欺騙、ハツヤイに對して爲せる奸誦、ワイヤを殺害せる事等は其最も著しき者也。然れ共彼は彼方に在りては又眞正の勇者

ダーボイ。ダマス

と稱すべき者にして、多くの高貴なる性質を顯はしたりし。彼がヨナタン及び人民全體に愛せられたりし者は、畢竟彼が愛すべき性格を有したりしがためにして、彼が再びサウルの生命を見通したる事、メヒボセテに對する其親切、其敵の没落を見て眞に悲みたりし事等は彼の性格の美の擲すべき者ありし證として見るを得べし。

ダーボイ

人名 ジョルジュ Darbois, Georges
一八一三—一八一七 巴理の大監督。フキートマンのフアイルビローに生る。大膽にして獨立なる思想家也。極端本山主義に嚴しく反對し、自己の教領内のイエスイト派及び諸宗派を判別するに力を盡し、グアチカン會議にては無罪教反對の投票をなせしが、而も他の反對者等と同じく布告出で、は直ちに服従したり。獨逸戦争に由て生ぜし列強者救済のためにも勞する所あり、其の精力に由て之が設備成り立ちぬ。彼は共產主義を拜へて一八七一年四月四日共産黨より人質として捕へられ、マゼーの獄に入れられ、其所にて其等迷戀者のために銃殺せらる。死せし時は斯りの態度をなし、口よりは赦しの語を發したり。之より先き六三年巴理の大監督とせられたり。著作多く聖アンソ著述の翻譯二冊、聖トマス、ベクト傳二冊等是其重なるもの也。

ダマス

人名 Damascus, 地名 エルサレム
Aの北及び東北百廿三哩、地中海の東凡そ五十哩、北緯卅三度卅二分、東經卅六度卅分在る地にして、海面を抜くこと二百六十呎、世界最古最善の市の一也。其風景の美なるより回教徒は之を地上の樂園と稱せり。ヨセフアスの云ふ所に依れば、ダマスはアララムの子ワンの建つ所也といふ。アララムの僕エリヤゼルはダマスコの人也と云へば(創十

タの部

ダマス

五の二)此邑が既に長時時代に於て知られたりしこと明也。ダマスコは又應々舊約に記され、使徒行傳及び書翰(加一の十七、哥後十一の卅二)にも亦記されたり。ダビデは創設の後之を略取したりしが(母後八の五、六)、ソロモンの治世に至り、エリヤデの子レオン自らダマスコの王と稱して爰に王國を建設し、爾後以色列人は屢々之と戦を交へたり。前七三二年アサスリヤ王アケラトヒルセル來り攻め、ダマスコ王國は爲めに其獨立を失ひ、斯くてイザヤの預言應驗せられぬ(賽十七の一三)。亞歴山大王は前三三三年スリヤを滅し、爾後幾多の變遷を経て、此國は遂に前六三年を以て羅馬の州となれり。基督の時代にはダマスコは數多の猶太教會堂を有したりし。ビザンチヌス帝國に在りてはアンテオケの教長の次位に在る監督の所在地となり、數多の教會及びバプテスマのヨハネ記念のために建てられたる大會堂を有したりし。六三四年回教徒の手に歸し、六六一年回教帝國の首府となりて頗る壯麗を添ふるに至りたりし。十字軍の時には聖地に在る諸市と其運命を共にしたり。サラティンはフランク人との戦争に於て、此地を其本據となし、一五一六年には全く土耳其帝の所領に歸し、爾後十字架旗は遂に新月旗に代はるること能はず、今日に至るもダマスコは尙土耳其領なる一州の首府なり。

して古來の傳説に依れば、邑より凡そ五哩、エルサレムより來れる道のバニアス及びケフルハワツルより來る道と交する處は、此事の起りたりし場所也といふ。保羅が藍にて吊り下されたる石垣の窟(哥後十一の卅三)アナニアの家、及びユダの家も亦指せられ、アナニアがマルソのサウロを導け往きたる「直と云へる街」も今日尙其名を有せり。現今ダマスコは回教徒の勢力範圍に在り。一八六〇年七月九日彼等は俄に起り市内に住する基督教徒を攻め、其日及び次の三日間に三千人を虐殺せり。而して後重傷のために死者亦少からざりしといふ。一八四三年米國の一致長老教會及び愛蘭の長老教會は、ダマスコに共同傳道を開始し、倫敦の猶太人のための傳道會社も亦其處に傳道地を有せり。

ダミアヌス

人名 Damianus, 人名
六〇一年死 亞歴山の教長。基督一性論に傾き、哈ゴサベリウスに同じき三位一體論を取り、父と子と聖靈の神は一なる實質を爲せり、此の三位各自一つのみにては神にあらず、唯だ共に合して神なりと言へり。此の見解に違ひし者をダミアヌス派、若くは其の亞歴山に於ける集會所の名に由てアンゲリウム派と稱す。其の反對派は所謂テトラダイタイ派なりき。此の派は父と子と聖靈の外又神格ありて以上三つを統一すことせしに由り、四神を信ずること此名ありしなり。

ダミアヌス

人名 Damianus, or Damiani, Peter
一〇〇七—一〇七二 以太利の僧。ラヴェンナに生れ、同市でフェネツとバルマにて學び、多年ラヴェンナにて教授し大に成功せし。三十歳の頃俄にアビオに近きフォント、アヴェエロの隱遁所に退き、爰にても

ダミアヌス

ダミアン

又有名となり、副院長とも院長ともなり、其の會を擴張、振興し、鞭撻懲罰の法を善く行はるゝに至らしめたり。鞭撻懲罰とは平鞭を以て鞭撻を打ち、其の間詩篇を唱へ居るものにて、三千打を以て一年の罰に相當すことせしを以て、壯健なる者は一日にして能く數年の鞭撻の量を盡すを得しかば、此の法は非常なる勢を以て流行し、或は自ら鞭うて死に至る者も生じ、ダミアン自身之を制止するに至れり。されど彼の名聲は猶甚となり、僧院生活を嚴にすべしと考へ居りし僧等は、彼を以て自己等の首領なりとなし、彼は奇蹟を行ふと信ぜられ、ヘンリー三世以太利に行きし時には、人心收服のため先づダミアンに結ぶの必要を感じし迄にたりたりき。クレゴワス六世タレメンヌ二世は書信を往復し、レオ九世は「リベレ、ゴモルヒアヌス」と稱し、僧侶の生活をソドム、ゴモラの町人に比したる著書を呈し、又其の性質上ヒルデアランド黨に屬し、一〇五八年にはステファノス十世より招かれて、強てオスチア監督兼カレタイナル會頭とせられしが、其の地位の適せざるより退れて隱遁所に歸りぬ。されどヒルデアランド黨のためには常に活動せり。五九年ニコラス二世の代理としてミラノに遣はされ、教會を改革し、之を羅馬に服従せしめ、同法王の死後はアレキサンデル二世の援助者となりて所々に活動し、六二年にはヘンリー三世の寡婦アグネスの告白師となり、六九年には法王代理として、ヘンリー四世の朝に使し、青年なる王を服従せしめ、最後には郷市ラヴェンナの教會改革を行へり。彼の文書は蒐められあり。

ダミアン

人名 Damian, Joseph
一八四一—一八九九 癩病者への宣教師。神父ダミアンとして知らる。伯耳義のルッパイン附

タの部

墮落説。ダリヨス。ダルウイ

近に生る。羅馬教會僧侶たるべき教育を受け、宣教師として南洋に送らる。一日布哇のモロカイ島に於ける癩病者の慘狀に關する説教を聞き、深く感動する所あり。祈りて曰く『神よ我れ此處に在り、願くは我を遣はし給へ』と。即ち其一生を癩病者の爲めに献げんと決心し、一八七三年モロカイ島に往き、布哇政府の設立せる病院に入りて癩病者に醫食を共にし、彼等看護の傍ら傳道したりしが、自己も亦癩病に感染し、遂に之がために倒れたり。イー、タリヨス、ヨドマンヌスと同一人也と思惟せらる。

墮落説

Fall of man. 『罪』の條を見よ。

ダリヨス

Darius. 此名を有する

數人の王傳に記さる。(一)メデア人ダリヨス(但五の卅一等)はアハシエロスの子也(九の一)普通通の歴史には此人の事を記され共、近時の研究に依れば、彼はベルシヤ人の繼承者にして、ベルシヤザルを設けて自ら王位に即けり。而して彼は六十二歳にしてカルテア人の王となりしと云へば、タロス王の直ぐ前の王なりし也と云へり(二)ロス、スベスの子ダリヨスはヘルツァリアン朝の祖にして(朝四の五、廿四、一、十五、五二の一、七、七の一)楔形文字の碑文に依れば、彼は彼處の人にして其治世中其國繁榮せりといふ。此は其治世の二年にエルサレム神殿建築の命を下し、其六年に之を竣工せりと云へる聖書の記事(朝六の二、一、三)被擧人ダリヨス(尼十二の廿二)は通常亞歷山大王の助手にして、前三三六―三三三一年王位に在りしタリヨス、ヨドマンヌスと同一人也と思惟せらる。

ダルウイール

D'Aviella, Eugène Goblet, Count. ユウゲチ。ゴブレット。伯爵。一八四六。伯爵元老院議員、アレキ

ダルウイ

セレス大學宗敎歴史學教授。ブルセルスに生れ、同大學總長となる。一八九一年牛津大學に於てヒラート講演者たり『神の觀念の起源及び成長』と題する講演を爲す。其著書には『宗敎思想の進化』(一八八五)『表象の轉移』(一八九四)等あり。

ダルウイ

Darwin, Charles Robert. 人名。一八〇九―八二。英國の生物學者、進化論の奉行者。一八〇九年二月十二日シェリウズベリーに生る。祖父は醫學博士エラスムス、ダルウイにして、母は陶器師ジョシア、ウエツワワードの女なりき。八歳にして



其學校に入りしが、彼自らの云ふ所に依れば、彼は當時既に博物學を好み、又物を集むることを嗜みたりしといふ。然れ共彼の幼時は殆ど常人と同じく、後來不出世の大器材となるべきを表示する者なかりき。彼は初めケンブリッヂ大學に學び、後劍橋大學に轉じ、ヘンズロウ教授の植物學講義を聴き深く之を喜び、且専心甲蟲を蒐集するの業に従事したりき。ピアール號の艦長フィッロイ世界探検のため遠航を企てるに方り、ヘンズロウはダルウイを認め共に往きて植物學上の採集を爲さしめんとせしが、ダル

ダニケル

ウィンの父は彼を牧職に就かしめんと欲せしかば、初め其行を許さざりしも後之を許し、彼は一八三一年ピアール號に乗り込み、殆ど六年間世界の各地を探検せり。此航海は唯に見聞に依りて其智識を廣めたりのみならず、彼が其生涯を献げたりし問題に向て解決の端緒を與へたりしが故に、其將來の生活に與へたりし影響は頗る大にして、彼も亦自ら稱して其一生の一大段にして、其終身の事業は全く此一舉に決せり云へり。アラバより南米の西海岸に及び、それより太平洋に達せる此長き航海の物語は、一八四〇年『ピアール號の航海』と題して出版せられ、此種の書籍中最も面白き者の一也と稱せらる。然れ共彼は此行に依りて病を得、終生癩病の人となりたりき。初め倫敦に居を定め、一八三九年從妹エムマ、ウエツワワードと結婚す。一八四二年倫敦を去り、セント州ベツケンハムに近きダラニに移り、市中の雜造を避けて學問の研究に其一生を送りしが、一八八二年四月十九日俄然長逝せり。ウエストミンスター寺院に葬らる。

タの部

ダルウイ

試験し、十五年の玩弄を経て初めて之を公にするに至りし也。而して彼をして五九年に之を世に公にするに至らしめしは、此時偶然の出来事起りしがためにして、もし此事なかりせば、或は此書の出版も尙數年を遅延したりしなるべし。偶然の出来事と稱するは、一八五八年に至り、ダルウイの外に自然淘汰の理を發見したる者出で來りしことにして、此人はアルフレッド、ラッセル、ウエッセル(其條を見よ)と稱し、大探検家に於て南米に四年、東印度諸島に凡そ八年間滞在して、博物の研究に従事したりしが、動物の生態及び分布の有様等より推究して、殆ど全くダルウイの説と同様な説を唱へ之を一編の論文に書き綴りてダルウイに送り、學術雜誌上に公にせんことを依頼し來れり。ダルウイは取りて之を讀むに、其所説の彼が十四五年以前より思考し來りし處と殆ど符節を合するが如き者あるを見て大に驚き、之をアルフレッド、ラッセル等の諸大家に示し如何すべきやを謀りしに、此等の人はダルウイが此問題に就きて久しく研究し居れることを知るものから、彼に勧めて自然淘汰の理を簡短に書き綴り、之をウエッセルの論文と同一號の林那學士會雜誌に並べ掲載し、同時に世に公にせしめたりき。然れ共生物進化の事實の證明、自然淘汰等は何れも頗る大問題にして、右の雜誌上に掲載したる論文を以て盡すこと能はざりしを以て、ダルウイは急ぎ從來研究の結果の大要を書き綴り、一冊の書として翌年十一月之を出版せり。是れ即ち『種の起源』也。斯くの如く自然淘汰の説を唱へ出したるは、ダルウイ也。ウエッセル二人同時なりしが、ダルウイの方十四五年以前より考へ居たりしと、又急ぎ一冊の書を出し、其説ウエッセルに比すれば

遠に開たりしに依り、ウエッセルは快く自然淘汰發見の功を全くダルウイ一人に譲り、後自己の著はしたる進化論の書さへ題して『ダルウイニズム』と稱するに至れり。『種の起源』以後ダルウイの最も有名の著作は蓋し『人類の祖先』(The Descent of Man)なるべし。此書は人類の祖先に關する彼の考を述べたるものにして、科學界以外の人々よりは、ダルウイが哲學說に貢獻したる最も重要な者也と思考せられたりき。此書中には又雄雌淘汰の説を掲げたり。此説は自然淘汰説程には廣く學者の承認する所とならず。一八六八年には『飼養に依りて生じたる動物の變化』(The Variation of Plants and Animals under Domestication) 一七八二年には『人及び動物に於ける感情の表現』(The Expression of the Emotions in Man and Animals) 公にせられたり。其外動物學、植物學及び地質學に關する著書頗る多し。彼の傳及び書翰は一八八七年彼の第三子フランシス、ダルウイに依りて出版せられ、一九〇三年更に多くの書翰二卷として出版せられたり。

ダルハム

Darham, William. ウイリアム。Derham, William. 人名。一六五七―一七三五。英國の神學者、哲學者。ウエッセルに近いストートンに生れ、牛津大學で、一七〇二年王會會員とせられ、一六六〇年『カノン』となり、三〇年牛津より博士號を贈らる。一七一三年有名なる物理神學、一四年天文神學、三〇年基督神學を著す。前二者は佛譯獨譯あり。

ダルビー

Darby, John Nelson. 人名。一八〇〇―一八二一。英國の同胞會派の首領。倫敦に生れ、一八一九年ダブ

ンのトリニチ、カレッジを卒業し、牧職に就きウエッセルの牧師となりしが、一八二七年教會で組織に就て疑を起し、全く教會なるものを去り、少數の同志と共にダブリンにて集會を開き、三〇年ピアールを訪ふて安んじて事業を續け、間もなく友會の一會合愛にて造らる。ピアール同會會と稱するものゝ始となりぬ。ウエッセル、エル、ハリスはピアールスタックの牧職を辭して此處に加はり、三四年初めて雜誌『基督敎義者』を出し、ダルビーは其責任記者となり、第一冊に『教會の秩序を破壊すべき教會的處理』を公にし、三六年には『相續的の教會』を公にし、彼等諸論文にて『現在制度の背教』を公にし、教會に向て根本的の非難を加へたり。三八年と四〇年とは瑞西にて活動し、三九年の秋ローザン同胞會の有力者が彼を招きてメツゲスト主義に反對せしめんせしに、四〇年三月之に赴きて講演をなし、又『完全に關するウエッセルの教義』等の小冊子を出す。四一年の春メツゲスト派の大部はローザンの他の分離派と合せり。ダルビーの預言に關する講義は又感動を與へ、國教者と分離派とを合同せしめたり。彼は尙説教し、青年を集めて之と共に聖書を研究せり。佛文英文にて現はれし『聖書諸卷大觀』は其の結果なり。ゲエード、ウエッセル、マヤン等の諸師に會衆造られ『言の弟子の立證』といふ雜誌を出でたり。イエスイト徒の陰謀に由り一八四五年二月ゲエード縣に革命の起りし時は、ダルビー徒は瑞西の或る地方にて迫害せられ、ダルビーの生命も危ふかりしが、彼は其よりは英國の同胞徒間に活動し、殊に四五年より四八年迄ピアールに於ける分裂のために力を盡せり。されど彼は佛蘭西及び瑞西をば決して忘るること能はざりき。

ダルビー

ダの部

ダルビー

ニウマンの『信仰の現象』出づるや、ダルビーは「不信仰の不合理主義」(八五三)を以て之に答へ、又「ビウビー主義に就て」(五四)『教會と世界』基督教と基督教(七四)等を著せり。之より少し前ダルビーは獨逸の所々に會衆を組織して之を連れ、一八五三年エルベールフィールドを訪ひしが、此時には既に大英國及び獨逸の同じ主義の同盟會多く出來居たり。四年再び全市を訪ひ同胞のために聖書を獨逸語に翻譯したり。ニウマンと論争せし點にのみ論及し居たりしが、一八五八年いふく運で自動的に之を論じ、反對を受けて惱まされたり共、尙一團の後援者を有し居たり。五九年神の義を公にし、復た論争の間に入りぬ。其後は新約全書の佛蘭西語翻譯を行ひ、之を終へて加那太に行き、既に久しく成立し居たる同胞會を訪ひ、六三年英國に歸り、論文及び批評を公にし、六四年六五年にはまた加那太に在り。六六年ニウマンの『アゴロギア』、プロ、ガイ、ス、アの解剖を公にし、同年また加那太を訪ひ、六八年之を去り、獨逸に行き留りて舊約聖書を獨逸語に譯し、之を終りて七〇年加那太へ第四回の訪問をなし、七〇年より八〇年までは斷續著作に従事し、殊に『羅馬教に就ての家族會話』の如きは熱情と思想力を以て之を行れり。七一年には短期間以大利を訪ひて同勞者を奨励し、使徒行傳に就ての感想は以大利語にて著せり。七二年七三年は七十二歳の高齡を以て米國合衆國にて大活動となし、世人を驚嘆せしめ、其後西印度を訪ひ、七四年また合衆國を訪ひ、七五年ニウマンの同胞會を訪ひ、七八年より八〇年までは多く舊約聖書の佛蘭西語に從事し、之がため屢々佛蘭西を訪ひ、

ダルマダン

一には長く滯留したり。八一年『改正譯新約全書に就ての書翰』を著し、希臘語不定時制に關し改正譯者の判斷を非難したり。之より先き七二年其著『英譯新約全書』の序文に既に此事を言ひしが、此外にも其の學殖の深きを屢々現はし、希臘語冠詞に就ての意見はドナルドソンの見に近きものを發表せり。七七年より八一年迄の『聖書立證及び評論』には屢々辯證を寄せ、ウイリアム、ロバートソン、スミス等の『大英百科全書』に於ける有名な文章、ミルの論理學、奇蹟、ヒウムの事等に關する論評等を之に依り公にせり。彼は神學上に於ける如く哲學上にも獨特の色を發揮し、カント哲學を熟知し、之をミル哲學をも同様に見識し、關係を絶對、自意識、無限等に關する論文を起草したり。彼の著作は大體教義的論争的のものなりしも、彼は信仰的實際的のものを書くことを好み、詩篇をば非常に愛讀し、聖書を生命とせしむるはパンヤンの如かりき。讚美歌をも作り、同胞會用の讚美歌集を編纂したり。(『ブイマス、アンズレン』の條參照)。

ダルマツク

地名 アドリヤナツク海の東岸、イリヤの西に在る山地にして、保羅此處にアトスを造はしたりしとの事聖書に記さる(提後四の十)。

ダルマツク

羅馬教會の附衣。初めダルマツクに於て製造せられたるより此名あり。曾て高貴の人の被服なりしが、第四世紀の頃より羅馬教行事の公服となるに至れり。又羅馬法王のマスを行ふ時に用ひられたることあり。兩側の開きたる長き上着にして、以前は紫條を有する白衣なりしが、今は白色也。

ダン

Dan. 『以色列の支派』の條を見。

ダン

ダンカン

人名 ジョン Duncann, John, L.L.D. 一七九六一一八七〇 蘇格蘭の東邦學者アベルティンに近きワルコムストーンに生れ、一八四年アベルティン大學を卒業し、エサンバラに學び、二五年准允を受け、二六年セザ、マランの感化にて悔改し、三一年グラスゴウに住し、四一年蘇蘭教會の猶太人傳道者としてヘスに行き、四三年エザンバラのニウ、カレンツの希伯來語及び東邦語教授となりて死する時に及ぶ。彼は非凡の人にして深遠なる思想家たり、力ある談話者たり、諸方面の學問に通じ、會ふ人々を悉く印象せり。希伯來語には精しく云ふ程ならざりしが、學生をば其の高潔なる人格にて化し、宗教經驗に於ては懷疑より信仰に至るまで凡てを包みたり。

断食

断食 Fastung. 慣例 (一) 猶太人に於ける断食 通常に云へば舊約に在りては神の定め給へる公の断食は唯一つあるのみ、即ち贖罪日に於ける断食也(利十六の廿九以下、廿三の廿七以下)。然れ共國民的大災あり、若くは國民的大要求起り、若くは國民的大罪惡の告白すべし者ある場合に方り、公の断食の日を定めて之を行ふは舊約の精神に展れることに非ず(士廿の廿六、母前七の六、王上廿一の廿七、代下廿の三參照)。巴比倫に俘囚たりし間猶太人は贖罪日の外に四の吉日を守れり。即ち四月、五月、七月及び第十月にして(亞七の一、七、八の十九)第四月の断食はサムソンの月の十七日に行はれ、エルサレムがチアアデザルのために取り、日々の犠牲を献ぐることを能はざるに至りし事實を記念せんと守られたり。傳説に依れば此日の断食は又以色列人が金の犢を作り、之がためモーセが律法の板を碎さしことを記念せんために守

ダの部

断食

られたる者也といふ。第五月の断食はアアの月九日に行はれ、第一(後第二)の神殿の滅亡を記念せんために守られ、第七月の断食はナスリの月二日に行はれ、ミツパに於けるゲデリア及び其徒の死を記念せんために守られ、第十月の断食はテベツの月十日に行はれ、エルサレムが初めてチアアデザルの爲めに圍まれたる日を記念せんために守られたり。此外アアの月十三日にはエステルの断食行はれ(帖四の十六)以上六日の断食の外現時猶太層には廿二の吉日を有す。然れ共此は凡てに非ず。一週二回即ち月曜日と木曜日とに断食するは猶太人の慣例にして(路十八の十二)彼等が此二日に之を行ふは、モーセが再び律法の板を受くるため木曜日(シナイ山)に上り、月曜日に下り來れりとの傳説あるに依る。マルドフの中には断食に關する詳細の規定あり。エツセチ人は肉體を服する方法として規則正しく断食し、三日間引續き何物をも食せざること屢々之れありき。現今の猶太人は贖罪日には白衣を着白朝を敷きて断食す、故に此日の断食を『白断食』と稱す。其他の吉日には差服を着す、故に之を『黒断食』と稱す。断食は元來悲哀を表するために行はれたる者にして(母前卅一の十三)即ち其犯せる罪惡を悲み、又は災害困難の場合に方りて神の助けを得んとするの情を表はせる者に外ならず。断食の効果に關しては屢々迷信的思想行はれたる。預言者等が屢々之を非難したりしは形式的に之を行ふ者ありしがためにして、彼等は生活上純潔と正義とを離るゝ時は形式的に之を行ふも何等の益なしとのことを指摘せり(賽五十八の三七、耶十四の十二、亞七、八)。

リしことは、アンナと云へる女預言者が夜も重し断食と祈禱を以て神に事へたりと云ひ(路二の廿七)耶穌の噓話に於けるパリサイ人が一週に二回断食したりと云ひ(路十八の十二)又ヨハネの弟子及びパリサイ人が断食に關し耶穌に問ひたることありしに依りて知るべし(太九の十四、可二の十八、路五の卅三)耶穌の断食に關する教訓は福音書中二箇處に於て之を見るべし。其一は太六の十六、十八にして、此處に耶穌は断食は神に對して爲すべき者にして、人に見せんとめを爲すべき者に非ざることを教へたり。其二はヨハネの弟子及びパリサイ人の問に答へたる場合に於ける(太九の十四、十七)此處に彼は贖罪日に於ける断食の如き猶太人の通常守れる断食に反對したるに非ず、唯是れ以外一定の方法を定めて幾多無数の断食を強制するに反對したるのみ。(三) 基督教會に於ける断食 初代教會に於ては既に断食を以て宗教上一定の義務となしたりしが(如し(徒十三の二、十四の廿三、廿七の九、モンテニ教は更に之を進め、寺院主義は更に之を進めたる共、其發達は舊新二教會に於て各々相異れり。今其梗概を叙せんに。

(イ) 羅馬教會の重なる断食は復活前の四旬齋也。元來此断食は四十日間繼續せしのみなりしが、第四世紀に至り羅馬に於ては三週間繼續し、イリリア、アカヤ、亞歷山等に於ては六週間繼續し、後には羅馬に於ても亦六週間を採用するに至れり。然れ共日曜日には断食せざる習慣なるが故に、六週間と稱するも實は卅六日にして、四十の表儀的の數に達せんたる所謂灰水曜日を以て断食を初むることなれり。又耶蘇降誕節前にも四旬齋を行はんとする計劃ありしが、此は遂に實行するに及ばずして止めぬ。一週の或る日に断食すること亦羅馬教會の慣例にして、彼等はパリサイ人が一週に二回断食するの風を採用し、其水曜日と木曜日を變へて水曜日と金曜日となし、基督の敵に付され、十字架に釘けられたる日を讃びたり。尤も後に至り水曜日を吉日となすの風は止みぬ。羅馬教會は又猶太人の第四、第五、第七、第十月に於ける吉日を採用し、時日と其名目とを變へ、之を四季に排列し、四季吉日(Quadragesima)と名付たり。此四季吉日は曾て租稅徵集の日なりしを以て又 Argentum と名付けられたり。Vigilia も亦吉日にして、此等通常吉日の外羅馬教會は又特別の場合に特別の吉日を有す。

ダニス

ダニス スコタス

人名 ヨハネス Danus Scotus, Johannes 一二六〇(又は七四〇)

タの部

ダンス

一三〇八 頓頓學者。マッテウス、ゲエレン...

ダンス

ダンテ

世界に於てトマスは實體の關係なりとすれば...

拓のために運ばれた。院僧の誓を立て、暫く退隱...

チの部

ダンテ

外三人は羅馬に追はされ、法王ゴンファ...

ダンテ

（神聖）は後に附加せし語なり。彼は自ら此書は...

チウダ Phœbus. 人名 徒五の世因に記...

チの部

中間の状態。チウダ

チの部

チーク

記し、此誓を以て信仰の特別に嚴かなる告白にして、敬虔なる人の義務、祝福を受けるの要件となしたり(詩六十三の十一)。然れ共エホバに依りて誓ふものは、眞理と正義の精神を以て之をなし、而して誠實に其誓ふ所を行はざる可らず(耶四の六、十二の十六)。而してバアルの如き神ならざるものに誓ひ、又神に誓ひ乍ら王に誓ふが如きは罪也とのこと指摘せられたり(歴八の十四、番一の五)。耶蘇の時代に至り學者及びババライ人等は、宣誓をなすことに關し、煩瑣なる規則を設けたりしが、此は明に道徳を破壊し、且神の名を濫すことなりしが故に、耶蘇は之に向て非難を加へ、當時の誓は虚偽にして眞語を蔽ふために神の名を呼ぶに過ぎずとなし、人は唯『然り然り、否否』と云ふべし、更に誓ふ可らずと戒めたり(太五の卅四以下、廿三の十六以下)。然れ共耶蘇は絕對的に宣誓を禁じたるに非ず(太廿六の六十三)。保羅も亦神を呼びて誓ひたることあり。時と場合と環境とに應じ宣誓をなすは聖書の教訓に悖れりといふ可らず。

チーク

人名 一五一四一五七 英國の有名な希臘學者。劍橋に生れ、一五四〇年ヘンリー八世より生地大學の第一回勸定希臘語教授とせらる。英國に於て希臘學を復興せしは彼と『サー』トマス、スミスとの力なり。五四年王子エドワードの師とせられ、四七年エドワードの即位するに及びて重用せられ、劍橋のキングス、カレッジの校長、内閣書記官長、樞密顧問官等に歴任す。然れども五三年ウェイン、グレーニ獨立に黨してメーより官職財産を悉く没收せられ、一年間塔獄に禁錮せらる。赦免の後許を得て大陸に遊び、ストラズブルヒに留まりて希臘語を教

チの部

朝鮮。超絶過境。超絶神論。超絶論

へ、同地の英人教會にて勢力を得しが、政府は之を危険とし義計を以て之を捕へ、五六年英國に護送す。彼は此に於て其の説を取り消し、他の新教徒の裁判にさへ與り、女王より舊の地位と財産とを與へられしが、後大に悔悔して死す。彼は當時の大なる希臘學者なりしが、歐洲新教の名士と交り、性格の美なる人なりしが、唯だ雄心を缺きたりき。馬太傳と馬可傳一部との改譯をなし又多くの著作あり。
チツェンドルフ Tschendorf. 『ドイツン・エントム』の條を見よ。
地方傳道師 『定住傳道師』の條を見よ。
超自然説 Supernaturalism. 『學說名』 超自然とは自然に對する語にして、自然の法則、自然の勢力以外に、之に超越せる法則及び勢力の活動あることを認むる者を超自然説といふ。基督教は其他の宗教の如く自然に發達したる者に非ずして、特に神より啓示せられたる者也といふの故を以て、其他の宗教を自然の宗教と稱するに對して超自然の宗教と稱せらる。又所謂奇蹟と稱するものは、自然の法則以外に活動せる一種の作用にして、超自然の勢力に其起源を有すといふの故を以て超自然の作用也と稱せらる。然れ共自然と云ふ超自然といふは單に比較の語に過ぎずして、其間に絕對的相違ありとの義に非ず。神より出づといふ點より云へば、凡ての宗教は超自然的にして、發達進化した今日の状態に達せりといふ點より云へば、凡ての宗教は超自然的也。又其起源より論ずれば、凡ての勢力作用は超自然的の所爲に歸するを得べしと雖も、他もより見れば所謂奇蹟なるものも自然の法則を以て説明し得べしと認むる者に非ず。奇蹟を以て一概に超自然力の干渉と見るは超絶神論的思想の遺物にして今日の學者の

超絶論

取らざる所也。『天啓』及び『奇蹟』の條參照。
朝鮮 『韓國』の條を見よ。
超絶過境 Transcendence, Transcendent, Transcendental. 『高語』 超絶 (transcendence) なる語は、神學上にて、世界と神とを別に見て、神は世界を離れて存在すといふ場合に用ぬ。世界と神とを相即して、世界を以て神の顯現也となし、又神を世界以外に在りとするも、其力を以て自然及び人間の中に宿れりとなす内在 (Immanence) の觀念に反對する觀念を表す。煩瑣哲學者はアリストテレスの純粋な超絶せる觀念を過境的 (Transcendent) 又は超絶的 (Transcendental) と稱せり。カントは此二語を區別し、前者を以て經驗及び認識の領域以外の義に解し、後者を以て先天的の同義に解せしが、又此二語を混用せしこと少からず。彼に依れば神、靈魂、本體等は經驗及び認識の領域以外に在るが故に、此等は過境的又は超絶的對象也。
超絶神論 『超絶』及び『超絶神論』の條を見よ。
超絶論 又は超絶哲學 Transcendentalism. 『學說名』 カント哲學の術語として、經驗及び認識の領域以外に在るもの知識を吾人に與へんとするものをいふ。即ち對象に關する先天的認識の可能を説明し、且斯くの如く對象に適用せらるべき先天的概念と、此概念を適當の制約の下に適用して起る原理とを組織的に排列するものにして、一言を以て云へば超絶的の原理を研究する哲學をいふ。今日にては此語は廣く意義にて、凡てのカント派の哲學、例之テイ、エチ、アインの如き哲學にも應用せらる。又美國文學上にてはエメラルンに依りて代表せられたる、經驗主義及び偏理主義に反對し、直感的、心靈的、超絶性的の要素を重視する

チの部

長老

長老

長老 Presbyter (episcopos) 『職名』 思想を超越論と稱す。年齢は必ず経験を加へ、從て人の尊敬を受け勢力を加ふ。スカルタ人の『ゲルシマス』(Gerasimus) は共に長老(年寄)を意味する語なり。以色列人の間にては長老は人民の代表者又治者たり(出三の十六、廿二の廿一、民十一の十六以下、書七の六、母前八の四、耶廿九の一)。猶太人の業議所及び地方議院の議員も亦『長老』なりき。新約時代にも長老制度は教會に採用せられ、爾來發展して以て今日に至れり。元來長老と監督とは名を異にしたれ共同し務をなす者にして、其の起源は使徒行傳六の一以下に示せる如く、エルサレム教會にて使徒の提言に依りて七人を選びたる時に在りき。クブリアエスが此の七人は唯所謂執事の務を執りたるのみと言ひしは誤りなり。使徒行傳中には之を執事と呼びたる所なく、其務は執事の務よりも復雜にして之と全く別になり居れり。クリソストモスの觀察したる如く、七人は長老にして執事たりしなり。此の二重の務を奉ぜしものから、其より長老職と執事職の二つが出て來りしなり。長老が執事の執る務を執るやう記しあるは徒十一の三十に、アンタオケの教會の長老は猶太の信徒を救ふため金を集めて送りたるを初めとなす。而して他の所に基督教徒の自由の大問題を議論し、書翰を贈りし者は、エルサレムの使徒及び長老なりしを記せるを以て見れば(徒十五)長老が物質上の事のみならず靈的事にも與かりしを知るべし。且又長老は保羅がエルサレムにて其の最後の宣教師の事を報告せし席にも出席し居たりとあり(徒廿一の十八以下)。尚又ヤコブより委任を受けたる長老は病者のために祈り、之

長老主義

に看を注ぎたりとあり(後五の十四以下)。異邦人中の基督教徒間に在りては長老は有力なる人々にして、保羅はルストラ、イコニウム、アンタオケにて之に按手禮を授け(十四の廿三) エペソの教會の長老を柔和に訓諭し(廿の十七以下)、撒馬五の十二、提前三の一以下、多一の六以下には、長老に統治と靈性の監督とを全うすべきを勧めたり。彼前五の一四にも亦同じ教あり。提前五の十七を以て、長老に治會長老と説教長老とありしに非ずやと思ふは非なり。長老の務には共に是等の務を含み、説教の力ありし者は説教したるなり。來十三の七と十七にも同様の語句あり。去れば長老は教會を治め且教へし者にして、彼等は會衆の上に權威を有し、會衆の靈性を守りし者なり。特に説教者なりしに非ず、何となれば當時男子會員は凡て説教し得たりとあり。又後世の所謂平人長老なるもあらざりき。何となれば當時尙舊俗の區別立ち居らざりければなり。彼等は會衆の中に在りて其上に立ちしなり。長老と監督と區別せらるるに至りしは使徒以後の時代なれ共、何時如何にして區別せらるるに至りしやは今日より之を斷定し難し。(長老と監督との關係に就ては『監督』の條、執事と長老との關係に就ては『執事』の條、長老主義の主張及び發達に就ては『長老主義』の條を見よべし。又『教會政治』の條を參照せよ。
長老主義 Presbyterianism. 『制度』 長老主義とは長老派の信仰並に制度を併せ稱したるものにして、此等は共に聖書に基づくせらるるものなり。
(一) 原則 (イ) 教會政治の形式 長老主義といふ名は、其の政治の形式 Presbyterianism (長老派)

長老主義

より出でし者にして、此の Presbyterianism (長老派) なる語は、新約聖書の中に七十一回起り、其十回若くは十二回は年齢又は社會上の地位を意味し、他の場合には職務上の地位若くは性質を意味せり。猶太人は皆な此の語にて耳馴れ居たり。福音書中猶太人の長老は民の長老祭司長及び長老。又は單に『長老』とあるは皆な其なり。路廿二の六十六には『民の長老』(toi presbyteroi tou laou) なる語あり。徒廿二の五には保羅の語として『凡ての長老』(hoi presbyteroi) といふあり。元來此語は希伯來人の政府及び諸市の政治、並に各地會堂の役員のことと指せるものにて、希伯來人の聖書には對する所に此名あり。彼等は年齢の長じたる者の中より選ばるるを以て、希伯來語にてエケニウム (Eke-nium) と稱し、長者の義也。七十人譯には Presbyteros と譯せり。而して此長老は『以色列の長老』民の長老と全會の長老等にして、人民全體もしくは各地より選ばれて民を治むるものとして記さる。福音書中對する所に會堂の事を記す。此は教會と同じ意味の語にて、場所のことと言ふ時にも會衆の事を言ふ時に均しく用ひらる。巴比倫因時代より猶太人は安息日又は祝日に諸の市邑の會堂に集り、神の言を讀み又論くを例としたりしが、此の會堂は何れも其の會衆の選べる長老を有したりき。『會堂の宰』とは即ち是れ也。斯く以色列人民は、古くより國家の事に於ては教會の事に於ても、長老政治に馴れ居たり。彼等は何れも基督教も其弟子も共に以色列人なれば、彼等は何れも幼時より何れかの會堂に屬し、其の長老の監督指導を受けたるや明にして、彼等は此の制度以外に他の制度を知らざりしなり。此を以て長老主義の主張者

長老主義

子の部

長老主義

長老主義

長老主義

は、長老政治は希伯來の預言者、祭司、諸王の是認したる所、また基督と其の弟子等の自ら是認したる所なりと言ふ。エルサレムの教會及び他教會の組織は如何なりしか、別に記述なれども、長老主義の人々は、其等は必ず遠き昔より猶太人全體が慣れ來り、初め基督信徒も慣れ居たる形を取りしものなること明なりと論じ、使徒行傳六の一より六に執事の起原を記して長老の起原を記さるは、既に初より各會衆間に長老が存在し居たる故ならんと言ふ。基督信徒は猶太人の會堂より除かれしを以て、自ら基督の會堂を組織し、かくて會堂は教會となりたりき。兩語が同じものを指せることは推二の二に依りて明なり。母教會既にかくの如く長老職を有して立ちしかば、西利亞其の他の地方の猶太人基督信徒の會堂も、思ふに同じ型に依て立ちしなるべく、其後使徒等の説教に依て各地に猶太人異邦人の集りて立てたる會堂も亦同じ型に従ひしなるべし。バルナバとサウロが小亞細亞を巡りて説教せしとき、凡ての教會にて彼等に按手して長老とせりと言ふ。又保羅がテサロニに附りしといふ書には、汝をクレテに残せば、我が汝になせし如く汝をして凡ての市にて長老に手を按かしめんためなりと記せるは即ち之を證するもの也。

長老主義者は尙主張すらく、*the elders* (監督) *the presbytery* (長老) は、同じ役員を指す同意義の語なり。監督ては語は希臘人又は異邦人の教會の時に用ひ、新約聖書中唯五回出でたるのみ。徒廿の十七と廿八に依れば、保羅はエルサレムへ上る途申エペソの長老等に書を附り、聖靈が彼等に *episcopos* (監督者) なしたる其の詳を監督 *episcopos* を教へしことあり。提多書一章には監督は監督

教師を以て管轄無道遠信備等の侵入を防ぎ、教義の清潔を維持するを勉め、善惡に對しては直ちに除却復旧の途を講じ、聖靈の一致せる標準を維持し、全體の財産を合せて全體の幸福を謀ることを志せり。而して此等の目的を達するに於て、教會には諸階級の政治所を設けり。即ち特殊教會の會議(小會)と長老會(中會)と大會とを設けり。此には憲法に依れる代議の主義徹底し、且不正を正し、説を導むるために告誡上告の途を開きあり。聖書の究理に基づくのみならず、決して傳説や習慣や人間の究理に基づくものに非ずと主張し、新舊約聖書を以て神の啓示を含むのみならず、神の心の啓示なり、信仰及び實行の唯一無二なる規範なりとし、非正經や法王の勅令や教會法の全體をば聖靈に由て書かれたる書に非ずとして之を排斥せり。全體より之を言へば、長老主義は羅馬主義に對するプロテスタント主義を取り、アキウス説、ソーサヌス説に對する三位一體説を取り、ペラヤウス説、アキウス説に對するカルゲイン説を取り、人間の自由力と其の思想言語行為に關する責任を説くに、人が有罪状態を罪の力より救はれ永生に入るは、徹頭徹尾神の恵に由りて十分に行はれ、人は全く之に依りて、自力に依らずと主張し、神の無限主權と其の絕對統治を最も強く説き、贖罪の目的を達するためには、神は人の凡ての力を侵奪せざるまゝ全く之を御し了ると唱ふ。長老主義は又アダムの子孫に先天的墮落性を有し、原初的正義なく唯だ神が罪の世のために死ぬべく其の子を與へ、救

子の部

長老主義

長老主義

長老主義

傳者、福音の説教者なり、神の家督の主權者に非ず、唯だ眞正の意味にて使徒の相續者なり、彼等は皆な兄弟なり、基督のみ其の主なりと説き、長老主義こそ原始の監督制なれ、高僧制は之が腐敗したるものにて、大都監督其他が特權を奪ひたるもの、終に教長の口實となり、最後に羅馬法王の爵稱までなりたるものなりと唱ふ。

長老主義には教會には見ゆる教會と見えざる教會とあるを認む。見えざる教會は世の終に至るまでの凡て顯はれたるもの全體を包み、見ゆる教會は長幼となく全世界の眞實な告白する者を包む。此の一教會は土地人種等のために別れたる多くの部分に分れ行くなり。されど各部分に決して孤立せず、一の大なる全體の一部として相連なり。故に又信徒の幾何かに定期定所に公共禮拜、禮典執行のために集り、互に契約する所あらば此は特殊の教會なり。此の特殊教會は聖書に形どり、教義は清く禮拝は精神的なるべし。而も此れ一の教會なり。一の特別の組織體なり。其れ以外それ以上何等特殊の階級に依歸すべからず、其の在るまゝ其の爲すまゝに委されざるべからず。さはいへ此等特殊の諸教會の組織及び監督に於て、長老主義は代議政體を取り、附近諸教師及び諸教會の評議協力を一定の主義制定の下に行はしめ、萬事を時と場所の事情のまゝに委せ、矛盾に陥るに委すを防止せり。此を以て時を定めて會議を開き、共通の利益を謀る也。且又教會をば一大共和體と見、善く活用せられし信仰及び秩序の形式に依りて、其の諸局部に一の有機的の一致を得せしめ、教會の互に連れることを表明し、特殊の教會には其の特權と權利とを得せしむることを心かけ、又善真なる

開子を新に生かし型にするために聖靈を與へたる其の賜くべき恵に由りて、救はれ全く神に凡ての信者、到れり、聖書に現はれたる神は、贖罪てふ永遠の計劃目的を何時にても實行進捗せしめ、之に由りて數獨子耶穌基督を榮光あらしめ、其の贖の血を以て救へ得ざる人々の永遠の救と榮とに於て、抗すべからざる力を以て働きて、其の用を徹底せしむと唱へ、此の教義は聖書に於て啓示せられ、敵の城を攻め陥すに於て神に由りて強大なる力あり、個人の更生、人類の向上に於て強大なる力あり、永へに先受とを廣く傳へ、全世界に眞と聖とを効果あるやうに弘め、心を引き上げ、清め高くするに於て強大の力ありと唱ふ。

(二) 歴史 基督教會に於ける長老主義の近世の復興は、宗教改革の初期に始まる。不幸にして改革等は聖靈に於ける基督の血と肉の關係に就て説を異にし、ルーテルの説に就きし者ルーテル派と呼ばれ、ツウイングリーに就きし者、其の教義にも戒規にも最も法王制の誤謬を排斥せしかば、レフォルムド派と稱へられしが、一五二三年十月のチャウヒヒに開かれたる會議にて、長老主義正式に採用せられ、其より改革教會の特別の主義となれり。佛蘭西語端西にては、フアーレル、ゲイレー、カルゲインの教に由り、一五三五年同主義を採用し、一五五五年エーゲノーに之に加はり、カルゲインの「基督教組織」に據りて佛蘭西レフォルムド教會を立てたり。白耳義及び獨逸のレフォルムド教會は一五六〇年頃より起り、蘇格蘭の教會も其時ツワン、ノックスに導かれ法王制より離れ、英國にてはカートライトの下に一五七二年長老制度發達したり。英國國教會の方は教義にては改革主義を取りしも、高僧制を留め、共

子の部

長老派

和政の時長老制となりし後又舊に復せり。愛蘭の長老主義も英國共和政治と同じ頃より始まり、次の代には英國領民地に長老主義立てられ、直ちに勃興せり。今や長老主義は全世界に播まれり。

このを建言せしが、此は私欲より出でしに非ず。彼等は此等教會の收入を教職の維持、人民の小、大學教育、及び貧民救済のために用ひんとしたりき。

した。此點に於ては勿論英國教會や天主教會に優ること能はざりしも、第十六世紀より既にウォルウ、アカナン、アレキサンダー、アレジアス、アン

【長老長老教會】(一) 歴史 蘇國教會は一五六〇年創立したるものなれ共、法律上にて確立せし

三十年なりしが、政府政策の變化の中に蘇國人民は長老主義を愛し居たりき。革命に由り一五九二年の蘇國舊條例は再興せられ、同國の監督制長老制の争は終りたり。

の世成したる告白は、一六四七年の總會議決に於て正式に此の新告白に代へられ、一六九〇年ウィリアム及びメアリー朝に、國會が長老教會を再興したる時また之を復興せり。

子の部

長老派

らんと期し居りしに、一五七二年いづれ其の期となり、此にイスにて教會の召集行はれし時、貴族等の私心のため、忽ち王が尙未丁年なればその理由を以て監督制全體を延期することとなりぬ。

三十年なりしが、政府政策の變化の中に蘇國人民は長老主義を愛し居たりき。革命に由り一五九二年の蘇國舊條例は再興せられ、同國の監督制長老制の争は終りたり。

の世成したる告白は、一六四七年の總會議決に於て正式に此の新告白に代へられ、一六九〇年ウィリアム及びメアリー朝に、國會が長老教會を再興したる時また之を復興せり。

長老派

長老派

長老派

長老派

子の部

長老派

長老派

長老派

「長老派」の教會(小會)といふ。教會會議は一般會議の設けられある大部會にはなきものなるが、此の教會會議は其の教會の牧師と其の補助たる長老二人以上より成る教會會議にして、教會の戒規を行ひ、其の權内にある宗教上の事件を定むるものなり。第二の會議は長老會(中會)にして、或る限られたる範圍内の地方の牧師と長老代表者より組成するものなり。此會は教會會議の管轄を聽き、其他の權威を行ふ。更に高等の會議は大會議なり。此は方面地を稱せらるる範圍内の長老會議員より成る。故に方面地會議の別名あり。館内の凡ての長老會を監督し、凡て其下に屬する會議を治す。最高會議は總會なり。總會は代議院にして、全長老會より選ばれたる教師及び長老、蘇格蘭大學及び御料市よりの代議員より成り、年々開かれ十日間開けり。是れ教會の行政又最高裁判所にして、同時に立法府なり。されど立法權をば長老の多數が同意し、又「長老會令」と稱する憲法と調和する時に限りて實行したり。

とも稱せらる。されど此書を用ふるは人の隨意に委せ、自由の新を許すこと多き點に於て他の式文大に異れり。之れ共和政治時代までは用ひられしが、其時舊習より同じく正式に決議に由て新しき「指令」に代へられたり。此の「指令」の稱號を詳記すれば「ウェストミンスターに於ける神學者會議にて同意せられ、總會と蘇格蘭會とが共に一六四五年アンノにて可決したる指令」に由て是認したる神の公共禮拜に關する指令」と云ふなり。此の指令は新舊の型に非ず、唯だ其の範例にして、禮拜の一致を助くるために作られしなり。序言之を讀す。長き間「共同遵奉書」も「指令」も強制的に之を用ひしめず、一六九〇年の革命確定後「指令」の實質は通用實行せらるべきことなれり。

せられしは前述の如く一五九二年と一六九二年となり。されど國立は決して教會會議の事に關して國家に服従するを意味せざりき。教會にては基督が首長なりといふ説を主張せしは蘇格蘭教會の右に出づるものなし。全教會は又國家行政者の其の權威内に在る政を行ふを非せざりし、獨立的なる事に於て彼等の干渉するに反對し、初より終まで徹底的獨立及び宗教獨立の兩原理は何等必然的衝突なくして獨立すと思ひ、之を以て教會並びに國家の義務となしたり。國家の法律も此の問題に就ては教會の要求を維持し一六九〇年の國會決議、合同令其他にては、教會の事實的事に就ては教會の會議は最上廷なりと宣言したり。裁判權も然りとせらる。教會の事は教會會議之を裁判すべしとせられしなり。

子の部

長老派

長老派

長老派

即位に至り、女王が聖制を奨励し至上權を要求したるため、全く此の主義は杜絶せられたり。此に於て清教主義は起りぬ。清教主義は教義に於てはもろくカトリック主義を取り、教會政治も長老制度を取り、禮拜上の僧權を排したるものなり。教義の事は死活の問題として彼等の間に多年論ぜられ、國會へ向け單純純粹なる禮拜の請願書提出せられし後、長老主義は正式に制定せられて、一五七二年十一月二十日當時倫敦より遠からざりし「ウェストミンスターに於て英國最初の長老會開かれ」(制定書)定められたり。牧師も會員も至て少數なりき。是れ實にウェストミンスターがエザンバラにて死して後第十四日に相當せり。英國に長老主義の種子を蒔きし者はノックスなりければ、其死は大行撃なりき。英國長老派の中に思想家著述者又受難者として大なるはトマス、カトトワイトなりき。斯くて長老主義は發して清教徒生活となりたり。

主義とコロムウェルの感化に由り、國會は教會の決議を實行することを自ら控へたること、ウェストミンスター報告は蘇格蘭にて、正式に調印せられたれど、英國にては前後正式に調印せられざりき。是より二十年間長老主義の說明としたることはなかり、唯だ之を聖書真理の說明としたることはなかり。是より二十年間長老主義の獨立教會たり、此間其の事業も成績善かりしが、獨立教會派とコロムウェルとは、長老主義が國立教會の不寛容主義を取り、英國に於ても新英州に於ても他教會に自由を許さぬを以て之を厭ひ、之がため長老主義は危ふき地位に立ちしが、終に一六六二年の聖パルトロマイ祭日に於て國立を廢せられ、二千の教師は免職せられたり。パックスター、ハワ、ベーツ等も其中に在りき。一六八八年長老主義は斥けられて、政治上宗教上の權利をも失ひ居りしが、英國にては他國に於ける如く敢て抗争せず、唯だ忍んで之を受けたりき。

同前より既に他教派よりも著しく會員の増進を高くしたりしが、合同後更に之を高くしたり。英國長老教會の活動の中に最も活氣あり最も高尚なるは、支那宣教師なり。最初の宣教師は勇敢にして聖徳ありしが、アブリ、シー、パインにして、其の活動幾何もなくして死にしも精神は永く残り、其後同志の士女之を繼げり。

即位に至り、女王が聖制を奨励し至上權を要求したるため、全く此の主義は杜絶せられたり。此に於て清教主義は起りぬ。清教主義は教義に於てはもろくカトリック主義を取り、教會政治も長老制度を取り、禮拜上の僧權を排したるものなり。教義の事は死活の問題として彼等の間に多年論ぜられ、國會へ向け單純純粹なる禮拜の請願書提出せられし後、長老主義は正式に制定せられて、一五七二年十一月二十日當時倫敦より遠からざりし「ウェストミンスターに於て英國最初の長老會開かれ」(制定書)定められたり。牧師も會員も至て少數なりき。是れ實にウェストミンスターがエザンバラにて死して後第十四日に相當せり。英國に長老主義の種子を蒔きし者はノックスなりければ、其死は大行撃なりき。英國長老派の中に思想家著述者又受難者として大なるはトマス、カトトワイトなりき。斯くて長老主義は發して清教徒生活となりたり。

主義とコロムウェルの感化に由り、國會は教會の決議を實行することを自ら控へたること、ウェストミンスター報告は蘇格蘭にて、正式に調印せられたれど、英國にては前後正式に調印せられざりき。是より二十年間長老主義の說明としたることはなかり、唯だ之を聖書真理の說明としたることはなかり。是より二十年間長老主義の獨立教會たり、此間其の事業も成績善かりしが、獨立教會派とコロムウェルとは、長老主義が國立教會の不寛容主義を取り、英國に於ても新英州に於ても他教會に自由を許さぬを以て之を厭ひ、之がため長老主義は危ふき地位に立ちしが、終に一六六二年の聖パルトロマイ祭日に於て國立を廢せられ、二千の教師は免職せられたり。パックスター、ハワ、ベーツ等も其中に在りき。一六八八年長老主義は斥けられて、政治上宗教上の權利をも失ひ居りしが、英國にては他國に於ける如く敢て抗争せず、唯だ忍んで之を受けたりき。

同前より既に他教派よりも著しく會員の増進を高くしたりしが、合同後更に之を高くしたり。英國長老教會の活動の中に最も活氣あり最も高尚なるは、支那宣教師なり。最初の宣教師は勇敢にして聖徳ありしが、アブリ、シー、パインにして、其の活動幾何もなくして死にしも精神は永く残り、其後同志の士女之を繼げり。

子の部

長老派

風に遭ひて吹き返され此の計劃を中止せり。されど其頃の新興州にては、牧師も人民も精神に於ては長老主義を取り、六四八年のケムプリア大会、一六六二年のホストン大会にては、教會に於て治會長老を置かんとし、獨立政治を愛して獨立政治に反對し、長老主義をアラワン主義の中間を取らんと思し居たり。彼等の主義の殆ど長老教會に同じからんを以て居たるは、コトソン、マザリーの書きし「マザリア」の中に現はる。大英州及び愛蘭に於ける第十七世紀の紛亂中、多くの長老教會牧師及び人民は二國より米國に渡り、會衆教會の中へ入りしが、當時會衆教會は長老教會と多くの差異なく、殊にコネチガット州諸教會の如きは長老主義を融和したる獨立政治を取り居たり。ハートフェルド北部聯合會は、一七九九年に同州教會は會衆教會に非ず、長老教會なりと宣言し、其等教會は眞々長老教會と呼ばれたり。此等の教會より出で立てられたるロングアイランド及びイーストウエルシーの諸地、民地等、彼等が組織したるサウスアムステルダム(一六四〇)サウスオールド(四一)エリザベスマウン(一六六六)ニウアーク(六七)の諸教會は、何れも機會を見出だすや直ちに長老教會となり、クヤマイカ教會の如きは其の組織當時より長老教會なりと自稱したり。(ロ) 最初の長老教會。チャールズ二世治世後半中(一六七〇—一七五)の迫害により、蘇格蘭及び愛蘭の長老徒米國へ逃る者少からざりしが、其頃新興英州公定の教會制度は會衆制にして、紐育地方にては和蘭式の長老教會制立ち、英人間には英國の教會のみ許され、グアルフニヤにても監督教會のみ認定せられ居りしに、東西ウエルシー、ペンシルバニア、デラウェア、メリアンランドにては自由の政治を取ら

長老派

長老派

れ居たりしかば、勢ひ新來者は自由ある地方に定住し、其所にて第十七世紀の後半微弱なる長老徒殖民地を造りたり。一六八〇年此の殖民地の一より愛蘭北部の一長老會に牧師を求めしかば、八三年フランシス、メーグミー(Megumy)任職赴任し、メーグミーのレホカスに定住し、其の附近の民を集めて長老教會を作れり。新興州より轉じ來りて長老教會に傳道する者ありき。(ハ) 最初の長老會及び大會。第十八世紀の初頭メーグミー、デグリス、ウイレルソン、アンドリウス、テロー、マクニッシュ、ハムプトンの七教師はヒラデルヒアに會合し、ヒラデルヒア長老會を造り、此に米國長老教會は組織ある活動に入りしが、尙外には保護なく内には力弱く、唯だ信仰に依りて賑ひたり。間もなくメーグミーとテローは死にしも、新來教師あり、一七〇一年には米國に於ける最初の教師任職式ありて、一七二〇年には教師十一人、教會十二ありき。一六八一年長老會を別してヒラデルヒア、ニウカサス、ロングアイランドの三長老會とし、ヒラデルヒア大會を作り、教會は十七となり、紐育、ニウカサス、ペンシルバニア各地方に各數個の他の地方に散在せり。間もなく此の教會に二教師加入し、教師は十九人となりたり。(ニ) 教義標準の採用。其より教會は確實に進歩し、一七二九年の大會には教師は二十七人現在し、初より名簿に正式に採用すること就ては何等の活動教義標準を見出す。唯だ教師も會員も蘇格蘭系統の人多かりしを以て、蘇蘭教會が一六四八年以來採用せるウエストミンスター信仰告白及び信仰問答を奉じ居たりと思はるるのみ。然るに歐洲の改革教會の

或者にはアルミニウス説ヘラキウス説アウクス説ソナクス説大に行はれ、蘇格蘭及び愛蘭にさへ傳染し、加ふるに超絶神論は諸國の教育ある社會に滲入して之を殘害せしかば、米國の長老教會は此等の誤説を防護せざるべからずとして、此に自己等の信仰を明白に告白するの必要迫れるを感じ、一七二九年の年會にて熱心討論の末、大會は驚くべき滿場一致を以てウエストミンスター告白の最も堅固なる形式なりとして之を自己等の信仰の標準となすことを決し、且つ其の實質的ならぬ點又不必要の點は論外なれど、此の告白の何所に對しても疑を拂む者は教師たるを許さず會員として受けずと宣言せり。(ホ) 最初の分裂及び和合。以上の討論の間にも、其後の會議にも、神學上教會政治上著しく相異れる意見現はれ來り。教師は大抵外國より來りし人にて、米國生れといへば新興州出身の人々なりき。前者は「舊派」又は「舊光」を稱せられ、後者は「新派」又は「新光」を稱せられ、教師候補者の資格及び試教の方針に就て意見を異にしたり。舊派は學殖に重きを置き、新派は眞摯の信仰を第一とし、舊派は神學科程全部修了を要すとし、新派は國々時代に應じ、持説さへ健全ならば著しき天才と熱心とを尊び、斯くの如きものを例外とすべしと言へり。此等の争論に續きて宗教的熱心と精神的復興とを起り、新興州の内外に神恩を蒙れるを自覺し、又其の證のあるもの續出し、教師を要すること愈々多く、平民的説教も最も重ぜられ、到る所より招かれ、所謂「大覺醒」とはなれり。ショルフ、ホワイヤット、フィールドが英國より來り、大西洋岸をウエルシアよりニウハンプシャーまで擴張説教し大群衆を引き寄せしも此時なり。此時新派の方に敢て彼を擁護に

子の部

長老派

選へしも、舊派は反對こそせざれば危ぶみて之に關係せざりし者多かりき。一七四〇年の大會にて兩派はニウアルンスウイタ長老會の不規律ありふ問題より衝突し、一七四一年まで争論あり。アルンスウイタ長老會は脱會するに至り、和蘭の人々は調和を謀りしも功なく、終に大會自身が分裂し、多くの教師と教會は紐育長老會、ニウアルンスウイタ長老會及びニウカサス長老會の一部と共に一七四五年脱會して紐育大會を組織せり。舊派の方は固より多数なりしも、人民は新派に同情せしかば、會員も實力も感化も迅速に増加せしが、一七五八年五月此の分裂は調和復舊せられ、新派は教師七十二人、長老會六、舊派は教師廿二人、長老會三を以て再合し、紐育及びヒラデルヒア大會を稱し、一百以上の教會を有したり。其より二十五年間革命と獨立とに至れる政治的動搖の間長老教會は常に自由の味方となり愛國心を刺激したり。(ハ) 最初の總會。平和回復後教會の一層の發展は謀られたり。教會は既に盛大に赴ける事なれば、今や蘇蘭に於ける如く總會を組織すべき時なりとせし、一七八五年より一八八三年の準備をなし、一八八三年長老教會は紐育、ヒラデルヒア、グアルフニヤ、兩コロライナの四大會區に別たれ、八九年五月總會議をヒラデルヒアに開きたり。之より先一七七九年四教師は更に自由を欲すとして大會より脱し、八〇年モリスの獨立長老會を組織し、九二年にも九三年にも一八〇七年にも分離長老會起り。之をモリス派及びウエストチエスター聯合長老會、北方長老會、サウトガ長老會と稱せしが、暫くにして絶え絶えに併せられたり。(ト) 合同の計劃。第十八世紀中に教會は南に西に

長老派

長老派

延びて、傳道者は各地に行き、教會を組織せしかば、新興州の派道傳道者も衝突あらんことを恐れ、一八〇一年の總會議はコンネチガット州の獨立政治教會と合同するを立て、長老主義會衆主義混合の殖民地に於ける教會組織の方法を立てたり。此は非常に好果ありて、紐育州及びオハイオ州の新興地にては兩主義相違んで行はれつゝ一致し、一八八〇年頃には二十六の長老會、殆ど五百の教會あるに至りり。(チ) カンパランド長老教會の分立。第十九世紀に入りて宗教の復興著しく、一八〇三年の如きは殆ど凡ての長老會區信仰の燃ゆる如き様となり、教師の要いよく切なりしかば、教育低き者にして特殊の才能あるもの動士又は傳道師となること非常に多かりき。一の長老會は此種の動士に正規の授手禮を授けしめて大會より賞賛せられしが、之に不服なりして多くの教師脱會し、一八一〇年二月別に長老會を立て「カンパランド長老會」と稱せり。此派後には米國長老教會諸派中の一大派となりり。(リ) 教義上の不和合。英米第二戦争(一八一二—一五)後教勢の振興また著しく、聖書、小冊子の頒布及び内外の傳道は非常に多かりき。一八八一年には總會議は奴隸制度を非難したり。又新興州より出でし「新神學」一名ホプキンス説に對しては頗る警戒を加へしも、此の學派は次第に勢を増し、舊派は大に之を憂ひぬ。此の兩傾向は一八二七年より三三年迄の信仰振起時代に更に其の度を強くし、ニウヘヴン神學に對する警戒公然發表せられ、アルバー

ト、バーンスはヒラデルヒアにて、ライマン、ピーチナルはシンシナナにて長老會より審問を受け證實せられしが、總會議は二人を正當としたり。全教會は此の論争のために騒ぎ立ちぬ。折しも奴隸問題のため米國非奴協會の設立あり、此の事南方の教會の大割割となり、兩派の反對陣に益々著しくなれり。(ニ) 大分裂。一八三七年五月の總會議にて、舊派は既往七年間に唯一回多数なりし自派が、此時は復た多数なるを見るや、單に其の勢力により教會憲法の制限を顧みず、西部紐育の三長老會、オハイオの一長老會を其の内部の教會教師も除名し去り、其他此種の卑劣手段を行ひたり。激昂は著しく全教會は鼎沸の如くなり、壓迫せられし派は三七年八月紐育州オハイオに會して抵抗策を講じ、三八年の總會議にて新派は上述の四長老會の議員を登録すべきを要求せり。議程之が拒絶せらるるや團體は二となり、二の總會議組織せられ、教會は此に分裂せり。財産問題は訴訟後新派の手に歸せしが、後再審となりて決せず、兩派は別々々に進み行けり。一八五〇年其後には過激奴隸法案、新派及び新興州に奴隸制を行ふべきをいふことのため人民また動搖せり。此時新派は兩派反對黨に同情し、五六年紐育にて、五七年クワイグランドにて公然之を發表せり。之を以て南方長老會の多くの者は脱會し、長老教會一致大會を造れり。此大會は後南部長老教會に合併せり。一八六一年南方諸州分離して南北戦争起るや、六一年のヒラデルヒアに於ける舊派總會は政府に黨し、新派は勿論然りしが、聖年舊派の南方諸長老會は全く北方より別れ、一教派を造りたり。是れ即ち次項の南方長老教會なり。(ル) 教會の再合。斯くて一八三八年の大分裂の最大原因となりし異分子は、大抵兩派より離れ去られたり。殊に奴隸所有者等の謀復の結果奴隸全廢行はれしに依りて、多年の論争の原因は無くなり、内亂に

子の部

長老派

依て北方は互に一致せし上に、新神學は信仰堅固に長老主義を表はすものなること明かなり、兩派は此に共に先の日の過を悔ひ、共に一の系統のものなりとの感加はり、一八六二年文通の創立、六六年にはミソリー州セントルイスにて一堂に相會し、結合委員任命せられて再會の議を建つべきことを托せられたり。六九年五月兩總會は紐育にて會合し合併の議を決し、更に此の決議を各長老會に廻付し、全十一月ペンシルバニア州ピッツブルグに於ける兩總會を合にて兩派長老會の最大多數は之を賛成したること

主権の所在に關する議論あり。或は終局主権は合衆國全體を本位として人民これを有すと言ひ、或は舊の植民地、後の州を本位として人民これを有すと唱へ居りしが、一八六一年五月ピッツブルグに開會したる長老會(舊派)の總會は、當時南北を危急に瀕せしめつゝありし此の問題に關する一議案を採用したり。南部の長老教徒は此の行動は假令眞理にもせよ誤謬にもせよ、教會のなすべきことに非ず、教會之を爲すは憲法にして國家の義務を侵害したるものなりと信じ、プリンスストン神學校の博士チャールズ、ホッパ其他總會議員四十五人の議案に對し抗議を提出して曰く、此の議案は政治問題を解決するものたるや疑ふべからず、此議案は單に憲法及び合衆國に對する忠信を確定するのみならず、又實に凡ての教會と牧師の名に依て聯邦政府を強くし扶助し獎勵するものに外ならず。されど我國の市民の忠信はも

Amalgam)と稱し、從來の信條及び制度を廢用する、こと爲せり。南北戰爭終了後合衆國長老教會と改稱す。(ロ) 他教會との合同、南部一政大會(The United General of the South)との合同の議は、一八六二年に議定せられし委員の交渉に依て進行し、翌年實行せられ、牧師百廿人、教會百九十箇、會員一萬二千人同派より加はれり。一八六七年北部總會より分離したるケンタッキー大會も、一八六九年に至り牧師七十五人、教會百二十七箇、會員一萬三千五百四十人を以て合同し、同じく北部より分離し居たるミソリー會も一八七一年牧師六十七人、教會百四十一箇、六七年牧師六人、教會三箇、會員五百七十六人を以て、ルチャア大會より分れて來り加はれり。(ハ) 對外活動、は別に局を置かず、年々總會にて委員を設けて之をなせり。外國宣教は支那、日本、南亞米利加、希臘、以太利、墨其西古、及び西印度人の間に及び、アラウカ國內には盛なる學校をも立てたり。内國傳道は維持基金、傳道基金、慰勞養老基金の三種を集めて之に依りて行ふ。外に出版事業あり、神學生教育あり。何れも相應に經營せり。(ニ) 學校、ニオン神學校はハイリニア州プリンスエドワード縣にあり。一八二一年の設立に、ハイリニア大會北コロライナ大會を維持し、總會之を管理す。此外に南コロライナ州コラマビアの神學校、アラバマ州タスカローラの獨人牧師養成學校あり。神學校ならぬ學校にてはハイリニアのハムデン、ペンシルバニア、北コロライナのデビッドソン、ペンシルバニア、南コロライナのアドワ、カレツ、ペンシルバニアの中央大學、ミソリーのウェスト

長老派

長老派

此派は合衆國に於ける長老派中最大の教派にして、一九〇七年の調査に依れば、此派の教會數一萬八千九百九十三箇、教師八千八百廿二人、會員一百三十一萬二千七百七十五人あり。(一) 合衆國南部長老教會、(イ) 起源、合衆國にては憲法制定の當時より、有力なる政治空間に居り

の關係に就て議論のため分岐ありし、其外は極めて平穩にして、教會は徐々確實に進歩せり。一九〇七年の調査に依れば、此派の教會數は一百九箇、教師一百十三人、會員九千六百三十三人あり。教義は蘇格蘭教會の取りつウェストミンスター告白を守りしが、特に契約徒にふ名の示す如く、公共なる社會的立契は新約時代に於ける諸教會諸國民の必ず行ふべき義務なること、及び教會は有機的一體なるが故に、此等の約束の義務は之が含める目的が全く行はるるまでは、彼等を制束すべきことを最も重大なる個條とせり。此を以て契約の條項は慎重に起草せられ、小會及び中會にて決定せられ、最大多數の賛同を経し後、一八七一年のピッツブルグ大會にて立誓調印せられ、次で全國の諸教會之に從へり。此の契約は蘇格蘭の國民契約及び蘇格蘭同盟聖に契約の主

界の主なり、政府は神の制定する爲にして、予當の誓保回復者たる基督の下に置かれたる受造物中の一たり、凡ての國民は基督に忠信を盡さるべからずといふ立場より、此教會は此の主義を何等かの形にて認め、之を其の法律に顯はさるる政府とは協同することを拒み、合衆國の憲法には實に此等のことを明に言ひ顯はさるるのみならず「我等人民此の憲法を制定す」とあるは神の權を侵したる故あり、又憲法にては聖書をも安息日をも基督教道徳をも官吏任命に際し其基督教徒たる資格をも認めず、行政上に基督教徒の形を取るべきことを法律にて定め居らざるより、此教會は憲法に就て立誓すること、若くは立誓を要する行為をなすことを拒み、之を要せざる職務等を自由に行へり。此を以て憲法の此等の缺點を信する所をば改良することを欲し、之がためには如何なる犠牲をも厭はざるべしとなし居れり。(四) 北米長老教會(總大會派) 此の一體は蘇格蘭の改革教會より出でたるものなり。蘇蘭にては法王制は一五六〇年廢せられ、一五八〇年蘇格蘭國民契約の起草ありて人民上下之に調印せり。是れ天主教の侵入を防ぐためなり。改革長老教會の基礎は此時据えられしなり。蘇蘭と英國の王位がウィリアムス六世に依て一に合はされし後、一六〇三年王は教會の首長たることを要求し、且つ奉養して長老會は共和政治の國にこそ適すれと言ひ、一六一七年には蘇蘭教會に英國教會の儀式を課せんと謀り、其子チャールス一世は暴虐を以て父の政策を踏襲せり。一六三七年禮拜書の式文蘇蘭教會に入れられ、之がため一六三八年の道徳的大革命となり、國民契約は修正補加せられ、更に改革教會維持のため、一六四三年英國蘇格蘭同盟の改革派は蘇格蘭同盟及び契約を採

子の部

長老派

ミンデル、カレツ、ペンシルバニアの西南長老大學、同州ケンヤ、カレツ、テキサスのオースチン、カレツ、アラバマ等あり。(二) 教義、他派の長老教會と同じくウェストミンスター告白と信仰問答とを用ふれど、南派長老教會が特に重を置く點は、教義を忠實に固執し、長老教會の歴史に從ひ所謂自由意見を排すること、教會の靈的なることを重じ、會議は教務以外の事を一切議せざること、權力は皆な耶穌より出づるものなれど、憲法は此の權力を運用するために諸種の法廷を指定したるを以て、或る法廷が自己に指定せられたるより以外の權力を運用するは違法なりといふことなり。

此派は合衆國に於ける長老派中北派に次ぐ教派にして、一九〇七年の調査に依れば、教會の數三千一百九十二箇、教師一萬六千六百人、會員廿六萬二千三百九十人あり。(三) 北米改革長老教會(大會派) 此派は一名契約徒と稱し、蘇格蘭長老教會中の一六八八年の改命確定に服するを肯ぜざりし者の系統に屬す。同確定中にはエラストス説は容れられれど、契約徒がノタス以來奉持して居り、殊に近く二十八年間權體たる迫害を受けつゝ守り來りし點をば含み居らぬこと多きを見て、最も熱心なる契約徒は此の決定に服従すること拒み、國教會より離れて一の熱心なる獨立の小團體を成し、其中より少數の者も北米に渡りて多くは大西洋岸に散布移住したり。蘇蘭の母教會は之に教師を送りて巡回、説教、司式等なましめしが、一七九八年に至りピッツブルグにて最初の北米改革長老會成立し、一八〇九年同市にて大會開かれたり。一八三三年に教員と國の行政制度

長老派

長老派

子の部

長老派

用し、大英憲法の一部となれり。其頃より蘇格蘭改革長老派は『契約法』と稱せらるるに至りぬ。一六四七年四月に於てウエストミンスター信仰告白及び大小信仰問答を採用し、一六四九年第一第二戒規書に種々の附加項を加へ、遂に改革を成就したり。次でチャールズ一世の虐刑、チャールズ二世の即位を回復せんとし、教會は分裂し、二十八年間の迫害あり。多くは流亡を蒙りて共向終りまで忍びし者あり。チャールズ、カメロン、ドナルド、カーウヤ等は其の著しき者なり。彼等は一六八〇年キヤンパーン宣言を公にし、君主にして其の臣下との真正なる關係を破り専横する時は、臣下は忠信の義務を免ぜられ、君主を助け護るを要せざるに至ると言へり。此の精神の煽動者は反逆を以て罪せられしも、未だ十年を待たずして、大英國民は一六八九年ウィリアム三世を王位に戴きて此の精神を實行し、一七七六年には同じ精神は米國の革命ともなりて現せり。彼等の言は過激なりしも、而も自由を重じ、今日英米國民に見らるる剛健なる精神を善ししたり。

ウィリアム三世の即位に由り、宗教改革の朝は終了し、英國及び愛蘭には監督制度立てられ、蘇格蘭には長老制度立てられぬ。而して王は教會の至上權者となれり。是れ其の契約法等の初より排し來りたる所なりければ、曾てスチュアート家の専横に忠信を誓ふを首せざりし者どもは、此の國立の教會より分離したり。彼等は又行政者等が教會の權を奪ひ、其の獨立を害するを以て、基督を唯一首長とすといふ精神に反するものと思ひて分離したり。十六人以上其等の人々は一人の牧師もなく、唯だ新舊の

長老派

團體として組織を立て、『第二改革』の期中は教會の現狀を維持し居りしが、一七〇六年教師ジョン、マタミラン國立教會を出でて彼等の中に入り、一七四三年教師ネーション(Neeson)また彼等に合し、同年他の二教師また治會長老等と來り加はりて、改革長老會を組織し、此の一體より蘇格蘭愛蘭英領亞米利加及び合衆國の改革長老會は其の教職を傳承したり。一七五二年教師カスベルトソン(Caswell)は蘇格蘭改革長老會より米國に行き、愛蘭の改革長老會より行ける教師ドブソン(Dobson)及びドブソン(Dobson)を合して、一七七四年一長老會を造り、北米にて新に改革長老會を成せり。一七八二年此長老會は解散して聯合教會の一長老會と合併せしが、兩方に不平等ありて終に再び分れ、此度は三派を生じたり。此を以て十年程の間に教師ウィリアム、マカカラフ、キング、マクキントレー等、各自の關する蘇蘭及び愛蘭の長老會より派ばれ、合衆國に於ける改革長老會の事を規定せんために協議せしが、一七九八年ワシントン市にてマクキントレーとワソンの二教師は、治會長老等と共に會合して北米合衆國改革長老會を再興したり。當時教會は南カリフォルニアリグランドに亘り、西の方はオハイオまで散在せしが、長老會は三區委員に分會せられ、一八〇九年に至り各區は長老會となり大會を組織し、一八二三年更に必要を認め總會を組織せしが、議員中合衆國の憲法は神と道徳を無みせるものなり、故に改革長老會の會員は其下に在て投票し又は官に就く能はずと論ずる者あり。之に對して憲法は缺點多けれど、根本より無神無道主義には非ずと論ずる者ありて、議論分れ、一八三一年此事を自由意見の問題とせしが、而も一八三三年の總會

長老派

にて或る牧師等其の同意者は此の問題を其上論ずるを拒み、總會より脱せり。此の教會の教義はウエストミンスター信仰告白、大小信仰問答、及び改革主義說明中に示され、教會の禮美は詩篇を用ゆ。會員の資格を十分に準備する、小兒を教育すること、實行を善くすることは教會の最も注意する所なり。一九〇七年に於ける此派の教會數は廿三箇、教師廿三人、會員三千五百人にして、尙一八〇八年の創立にかゝるワシントン市の神學校あり。一八三六年開始せる北印度に於ける宣教師あり。其他英領亞米利加及び合衆國內地に於ける内國傳道團あり。

(五) 北米一教長老教會 此教會は蘇格蘭及び愛蘭の長老教會より出でたり。一七四二年ペンシルバニア州ランカスター縣ナースター郡より既に聯合長老會に向ひ牧師派遣の請求あり。エベネザール、エドモントン、アレキサンダル、モンクタイフ、ウィリアム、ワイルソン、ウォームス、フィッシュヤル等一七三三年蘇蘭ケーンズアリアにて按手禮を受けて赴任せり。而して一七五三年まで屢々同様の請求あり。同年には既に聯合大會組織せられ、アレキサンダル、グラットリー(Gratley)及びアンドリュア、アレン、ワット派遣せられしが、彼等は來りて故國教會の命に従ひ、同年十一月ペンシルバニア聯合長老會を造り、之を蘇蘭の同大會に屬するものとなしたり。然るに一七五〇年頃蘇蘭改革長老會より同様の請求によりて、ジョン、カスベルトソン送られ、其後マシワ、ランド、アレキサンダル、ドブソン愛蘭より來りて之に合し、一七七四年三月改革長老教會長老會を組織せしが、八年を経て一七八二年六月に至り此の派の全體と聯合長老會の大部分とは同意して合

子の部

長老派

同し、翌年の十一月合同の大會を組織し『聯合改革教會大會』と稱したり。然るに聯合派の牧師及び教會中には此の合同に加はらぬ者あり。かくて聯合教會と聯合改革教會との二派あり。告白習儀大同小異にて、殆ど八十年間並進せしが、屢々一致すべしものなりといふ懸隔方に起り、一八四二年五月終に兩方よりの代表者ヒラデルヒヤに會して交渉を始め、一八五八年五月いよいよペンシルバニア州ピッツボルトにて合同式を舉げ、之を『北米合衆國一教長老教會』と稱したり。

此の合同の根本となる條件は、ウエストミンスター告白と大小信仰問答及び宣言なれ共、告白中の行政者權力に關する項には改訂を加へたり。又宣言は十八條より成り、告白及び問答を敷衍したるものに大抵一般基督信徒の共通的に守り居る所なれど、而も五個條は此教會の特色を現はせり。即ち奴隷制度を非難し、神の法律の違犯となせる事、秘密結社に加はるるを基督教の精神に反して禁する事、晩餐禮をば、特に此教會の告白を固執するもののみ共にすべきを言へる事、公開の社會的契約を道徳義務とし、之を教會の危機と改訂の時と云ふ如き大事の場合に於て爲すべきことを要求せる事、及び詩篇を以て世の終りまで神の讚美とすべしと言へる事是也。以上の諸標準に後又教會政治及び戒規書と禮拜指定を加はり、是等が教會の法律となりて、教師長老及び會員の一體に調印すべきものとなれり。教會の政治は長老政治にして總會は最高廷たり。合併前より聯合教會とも修道者養成に力を盡し、各々米國最初の神學校を立てたり。即ちマサチューセツ州アンドーヴァルの神學校(一八〇八年設立)とニウヘンシャー州プリンストン神學校(一八一二)なり。

長老派

されどより先一七九四年聯合教會は博士ジョン、アンダーソンに任してペンシルバニア州サードイース、グレイダに神學校を立てさせ、十年後の一八〇四年に聯合改革教會大會は博士ジョン、エム、メイソンに任じて新學校を組織せしめ、翌年紐育市に開けり。其他にも神學校を立てられしが中に就いてオハイオ州ヒニアの學校、ペンシルバニア州アレゲニーの學校は最も盛なるものなりき。外に普通學校六箇あり。教會の活動のためには内國、外國、及び解放喜望の三宣教師、教會擴張、教育及び教職補助の三局ありて總會の下に屬せり。最近の統計に依れば(一九〇七年)聯合教會の數九百六十箇、教師九百八十七人、會員十二萬七千二百人なり。

【加那太に於ける長老教會】 長老派は歐洲よりの最初の移民に由りて加那太に入り行き、第十八世紀の中頃には長老派の教師ノグアスコチア及びグベックにて傳道したり。英佛戰爭ありて一七六〇年加那太が英領となるや、除隊兵と蘇格蘭よりの移民は沿岸各州にト居せり。合衆國革命戰爭終りし時には、新英州民中の王黨にして此に移住したるもありき。故國たる蘇蘭の長老教會は諸派に分れ居りしかば、移民者等も亦宗派心を維持し、之がため加那太の長老教會は初より小派分立せり。最初の宣教師牧師は大抵蘇蘭分派教會より來りしが、第十八世紀の末には既に合衆國の長老教會及び改革和蘭教會より來りたる者もありき。アルバニー派のロバート、マカドウェルは一七九八年より一八四一年までオンタリオ州にて最も廣く傳道したる人なり。モントリアルの最初の長老教會は米國長老教會の教師之を組織し、トロントの最初の長老教會は米國改革和蘭教會の教師之を造れり。蘇格蘭聯合大會よりはスミス及

長老派

びコッタ一七六九年にノグアスコチアにて長老教會建設に着手し、トロントの市民立憲派長老會を造り、後蘇蘭の分派教會よりウォームス、マカドウェル、ヒタタラに行きて傳道し、市民立憲派長老會を立てたり。蘇格蘭教會よりは是等におくれて至りしが、ノグアスコチア及びニウアルンスウイクにて教會員を集め蘇蘭教會を組織せり。一八四四年の母教會大分離の後この教會も亦分れて自由教會と以前の教會とに別れたり。一七六五年頃ウォル、ヘンリーは軍隊附牧師としてクベックの舊市の小教會にて説教し、少しく後にベジューンはモントリアル其他にて説教せしが、一七八七年クベックに於て少數の篤信なる軍人及び官吏等始めて教會を組織し、一七九〇年モントリアルに於ても教會起り、アルバニー長老會のヤントガを牧師に招けり。一七九二年聖ガブリエル街教會建築せらる。

一八一八年加那太の全長老教會の合同計劃起りしも、蘇蘭系の教師等が運動に無頓着なりしため行はれず。然れども一派は自ら合同大會を造り、他派はコレクタル、ベルス、ナイアガラの三長老會を組織して翌年『上加那太合同大會』と稱せり。一八二五年グラスゴウ植民協會造られ、多くの教師等加那太へも送られしかば、蘇蘭の教會系の教師の數は遂に増加せしが、一八四〇年には當時十八人の教師を有せし合同大會または等を包容したり。蘇蘭一分派教會よりは一八三二年三教師送られ、續て若干人送られしかば、一八三四年には其等は加那太宣教師長老會を組織したり。當時教師九人にしてウィリアム、フレデーも其一人なりき。此派の教師十八人となり、教會三十五となるや加那太宣教師大會は組織せられぬ。一八四七年蘇蘭にて分派教會と救助教會とが

子の部

長老派

チャップのチャプナル

チャプレン

合同するや、加那太の兩教會また合同し、加那太一...

十八箇の無教會を含める加那太長老教會、百廿四...

邊の南に在る高き穹窿狀の室をいふ。ベチアクト...

合其の合同せし順序を言へば、一八七一年トルロー...

チャップ トマス Chubb, Thomas

チャプレン Chaplain

而して六十歳を以て退職すべきものと定めらる。年...

には聖クリス 同書前編を翻譯して掲載し、...

五phen, D. D.

子の部

チャペル

チャルチ

チャルチ

チャペル Chapel (拉丁 Capella)

チャルチ アーミー The Church Army

チャルチ

Church, Richard William

チャルチ

チャルチ

子の部

チャルマルス

チャルマルス

チャルチ

位を失ひ、〇三年九哩を隔つるキルメニーの牧師となり、定時説教の傍ら舊の大學にて隨意獨立の教學科講義を始めしに、當局の妨害あるに拘はらず講義者甚だ多かりき。當時一體に蔓延せし安富主義は彼の心にも浸染せり。安富主義とは敬虔より學術を重じ、獨立より國家の保護を重じたる主義なり。チャルマルス〇八年に著したる『國民的補助の範圍及び成立』は此の色彩を呈す。彼は人類の肉體的及び社會的要求に應ずべしと云ふことを以て心を充たし居たり。然るに折し折し家庭内に隔起り、自らも病で死に垂んとし、一年にして慈母をを得たり。



スマト チャルマルス

其頃博士プライウスターに喝せられてエザンバラ百科事業に著手を約し、初は三角學に就て書かん心なりしを、終に轉つて『基督教』といふ題を取り、自ら深く基督教の奥義を研究し、其の真味を獲得し、斯くて全く一の基督教者となれり。會員も其の教師の一變せしに氣付けり。チャルマルスは心全く燃え、其の學術は救いの力を生ける真理のために活きて用ひられ、安富主義より醒を解きて今や斷乎たる福音主義となり、其の在得の能勢は斯らしき方向に溢れ注ぎ、其の結果は頗る大なるものなれり。一五年六月アウグスチーのトロン教會の牧師となり、

一六年有名なる『近世天文学上より見たる基督教天啓論』を著し、一九年聖約翰教會に轉任す。是れ古くより蘇國教會に在る貴者保護の組織が、大部會に於て實行せられ得べきを、此の新設教會領にて試験せん機會を得んためなりしなり。同教會領内には二千の家ありしを、彼は二十五區に分ち、區毎に靈的要求を注意すべき長老一人を、物質的要求を注意すべき執事一人を定め、二つの特別學校を立て、四人の真教師を用ひ、學校校に由て七百の兒童を教育し、日曜日には四五十の學校に於て宗教的教育を施したり。チャルマルスは此の組織全體の上を監督するのみならず、其の細部をも知り、自ら又之がために活動し、各家族を巡り、二年に一回づつ訪問して夕會を催せり。彼は貧者全部維持の方法を立て、之を整理して一年千四百磅の費用を二百八十磅に減するを得たり。されど此の方法は三七年に至り義務的課税の方法に代えられ、困難なば減せし、効果をも亦減じたり。二三年チャルマルスは聖アンドリュース市大學神學教授とせられ、二八年エザンバラ大學神學教授とせられ、三三年アウグスチー論文『人の道徳的習性的天性に對する外部自然界の適合』を著し大なる感動を興ふ。三四年エザンバラ市會に舉げられ、直ちに其の副議長とせられ、同年佛蘭西の同會の通信會員とせられ、三五年牛津大學より民法博士號を贈らる。チャルマルスは此時まで教會政治には主動的活動をなされりしが、其頃教會と國家との衝突は次第に困難を構へ、教員に善からざる牧師を任命すること、は不平の種となり居たり。マノッラ事件の如きは其の弊の著しく現はれたる者なり。牧師任期の時短

聘書に調印せしは會員中た一人あるのみならず、長老會は三對七の多數にて任職式を行ひ、而して其の七名の停職せらるるや、有司は干渉して停職を解除し去りたり。斯かる例到る所に起りて、終に四二年十一月之を議せんとする召集行はれ、多くの牧師等は若し匡衡の方法立てらるるに非ずば斷然獨立教會より脱せんを決議したりしが、匡衡は終に行はれず。此に於て四三年五月十八日四百七十人の牧師は總會より脱して蘇格蘭自由教會を設立し、チャルマルスを第一會長に選べり。チャルマルスは分體を先見し、豫め善後策を考へ、之に依て整理を行ひたり。而して事定まりてはエザンバラのニワカレヲザに總理して専ら教授に力を注ぎ、又『神學組織』を編成せしが、俄に此世を去れり。チャルマルスは確に大なる人格なりき。其の感化の國人に及ぶ所甚だ深く、今日尙衰へざるものあるなり。ハンナ博士の『チャルマルス博士の傳及文集』(一七八八第三版)はチャルマルス傳中の標準書也。オリファント夫人の『説教者、哲學者、及び政治家としてのトマス、チャルマルス』(一八九三)亦佳也。

チャルチ ユニオン Church Union

〔社名〕 英國教會高教派の團體にして、其目的國家全能論、純理論及び清教徒派に反對し、英國教會の教義、條例を保護するに在り。此團體は宗教上の事件に關し俗政府の立てたる法廷の權利を承認せず。一八五九年の創立に係り、現今三十一人の監督、四千人の教職及び三萬四千人の信徒を有す。會長は子爵フリアフラスにして『チャルチ、ユニオン、ガセット』と稱する機關紙を發行す。

チャルチレー、Church Rates

〔術語〕 英國教會にて其會堂修繕のため、其教區内の信徒及

子の部

チャルチ

チャルチ

チャルチ

ひ土地所有者に課する税をいふ。但し之を強制するを得ず。規定の集會に於て信徒多數の評決に依り、教會の庶務委員之を賦課す。

チャルチ ワルデン Church-Wardens

〔職名〕 英國及び米國の監督教會に於て、教區毎に任用せらるる平信徒の役員にして、教會堂の保護、修繕、會堂内の整理、教會の經濟等凡て教會の庶務を掌るを以て其職務なり。

チャンセルル Chancellor

〔職名〕 英國大法官 (The Lord High Chancellor) 大學總長等の職名として用ゐらるるの外、英國にてはカセドラル (Cathedral) のチャンセルル、監督區 (Diocese) のチャンセルルと稱する者あり。前者は英國最古の或るカセドラルの持つる最高僧官の一にして、テイーン及びチャプテルの印章を保管し、且教育上の事務を總督す。シンカーン其他にては神學校長をチャンセルルと稱す。後者は監督區内監督法院の列事に於て、通常審議士會員之に當れ共、教會の教職之に當る。あり。監督之を任命す。

チャンドラル John Chandler

〔人名〕 一八六〇—七六 英國教會の教職。サハレーのワイトレーに生れ、拉丁語美談翻譯者中の諸々たる者也。牛津クライスト、チャルチ、カレツヤにて學び、一八二七年卒業し、三一年按手禮を受け、三七年ワイトレーの『グイカー』となり、後『ワイル、テイーン』となる。原始教會讀美談(一八三四)は其の傑作にして、其他『ワイル、ハム』のワイルアムの傳、『ワイル、サトライ』説教集等あり。原始讀美談集は拉丁語美談百八を収め自己の翻譯を附せり。翻譯單純實朴なりしが、其の多くは英國教會及び他教會に用ひらる。ニウマンを除きては拉丁

讀美談を近世の用に供せしめたる點に於て彼は先驅者なり。監督ワイトレーの『古代讀美談』は同様に出版。アール、カメル、ニール、チエムス其他の同種の書は何れも其の後の出版也。其等の人はチャンドラルの感化を受けし所大なるや疑なく、而してカスワール及びニールの外は彼を凌駕し、若くは彼と比肩するものなかりき。

チャニング ウィリアム エレリー

〔人名〕 一七八〇—一八四二 米國の最も有名なるユニテリアンの牧師、又博愛家、著作家、判事にしてアイランドのニウガルトに生る。父は名譽ある判事にして、種相なるカールトン主義の人、母また氣品ありて敬虔なる婦人なりければ、幼より宗教的天性流露するものありて教職に志せり。其の回心は父の葬式の時の感動と、新英州を風靡せしワイルの感化とに由てなりき。ハーバード大學を卒へ、餘暇をばシエークスピア研究の爲めに費し、一七九八年リチャモンドに行きて家庭教師となり、此に宗教的疑惑に陥り、精神鬱閉し、身體衰弱し、一八〇〇年病人となりて歸家し、郷里にてサミュエル、ホプキンスと交はる。ホプキンスは有名なるカールトン派の人にして、フナサン、エドワーズの後を追ひ者なりき。一八〇二年チャニングは傳道准允を受け、其の熱情と其の華麗なる演説とに由て直ちに名を顯はす。世人は正統派の人と思ひしも、實はアウグスチン派にホプキンスの倫理觀を兼ね有せしに外ならず。〇三年按手禮を受け、ボストン市フエタル街のカールトン派の牧師に就職す。聽衆俄に増加せしが、彼は説教にて彼れ果つるを常としたり。博愛の事、社會改良の事を

説教に導き入れて講壇に一新生面を開きしは實に彼間もなくボストン及び附近の會衆教會に次第に非三位一體論者、非カールトン主義者となり行き、終に分離の勢明かとなりし時、チャニングは所謂『自由派』に與分し、其の首領と仰がれたり。世人は彼をユニテリアンと言ひ、彼も亦之を拒まざりしも、其の熱望せし所は宗派を棄て、一に真理を愛し基督に從はんとするに在り、自ら世界的教育に關する感情を増さんと言へり。其の寛大な性質は、凡ての人の愛する所となりぬ。彼は一方に於ては頑固なる清教徒のオールドファクスの説に反對し、三位一體、墮罪、人類全體墮落等の傳來説を攻撃せしが、又一方には偏理的のユニテリアン説を駁し、此の中間説を取れり。基督と基督教中に在る人間的要素はカールトン派の忘れたる所なるを、彼は之を尊び、基督の道徳性格の完美に就ては非常に有力なる主張をなし、基督は我等の從ふべき大理想の模範なりと言ひ、基督に於て人に對する神の啓示完全に顯はれたりと言ひ、又基督は神よりの權威に據りて諸人道の理想なりと斷じ、基督の無罪と奇蹟、殊に復活を確信し、基督の豫先存在を説かんとしたり。されば其の勇にして傳者たるウィリアム、ヘンリー、チャニングの言ひたる如く、彼はワイトレー等と同じく人間説を取りし人に非ずして、アウグスチン派の人たりしなり。而して基督に關する形而上學的問題は顯る。こと少く、歴史の方面に注意を傾けたり。されど終に至るまで彼は超自然論者たりしなり。チャニングは神學者たるよりも寧ろ説教者、博愛者なりき。夢想家に非ずして實際的改革家なりき。生活及び社會の清化高擧のために努力し、奴隷廢止、

チの部

チーユモンノ直覺説

禁酒、監獄改良、聖書弘布等には心から盡力し、人性的の尊厳を信じ、自由と進歩のあることをも確信せり。彼は物を按ずる質の人なりし、一たび起てば熱誠に燃え立ちぬ。丈短くして細長く、性には主我の傾向更になく、同情に富み、一八二二年英國にてコルリヤヤに會ひし時、詩人はいたく感ぜしと見え、チヤンニンガは智慧の愛、愛の智慧を有すと言へり。其の著書は『全集』として編まれあり、編譯者また存す。一八八〇年には誕生百年紀念會ニワゴルトに備され、紀念教會開堂せられ、小冊子發行せられたり。(チヤンニンガの傳には、其甥ダグワ、エチ、チヤンニンガの編みたる者(一八四八)フロシテアムムの編みたる者(一八八七)あり)。

チーユモン、ルイ、セバステヤン、Tillemont, Louis Sebastien. フォイニオン、ルイ、セバステヤンの條を見よ。

直覺説 Intuitionism. 學説名 直覺とは推理を待たずして認知する智識の謂なり、之れは自ら二種の意味あり。一は推理以下の五官の智識を云ひ、一は推理以上の直接の智識、即ち根本自明の真理(夫れ自ら凡ての推理驗證の基本となる智識)例之『總ての出来事は原因を有せざる可からず』『同一の原因は常に同一の結果を生ず』云ふが如き智識を云ふ。直覺説とは本来人心に此第二の意味なる直覺が存するを主張する學説の謂なり。評言すれば直覺説とは必然の觀念——例之原因結果の觀念及び數理の根本思想等——は生來人心に固有するものにして、經驗學派の唱ふるが如く經驗に由て生じられるものに非ずと唱道するものを云ふ。今之れが起原を稽ふるに、近代にありては蘇國を以て其發生地となす。トマス、ウィードは其が主唱者なりき。彼

はロウムの懷疑論に反對して起り、常識的直覺説を唱出して盛に經驗論疑説を批評したり。今其論旨とする所を抽出すれば、曰く吾人は生來普通必然の觀念を有す、此觀念たるや決して經驗に由て生じ来るものに非ず、『斯くあらばならぬ』云ふ觀念は決して經驗によりて生じたる觀念に非ず、別言すれば直覺より生ず。ウィードの學說に巧妙なる文學的註疏を興へたる者は、スナ、ワルトにして、創始的思想を以てウィードの學說に多少の變改を加へたるものはトマス、ブラウソなり。宗教上に於ては、神祕論者の靈感、又は神靈に接し、或は神と合體するといふが如き心狀を直覺と稱す。編譯の神祕論者間には、知的直覺なる語を此意義に於て使用せり。又神祕論者以外の學者の中にも、道徳的直覺又は宗教的直覺を以て心靈上の真理を直接に感得するを得べき智識を以て、之を直覺と稱する者あり。而して人の智識は必ずしも無限絶對なる實在の範圍に全く近づく可らざる者に非ずとするも、其智識なる者は直覺的、直接的の者に非ず、推論的に非ずと論ずる者は宗教上の直覺説と稱す。此説に従へば、宗教的智識の機關は理性に非ず、單に感情、信仰、若くは直接的に推理を用ふるざる領解たるに過ぎず。人間理解力の關係すべき領分は、有限の事物及び關係にして、宗教的真理はあまりに高貴莊嚴なるが故に、論理の到達すべき者に非ず、又之を成る一定の説若くは教義となし、又は真理の或る推理的系統の中に入れてべき者に非ず。再言すれば、吾人は歸納的にせよ演繹的にせよ、論理に依りて神の存在及び其性質を信すること能はず、又吾人は形式的定義及び神學の獨斷論に依りて、吾人の靈的直覺を適當に言ひ顯はすこと能はず。吾人の神

直覺説

チーサル

を信するは之を知るが故にして、吾人は之を證明し若くは之に定義を下すこと能はず。吾人は靈的真理を感ぜし又は實得すこと能はず、之を言語又は命題に表明すること能はずといふに在り。此説は哲學的學派の主張として來ることあり。又時として科學的組織的思想の冷淡刻薄なるに反對して起れる敬虔なる感情、及び宗教的生活の情操及び經驗論的形式の中に包容し難きことを表明せんとして起れることあり。又時として人の靈的性質が其最も神聖なる確信に向て理性的の與ふる疑念に對して起せる反動、及び人の知識的論理が精もすれば排斥し去らんとする物に對して起せる信仰の本能的衝動を言ひ顯はせる者なることあり。何れにしても宗教上に於ける理性の權威を拒否せんとする者也。

チーサル Geolrey. ジェオフレイ Chaucer, Geoffrey. 人名 一三四〇頃—一四〇〇 英國最初の大詩人。父は倫敦の酒商なりければ、倫敦にて生れたる者如く、其の社交的地位は上流中におりしが如し。チーサルは、一三五七年エドワード三世の第三子リチャードに事へ、五九年王軍に従ひて佛蘭西を侵し、據せらる。されど未だ和成らざる時願はれたり。其の料金の幾分は王之を負擔せしめられ、重要な人物なりしを知るべし。後七年宮廷年金受給者中に其名あり。而して常に『貴人』として記さる。之より先きフイリヤと云ふ婦人と結婚せし事も亦明なり。同女はランカスター侯ゴントのウィーンに嫁せしかザリシ、ロケットの姉妹なりしが如し。此の關係は又彼の詩中にある僧侶梅麗の語氣より察すれば、彼はフイリヤの弟が少くも其の同情者なりと思はる。されど詩中所々に羅馬教に對する教意の散見するもまた認めざるを得

ず。彼はチーサルの所作を傳へられし『愛の約束』(The Testament of Love) 中に在る種々の出来事は公の記録には少しも記されざるものなり。八六年宮廷を退き、八九年再び官に仕へ、九一年また官を失ひ、九九年ヘンリー、ポリーシアプロットが地位を得しに由て失意より歎はれしが、翌年死去す。『カンタベリー』、テールズ』は一生中時々筆を取りて書きたるもの、蒐集なるが、最も其名を高し。散文、パース、ソネット、テール』は嚴密の說教、同『メア、メアの物語』は愛の法を説明せしものなり。兩書を論め其の詩は聖書の物語や語句にて充つ。神の現在、豫定、自由意志等の問題所々に現はれ居り。

チヨツケ ヨハン、ハインリヒ、ダニエル Zschokke, Johann Heinrich Daniel. 人名 一七七一—一八四八 獨逸の著述家。マリアブルヒに生れ、オデル河畔フランクフルトにて修學し、一七九二年同學校にて文學及び史學的開單の講義を始め、九六年教授に任ぜられしも、普蘭士大尉ワニルキルが凡ての說教者は其の說話を信仰告白に合はすべしと命ぜしことあるため此の任命を拒絶し、瑞西に行き、餘生を瑞西にて送り、殊にアイッワにて種々の事に關係したり。彼は詩人、小説家、歴史家なりき。殊に『瑞西人用瑞西歴史』(一八五五)は名高し。されど最も其名を揚げたるは『瞑想の時』(一八〇六、英譯あり)なり。偏理派の人の著書中最も信仰篤きものにして、英國にて大に愛讀を受く。トワルクが『基督教神學の時』を著せし、一は此の書の感化に對抗するためなりき。

智利 Chili. 地名 南米の共和國にして、一八二七年二月設立せられ、面積卅萬七千六百廿方

チの部 チヨツケの智利

理、人口三百廿萬六千人(一九〇三年調)にして、其大半は純粋なる西牙種也。土人の中最も勇敢なるをアラウカニアと稱す。凡そ十萬を算す。羅馬教は國教にして政府の保護を受くれば、信教の自由は充分に保障せらる。教會の首領をサンチアゴの大監督とし、其下に三人の監督あり。ラ、セレナ、コンセプシオン及びアンカッドの監督是也。此等の諸監督は大統領を任ず。法王の命令も監督の書翰も大統領の許可を得ざれば、國內に於て之を公にすを得ず。西牙より分離後教會の財産及び什一税は國家に沒收せられ、其代償として國家は教職の俸給を支給せり。

チリングウオルス ウィリアム Chillingworth, William. 人名 一六〇二—一六四四 英國新教の神學者。牛津に生れ、一六二八年同大學トリニチ、カレッジのフェローとせられ、且イエズイット徒ワゴン、ヒルシー又の名ジョン、フイッシャーに依て天主教に改宗す。ヒルシーは同派の徒と共に大學及び名家の有爲なる青年間に活動し、之を改宗せしめ居たるなり。一六二五年チヤーリス一世佛蘭西のヘンリエタ、マリアと結婚せしため、英國宗教の前途いよいよ複雑となり、羅馬は有らん限りの力を盡して之を自教會へ捲き入れんとせり。チリングウオルスも命ぜられてアネーに行きしが、彼の教父にして當時倫敦監督たりしロードは彼を強制して新教に就かめしめしかば、グエーを去て牛津に歸り、改めて問題を研究せしが、其の結果心から新教に歸するに至る。之より先きマツシアス、ウィルソン又の名エドワード、ノット一六三〇年に『誤れる惡惡』て小冊子を公にせしが、三三年牛津のウインス、カレッジ長博士クリストファー、ボツ

チリングウオルス

チーに答ふる所あり。ウイリヤソンは三四年更に『基督の真理』を出だし、チリングウオルスは深く此論に注意し、精しく問題を研究し、三七年三八年に有名なる『教の安全なる途なる新教の宗教』を出してウイリヤソンに反對す。同書は今日尙讀者あり、出版の時ば善く行はれて五ヶ月内に二版を重ねたり。其の說く所は新教主義の宣明にして、新教徒の宗教は聖書全體こそ其にして其他に何もなしと論じ、一宗派の教會は一として無難なるものなしと説けり。去れど其の序文には英國教會の教義の實際に無難なるを認め居れる觀あり。此書の發行に先ちてロードは其の原稿を檢せしめたりと云ふ。彼は教會に服従したるなり。此を以て、先に拒絶せし賜給を受けて、三八年にはセラム教會の學長となり、併せてアリクスウオルスの教給を受く。彼は宗教の自由をば唱へしも政治上の自由の思想なく、四二年に書きたる『君主たごひ不度暴虐なりとも之に抗することの不理なる事』は之を表はせり。内亂には王黨に與みし、四三年にはチヤーリスに從ひてセラウマスタイ包圍中に在り、其の學問を應用して敵を射撃する時に身を隠す器を造り、四三年捕せられ、チエスターの監督邸にて病死す。彼は其時代の最も理性に秀でたる學者なりき。

チルネル ハイナリヒ、ゴットフリート Tschirner, Heinrich Gottlieb. 人名 一七七八—一八二八 獨逸の神學者。サクセンのミトワイダに生れ、ウイッテンベルヒ及びライプチヒにて修學の後、ミトワイダの牧師となり、一八〇五年ウイッテンベルヒの教授、後ライプチヒの神學校教授となり、同市トマス教會の牧師を兼ねし。偏理主義の人なりしが、頗自然派の方への傾向強かりき。

チルネル

チの部

チヨツケの智利

智利 Chili. 地名 南米の共和國にして、一八二七年二月設立せられ、面積卅萬七千六百廿方

チリングウオルス

チルネル

より以後死に至るまでのツインツェンドルフの傳記は實にモラヴィア教會の歴史其物なりき。彼はモラヴィア教會の首領となり「教會(國立)内に一小教會を設立せん」といふことを一貫せる志とし、特殊の習慣を造り、外國傳道を及ぶ限り實行し、教會をして「ヘミア兄弟會の監督系統たる承認を受けるを得しめ、自らも三七年ヤブロンスキ及びニコラヤマン兩監督より聖別式を受けて監督となり、大陸諸政府及び英國議會をして兄弟會を承認せしめ、自己の財産をば皆て教會のために費消し、萬事に付けて教會の幸福のために謀り自らを犠牲となせり。之と共に一教會のみならず基督の王國のためならんば凡ての事に力を盡しぬ。勿論反對も彼に種りぬ。屢々誤解をも受け、自ら物を極度に言ひ願はず辭も此の誤解を助けたり。争論文書は所々より編集し、三六年にはツアモンより追放せられしが、之に依りて却て其の主義の播布を盛にせり。彼は家族及び重なる補助者と共に「巡行者の教會」と呼ぶものを作り、和蘭に行き、英國に行き、至る所にモラヴィア教會を立て、且屢々軍備若くは三人にて傳道旅行をもなせり。三九年には聖トマスに行き、四一年には米國に行き、米國にては一年滞在して獨逸人間に傳道し、ハンシルバニアの獨逸人諸教派を喚んで「聖靈に於ける神の會衆」を造り、印度人間へも宣教し、ハイオンケ路谷まで行きしが、此にても誤解を受けしを善く之に對して、四九年ツアモンに歸りて追放の令を取り消し、更に彼に請ふにヘルンツフトの如き團體を領内の他所にも造らんことを以てし、最猛の敵も友と化しぬ。六〇年五月九日ヘルンツフトにて安らかに死す。獨逸、和蘭、英國、愛蘭、北米、ドイツ、フランスその他より集れる三十二の長をこ

ツの部

ツインツェンドルフ

ツウイングラー

ツウイングラー

執事彼の遺骸を昇き、墓碑には「彼は實を結ぶべく任定せられたり、而して其の實は残るべし」と記さる。固よりツインツェンドルフにも缺點なきにはあざりき。彼は其活潑なる想像信仰を言語文書に顯はすに當りて感情的なりき。時として聖書になき事をまで言ひ、且物事を決するに感情に由てせしこと少からず、他人に對しても押し強かりしことありたり。去れど其の品性の高潔なりしは此等の缺點を償ふて餘りあり。彼は基督を信じ、之を愛し、之を絶えず交はり、基督も實に死に至るまで彼と共に在したり。基督に比すれば世上の物は彼には無に等しかりき。彼は基督のため凡ての人に善をなせり。貴人にも賤者にも交はり、又善く其の途を知りたり。容貌に威あり、眼鏡を掛けし愛あり、顔には平和溫和の氣あり、社交に於ては溫和親切なりしも、何人も彼に親しむを得ざりき。其の文書は説教、讚美歌、信仰問答、歴史、文藝、信仰的論争的文章等にして百五十篇以上あり。されど多くは名高からず。

ツウイングラー フルドライヒ (又はウ

ルヒ) Zwingle, Huldreich, (or Ulrich) 人名 一四八四—一五三一 瑞西の宗教改革者。聖ゲールの村落ワイルドハルスに生る。父母は資産ある農夫にして、叔父の一人はウーレンの「デアコ」たり。一人はフィッゲンゲンの僧院長たり。ツウイングラーは少より英才の質あり、學を好み音樂に秀でしが、教職をせん定められ、パーセル及びベルンにて教育を受け、一四九九年維納大學に入り、哲學を修め、ウァデアイアン及びグララアンと交友し、フアイベル及びエックツも知り。一五〇二年パーセルに歸り、學校を教へ、神學を研究し、レオ、ユードと交友し、又トマス、ウイッマンバ

なりき。市門には「凡ての罪の全き赦は此にて行はれ得」との文字あり。瑞西國內は勿論南獨逸より巡拜者等頻り來りぬ。ツウイングラーは人情の要求上からる迷信の遠くべからざるを知りしが、説教を以て彼等に何等かの途を以て慰れを受くべきを勧め之を歸しやりたり。之に公然の攻撃を加へざりしも、彼は教會の制定と聖書の制定との相違を執つけることを隱す能はず「カレテイナル」シンネル、法王代理ツアチ、又コンスタンス監督に書を贈り、其の勢力を用ひて神の言の誤用を止め、其の純粋なる説教を回復するに至らんことを請へり。一七年に至り始めて友人等と法王制廢止の可能なることを論じ、一八年執事監督者ツアモンに公然の非難を加へて離りて逃びぬ。「カレテイナル」も法王代理も監督も之に就て何を言はず、却てツウイングラーを法王の名義附屬僧となして風雲を醸し鎮めんとしたり。而も彼等は誤りぬ。一八年此の「法王附屬僧」はツウリヒの大會議設教者としての招に應じ、風雲はますます急となれり。

書四の一より五を引き、諸食日に肉食するは罪に非ず、却て殺さんために人の肉を賣るは大罪なりと答へ、之がため諸者の中に教會の制定規則より離れし者多かりき。此に於て僧侶や年金受領者より獨逸黨や外國の軍兵使や、皆な一致してコンスタンス監督の干渉を請ひしが、監督は司教長をツウリヒに送りしに、議會の前にて司教長は討論にツウイングラーより破られ、ツウイングラーは二年四月「食の選擇の自由」を公にし、始めて斷然たる改革主義を唱ふ。此は開眼の合圖となり、教權者等も斷乎としてツウイングラーの方針を取れり。同年七月ツウイングラーは十牧師とアンワーアレンに會し、書をコンスタンスの監督ツウリヒの執政官とに贈り、言論の自由と獨身生活の廢止を要求し、八月論争書「アルケテレス」を公にす。反響は直ちに聖ゲールのフアイアン、ウワセレンのニコニコウス、シュウワイツのトラハスレル、ベルンのマルセル等より來れり。ルーテルがウイリス會議後失脚して後は、ツウイングラーは自然改革運動の中心となり、ストラスブルヒのカヒトやヘデオヤアチエル、又ヨレムベルヒのヘルツハイメルやテューレル、又フランクフルトのチーセン等と相聲接したり。ツウリヒにては離獲殊に甚だしく、執教官等は英斷に出づるの必要を感じ、時の習慣として公開討論を開能することなれり。

ハの説教を聴けり。〇六年按手籠を受けて僧となり、グラールスの牧師とせらる。グラールスに十年留任し、苦辛して希臘語を獨修し、聖書及びブルケルケ、プラトーンを研究し、保羅書翰を寫して保羅と常に在らんことを志し、オリゲナス、クリソストモス、イエロニモス、アウグスチヌス、及びロイツクリフ、ベトロス、バルドス、フラス、ヒコス、ア、ミランドラの書を讀み又エラスムスと文通し、斯くて一個の學者となり、其の教會に於て示せる熱誠と精力と、其の學問と、又其の容觀性質の美とに由り、大に世の注目する所となり、其の研究繼續のため法王より代理「カレテイナル」シンネルを介して五十ダルトンの年金を與へらる。古典文學者たり、又ウイッテンバッツの弟子たる所より、羅馬教會の教義及び戒規に對する見解は稍自由なりしが、其頃は何等非羅馬的の傾向もなかりき。其の性質は宗教的なるより道德的なりき。一五一〇年一年に出せる「迷宮」一匹の牛と多くの豚の諷刺の詩は之を示せり。當時瑞西は歐洲の假裝たり。幾千幾萬の青年は毎年他國の傭兵として出て、佛蘭西王や獨逸皇帝や法王は何れも無数の使を送り入れ、諸縣の貴族等に年金を與へて之を自己の權内に置かんせり。此を以て善き共和政の道徳は日に廢頓し、奢侈腐敗激進せり。ツウイングラーもグラールスの牧師たりし時、屢々傭兵の隊に従軍説教者となり、其の隊へべき買財を自撃し、上記の書などにて猛烈に之を攻撃し、殊に佛蘭西との同盟を非難せしに、當時自己の縣の議會にては佛蘭西黨多數を占めしため非常なる嘲罵を受け、一六年終にグラールスを去り、アイソワールに説教者となれり。

ツの部

ツウイングラー

ツウイングラー

ツウイングラー

は善く無事の事なりと言ひ、又聖書こそ最高、唯一の指針にして羅馬教會の定めたる凡ての方法、即ち僧制、告白、斷食、懺悔、巡拜、僧院制等は悉く危險なる迷妄なるを論じ、改革主義を形式的にも具體的にも顯はし、容赦なき論理を以て之を行はる。殊に最も特色ありて改革運動に深き感化を與へたるは、教會政治に就ての思想なり。彼は其の個條文にて教會の代表者たるは會衆にして僧侶階級に非ず、故に教義と教會の實行との間に起る衝突を解決するの權利は會衆に屬して僧侶に屬せず、教會の執政は國家の權威に屬す、然れども若し國家主權者にして基督の命令の外に出でなば之を離れよと云々を論ぜり。討論は全瑞西ツウイングラーの勝に歸し、改革主義はツウリヒ領内に採用せられ、法王アドリアヌス六世は彼に書を贈り、法王位以外ならん何物にても款するまゝに與へんと言ひしが、ツウイングラーは之を意にも留めず、個條文の説明を公にす。六月執政官は監督にも謀らずして市と地方との尼院を閉鎖し、尼をば家に歸らしめ、九月大會議の教職會議は解散せられ、神學生養成所となる。二四年四月ツウイングラーとアンナ、ウイッナルドとの結婚大會堂にて行はれ、多くの同業者之に徴ふ。儀式改良論は固もなく物議を起し、二三年九月彼は「テ、カノネ、ミセー、エヒキレンス」を出し、二四年八月「アンチゴロン、アドワレルツス、エムセルム」を出し、始めて聖職の意見を公にす。されど最も議論喧しかりしは像物使用の許否に就てなりき。之に就て一般の感情を和らげ、且極端に陥らしめざるため、二三年十月第二回討論開かれ、九百人列席し、フアイアン司會し、結局像物は聖書に禁ぜられ居れり、ミサは祭物には非ずといふこととなり、やがて諸教會より像物

ツの部

ツウインググリー

ツウインググリー

ツウインググリー

は無くならず、オルガンも聖遺物も去られ、祝詞や行列や儀式も多く奪われて、二五年四月復活節に於て聖職開始で改革教式にて行はれ、祭壇の代りに白布を布ける事を用ひ、普通信徒も蓋を受けた。同年「コンメンタリウス」、デ、ウエラ、エト、フアラサ、レリギオナ出づ。

斯くて宗教改革はツウーヒにて漸次に確立に進行せしが、而も尙困難なきに非ざりき。先づ之が果となりたるは再洗禮也。彼等は既に二三年より市に現はれ、グレイベル、マンツ等之を代表し、聖會の組織権を要求し、全然更生せざるものを除かざるべからずと論ぜり。ツウーヒは二五年中二回之を會見談判し洗禮に就き再洗禮に就き小兒洗禮に就き之を著して之を攻撃したりしが、彼等は其の宗教的熱情と社會的極端主義とを混同し、又獨逸の百姓一揆と聯絡ありしため、益々強硬の要を感ぜらるゝに至り、二六年三月執政官は布告を發して再洗禮の唱道者を罰することとした。次の困難は羅馬教會より來れるものなり。羅馬教會は一日とツウーヒ改革に對する敵抗を烈しくし、瑞西同盟諸國を動かさざれば、二四年一月「セルムン」議會にて同盟はツウーヒに使節を送りて古來の美風を離れざらんことを警告せしむ。ツウーヒは之に答へて、神の言と靈魂の救とに關しては他の干渉を許さずと言ひければ、同年七月同盟は再び使節を送りて同盟より除かんことを求め、之がためツウーヒも輦閣の準備に取りかされり。ツウーヒは「バーテン」にて「フーベル」エツタ等との討論に招かれし決して安全ならぬを知りて之に應ぜず、此を以て羅馬の徒は容易き勝利を得、國會はツウーヒを宣明せり。第三の困難は「カトリック」の論争なりき。カトリックは主の

晩餐に關する教義を説明するに及びて、ツウーヒは二四年十一月「アルベル」へ贈れる書に己の意見を明かにし、明白なる語を用ひて之を發表し、論争遂み行くに従ひ、更に二五年「スプサイウム」、シウエ、コロニス、デ、ユウカリスタア、二六年「主の晩餐」に關する明白なる説明、二七年「アマカ、エキセゲシス」二八年「博士マルチン、ルーテル」の書に就て之を出せり。ルーテル派の人々が主張を明白に缺きしに比すれば、彼の明快にして節制至るものなりき。終にエツタ侯「フイッパ」の斡旋により、二九年十月兩派の名士「フーベル」に會合を開き、論争は一時鎮まりしが、兩派の間には到底一致し難き所ありたれば長く無事なること能はざりき。

瑞西にては宗教改革は迅速に蔓延し、二八年一月の大會合には「ベルン」改革主義に加はり、次で「バーセル」、聖ガール、シャフハウゼン之に従ひぬ。されば又反對派も益々堅固なる結合をなし、二八年十一月には「フイッパ」を始め五個の羅馬教廷特使を結び、聖書には塊太利大侯「フェルザン」も之に加はれり。二九年四月「フーベル」、聖ガール等は公然斯くの如く瑞西同盟内の政治に外國君主を加へて盟約するを抗議せしが、答は極めて冷たかりき。次の月「フーベル」より出で行きし「プロスタント」の一牧師は公道にて執へられ、シウエツに運び行かれ、異端として焚殺に宣告せられたり。ツウーヒは此に於て直ちに開戦を宣言し、ツウーヒに立たる計に從ひて軍隊を進め、彼も一隊と共に「カッペル」に在り、將に交戦せんとせしが、仲裁者ありて兵を交へずして止み、二九年六月平和締結せられたり。されど平和の條件は不完全なれば、ツウーヒは「フーベル」一層重大なる衝突の起るべきを預言せり。「マールブルグ」會議

の間彼は邊侯「フイッパ」に囑せられ、塊太利侯家の野心に對する大同盟を造るの案を立て、かくて豫備交渉「エネチエ、佛蘭西」、其他の諸國と結ばれり。同時に彼は瑞西同盟の再成のために熱心を注ぎたりき。されど一時に種々の案を立つるもの多く存し、ツウーヒは「フーベル」にて「地位危ふきに至れり。彼は即ち神治政體を立てんと欲せしかば、市にも漸く不満を抱く者生じ、彼の包摂主義の政治計劃は敵に攻撃の及を與へたり。此に於て彼は六月下旬議會に出で、辭表を呈せしに、全市は驚駭し凡ての反對は止み、彼の勢力は再び無制限となれり。去れど最後は既に接近し居たり。羅馬教の諸國の凱進とツウーヒ市がツウーヒの助言にも拘らず維持せし嚴密なる禁制とは終に衝突の因となり、三一年十月十日羅馬教諸國はツウーヒの諸國に軍を進め來れり。ツウーヒは軍隊を率ひて出で、防ぎ、カッペルにて激戦あり、ツウーヒの軍は全く敗れ、ツウーヒは「フーベル」に在りき。彼は瀕死の戦傷者を慰めんとして身を屈め居りしに、槍飛び來りて彼を刺せり。彼等は身を殺し得べし、去れど靈を殺し得ず。とは彼の最後の言なりき。

「フーベル」に、ツウーヒは天性善く均衡を得たる人なりき。感情極端に走ること絶てなく、心幅広く性格單純高潔なり。學者として古典の如く善く人間眞生活を觀ると共に、古典學者の有せざりし所を有し、要を矯正するの意志を有し、其の計劃を實行するの最良なる途を知り、着手すれば次第に其の手を擡げ行きたり。神學も亦其の性格に應ず。煩瑣の唱へし三位一體の形而上學的説明をば彼は殆ど機械的に容れ、創造の天使や奇蹟や人類墮落や遠傳師や基督の聖司「王」等の教義に關する解釋

ツの部

痛悔

痛悔律

痛悔律

だ少なく、唯だ神と人の直接接觸の關係に於ての意義に重きを置きたり。即ち神が人に接するの途、人を通して世界に接するの途、人に於ける聖靈の内在、之に由て影響せらるゝ、神人の一致等是なり。彼の文書に於ては自らも聖書に「眞に研究せらるれば直ちに不用ならんと言へり。全集及び選集あり。英譯となれるものも多し。

痛悔 Penance 恨例

羅馬加特力教會の七禮典中の第四に位するものにて、行ひたる罪を償ひ其の赦免を得るの手段也。一方には挽回の儀式を行ひ、一方には罪に相當する罰を心から甘受して此の禮を全うす。痛悔は凡ての宗教にあり。舊約聖書の中には深めと挽回の祭物と斷食などとなりて現はる。預言者は更に精神的に此の形式を考へ、心の悔改と全生活の變化とを説きたり。古代の基督教會は預言者の此の精神的觀念を採用して、甚だ嚴酷なる實行を勵致し、保羅の言(「哥前五」)に從ひて「(改門)即ち教會の交より除く法を採用したり。されど斯くの如き絶交は終局的絶對的のものに非ず、一旦絶交せられし者も、公に其の罪を告白し、十分なる挽回をなすの條件に依り、再び教會に入るを得たり(「哥後二」)。イレニウス、テラチニウス、カプリアス、ラケテンチウス等の文書には何れも此問題を記せり。然れども公の告白には多くの不便あり、危險さへも伴ふを以て、其後特に「レオ」大法王の靈力により私の告白と認せられたり。此の告白に關しては一體に長き間意見定まらざりき。八一三年のシヤロン會議法典第三十三條には「或人々は神にのみ告白すれば十分なりと考へ、或人々は更に司祭に告白するを要すと思ふ。共に道理なり」と記はれり。然るに第十二世紀に至り「眞實悔」と「偽實悔」

てふ善現は、罪なる理由など一般に「アガスチヌス」の遺著に於ては、其書の感化に由り、僧侶は罪を免し又は之を繋ぐの力を有すといふ思想大に勢を得て、多少の制限こそありたれ、兎に角人々に承認せられ、僧侶に罪を告白するの習慣は之に由り弘まりたり。一一一五年の「第四ラテラン」會議は「イン」一セント三世を司り、カトリック及び「プロテスタント」の事を議せしものなるが、此時終に僧侶に告白することには強硬に缺くべからざる事なりと定まり、其後は強制的に之を行へり。痛悔の挽回的部分即ち痛悔の本體ともいふべき點に關しては、意見も甚だ嚴にして痛悔の期甚だ長く、全生涯に亘ることも屢ありて、罰も甚だ重かりき。されど時代を経るに従ひ意見緩和となり、罰は漸次斷食と斷食とに限られたり。罰は初は悔改の眞實なるを證するものとして考へられしが、時代を経て眞の外道行跡となり、中世には或人に課せられたる痛悔は、其の全部が少くも一部をば、他人之を償ひ得る一般に承認せられたり。マンシ集中の痛悔律集には、七年の斷食も共に斷食するもの相當の數あらば、六日に依り充たさるべしといふことあり。痛悔は一の満足なりと思惟せられたり。此故に「アキノ」のトマスと言ひし如く、眞價の拂はれる限りは、之を拂ふ者の何人たるやに問ふを要せずとせられたり。トレント會議は痛悔に關する此等凡ての點を唯だ簡短よくしたるまゝにて保存したり。希臘教會は痛悔に關しては羅馬教會と異なる觀念を有し、之を第二の「バプテスマ」即ち「涙のバプテスマ」と考へたり。尙「罪の告白」(Confession)「痛悔律」(Poenitentia)「悔改」(Repentance)の條を併せ見よ。

痛悔律 Poenitentia(Tibi Poenitentias)

痛悔師の手引書として痛悔師の信託に

課すべき規則を蒐集したるものにして、即ち痛悔師が信徒に教、免を與ふる前に信徒に要求すべき箇條の書也。古代の教會にては三二四年の「アンタラ」會議、三二五年の「ニカヤ」會議など斯かる規則を立てたり。カイザリアの「パロス」(三七九年)の此問題に關する二書翰も亦痛悔律の實行に大感化を與へしものなり。ヨハネス、スコラスチコス(五七八年死)は其の「スニダマ」にて六十八條の教律を擧げしが、六九二年の「フルラン」大會は之を確定したり。されど希臘教會文學に於ける此の後の發展は餘り重きを置くに足るものなかりき。拉丁教會にては「パシロ」の書翰に發源して、第三世紀の申項に同種類の記事のこ記されあり。「アプリア」書翰及び「アラブ」を見れば知るべし。僧院的訓練は特殊の感化を起し、之より舊アテネ教會及び愛國教會に若干の痛悔律發生し、精密に刑法の形を以て或る罪に對する或る罰を規定したり。四五六年頃の「カノニス、パトリキ」や「五四年頃の「カトリック」、ダビデ「ス」や「ギルダス」(五八三年死)著痛悔律などは尙今日に傳はれり。カンターベリーの「大監督セオドル」(六九〇年死)は英國教會のために此等の書を蒐集整理せり。彼は希臘人なりしが、其書は第八世紀より第十二世紀まで痛悔問題に關する最高の遺稿と考へられ、其中に多くの希臘羅馬傳統を含みたり。去れど彼が自ら筆を執りしことありや又は後人之を記せしや甚だ疑はし。一八四〇年發行「英國古代法律及び制度」中の「Poenitentia」Friedhof は彼の著に非ず。ヘダ、ゲネラビリス(七三五年死)及び「ヨルダ」の大監督「エアト」(七六七年死)の痛悔律も同様に、されど以上の「マンダロキ」痛悔律を「ヨルダ」は「アリア」に持ち行き、フランス國內にて大

ツの部

罪

罪

罪

在りて最も重要なものは、政治的及び儀式的要素に於て、其所謂罪とは道徳的罪過よりも寧ろ儀式的規定の有意無意の怠慢の義なりき。又神は新なる國民の王なりしが故に、神の支配の範圍内には凡ての行爲を包容し、又非宗教的律法を容るゝの餘地なく、從て道徳上の罪と法律上の罪との區別なかりき。今日にては國家の法律にては罪とならざるも、道徳上宗教上罪となること多く之をあれ共、古代の以色列に於ては、凡ての法例は神の律法の部分に爲せしが故に、其何れを破るも皆罪となりたりき。此の如く以色列の律法は宗教的性質を有したりき。

申命記の律法は神に對する愛及び人に對する愛を以て誠を行ふの動機となしたりしのみならず、誠以外義務に關する新見解を開き、且之を行はざる處に罪の念を深刻ならしめたり。且申命記には仁慈に關する教訓少からず。

律法に依れば罪の罰は死也。少くも理論上律法の嚴酷なることは驚くべき程なりき。もし個人にして罪を犯せば國民全體罰せらるべかりしが故に、其罪を犯せる個人は殺されざる可らざりき(書廿二の廿)。個人の罪にして罰はるゝことを得たるものは、故意に犯さざりし罪のみにして、之が爲め罪祭及び聖祭の罰設けられたりき(利四一六の七)。

(二) 預言者に於ける罪 罪の本質は神より離反する事也とせば、偶像禮拜は其如何なる形にして犯する事も最も大なる罪也とせざる可らず。舊約歴史の書取所の地位は即ち是にして、士師記は以色列國歩

罪の淵因を以て偶像禮拜に在りせしとせし、撒母耳前記に在りては、偶像禮拜の行はるゝこと比較的少かりしが故に、此時代には國運隆盛なりしとせし、列王紀略上下に在りては偶像禮拜の許否を以て列王の治世を測るの標準となし、罪なる語は偶像禮拜と哈同一意義を有せり。然れ共餘りに一方に偏したる此觀念は、前八世紀の預言者に至り漸次變化し、エホアの道徳的性質及び要求に關する觀念の發達と共に、罪の範圍、深さ及び其危險に關する觀念も亦發達せり。道徳上の罪を明にするの道を開きたるはアモスにして、摩一、二章に捕虜攻撃したる罪過は人々との間に行はるべき正義人情に反する罪也。ミカ及びイザヤ之に繼ぎ、ホセアは以色列人の罪は神の愛に反する罪なるが故に最も憎むべき者也と云ひ、且神の道徳的性質を最も明白ならしめ、以て罪の觀念を一層深大ならしめたり。罪に關する預言者の他の教訓は個人的及び國民的悔改也。又エレミヤ及びエゼキエルの宣傳したる個人主義は、罪の教義の發達に於て最も重要な者にして、彼等は個人は其國民若くは其祖先の罪及び運命の中に包有せらるべきものに非らずとやうに説きたり。然れ共エゼキエルも罪に關して以色列國民は連帶責任を有すといへる舊約の大思想を全く棄てたるには非ず。此思想は新約に至りて更に發達し、基督代贖の思想を可能ならしめたり。

(三) 聖文學に於ける罪 罪人の方面より罪を觀察せるは吾人初めて詩篇に於て之を見るべし。預言書に於ては吾人を痛切攻撃する歴史家若くは説教家を見るべしと雖も、詩篇に於ては自ら其罪を悔改せる罪人を見るべし。罪に對する深き感情は多く困難苦痛より起り、少くも或る場合に在りては會同の苦

難より起れり。詩篇作者の罪を悔改むるは未來の刑罰を懼るゝがために非ず、現在の苦難の壓迫あるが爲めなりき。詩篇に於ける特殊の罪は虚偽の罪にして、主として感情に關し、單に形式的に律法を守るといふが如きことには非ざりき。詩篇作者は神を愛し、神との此幸福なる關係を破ることを以て、神の面を覆く其恩恵を閉すこと也として之を罪と見たり。此思想の高調に達したる者を第五十一篇也とせし。預言の教ふる所は實際的宗教にして、罪を見るも外部的、知識的立場地よりせり。愛に在りては義は智慧にして、罪は愚蒙也、罪人は愚蒙、暗昧若くは嘲笑者也。約百記に至りて罪の思想は更に進歩し、全然倫理的となり、罪は普遍的にして人性に固著し、其中には思想、願欲の罪をも含有せりと見られたり。此最後の點は卅一章に於て最も能く表明せらる。以色列國民は早くより罪と苦難との間には密接の關係ありと信じ來りしが、此書は此問題を論じ、罪に必ずしも苦難を携へ來らず、苦難は必ずしも罪の結果也と斷定す可らずと説けり。傳道之書は人皆罪人也(七の廿)との思想の外此點に關しては特筆すべきものなし。

【經外聖書に於ける罪の教義】 ツツの書は預言の如く、義人と惡人とを對照し、惡人は矯正し難く、罪より離るゝは唯義人の悔改のみ也と云へり。左れ共又作者は罪人が自ら悔改め難しと云へる遺憾をなすを許さず、人を以て罪を犯さしむる者は神に非らずと云へり。作者は人の自由と責任とを高調し、又物質上の惡は道徳上の惡に伴ふて起りたる者にして、之が對照として加へられたる者也と云へり。ソロモンの智慧の根本思想も亦ツツの書とそれと同じく、罪は無智也、人の知識的方面に罪を防ぐために發達せ

ツの部

罪

罪

罪

られざる可らずと説けり。然れ共此等の書には、人は生れ乍らにして罪ありとのこと、及びアダムの罪に依りて罪は普遍的となれりとの思想未だ之れあらす。マナセの新婦には以色列の族長は全然無罪なりしとの思想あり。此思想は後に至り舊約の他の多くの人も亦無罪也との思想を生ぜり。エズラ第二書と保羅の羅馬書との間に密接の關係ありとのことはサンデーの指摘したる處にして、此書は此書の書かれたりし當時に於て、人は生れ乍ら罪を遺傳せりとの教義猶太教の中に在りしことを示せり。

【新約に於ける罪の教義】 新約に於て罪の意義を表するたため用られたる希臘語凡そ六種あり。即ち(一) *amartia* 及 *homoartia* 共に「罪」と譯し、前者は習慣、狀態、若くは力としての罪を意義し、又罪の動作を意義す。後者は罪の動作のみを意義す。(二) *trayghane* 及 *trayktrayna* 共に律法を犯すの義にして、前者は「律法を犯す」又は單に「罪」と譯せられ、後者は「過」と譯せらる。(三) *doxiaz* 是又律法を犯すの義にして「不法」と譯せらる。(四) *anagkiz* 神の律法を蔑視するの義にして、罪の中に含まれたる輕蔑、褻瀆を含む。「不虔」と譯せらる。(五) *skandala* 人に對して惡を爲すの義にして「不義」と譯せらる。(六) *skandala* 唯一同太六の十二に用ゐられ「負債」と譯せらる。

(一) 共観福音書に於ける罪 罪に關する教義は舊約に於て既に充分に明にせられたり。故に新約に於ては罪に關する教訓比較的少く、多くは其教義と共に記されたのみ。耶穌は罪を明にする爲めに來りたりといふよりも、罪を赦さんために來りたりといふべく、第四福音書に明に此旨を示せり(十二の四

十七) 而して彼が罪に關して教へたりし場合に在りては、舊約の教義を訂正したりといふよりも、寧ろ猶太の學者の形式主義に依りて發達したりし誤謬を訂正したりといふべし。彼はモーセの律法に靈的説明を下し、且神の國の新要求を明にして、以て罪の範圍を擴充し、又罪は儀式上不潔とせられたるものに關接することに依りて生ずるものに非ず、人の心中より生ずる者也との事を明にし(可七の十五、太十五の十一) 彼の使命及び彼が其使徒等に委託したりし使命は、神が人類に對する態度の罪の教に在る事を明にするに在りとのことを宣傳したり。

(二) 第四福音書に於ける罪 罪に關する此書の重大なることにして、十五の廿二新約に於ける此不信の罪は、舊約に於ける偶像禮拜の罪と其地位相類似たり。次に此書は罪を以て人を束縛するること也とせし、「凡て惡を行ふ者は惡の奴隸也」と云へり(八の卅一、卅六) 罪と異論との關係に就ては、常に必ずしも相關係する者に非ざることを説くと共に、又罪の疾病苦痛の源因を爲すことあるを認めたり(九章及び五の十四參照) 個人の罪に對する耶穌の態度の寛大なるは四の十七、十八及び八の十一に於て之を見るべし。福音書を全體として觀察するに、耶穌に於て顯はれたる完全なる生活の標準は、罪に對する意義及び關係を與へ、基督に對する不信は唯に力と智慧とに反對する罪なるのみならず、又善と愛とに反對する罪也とせられたり。

(三) 雅各書に於ける罪 雅各は罪の起源を以て個人各自に在りせしとせし、不法なる態に従ふ意志より來る(二の十四、十五) 又此書の中心思想は基督に非らずして律法なれ共、其所謂律法は基督の教訓

及び生活に依りて解釋せられたる所謂自由の律法にして(一の廿五、二の十二) 此律法の一を犯すは凡てを犯すと同じとせられたり(二の十)。

(四) 希伯來書に於ける罪 罪に關する此書の重要な教訓は、罪は神と人との間を離隔する原因、人の神に近づくことを妨ぐる者也とのことにして、基督は其罪に依りて二者交通の道を開きたりとの事也(十の十九) 此書は又罪の特殊なる形狀に言及し、之を恩恵より隠蔽せる者也と云へり。是れ一たび基督教徒となれる者にして猶太教に復歸するの危險を警告せる也(六の四以下、十の廿六以下) 二の十は人の苦難は罪の結果に非らずして完全に達する方法也との信仰を表白せる者也。

(五) 保羅の書翰に於ける罪 保羅の基督教的感情及び教義の中心は、罪人に對する基督に於ける神の恩恵にして、彼は神學者として福音の最も重要な點は、罪より救はるゝこと也とのことを感じたりしのみならず、又福音は自己に對する救也とのことを感じたり。罪に關する彼の教訓を略叙すれば左の如し(イ) 罪の普遍なる事 保羅は羅馬書に於て先づ異邦人悉く罪ありとの事を述べ、而して其罪は律法を有せざることに存せず、彼等は其心の律法を有せしに、之を守らずして罪を犯せりと云ひ、而して律法ある猶太人も亦律法を情み神あるを誇りて律法を犯し、斯くして猶太人も異邦人も皆罪の下に在ることと説けり(ロ) 罪の遺傳せる事 保羅は人類は凡てアダムの罪に與り、一人より罪世に入り、罪より死來り、人皆罪を犯せば死凡ての人に及べり(二の二) 之を基督の教に對照して、一の罪せらるゝ事凡ての人に及びし如く、一の義より義せらるゝ生命を得ること凡ての人に及びべりと説けり(羅

ツの部

罪

罪

罪

五の十二(廿一)此はアダムの罪が吾人に歸せらるるその義に非ず、アダムの罪に吾人は刑罰の中に含まるる義也。罪の性質が父母より其子に遺傳するの事は舊約に於て明に承認せられたれ共(詩五十一の五、伯十四の四)之をアダムに溯ることをば爲さざりき。保羅が之をアダムに溯らしたりや否やは明ならざれ共、全體として之を論ずるに、罪の性質の遺傳の思想を、之と密接の關係を有する上述凡ての人類がアダムの罪に與りたりとの思想より離すことは困難也。而して『罪の世に入り』(羅十五の十二)といへる語は罪の傾向の遺傳すべき者なることを云へるが如し。但し保羅の思想がアダムの罪に依りて人性それ自らが悪質に染りたりといふよりも、之に依りて罪世に其地步を占め、凡ての人をして罪を犯さしむるに至れりといふに在るは明にして、後のアラガスタヌスの説は自ら異れり(一)。

罪の地位、嚴正に之を云へば意志なれ共、廣義に於ては意志を動かす所のそれにして、保羅は之を『肉』(Flesh)と呼べり。『肉』とは單に情慾をいふのみならず、神の靈に關れざる人の全生活の謂にして、唯言すれば私慾を志する人全體の義也。(二)力として之を論ず。保羅は罪を以て孤立せる倫又は働の積聚也として之を見ず、人の中に在りて其意志を奴使し、麻痺せしむる力也と見たり(羅七の十七)。(三)罪と律法。保羅は以色列國民の歴史及び自己の経験を回顧し、律法の無能を發見し(羅八の三) 律法の結果は單に罪を顯はすに過ぎずとのことを論ぜり。(一)罪と死。保羅は死を以てアダムの罪を犯せる結果也と論じたり共(羅五の十二) 彼は死なる語を以て道徳的の表徴となし、神より離れ喪失の生命の滅亡する義に用ひたるが故に、嚴密に肉體上の死と道徳

上の死とを區別すること能はず(ト) 罪に死する事死は以上云へる如く神より離れ喪失の生命の滅亡することなるが故に、基督に合するは罪に死する也(羅六の十一) 保羅が肉の罪、罪の力等に就て云へるは、何れも義せらるる以前の狀態に就て云へる者にして、信仰に依りて義せられたるクリスチャンは即ち罪に死せるもの也。

(六) 約翰の書翰に於ける罪。罪に關し約翰の書翰に於ける著しき思想は、一方に於て基督教徒の罪あることを高調し、『もし罪を犯したることなしと言はば神を誑かす者とする也、其道我佛に在るなし』と云ひ(壹約一の十) 而して他方に於て『凡そ神に由て生るる者は罪を犯さず、善神の種其裏に在るに由る、彼又罪を犯すこと能はず、善神に由りて生るれば也(三の六十九)』と云へる也。蓋し前者は實際の生活に就て語り、後者は理想の生活に就て語り、主義として罪は最早基督教徒生活の中心に非ざるを云へる也。

【基督教會に於ける罪の教義】 舊約聖書に記されたる如上の單純なる罪の教義は、基督教會に至りて更に發達し、所謂墮落説、原罪説等の教義を産出せり。以下之が發達の梗概を叙すべし。

(一) 使徒時代の終りニカヤ會議に至る。最初の三世紀間に於ける基督教會には、尙未だアダムの犯罪に依りて一般の人類が直ちに神より墮落せらるべしと云ふが如き説に於てざりき。而して墮落の結果を論じても、此時期に於ては之がため道徳上の自由を減し、若くは人の性質中善なる要素を全く失へりといふが如き説は尙未だ行はれず。教會の著名なる代表者は墮落せるアダムの子孫も尙充分なる自由意志を有し、善惡を選擇し、又正當なる道徳を執

行するに必要な恩寵を利用し若くは濫用するを得べしとの説を執れり。然れ共其極端の結果に就ては、教會は一般に墮落のため道徳上の便宜を奪はれ、今は以前の如く神と充分なる交通を爲すを得ず、從て自己の弱きに引かされて惡魔の餌となれりと思惟せり。去れども如何なる程度迄道徳性之道徳力を害したりしやに關しては、確乎たる答辭を試みたる者少く、テラチオリアヌスは墮落は人の善眞の要素を斷つ程に非ざれ共、道徳性を腐敗せしめたりと説けり。罪の性質に關しては、罪は靈の自由行為の結果也との説一般に重ぜられたりしが、之と共に肉體を輕蔑する傾向あり。オリゲヌスの如きは肉體を以て好ましからざる重荷也と思惟せり。彼は又罪惡は積極的よりも消極的の者也とし、善は實在するも惡は善の反對にして無有物也と説けり。又ラタナンチウスは善の反對物として惡は道徳界を組織するに必要な者也と云ひ、又肉體を以て罪惡の中心となし、靈魂を以て善の中心となせり。然れ共此の如き説は當時一般の認許したる者にはあざりき。

(二) ニカヤ會議より中世期に至る。此時代は所謂争論の時代にして、罪の教義に關しても殆ど凡ての議論は此時期中に顯はれたるを見る。

(三) 希臘教會。此時代の希臘教會の中には墮落の結果に關し頗る強き説を取れる者あり。例之アタナシウスが人は其最初の發達に由り腐敗して獸類の如くなり、出生前既に腐敗して律法の眼を受けたりと云ひ、ナウアンスのグレゴリウスが人は其始祖の不從順と惡魔の奸計とに由りて墮落し罪せられたりといふが如し。然れ共彼等の云ふ處はアラガスタヌス派の説と同じからず。彼等は墮落せる人にも自

ツの部

罪

罪

罪

由意志の要素ありとし、人自身の選擇と努力とに依りて救を得べしとなせり。且其他の希臘教會の通説は、アダムの罪に由りて死と情慾の安全とは萬人の頭上に来りたり共、人は之がため理性と自由意志中に在る善を爲す力を失はず、故に神の助けに依りて救を受け道徳上の完全を求むるを得べしと云ふに在りき。

(四) ハラギウス、争論前の拉丁教會。アダムの罪は人類の道徳上の状態を腐敗せしめたりとなすに於て、當時の拉丁教會は希臘教會よりも一層甚しく、ハラギウスはアダムの過失に依りて全人類は峻路に彷徨するに至れり云ひ、アマブロシウスは吾人は出生前既に遺傳のために汚れたり、吾人は未だ光を見ざる前に原罪の損害を蒙れり云へり。然れ共彼等は遺傳の腐敗が全く人の意志を束縛したりとは考へず、墮落せる人にも道徳上の能力ありと説きたり。

(五) ハラギウス及び其學派。ハラギウスはアダムの墮落は單にアダム一人の墮落にして、彼が性質に受けたる腐敗は決して子孫に遺傳せずと爲し、且肉體の死も罪より來りしに非ず、肉體は素より死すべき者也、故に死はアダム及び其罪なき子孫の天運也となせり。又アダムの不從順に由りて來りし結果に就ては、唯惡例を遺せりとの事に過ぎずと爲し、自由意志に就ては、人は善惡共に選擇し得る自由意志之を行ふ才能を有し、始より性質の腐敗に妨げられず、故に人は生れ乍らの力に依りて神の律法に従ひ得べしと論ぜり。

(六) アラガスタヌス。アラガスタヌス説はハラギウス説に反して起りたる者にして、後者は極端なる個人主義を執り、人類の自然力を尊み、人は自己の働に依りて救を得べしと云ひ、前者は人類合一主義に

基き、人を卑しき者と説、全く神の恩寵に依りて救はるべしと爲せり。アラガスタヌスに依れば、アダムは知識なき小兒の如き心を有したるに非ず、善眞の心意及び道徳性を有し、高尚なる智能及び積極的精神の性情を具備したりき。而して之と共に彼は尊き自由を有し、善惡何れをも擧むる能はるべかりし、此自由は試練のために與へられたる者にして、彼にしてみれば之を善用したるには必ず罪惡と死とを免るるの地位に進みしならんも、不幸にして彼は誘惑者の試に堪へず死罪を犯せり。而して彼の罪に相應なる結果に思ふ彼の身に降り、肉體と靈魂とは死の宣告を受け、其性質の調和は破れ、肉は靈に逆ひて戦ひ、人畜共通の愛情は制す可らざる勢力を以て起り、意志は束縛せられ、其自由は唯罪を犯すの自由のみとなり、墮落せるアダムは自己の罪を犯すを制するの力なく、唯大小の罪惡中何れをか擧むる力あるのみなるに至れり。而して墮落せるアダムのの上に来れる死、腐敗、罪惡及び道徳上の不自由等は同一の力を以て彼の子孫に遺傳し、彼の子孫は生れ乍らにして不從順なる者となれり。アラガスタヌスの此説はアダムと其子孫の間に人類の合一ありとするより起りたる者にして、即ち彼は萬民は最初の犯罪者の中に在りて其罪を共にしたりとなし『吾人は夫の一人中に在りしが故に、吾人は凡て罪に墮ちたる其一人也、當時吾人は尙未だ一個人として特殊の形状を有せざりしと雖も、既に彌布せらるべき根源の性質を有したりき、而して此性質罪のために汚され、死の鎖に依りて縛られ、受くべき刑罰を受くるの身となりしが故に、人は此狀態に於ての外人として生るること能はざるに至れり』と説けり。是れ所謂アラガスタヌスの原罪(Original Sin)と稱す

る者にして、彼は其正當な罪五の十二、第一の三に取られたれ共、素より聖書の教訓には非ず。

(七) 半ハラギウス派。此派は一方に人は完全なる道徳的能力を有すとのハラギウス説に反し、他方に於て人は全く道徳上無能力也と云へるアラガスタヌス説に反し、アダムの墮落は子孫に死と腐敗とを傳せりと雖も、此腐敗は自由意志を全滅する程強かりしに非ず、人は神の恩寵を受け、又之を避くるを得、原罪は人を全く無力にしたるに非ず、唯靈力を衰弱ならしめたるのみと説けり。

罪の性質に關しては、此時代の教父は之を消極的に思惟するの傾向あり。罪の背後には絕對的意志なく、又罪は萬物の本源より來るに非ず、罪は本質に非ず、寧ろ偶有性也、偶有性なるが故に罪は缺乏、實在の減少、靈魂の空虚、虛無を表する者也と論じ、アタナシウス、ニッヤのグレゴリウス、アラガスタヌス等皆此説を取れり。當時墮落主義及び肉體を惡とするの傾向ありしに拘はらず、神學者は大抵肉體それ自らを惡とし、若くは靈の根源也とするの説を斥け、罪ある靈魂肉を腐敗せしむる也と説けり。又アラガスタヌスは罪は靈魂が目的として從はざる可らざる神を棄て、己に従はんとする傲慢若くは利己に基せりと論ぜり。

(八) 中世期又は煩瑣學派の時代。墮落及び其結果に關し、煩瑣學派の神學者は大抵アラガスタヌス説を取れり。即ち(一)原罪に關しては、之を以て性質の缺乏若くは腐敗也となし、又人各々有罪にして刑罰を受くべき者也とする點に於てアラガスタヌスに一致せり。尤もアラガスタヌスは例外にして、彼は原罪には唯一の要素のみにして、之に罪科の性質なしとし、唯アダムの子孫が彼の犯罪のために受くべき

ツの部 罪

刑罰は其罪に依りて成る也とせり。又或る人々は原罪を個人の性質と其神に對する地位とに關係せしめたる共、第一の點に就ては漸く説を異にする者あり。アンセルム・ド・ソートスは原罪を以て性質の缺乏、本來の正義の不在とせし、此不在を以て刑罰を受けるの理由也とせり。之に反しトマス・アクィナスは情慾を原罪中に入れ、是れ單に缺乏に非ず、本來の正義の缺乏也と思惟せられし者は情慾にして、靈魂の損傷を含むと云ひ、セント・ゲイットル・ユイゴに一致したり。(ロ) アダムは犯罪の子孫に原罪を傳へたる方法に關しても諸説あり。アンセルムは間接、即ち説を取り、新生の小兒はアダムの中に罪を犯せしに由りて罰せらるゝに非ず、唯アダムに於て本來の正義を失ひ罪に入りたる性質を有するが故に罰せらるゝ也と云ひて、人間的關係に依りて各人は各自罪に傾き易き不完全なる性質の所有者也との事實に重を置き、トマス、アクィナスはアダムより生れたる凡ての人は、始より受けたる性質の均しき如く一人と見做すを得べし、是れ猶一國の管内に於て一社會の中に在る人々は一體にして、又其一社會は一人と見做すを得るが如しと云ひて、人間的關係に依りて各人は自ら罪を犯し而して其罪に依りて各人に處せざる性質を傳へたる人の子孫也との事實に重を置き、(ハ) 自由意志の本質に就ては、煩瑣學派は一般にアウガスタヌスの説を取りたれ共、若くは彼の能力なる自由意志は墮落に由りて消滅せりとの説は漸く寛かにせられたり。(ニ) 罪惡の性質に關しては、之を否定又は缺乏と説くは中世神學者の特長也。(四) 宗教改革より十八世紀の初に至る、(イ) 羅馬教會、羅馬教會の神學者は始に罪を犯せし時

に有せし自由には、善惡何れにても選擇するの力を含めりと説き、アダムの子孫に於ける原罪は性質の腐敗と罪科との二要素を有せりと云ひ、墮落以後人は尙幾分の道徳力を有せざるに非ずと雖も、墮落の爲めに墮落して復たず、恩寵を離れては決して自ら原初の状態に復歸すること能はずと説けり。(ロ) ルーテル派、ルーテルはアダム及び其他の被造物の有りたりし自由は單に執意の力に過ぎずと説きしが、ハイデル派一般の神學者はアダム犯罪以前の自由は選擇の力ある自由也と説けり。原罪に關してはルーテル派の神學者は之に性質の腐敗と罪科との二要素あるを認めたる共、其罪科はアダムの行が直ちに我等に歸するに依りて來るか、若くは其腐敗の性質を遺傳するに依りて來るか、就ては彼等の間に一定の説なかりき。而して此派の神學者は一般に墮落せる人間の道徳上無力なるを高調せり。(ハ) レフケルム派、ブライングリーはアダム犯罪前の自由は單に意志するの力に過ぎずと説きしが、カルゲイン、ビーデ等はアダムは自由にて罪を犯したりと唱へたり。尤も彼等の所謂自由とは選擇の力を含蓄する者に非ざるが如し。原罪に關しては、ブライングリーは罪科の要素を除き、罪とは律法を犯すこととせり、アダムの子孫に於ける原罪は適當に罪と稱す可らず、何となればそれは律法を犯すことに非ざれば也と云へり。去れ共カルゲイン及び其他の神學者は一般に原罪に性質の腐敗と罪科との二要素ありとせり。其罪科は間接にアダムの子孫に傳へたる能を説くはルーテル派に異ならず。(ニ) アルミニウス派、此派は彼此選擇を以て自由の本性とせし、原罪に就てはブライングリーと同じく、墮落せる人間の道徳無力に關してはカ

罪

罪

ルゲインと同じ説を取れり。(ホ) ソーチヌス派、アダムの墮落は決して罪科を子孫に及ぼす者に非ず、唯自身に及ぼせしのみ。而して墮落は單に惡習の第一歩たるに過ぎず、故に根本よりアダムの性質を腐敗せしめたるに非ず、况や其子孫の性質もや、惡の傾向なる者も必ずしも特にアダムの墮落と連絡する者に非ず、唯人間が絶へず惡を行ひ習遂に性となりし者也と説けり。(五) 第十八世の初より近代に至る、自由及び責任の性質に就ては異説あれ共、アダムは其犯罪に於て自由にして且責任ありとは各派神學者の一致する所に於て、原罪には腐敗と罪科とを含有せりとのこと亦各派神學者の殆ど皆同意する所也。尤もカルゲイン派の中には、腐敗のみは遺傳する者なれ共、罪科は罪の選擇を爲す時に初めて起るものにして、必ずしも遺傳する者に非ずと唱ふる者あり。新英州神學者の多數及び長老派中の新派亦此説を採用せり。英國のメソヂスト派は通例罪科遺傳の説を承認したれ共、米國のメソヂスト派は之を否み、單に腐敗性遺傳のみを承認せり。ユニテリアン派及び其他の合理派は原罪の問題は特別に之を論ずるの要なしとし、遺傳といふ普通思想中に含蓄せしめて之を論じ、遺傳は各個人の性癖を決定する一要素也とせり。墮落せる人の道徳的能力に關しては、全然無能説を採用する者あれ共、現時の傾向は寧ろ之を排し、人は神の力を有すと説くに在り。罪の性質及び起源に關し近代行はるゝ重要な説は左の如し。(一) 罪は積極的及び積極的の兩面を有す。又單に行爲のことに非ずして、行爲の背後に在る性質の事也。而して其起源は人の自由選擇に在り。然

ツの部

罪の告白

れ共各種の罪は之を一個の私慾也と概言し得べきに就ては異説あり。ユウウス、マウレルは之に對して然りと答へ、新英州神學者の多數もエドワードの徳は仁愛即ち一般人類を愛するに在りとの立場より發せり、罪の性質は私慾に在り云へり。近時新神學を以て有名なる英國のカムベルも亦罪を定義して私慾に外ならずとせり。(二) 新英州神學者中には之に反し、罪を全然有意的動作に限る者あり、エムモンズは此説の代表者にして、オベリン神學にも此説あり、フインチー之を代表す。(三) 罪は單に積極的也、缺乏也、其起源は人の本來の不完全に在り、制限に在りて説く者あり、ライアニオン即ち是れにして、ヘッゲ之に一致せり。(四) ローター及び其他の學者の説に依れば、罪の性質及び起源は共に物慾に在り。人は物慾的の性質を以て發せり、之を變化するは其職分也。然るに物慾的の性質は常に此目的に背馳す。是れ罪の起る所以也。シューライエルマツヘルは之に近似し、罪は下等なる力が神の意識に抵抗するに在りて説けり。(五) 近時の或る學者は反對若くは對抗は發達に缺く可らず、故に罪は進歩的の道徳界に必要な要素也と説く。ヘーゲは即ち是れにして、彼は道徳上の善はある可らざるの者に非ず、寧ろ殘存す可らざるの者也、人間の善は惡を制御せざる可らず、然れ共其適當の發達をなさんには惡の提出する試惑を戦はざる可らずと云へり。【參考書】 エーレル及びショルツの『舊約聖書神學』ウアイズ、マイシワツアの『新約聖書神學』ドムルの『基督教義の系統』キッナルの『新義及び中和』チワロツク、ミウレルの『罪の基督教義』シムルトン、フイツィナル等の『基督教義歴史』等。

罪の告白 Confession, or Confession of Sins. 有せし自由には、善惡何れにても選擇するの力を含めりと説き、アダムの子孫に於ける原罪は性質の腐敗と罪科との二要素を有せりと云ひ、墮落以後人は尙幾分の道徳力を有せざるに非ずと雖も、墮落の爲めに墮落して復たず、恩寵を離れては決して自ら原初の状態に復歸すること能はずと説けり。(ロ) ルーテル派、ルーテルはアダム及び其他の被造物の有りたりし自由は單に執意の力に過ぎずと説きしが、ハイデル派一般の神學者はアダム犯罪以前の自由は選擇の力ある自由也と説けり。原罪に關してはルーテル派の神學者は之に性質の腐敗と罪科との二要素あるを認めたる共、其罪科はアダムの行が直ちに我等に歸するに依りて來るか、若くは其腐敗の性質を遺傳するに依りて來るか、就ては彼等の間に一定の説なかりき。而して此派の神學者は一般に墮落せる人間の道徳上無力なるを高調せり。(ハ) レフケルム派、ブライングリーはアダム犯罪前の自由は單に意志するの力に過ぎずと説きしが、カルゲイン、ビーデ等はアダムは自由にて罪を犯したりと唱へたり。尤も彼等の所謂自由とは選擇の力を含蓄する者に非ざるが如し。原罪に關しては、ブライングリーは罪科の要素を除き、罪とは律法を犯すこととせり、アダムの子孫に於ける原罪は適當に罪と稱す可らず、何となればそれは律法を犯すことに非ざれば也と云へり。去れ共カルゲイン及び其他の神學者は一般に原罪に性質の腐敗と罪科との二要素ありとせり。其罪科は間接にアダムの子孫に傳へたる能を説くはルーテル派に異ならず。(ニ) アルミニウス派、此派は彼此選擇を以て自由の本性とせし、原罪に就てはブライングリーと同じく、墮落せる人間の道徳無力に關してはカ

罪の告白

ツームス

羅馬教會にては私の告白又は其語告白の慣例を以て原初教會に起れり。然れ共此は私の告白は寺院生活に初まりたる者にして、元來寺院生活に於ては、思想に於ての外罪を犯すこと能はずと規定せられたるを以て、斯る場合には私に寺院長に向て告白すべき者定められたり。寺院以外に於ける私の告白は初め教職の方面より反對あり。アキア及びカムパニヤの監督は、私に犯せる罪は公に告白して之を會衆に知らしめざる可らずと論じ、其結果法王大レオは初めて私の告白を以て法律上の制度となしたり。第八、九世紀の頃に至りては漸く法律となりたる行爲は、強制的となり、キヤの宗教會議(七一〇)に於ては各人皆一年一回其管區の僧侶に向て其罪を告白すべしとのことを議決し、ワテランの宗教會議(一一一五)に於ては更に此慣例を是認せり。此告白を聽き教職を宣言する僧侶を懺悔僧(Confessor)といふ。(耳語懺悔)の條參照。第十六世紀の宗教會議は更に信徒に向て、成るべく屢々告白を爲すべしとのことを勧告したりしが、彼等は毎週一回告白を爲したり。宗教改革家は全然強制的告白を排斥せり。ルーテル派の教會に於ては、懺悔執行の準備として、此告白を成る形狀に於て保存せり。尤もカルゲイン及びカルゲイン派の教會は一般に此禮典的性質を拒否せり。英國教會の新編書中にも私の告白の事記され、一六八八年の革命以前には貴族の家庭には懺悔僧を置きたりしが如し。【人名】 ツームス、ジョン、Tombes, John 一六〇三—一六七六 英國の牧師。カールススターのゴドレーに生れ、一六二四年牛津を卒業し、聖職に入り直ちに説教に由て著はれ、殊に清教徒間

ツの部

ツレーティニ

ツレーティニ

ツ

に著る。牛津聖マリーチン教會講師、ウエルセスタ
一の説教者、倫敦のテムブル會堂の長、ゴードレー
の説教者に歴任す。ゴードレーにては近地のキツダ
ルミンスターにリナルド、パックスターあり。共
に多数の心服者を有し、何れも遠隔の地より聴衆を
引きつゝあり。兩人は絶えず論争し、殊に小兒洗滌
の事と教會政治の事に就て激論せり。五三年ツム
スは公衆傳道者推選試験者の一人として倫敦に轉
任す。五八年當める宣講と結婚して教會職を退く。
王權回復には同意し餘生を安易に送れり。彼は小兒
洗滌の烈しき反對者なりき。バックスター其他は
之に就て公開の討論をなし多くの書を著はせり。

ツレーティニ

人名

Turrettini, Jean Alphonse 一六
七四—一七三七 瑞西の神學者。フランソア、ツ
レーティニの子、ジュネヴァに生れ、同市にてイ、ト
ロンジャンの下に神學を修め、一六九一年和蘭を訪
ひライデンにて研究し、九二年英國に行きて牛津及
び劍橋にて研究し、時代の第一流の人物ボルト。
チロストン、ウェーグ其他と交はる。二十一歳の時
歸國し、以太利人教會の牧師とせられ、九七年教會
史の教授となる。一七〇五年トロンジャン死して神
學教授となる。教師として神學者としても單に人
として感化極めて強く、殊に其の父の教へし嚴密
なるカルヴァン神學を融和して成功し、又レフォルム
ド、カールテ爾兩教會の合同を奨励したるに由て著
る。ヘルゲネチー條約が次第に和らげられ、一七二
五年に至りて終に廢せられし、も彼の靈力に由
る所多し。教會合同の事に熱心せしは一七〇七年に
始まれり。其時普蘭士のフードリッホ一世は兩教會
の合同を欲し、之に關してジュネヴァ神學者の意見

ツレーティニ

人名

François 一六二二—一七八七 瑞西の
神學者。又佛蘭西風にツレーティニとも云ふ。ジュネ
ヴァに生る。父ベネディクトはジュネヴァの神學教授
たり、多くの書を著はし、アレー會議にて勢力あり
し人なり。フランソアはジュネヴァ、ライデン、巴
理、モントーバン、ニスムにて神學し、ジュネヴァ
の以太利人教會の牧師となり、一六五三年神學教授
となる。ゾーミアアの神學に強く反對し、ドクト法
典の正統説を厳に主張し、又ヘルゲネチー條約の作
者の一人たりし事に由て有名なり。稍自由意見を取
れる同僚メストレツァット及びバレイ、トロンジャンに

ツ

地名

強く反對し、當時のジュネヴァ牧師等の間に感化大
なりき。著書にては『インスチテューション、デオロギエ、
エレメンタリイ』を著す。
ツロ Tyre 往古一たび隆盛なり
し、今は極めて小邑と雖も、フェニキヤ平原の狭き
處ツドンとアケレとの中間にあり。北方は高き三角
形の海角によりて蔽はる。ツロと海岸との間に牛哩
の水渠を有したる古代の島は今や荒果てたる岬とな
り、又有名なる防壁石堤の存在及び其が建設の困難
なりしことを回想せしむるに足るものなし。亞歷山
王侵略の際、其兵卒等が逃みたる處さ六十ヤルドの
徑路は、今や西南の方面に於て海砂の打寄する所と
なりて牛哩の廣さをなすに至れり。ツロなる名稱は
此の島より起りたる者にして『岩』なる意義を有す。
而して之をツロと稱したるは、長さ凡そ一哩、幅凡そ
數丁に渉る巨岩横はりて海陸何れより見るも一奇觀
をなせるに依る。ツロが古代最も有名なる港となり
しは船舶の出入便にして、且海防の便を得たりしに
由る。海の入口に在るツロは宛も行商が市の入口に
商品を買掛するが如き趣あり、斯くて『諸の國人の
商人となり、多量の島々に通ふ者』となるに至れり
(新廿七の三)。
ツロは頗る古代に建てられたる邑にして、ヨシマア
の時代に在りて要害堅固の市也と稱せられ、母後廿
四の七、賽廿三の十四、亞九の三にも亦しく稱せ
らる。ヘロドタスは之を以て紀元前二七五〇年に建
てられたる也となし、ヨセファスはエルサレム神
殿建築の二百四十年前即ち前一二一七年に建てられ
たる者也とせり。何れにするも其古代に屬する者
なるは明也。イヤヤはツロを『ツドン』の女』と呼べ

ツの部

ツ

ツ

ツ

リ(賽廿三の十二)。此は希臘及び拉丁の詩歌が一般
にツドンに於てフェニキヤを代表せるに一致せり。
南極がツドンよりツロに移りし原因に就ては、ツド
ンがペリシテ人の突進に依り打撃を受けしがため也
といふ者あれ共、恐らくはツドンの商人が地中海の
東南地方と貿易する上に於てツロに移るを以て一層
傾斜をなしたりしがためなるべし。斯くてツドンは
地中海の東半にのみ知られたる名なりしが、ツロは
商業益々盛大にして遂に『諸の國の集ふ市』となる
に至れり(賽廿三の三)。ツロが斯く盛大に向ひしは、
其商人が遂に行商を營みたりしがためにして、即ち
陸に在てはアレクサンドリア、マルマラを経て更に東北に
達し、東南は亞細亞に至り、又アルメニヤより彼
船灣に至る諸道に輻湊する者悉くツロの商品に非ざ
るはなく、海に在ては亞非利加の北岸、地中海の諸
島は申すに及ばず、ツアラタルを越えて西班牙の
西岸に至り、コーンワールを横りて亞非利加の西
岸に達し、メソポタミアの諸島に至るまでツ
ロの船舶の往來したりしを見る。當時ツロが世界貿
易の中心として如何に繁榮を極めたりしは、エセ
キエル亦之を記せり(結廿七)。ツロは實に東西兩洋
を聯絡し、且世界に人類相依の教訓を教へたる文明
の先導者なりき。ツロの目的は羅馬のそれと異り、
世界を我が屬領とせんとの事に非ずして、東西諸
國の國民をして有無相通せしめんとの事なりしが、
紀元前十二世紀の頃より驚くべき忍耐と巧術とを以
て此目的を遂行したりき。

ツ

之を撃ち大に敗軍を敗りしが、陸上五年の間ア
スィヤ軍の攻圍を受けたりき。六七三年アスィヤ、
埃及國軍の侵す所となり、六六四年遂にアスィヤ
キ王の劫掠する所となりたり。ツロを以て以色列列はヒ
ラム及びソロモンの時最も親密なる友交を訂し、ツ
ロ人はエルサレム神殿の建築を助けたりき(母後五
の十一、王上五の一、七の十三、十四、九の十一、
十二等)。アモスはツロ人が此契約を破りたることを
愾し(摩一の九、十)、イヤヤ、エレヤ及びエセキ
エルはツロの腐敗、貪婪を責めたり(賽廿三の一
十七、耶廿五の廿二、廿七の三、四十七の四、結廿
六、廿九)。新約の時代に至り、ツロの民は基督を見
んとてガリヤに來りたる群衆の中に在り(可三の
八、路六の十七)。基督も亦其海岸に往き(太十五の
廿一)もし其民にしてガリヤ諸島の如く道を開く
を得たりしならば、悔改めしならんと言へりとい
ふ(太十一の廿一、廿二)。巴比倫時代の初期に在り
てはツロは比較的平和なりしが、カルケシス戦争後
(前六〇五)ツロは十三年間攻圍せられたり。其結果
は明ならざれ共、驕慢なるツロの王侯は大なる困難
を蒙りたりしが如し(結廿八の十二、廿九の十七、
廿)。後久しく戦亂相續きしが、漸次秩序を回復し、
巴比倫滅亡の時(前五三八)に至る迄之と同盟を繼
續せり。波斯時代に至りツロの状態は更に好況に向
ひしが、フェニキヤの諸市波斯に背くに及びツドン
は滅され、ツロは降服せり(前三五五)。ツロの歴史
に於ける最大の出来事は七箇月攻圍の後亞歷山のた
めに掠奪せられたることにして(前三三三)此戦に
六千人は戦死し、二千人は虜虜せられ、三萬の婦人
小兒は賣られたりといふ。然れ共後十八年を経て
ツロは再建せられたりしが、二八七年埃及に降せら

ツウイングリー

人名

ツウイングリー 一七七四—一八四二
波蘭の『カルデア』西部波蘭のツル村に生れ、
羅馬のコレヤラム、ゲルマニウムにて教育を受け、
一八三一年クレーゼンボーンの大監督とせらる。
波蘭にてはもて教會法は疑義なく通用せられ、ベネ
ディクトス十四世の如き一七四八年に其の通用範圍
を擴張したる位なりしが、一七六八年波蘭、露西亞、
英國、普蘭士、丁捷、瑞典諸國の盟約に由りて、教
會法は社會の諸部面に通用を停止せられ、之がため
諸教派信徒の離隔許され、男子は父の信仰に、女子
は母の信仰に従ひて教育せらるることとなり。波
蘭の西部普蘭士に合併せられて後此法律有功な
りしが、一八三六年大監督ブーニンはフィウツェミン
グのドロッステの行爲に由て心づきしと見え、急に普
蘭士政府に向ひ、一七四八年の教會に歸るべきなく
ば法王より新令を得んことを要求せり。政府何れを
も許さざれば、彼は三八年教會書翰を部下の僧
侶等に發して離隔を同式することを禁じ、聖別せら

ツウイングリー

人名

ツウイングリー 一七七四—一八四二
波蘭の『カルデア』西部波蘭のツル村に生れ、
羅馬のコレヤラム、ゲルマニウムにて教育を受け、
一八三一年クレーゼンボーンの大監督とせらる。
波蘭にてはもて教會法は疑義なく通用せられ、ベネ
ディクトス十四世の如き一七四八年に其の通用範圍
を擴張したる位なりしが、一七六八年波蘭、露西亞、
英國、普蘭士、丁捷、瑞典諸國の盟約に由りて、教
會法は社會の諸部面に通用を停止せられ、之がため
諸教派信徒の離隔許され、男子は父の信仰に、女子
は母の信仰に従ひて教育せらるることとなり。波
蘭の西部普蘭士に合併せられて後此法律有功な
りしが、一八三六年大監督ブーニンはフィウツェミン
グのドロッステの行爲に由て心づきしと見え、急に普
蘭士政府に向ひ、一七四八年の教會に歸るべきなく
ば法王より新令を得んことを要求せり。政府何れを
も許さざれば、彼は三八年教會書翰を部下の僧
侶等に發して離隔を同式することを禁じ、聖別せら

テの部

低教會派

れざる婚姻の者なば聖禮典に與るを禁じたり。...

テの部

低教會派

Low Church. 學派名 英國教...

定住傳道師

テの部

一年死)の如き人々に依りて代表せられ、...

定住傳道師

Local Preachers. 職名...

テッシュェンドルフ

ローベゴット...

テの部

テッシュェンドルフ

地にて、アフリテリコ、アラガスタ...

剃髮

テの部

剃髮 Tonsure. 僧徒は僧院の生...

テューモン Tümmen, Louis Sebastian,...

テの部

タイロレ、ティロストン

ティロストン

ティンダル

天主教の歴史家。巴理に生れ、ポルトローヤルにて教育を受け、ヤンセン派と見解を異にし、一六七六年僧とせらる。ティロレ、ティロストンと己れが同長たりし町名なり。巴理に近し、彼の名を眞直に唱ふればティロレ、セバステンとせらる。長く歴史を研究し、種々の師父傳及び文書を出版したる後、一六九〇年『教會の初六世紀間統治したる皇帝及び他の君主と基督信徒の受けたる迫害の歴史』を公にし、後又之に就て三冊を公にし、死後遺稿出でたり。遺稿は『初代六世紀の教會歴史』の『遺稿』と題し十四冊として現はれ、五一年迄の事を師父文書より引き、著者の筆を括弧に入れて加へ、年次に従て編纂せり。佛蘭西に於ける正確なる教會史の最初のものにして、今尙或處には價値を失はざるものなり。

タイレ

Cornelis Petrus 人名 一八三〇—一九〇二 和蘭の神學者。ライデンに生る。一八五三年、ライデン神學學校の校長となり、七七年ライデン大學の教授に任ぜられ、其死する前年に至る。埃及及びメソポタミヤの宗教の比較歴史(七八—八二年英譯せらる)『巴比倫、アッシリヤの歴史』(八五—七)『宗教歴史の概観』(七七年英譯せらる)『古代宗教史』(九五—一六)『宗教の要素』(九七—九九年)『古代宗教史』(九五—一六)『宗教の要素』(九七—九九年)『古代宗教史』(九五—一六)『宗教の要素』(九七—九九年)等あり。何れも廣く讀ま

ティロストン

人名 一六三〇—一九四 英國の大監督。ヨルタのウィアビーに生る。父は製布業者にして熱心なる清教徒なり。彼は留學のテラ、カールにて

學ぶ。同學院は清教徒教義を取り居りしも、彼は清教徒教義に染まず、却て自由派の方向に傾きぬ。カドワッセル、モーア、スミス、ワイルキンス其他の所謂清教徒神學者は何れも此の傾向を有したれば、ティロストンを化したるべく、チリントン、ワイルキンスの文書に至るは大に其の思想に感化を與へたり。サボイ會合には如何なる理由なりしか不明なれど、尙長老派として出席せしが、年若ければ尙何等の重きをなさず。六一年には説教者となり居たり。六二年エドモンド、カラール、カラムの後を承けてアルデルマンゴリの聖マリア教會司長となる。宗教對一令に服従してサフォルクのケッティントン司長となり、間もなくリンコリン院の説教者となる。六四年、宗教的なる事の智慧を著し、六六年、信仰の規則を著し、説教者として説教集の著者として有名となり、最も中流及び學問ある社會に人望を得。ドリアンと彼の文學に負ふ所あり、佛蘭西批評家テーレン又彼を激賞す。彼は徹底せるプロテスタントにして、法王主義論争に加はり、聖書と理性とに訴へて議論せり。彼はエラストス派(教會を國家の從屬とする論者)の説を持し、一書を作りて假令國立法は誤れりとも何人も之に反するの自由なしと論じ、之がため友人との關係困難となり、直ちに其の主張より退きたり。政治に於ては民黨にしてステュアルト家の壓制に反對したり。又ウィリアム、ラッセルを斬首せしめて送る、八八年の革命をば祝し、而して後新舊教會の『アイン』に委任せしが、九一年カントリーベリー大監督とせられ、ノンウェーロー(ウィリアム及びメアリー系の王に忠信を誓はざる者)の

ティンダル

人名 一四八四—一五三六 英國の宗教改革者、殉教者。ノルサムブリア家の裔にして、アラウセスター、ノルサムブリアに生れたるものゝ如く、牛津の學校に行き、後マダレン學館及び劍橋にて學び、一五二〇年頃アラウセスター、リトルゴリーの『サー』ジョン、ワルシ家の家教師となる。教職に入り居りしも按手禮を受けし時日等詳ならず。改革主義に染み、聖書研究に耽り、ワルシの家にて其の主義を公然告白し、羅馬教會の教職等と議論し、同主義にて説教しては、多くの反對を喚起し、二三年倫敦に轉任となる。倫敦にても説教して普通信徒の中に多くの友人を得しが、教職者の間には一人し之を得ず。『サー』ハムフレ、モンマスに於て優待せられ、モンマス及び其の友人等の金錢上の助けを受け、聖書を俗語に翻譯する事に着手せしが、英國にて之を成すに困難なるを以て、二四年五月頃歐洲に去り、ハムフレ及びウィッテンベルグ等も訪ひたるものゝ如く、ウィッテンベルグに於て翻譯を成就し、二五年の夏よりケルンにて新約聖書を四折大の書として印刷し、ワイルムスにて完成し、同年申すハムフレの書をも出せり。一年間ハムフレに留まり居りし如くなるが、其より後哈ムフレに留まり居りしに定かならず。身を隠し居たるが如し。されど文學上には最も盛に活動し、初め英國を去りし時は極めて覺束なかりし希伯來語を修め十分の熟達を得、舊約聖書をも翻譯し、五折、約書、士師、路得、前後撒母耳、列王記上下、歴代志上、約拿の諸書に及れり。翻譯は實に秀俊なるものにして、欽定譯聖書中の此等の部分はティンダル譯を基礎とせ



ジョン・ティロストン

論せられ、ウィッテンベルグ城内に投ぜられ、異端とせられ、其の罪に問はれ、初は呼吸困難の刑に處せられ、次で獄中に於て焚殺せられたり。是れ三六年十月六日の事なり。最後の語は『主よ、英國の王の眼を開き給へ』なり。ティンダルの事は獄中の記録等より故意に黙殺せられ居りて、唯だ極めて不満足なるフォックスの事跡記にティンダルの獄中の一書翰とに由りて知らるゝ位なり。其の歐羅巴に在りし間の事も全く不明なり。若し明ならば必ず種々の有益多趣味なるものあるべきなり。

ティンダル

人名 一六五七—一七三三 英國の自然神學者。デヴォンシャー、ピーア、フェリスに生る。牛津のリンコリン、カレッジ及びエキワスター、カレッジに學び、七六年卒し、オール、ソール、カレッジのフェローとなる。ウェルムス二世の朝一度天主教會に入りて又英國教會に歸る。重なる著書は『大地

論に英國史上の一大人物なり。此の諸方面に於ける感化は至深にして、英國人民の心は彼の爲めに燃やされたるを見るなり。(アマリスの『ティンダル傳』(一八七)ウェストコットの『英語聖書の歴史的概観』(一九〇五)を見よ)。

テの部

ティンダル

ティンダル

テオドシウス大帝

テオドシウス大帝

又名一世 Theodosius the Great. 人名 東方皇帝 (三七九—三九五在位)。西班牙の人。三四六年カワカに生る。軍勢にて教育せられ、戦功に由りテラチアヌスに用ひられ、其の皇立統治者として帝國東部を托せらる。政治上と共に宗教上に大勢力あり。正統派の人にして即位後一年経るやニカヤ告白こそ唯一の眞正なる一般的告白なれと布告し、之に反する者に嚴罰を與へんとす。コンスタンチノープルに入りては直ちにアリウス派首領なる故を以て其の監督テモフィロスを罷免し、之を追放し、アリウス派人民の難擧するに拘はらず都の教會をば悉く正統派の者に與へ、公私ともアリウス派をなすものを嚴罰に處せり。三八一年コンスタンチノープルに會議を召集す。是れ第二回世界會議なり。精選せる百五十人の監督より成る。三十六人は中アリウス派に屬し、マケドニウス派を成せしが、直ちに壓倒せられ沈没せり。此の會議にてニカヤ信條を確定し、聖靈の發出の句を加へ、其の布令には皇帝の布告を加

るなり。此外『聖書の論』(一)『聖書の財神の管』『基督教の歴史』等を著し、『サー』トマス、モーアは其の『ダイアログ』中に此等の書を引けり。次で(三〇年)『高僧の勳績』『ダイアログ』への答。『約翰第一書解釋』『約翰書序論』『馬太五七章解釋』『聖書小論』等を著せり。此等の中には死後始めて出版せられたるものもあり。斯かる内に英國にては宗教改革次第に行はるゝに至りしが、彼は之を見て身の安全を感じ、一五三四年アントワープに居を定め、聖書翻譯と共に福音傳道をなす。然るにヘンリー八世もしくは英國教職の内命を受け居りしワイアスなるものゝ運動に由りて、彼は

テの部

テオドレトス

テオドロス

テオドロス

テオドロス
テオドロスに於ては、其の著書に於て、...

テオドレトス

Theodoretus

人名 三九

テオドレトス
テオドレトス、シリアの神学者、...

テオドロス

Theodore of Mopsuestia

人名 三五〇

テオドロス
テオドロス、モプスエスタの神学者、...

版したる所なれ共、今日にてはテオドロスのものこ...

テサロニカ

Thessalonica

地名 次

テサロニカ
テサロニカは、バルカン半島の南端に...

帖撒羅尼亞前書

The First Epistle to the Thessalonians

新約聖書保羅書翰中の一書

帖撒羅尼亞前書
この書は、使徒パウロがテサロニカに...

テの部

テグラトピルセル

テグラトピルセル

テサロニカ

テグラトピルセル
テグラトピルセル、三世紀の神学者、...

テグラトピルセル

Treatise-piliser

人名

テグラトピルセル
テグラトピルセル、三世紀の神学者、...

テグラトピルセル
テグラトピルセル、三世紀の神学者、...

テサロニカ
テサロニカは、バルカン半島の南端に...

テの部

帖撒羅尼迦前書

共に其業をなしつゝ福音を宣へ傳へたりしが如し
二の九。此地の主要なる製造物は、山羊の毛布にし
て、今日も尚盛に之を製造せり。此地の住民は土人
なる希臘人、羅馬人の殖民及び東洋人にして、猶
大人の殖民地は會堂を有する程に廣大なりき。保羅
は其他の場所にて爲したりしが如く、先づ猶太人
の會堂に於て説教をなしたり。彼は三週の間會堂に
在りて、耶穌のメッヂヤなること、及び彼が聖書に
應ひて、苦を受け、又死より甦りたりし事を説きた
りしが、其中の或る人々は之を信じて保羅とシラス
とに従へり。又敬虔なる希臘人の之につけるも多し、
貴女も少からざりき(徒十七の三、四)。使徒行傳に
依れば、此の如くテサロニカ教會の信徒は多く猶太
教に改宗したりし異邦人の更に基督教に改宗したり
し者の如しと雖も、此の書翰の示す處に依れば、異
教より改宗したりし者も其だ少からざりしが如し
(一の九、二の十四、及び書翰中猶太教の禮典、歴史及
び舊約聖書を引照せざりしを以て知るべし)。又此書
の示す處に依れば、保羅は幾ならずして、テサロニ
カを去らざるべからざるに至りしと雖も、彼は此間
二回ヒッピの教會より補助を受けたりしを見れば
(腓四の十五)彼が此地に留りしは、三週以上以上
にして、使徒行傳十七の二に記せる三週間は、單に猶
大人の會堂に於て説教したりし時日を云ひしに過ぎ
ざるべく、彼は其後斯らしき場所、恐らくはヤソソ
の家を得て(徒十七の五)之に移り、此處にて異邦
人に説教したりしなるべし。果して然らば、彼は恐
らく六ヶ月の間此地に留りたりしなるべし(ラウセ
一の「証人保護」二二八頁)。而して彼の説教は成功
を以て迎へられたりしと雖も(一の八、二の十三)
之が爲め猶太人の嫉妬を受け、遂に俄にテサロニカ

帖撒羅尼迦前書

を去らざるべからざるに至りし次第は、使徒行傳(十
七の五十一)に記せるが如し。
【此書の書かれたる場合】 斯くて保羅は心ならず
もテサロニカを去りたりしが、此地に在る信徒の困
難なる有様を知るを思ひ、道に背くものあらん事を
恐れたりしが故に、再び來りて彼等を慰ふべしと
を切に願ひたりき(二の十七、十八)。然れ共彼は自
ら來ること能はざるを知り、テモテを遣はして、彼
等を慰め、彼等を固ふせんとしたり(三の二)此に
於てテモテは來りて彼等の状況を視、歸りて彼等が
患難の中に在りて、尙信仰を維持せる有様を復命せ
しかば、保羅は喜悅と感謝とに堪えず、遂に此書翰を
書きて彼等に贈るに至り(三の六、十)。テモテの
復命は此の如く、テサロニカ人の確信を有せる事な
りしが、亦悉く喜ばしき福音のみにてはあらざ
りき。即ち希臘人の行ふ惡は此時既に基督教會の中
に入り來りたりき(四の三、八)。又保羅の性質、動
機は此時既に攻撃せられたるなり。若し彼等にして保
羅を疑はばんか、恐らくは彼の傳へたる眞理を疑ふ
に至るべし。是れ保羅がテモテの復命を聞き、彼等
に書を贈りて其の妄を駁するの必要を感ずるに至り
し所以也。
【此書の内容】 故に此書の目的はテサロニカ人の
心より、彼等の信仰を薄弱ならしめ、其進歩を妨礙
すべき凡ての疑念を解き去らんとするに在り。故に
保羅は先づ彼等が信仰に依りて行ひ、愛に依りて勞
し、基督を望むに依りて忍ぶ事は、彼が斯く神
に感謝する處なりとのことを以て切(一の十一、十三)
且彼等の信仰と其を述べて、彼等を勵ましたり。彼
等の眞に希臘に在る凡ての信徒の模範となるべきも

帖撒羅尼迦前書

の也。而して其此に至れるは、保羅傳道の結果也と
せば、彼の教へたる所のものは、唯人の言に非ずし
て、神の能に出でし事明也と論じ(一の四、十)第
二章に至り、彼は彼がテサロニカに來り、道を傳へ
たりし動機に關して流傳せられたる誹謗を辯じ、彼
の福音を傳ふる所以のものは、神に託られたるが
爲めにして、恐より出づるには非ず、又汚より出づる
に非ざるを明にし、而して是れ彼等が彼の品性で
爲すに就き目撃せる所に依りて知らるべき事也との
旨を述べ(二の十一、十二)而して彼は彼が迫害の中
に在りて、能く之に耐へたりし事を述べて、是れ即
ち彼等が彼より傳へられたる福音は神の言葉にし
て、彼は神より遣はされたる神の僕たるを認するも
の也との事を論じたり(二の十三、十六)。保羅がテ
サロニカに在る幼稚なる信徒を棄て、俄に其地を去
りたるは、敵を恐れたるが爲にして、輕率と怯懦の
譏を免る能はずと、彼が彼の敵に依りて罵る非難
せられたる處なりき。故に保羅は二の十七、三の十
三に於て、其妄を駁して、彼は眞に耶テサロニカ
に往かんざりたりしが、往く能はず、假令當時
彼等と離れ居るも常に彼等の安否を案じ煩ひ、遂に
神文すしてテモテを彼等に送りたる旨を述べたり。
保羅が自己と其傳へたりし福音とに關し幾多の非難
と攻撃とあるに對し、之を駁解せるは、前已に述べ
たるが如く、本書の目的にして、以上の駁解は本書
の中心を形成せり。故に第四章以下は、餘論也と稱
すべきものにして、彼は此餘論に於て先づ堅く基督
の眞を守るべきことを告げ、殊に異邦人の最も陥り
易き男女間の不潔に染まらん事を警告し(四の一
一、八)兄弟を愛する事に就ては、益々愛の行に邁み
んことを勧め、且安靜ならんことを己の行を行ひ

テの部

帖撒羅尼迦前書

て手づから其工を爲さん事を勧めたり(四の九、
十二)而して又當時一般の信徒は、基督の道に來ら
んことを期待したりしが、テサロニカに在る信徒の
中には、之が爲め其平常の業務を廢して、只管主の
再來を望むものあり。又基督の來らざる前に此世を
去りたるものは、如何なる運命を受くべきや等に關
し、空論をなすものありき。故に保羅は此等の人々
に答へて、信徒たるものは常に警覺して光の子輩の
如く行ひ、又互に慰め且各々の徳を述べべきこと
を勧めたり(四の十三、十五の十)。而して彼は最後に
當時教會の缺點たりし事に就きて警告し、此書を凡
ての兄弟に讀み聞かすべしとの言を以て之を終れ
り。
【書中の問題及び作者】 此書の中には保羅特有の
教義を有せず。例之生得の人は己の教を全ふするこ
と能はざること、罪は尙に存在すること、恵に依り
て義とせらるること、靈に依りて基督と交る事、
基督教徒の律法に對する態度、及び基督教と猶太
教とに異教との關係に就て彼の有する思想に關して
は、此書中に一語をも發見すること能はず。此事實
より此書を書きたりし當時に在りては、未だ此等の教
義を發達するに至らざりしなるべしと推論するもの
あり。或は然らんと思も、此書中に此等の教義を發
見せざる所以のものは、主として當時テサロニカ教
會の有したりし困難、教義的に非ずして、實際的、
個人的なりしに由らざるべし。此書中に於て斷
えず起れる問題は、主の再來にして、宛も金線的全
組織を貫通せるが如く、書中到處に言及せざる
はなし(一の十、二の十九、三の十三、五の廿三參
照)。是れ幼稚なる異邦の教徒に贈れるがために終
らず。保羅の異邦人に道を傳ふるや、果より直ちに

帖撒羅尼迦前書

耶蘇の教主たるを認し、若しくは舊約聖書に託ふる
をなすこと能はざりき。故に彼は眞心、責任の念及
び神の義しき審判等に訴へて、基督の世を審判すべ
き日來るべければ、速に罪を悔改めて神に歸るべき
事を告げたり。彼曰く、基督の死より蘇りたるは、即
ち彼をして義を以て世を罰かしめん爲め也(徒十七
の三十、三十一)。故に基督の來るは、審判の爲めに
して、此日には亡滅忽ち敵の上に及ぶべく(五の三)
彼を信するものは、速くして責むべきものなきが故
に(三の十三)永く主と共に居ることを得べし(四
の十七)と。是れ保羅が異邦人に道を傳ふるに方り
採りたる方法にして、此書中に主の再來を論ずるこ
と多き所以也。
然れ共此書中には保羅が常用たる言語なきに非
ず。例之我々の福音(一の五、二の八、九)我々は
神の選を得、此福音を傳ふることを託られたり(二
の四)神の我僕を招きたるは、我僕の潔からんこと
を要め玉ふ也(四の七)耶蘇は來らんとする怒より
我僕を救ふ者也(一の十)耶蘇は神の子にして、死
より蘇り、聖徒と共に居るべし(三の十六)と云々
るが如き是也。又保羅の性質最もよく此書中に顯は
れたるを見る。即ち彼の親切熱心なる性情、其同胞
の幸福を思ふ熱情、其信徒に對する寛大、其高潔な
る精神、其不撓なる勢力等は明に此書中に顯はれた
り。彼は其信徒に對して、父の如き愛と責任の念と
を有したり。彼は當時也と彼等と離れ居ることな
悲しめり。彼は屢々彼等を見んとして果すこと能は
ざりしを歎けり。而して彼は再び彼等を見るの時あ
るべきを望みて之を喜べり。凡そ此の如き美はしき
彼の性情は、殆ど此書の各頁に顯たるものあるを
見るべし。

帖撒羅尼迦前書

去れば此書の保羅に依りて書かれたる者なること又
疑を容るべからず。然るにパウロは此書の確實なる
ことを疑ひて之を否定したり。彼が其之を合める重
なる理由は、書中に包含せるものゝ緊要ならざる事
と、此書の書かれたる特別なる目的及び特別なる場
合の不明なる事とに在り。然れども此書が特別な
る場合に特別なる目的を以て書かれたるものなる事
は前既に論じたるが如し。且凡ての書翰は悉く最も
重要な問題のみを論ずべしと思ふは、使徒の生涯
を以て器用的となすもの也。保羅と雖も亦何ぞ他
の人の如く、單に友情を表せる書翰を書き、此書は
ざる理あらんや。パウロが反對の他の理由は、此書の
重要な部分、吾人が使徒行傳に於て見る所のテサロ
ニカ人悔改の歴史を敷衍したるものに過ぎずと云ふ
に在り。然れ共此書中に記載せる物語は、使徒行傳
に記載せる簡短なる物語と其性質を異にせり。某よ
り同一視す可らず。而してパウロは又此書が哥林多
書に類似するの故を以て、保羅より出でたるものに
非ざる理由の一となせり。然れ共彼は先きに此書翰
の保羅の他の書翰と異なる故を以て之を否定し、今
は却て其類似せるの故を以て之を拒斥す、是れ自家
撞着に非ずして何ぞや。
此書が保羅の書きたる書翰なるは書中保羅慣用の言
語を有するに依りて證すべし。即ち「我々の愛と喜
び」云ひ(二の十九、腓四の一參照)又「我パウロ」(二
の十八)と云ひしが如きは其最も著しき例也。而し
て保羅は基督の再び此世に來る迄生存すべしと信じ
たりしが如し。此の如きは後世偽作者の手に依りて
成りたりと信する能はず。又此書が保羅の書翰たる
外部の證據は甚だ明か也、即ち此書はマクシマンの
目錄、ムラトリアン聖經及びヌリヤ及び古き拉丁の

テの部

帖撒羅尼迦後書

帖撒羅尼迦後書

帖撒羅尼迦後書

翻譯書に保有せられ、又クレメント・イグナチウス及びポリカルプの書中には此書論より引用せり。覺しきものを發見すべし。

【著作の時代】 此書の書かれたる時代は、使徒行傳十七、八章に記されたる物語より容易に推定せられ得べし。此物語より著人は保羅はシラス及びテモテと共にテサロニカを去りし後ペリアに往き、アベンスに往きたる事を學ぶべし。テモテはペリアよりテサロニカに遣はされたりし。若しくは他の所よりなりしは明ならず。然れども、彼がテサロニカに在る弟子等を勵まさんとして遣はされたりし事は三の二に明也。斯くて保羅はコリントに往きたりしが、彼處に於てシラスとテモテはマケドニアより來りて保羅に追及せり(徒十八の五)。保羅をしてテサロニカの教會に此書論を贈らんとの心を起さしめたりしは、テモテが此時テサロニカ教會に關する音信を携へ來りしに在り(三の六)。故に此書論の書かれたりしは保羅がテサロニカに往きたりし時より數月後の事にして、其精密の時日は確定し難し。然れども、紀元五十年より五十二年迄の間に在り。果して然らば此書は今日存在せるもの中保羅の書きたる最初のものなる也。

【参考書】 註釋書にはウォウエット、マソンの「テサロニカ」(「スピリチュアル・リテラチャー」)、エドワード・ワイルド、ハイナル、エルリコット、アルフレッド・フインドレー(「福音書」)、ライトフット、マイヤル等あり。總論にはユウリッパ、ツァン等あり。

帖撒羅尼迦後書 The Second Epistle to the Thessalonians. 經名 新約聖書保羅書論中の一書。

【著作の時代】 此書論はテサロニカ人が、保羅の初め書きて彼等に贈りたりし書論を誤解せるに由り、其誤謬を矯正せん爲め書かれたるものにして、思ふに最初の書論の成りたる數月の後、保羅がシラス及びテモテと共に向コリントに留りし時書きたるものならん。是れ此二人が保羅と共に此書論の冒頭に署名したりし所以也。且保羅が本書三の二に云ふ所のものは、彼がコリントに在りし時経験したりし事情に適合するを見れば、此書の彼がコリントに在りし時書かれたるものなる事殆ど疑を要せず(徒十八の二十一、二十八)。但しテサロニカは此後書と稱するもの、實は前書にして、前書と稱するものこそ保羅の後に書きたるもの也。この事を主張せり。而してバナル、レナン、エドワード及びテビッドソン等の學者は此説を賛成したる共、著人は此説を承認すること能はず。何となれば此書論は唯に最初の書論の存在を假定せるのみならず、其中には明に保羅の書論なるものも既に彼等に贈られたりし事を言ひ顯はすものあれば也(二の十五)。且最初の書論には保羅が彼等の處に至りしとの事は屢々明言せられたるも、此書論には唯稀に之を言ふのみ。又最初の書論には基督の再來を以て眼前に在るが如く説きたるも、此書論に於ては一層の注意を明白を以て之を語れり。加之最初の書論に於て顯はれたる猶太人の反對は、此書論に於ては最も恐るべきものとして顯はれたるを見るべし。此等の事實は此書論の前者と稱するものより後に書かれたることを證するものにして、之を顛倒するが如きは謂はれべき事なれば也。

【著作の目的及び此書の内容】 去れば此書論の目的は、保羅が其最初の書論に於て主の再來に就き説

きたりし事に關し、テサロニカ人の誤解を矯正せん爲めなりし事を知るべし。テサロニカ人は主の日の今過ぎに來るべき事を信じたりしが(二の二)此信仰は彼等の或者をして、空しく其再臨を待たしめ、其日の速に來らざるを見ては、彼等をして空しく心を動かし且擾がしめたりし。故に保羅は彼等に告げて、彼等が眞道と忠實の中に在りて忍耐と信仰を有するは、是れ主が再び來りて義の國を顯はし、彼等を其數の中より救はん表徴也と云へり(一の四、十一)。且彼は彼等に教へて、主の日の速に來らざるが爲めに、徒に心を擾す勿れ、主の來る前には先づ不法のものは顯はれざるべからず(二の二、三)。然れ共神は初めより彼等を選びて救を得せしめ給へば、堅く立ちて、彼が彼等に教へたりし教訓を守らざるべからず(二の十三、十七)。又彼は彼等が邪なる惡人より救はれん事を、主の道のよく廣まらん事を祈り、彼の傳へたる教訓に備はず、懶惰と虚妄なる行爲をなすものに違はるべしとの事を告げたり(三の十五)。

【作者に關する疑問】 然れ共此書の保羅の手に成りたりしとの事に就て疑を懐きたる學者少からず。ワアイズ曰く、近世の批評家は帖撒羅尼迦前書を以て一般に保羅の書きたりしものとせざるが如く、後書の確實なるを疑ひたりしが、後此書全體の果して確實なるや否やを疑ひたり(一八〇一年)。彼に次で此書の確實を否きたるものをバナル、フレイデル、ヘルゲンフィールド等の學者とす。シムムットは謂えらく、此書の原本は元と保羅の書きたるものなれ共、今紛失して存せず、著人の有するものは後年改作したるもの也と。テビッドソンは謂えらく、此書

テの部

帖撒羅尼迦後書

哲學

哲學

の根柢には保羅の思想あり共、此書は之を變化し、敷衍したる也。

此の如く此書論の確實の疑はるるに至りし理由思ふに二個あり。其一は、主の再來に關する此書論の思想と、最初の書論の思想と相違せるが爲めにして、即ち前書に在ては、主の再來を以て遠なりとせし、此書に在ては之を速なりとせし、是れ此書の眞實の疑はるるに至りし理由也。然れ共著し仔細に最初の書論を吟味せば、保羅は決して主の再來を以て目前の事とせしむるに非ず、唯主の來るは突然也と云へるのみ。故に彼は「時と期に就ては我爾曹に書き贈るに及ばず」とて、其何れの時に來るべきやに關しては一言も述べざりき。第二の理由は此書第二章に記せる默示的言語也。此章に記せる終末論は、保羅の終末論に非ずして、約翰の默示録(第十三の二、十四、十九の廿參節)より假り來りたるもの也とせし、此書論を否むものも主張する處也。此説に従へば「罪の人」とは羅馬帝ネロにして、當時一般の信する處に依れば、ネロ帝は眞實死したるに非ず、東方の國に隠れ居り、後再び羅馬に歸り來るべしと云へり。從て「彈ふる者」と云へるはバツェスマリアンに指せる也。此解説に従へば、此書論は紀元六十八年乃至七十年の頃保羅の弟子に依りて書かれたるもの也。ヘルゲンフィールドは此部分を除いてトラヤン帝晩年の小默示也と云ひ、其不法は當時既に發達せるノストラタを云へる也と云へり。然れども著人が使徒行傳に於て見る所の、保羅が當時處したりし状態は此書を眞實に解釋するの障礙也。夫れ猶太人は幼稚なる基督教會に取りて最も危險なるものなりき。保羅が到る處に反對を蒙りたるは、此猶太人にして、テサロニカ人の迫害せられた

りしも亦此猶太人に依りてなりき。然れ共猶太人の反對は、羅馬の官吏に依りて妨げられたり。羅馬の官吏が彼等の信徒を保護して兇暴なる猶太人より救はしむるに非ざれば、基督教會は猶太人の爲めに破壊せらるべかりし事也。保羅は猶太人の基督教に依りて學びたる處なりき。保羅は猶太人が基督教に反對するの精神は益々盛なるべきを豫想したり。而して彼等の反對の烈甚なるべきは、彼が其壯年の生活より學びたる所なりき。蓋し彼は此の如くして猶太人の基督教に反對せる精神は、益々激烈に赴き、舊教主の顯はるるに及んで其程度に達すべく、而して此時基督再臨して此敵を滅ぼすべしとの事を豫期したりし也。而して斯の如き期望と、又保羅が此期望を顯はせる言語とは、基督の末事に關する談話と、但し其書に基せる也。但し保羅が豫期したりし「罪の人」なるものは遂に來らず。猶太人が大に基督教に反對すべしと云へる時も曾て來らざりし也。蓋し初代の使徒は、基督の再來に關する基督の言葉を誤解したりし也。彼等は之を以て基督が眞に再び肉體を取りて來るもの也と思惟したり。然れ共思ふに基督は遂に依りて來るべきことを意識したりしなるべし(參考書に就ては前書の條を見よ)。

哲學 Philosophy. 學科名 人は生活す。彼は此の生活に就て自ら思想す。是れ人の天性にして、實に下等動物と異なる所也。人生が思想の對象となれば、唯人類に於て之あるのみ、人類に於てのみ経験せしむる問題となるなり。哲學は一言にして云へば、經驗を全體の上より考へ得る所以は、人の思想、理性、又は精神なるものは、其中に種々雜多なる要素を含むむと雖も、全體の上より見れば此に統一あるを以て

也。哲學の任務は、人類意識の中に潜る此の統一を探明するに在り。故に哲學の歴史は統一、綜合、集中に向て進める進歩の歴史也。

此の進歩は多くの階段をなして進み來れり。其の一段階は、一の統一原理の用ひられて、其の個々の經驗に説明を與へ、人々に満足を與へ、人々の行爲を體化する力たりし期間也。されど社會の事情漸くに變化し、人生の中には其の原理に依りて説明し得ざる要素の麗り居ること發見せらるるに至り、此に從來の調和破れ、更に一層深き考察と一層廣き智慧とを以て統一の原理を求むることとなる。されば哲學此を視れば、如何なる思索の體系説と雖も、決して終局的のもの存せざるを知るべし。如何なる哲學も交る／＼亡ぶるなり。是れ哲學の弱點にして、實は其強所なり。何となれば經驗の凡ての種類を一形式の思想にて思想し盡さんことは能ふべくもあらず、哲學が抽象的の思索を以て満足せば、即ち永く一定なるべし。去れど人生の事實に面し、之を永くせる原理を求むるに於ては、其の斯くの如きは當然なればなり。哲學は根本的には生活の綜合の追求也。此の追求に依り、此の問題に深く入り行き、知力の綜合のみにては其の目的達せられざることを明かなるに至れば、此の追求は成功したるなり。哲學の問題は此に於て宗教の問題に交叉す。哲學は哲學以上に地あるを指す。

宗教と哲學とは相似たる所あり、相反する所ありて、錯綜せる關係を有す。哲學が究末する所の解決は宗教之を供給す。哲學の探求する所を宗教は經驗に實現す。即ち統一の實にして、其の中に人生の凡ての差別相違相調和し、其の圓を越えて何物も人心を擾亂すべしものなきなり。哲學は宗教のために用をな

テの部 哲學

して、群衆たり批評たる任務を果す。此は有益にして又缺くべからざるなり。即ち哲學は宗教の合

關係を有するのみならず、之に依りて又基督教哲學との關係を説明するを得べし。

代より精神的原理を考へ出でたるなり。此の方面代々に傳はりしが、又之と共に二元論、即ち精神と物質、思想と延長の兩立の主義も幾分存在して傳はり

テの部 哲學

思想法は歸納的にして、個々の事物の集合の中に普遍的なものを見たりき。『徳義は知識なり』といひし彼の名言は、よく其の思想法の指す所を言ひ顯はせり。

いふ問題を考へざりき。彼は唯神の思想をなし、人類が人格的の神を求むる心に堪へざる事實を見逃ごしたりき。

なり、終に新プラトニズムに至りて全く宗教となれり。此の時代の諸哲學に、何れもアリストテレスの中に在る諸要素を取りたるものなり。

哲學

哲學

哲學

哲學

テの部

哲學

なるを得べからずとなし、思想及び生活を唯唯見
及び衝動の遊戯のみを云ひ、實在に對して取るべき
唯一正當の道は、判断を中止することのみとなした
り。唯唯論は人心を感し來り居りし絶望を兆するも
のにして、哲學の材料自又宗教の要求の聲也。
(d) 新プラトニ派、今や人心は智慧を求めず、
教を求め來り。即ち此の人生の不満より免れ、高
き所に跳り入らんことを欲せり。新プラトニ派は
之に應じて出で來り。此派は希臘哲學の頂點に
て、又實に其の破壊なりき。『思想』は此時まで統一
を求むる人心を導き來りしが、此派に於て打ち破ら
れ、全く其力を失ひぬ。新プラトニ派の後は、
野蠻人主義世を倒せしが、幸に基督教の希臘哲學
に代はるありて不幸を減するを得たり。新プラト
ニ派に於て見るべき進歩は、思想問題實際問題の観
念中におり。形式と材料と二元論は神と世界と
二元論に化し、無限と有限と二元論は善と惡といふに
變り、此に於て全く宗教問題となれり。新プラト
ニ派哲學は宗教的解決にして、諸宗教を放棄したる
哲學、自ら絶対宗教たることを要求せしものなり。
其の大開祖はフィロ、ユデアオス (Philo Judaeus)
にして、其大説明者はプロクレス (Proclus 紀元二
〇四—二七〇) 也。彼等の哲學は種々あれども、要
するに左の三點は彼等の間に共通せる所也。其一は
神の說なり。神は超越的にして絶対なり、創原 (En-
teichon) なり、無限 (Apeiron) なり、之を形容
する能はず、人間の思想の限定の及ばざるものなり
とす。其二は世界の說なり。神と世界の間の無限
と有限の間に、大開闢あり、新プラトニ派
は種々な發出說にて之を説明し、無限の純より
次第に不完全なるものへ降下し、又降下して純に

哲學

なる物質に達せざり。其三は人の說なり。人は
神の微光を感せり。されど彼は感覺界に浸されあ
り。故に彼は此の境より脱出し、己が眞に屬する所
の超感覺界に上るにあり。此の解放は隨者的の修行
を以て心を清めて達せらるべしとせり。基督教が
傳布し始めし時、希臘思想は此の狀態に發達し居た
り。基督教は之を接觸せしなり。
(e) 基督教と希臘哲學の結合 (A) 基督教の統
一、希臘世界は支離滅裂となり、知力上道徳上の滿
足を求むること飢渴當ならざりし時、基督教は希臘
教育を受けし人及び凡て人心の追求せる統一てふも
の此にありと要求しつゝ入り來り。されど新プラ
トニ派其他は説明も解決の性質も大く異りたり
き。今二者の異同を略叙すべし。
(イ) 知識上の問題及び人間の道徳的要求の解釋
希臘思想の人生問題の最深觀念たりしが、形式と材
料、無限と有限の對立てふことなりしが、基督教は
之を更に深く分け入りて意志の反對てふ問題に入れ
り。即ち人の意志が神の意志に反し、調和を失ふこ
と是れなり。希臘人は人格てふことを充分に考へざ
りき。彼等は汎神論に溺れ、個人の生命を没して非
人格的大存在の中に沈むを標的とし、此に達する
を障礙するものは常に人間自身の外部に在り、靈魂
の物質的の外界にありとせり。基督教は大體に人格
てふ事實を捕へ、人格の生命は人格的の神と交はる
に由て全くなるべしとのことを標的となし、而して
之に達するを助ぐるものは人の人格自身の中にあり
とせし。神と人の合一の障礙たる神は人の外に在
るに非ず、物質の身體に在るに非ず、神の意志に反
して自己の意志を決定する此の決定に在りとなせ
り。

哲學

(ロ) 基督教解決の性質、一言を以て言へば、是は
基督教なり、基督教は統一を根本の要諦とせる所新プ
ラトニ派と同じく、其他にも似たる點あれど、心
的修養と精神的經驗の斷面に依り相異れり。基督教
は人心に接觸するに、學說や組織の手續を以てせず、
福音を以てせり。此の福音は人となり十字架につけ
られ能りし耶穌基督を實質とし、之に歸結せり。人
生問題は結局神人兩意志の和合にありとせし、基督に
依る和合によりて此の問題は解決せりとなす。即ち
『基督教は人となれる神なり』基督教は修養に依り身心を
清め (katharsis) 以て最高點に達したる人にあ
らず、人の和合を起すために人性に入り、人性を自己
と合一せしめし神なり。人類は神を求め、神人の間
に横たはれる底なき淵の岸に行き止まりて空しく佇
立せしが、神人となれる事に依り、神の本來の運動
は此の淵を越えて渡り、開闢を埋めたり。次に『神
は人のために死せり』神と人を別つものは人の薄
弱にあらざる。故に此の薄弱が精神的の神と
同體となること其障礙たりと思ひ、若くは之を去
らば同體を得べしと思ふは非なり。新プラトニ派
の救済力の足らざりしは此點不完全なればなり。人
が神に達する能はざる根原は罪なり。人は神と交は
るために自ら神性的となるを要せず、唯其罪の重
荷より引き出さるるを要す。此の救ひ出し基督教の
性的の死に依り來りしなり。有罪狀態は唯人自身の内
性的の分裂に對する不安の情に非ず、神より乖離せる
意識なり。罪は主觀的のものに非ず、精神の客觀
的實在にして、精神が神と合一するに先ちて除かれ
ざるべからざるものなり。基督教は人の罪を負ひて之
を果しぬ。次に『基督教は純れり』基督教の生命は時間
空間以上を擧げられ、時間空間の中に生くる者等と

テの部

哲學

有機的の合一をなし、此の合一に由り又神との合一
の中に在らしめ、彼等を神の子供たらしめて、其の
生命の源たり。新プラトニ派にて時々に起りし精
神的喜悦は、基督教に於ては神と常住の同體とな
り、少數の人の特權ならで、何人にも得らるるもの
となれり。斯くて基督教は神人兩意志の反對より成
れる問題を完全に解決せり。
(B) 基督教と希臘二元論、希臘哲學は二元論を壓
倒せんとして之を得ず、屢々之がために煩はされたり
り、是れ二元論を深く考へざりしが爲め也。基督教
は神人兩意志の反對てふ二元論を徹底して考へたり
。基督教の解決は又希臘思想の問題の解決なり
き。基督教は哲學に非ずして宗教なれども、哲學の
求むる統一てふものを與ふる宗教なるが故に、自然
哲學の提出せる疑問に答ふる所ありしなり。
(イ) 思想問題、希臘の心意は形式と材料とを以て
調和すべからざるものと前定したりしが、新プラト
ニ派は調和を極度まで謀り、『發出の諸段階』を以
て形式と材料の間の空隙を埋めんとしたりき。基督
教の學者等は希臘人の辛苦を一通り見渡して曰く、
終局の二元論は形式と材料の論には非ず、神人兩意
志の論なり。人をして神に達せざらしむるものは物
質的の外界に非ずして罪なり。基督教は人の罪を去れり
人となれる基督には、如何なる人も直接に一步一階
一階にて達すべし。而して基督に達すれば神に達す
るなりとせり。彼等は希臘人が熟語定語に頭を埋められ
てアレクサ (充滿) ロゴス (言) 其他を言ひ、而も
此等は發出てふ拙き理想に由らざれば、神に就て妥
當なる觀念を得る能はざることを自ら含意せるを
見て、彼等自らは遠慮なく此の術語を取り、之を基
督教化したり。希臘哲學が發出てふことに依り成就

哲學

すを考へしは想像にて、實際には成就せられざりし
事が、基督に由り成就せられたり。基督を見し者は
交を見しなり。希臘人アレクサを説くが、基督は其な
り。希臘四書に在るが如し。彼等ロゴスを言ふが、
基督教は其なり。第四福音書に在るが如し。此言の希臘
哲學の用語は、之を用ひし基督教者等が希臘學
者の教を仰ぎしといふことを示すに非ず。新約聖書
の言は、フィロソフの如き人の思想以外の源より來
れる思想を言ひ顯はせり。されど時代が時代なりけ
れば、新約聖書は希臘人が求めて得ざりし真理を顯
はすに於て、希臘人の努力を表明せし其等の用語を
採りて用ひたりしなり。基督教は發出て其他抽象思
想に由らず、生ける基督に由りて、人を中心點に擧
げ、彼等をす、生ける基督を一つの統一體として認むるは
め、人の最も物質的なる方面と雖も決して神と遠か
らず、却て神の心の顯現、其の經驗の具たるを思はし
めたりき。神は自らを顯現する靈なり、宇宙は其の
最底に至るまで靈的なり。基督教は二元論を打破し終
りたり。基督教は哲學には非ざるも、凡ての哲學の
生命を吹き入るもの、又其の標的也。
(ロ) 實際問題、希臘二元論は屬々希臘人の思想に
去來し、理性と欲情とを永久に對立せるものとせし、
欲情は人の物質的の身體に滯り居て徳義の妨害をなす
者也と思惟し、種々の手段に由りて之を人々より去ら
んとせり。新プラトニ派の如きは、隱者風の修行に
依りて欲情を去り行けば、次第に其の係累より全脫
するを得と説き、ストア派は理性を以て欲情を支配
すべく、常に欲情に對しては壓制者たるべきを教へ、
アリストテレスは工人が材料を用ふる如く、理性
は欲情を用ふべしと論ぜり。斯く欲情を以て靈の本
となせしを以て、彼等は罪の深き自覺に達せず、從て

哲學

簡潔の必要を感せず、常に想像にして自ら満足し
たり。基督教は深く考へて靈の本の人性に於て非ず、
神の前に降下すべきを教へたり。此の降下は希臘
人には全く無き道徳なりき。之と共に基督教は人
の地位を高くし、其の到達すべき點を希臘人の考へ
たる所より非常に高きものとなせり。即ち人の意
志を神の意志と合一せしむる是れなり。此を以て人
は靈も肉も共に一の全體として、神の意志の成就し
行く神の殿又神の國となり、希臘人が相對せり
思惟せし兩要素は此に調和するを得たり。而して此
に至るためには、人の方面に在りて意志を定め目的
を遂行する努力を要すれ共、又神の力に由るものに
して、其の結果たる基督教の品格は、人自身の造り
たるものに非ざれば得るべき點なく、唯聖靈が人の
謙虛服従せる精神上に直接作用したる結果なる也。
(C) 基督教の經驗と希臘の思想形式との關係、此
の問題に就ては、獨逸にてはヘルナツク、英來にて
はハツチ及びマツヤフェルト等を代表者とせる歴史
的批評派の研究あり。其結果甚だ有益なれ共、前提
を定めて之をなせるが故に誤れる所も少からず。ハ
ルナツクが教表は其の觀念も其の發展も福音の地面
に生じたる希臘思想の產物なりと言ひしは、一面眞
なれ共、斯く後に至りて種々に思考せらるるに至りし
福音の内容は初より存し居たることなれば、此の本
原の内容にまで以上の如き原理を適用するは注意す
べきことなり。ハツチは耶穌の教の眞先に出で居る
は道徳的説教にして、第四世紀の基督教の最も重
し所は形而上的の信條なりしが、此は基督教がヘム
人の地面より希臘人の地面に移りしに伴ひて起りし
ものにて、希臘の感化の結果なりと言へり。即ち原

テの部 哲 學

始の基督教は神と義徳に關する單純なる道徳的の教にして、全く思辨の要素なかりしを、大なる諸信條は希臘知方に依りて煩雜しく建設せられたるものなり、故に基督教の眞面目を發揮するには之を補滿せざるべからずこの意也。然れども彼等の説は極端に走り、耶穌基督は實際に於て、單に大宗教者大道德者云ふよりも以上の人格なりき。されば之を然かく考へしを以て、必ずしも希臘思想の感化也といふべからず。福音書の叙述も、唯に耶穌を斯くの如き人格として記せり。耶穌の意識にも亦自己を斯くの如きものとせしこを見ゆるなり。更に又原始の弟子等の宗教を見れば、單に猶太的ユニテリアン教にあらざる、猶太的律法教にあらざる、耶穌の説きし道徳のみを教ふる宗教にあらざる、又實に耶穌の復活を説き、之を拜し、之に祈りたること見ゆ。使徒行傳を公平に解すれば此外に見方なし。尙又新約聖書の書翰の基督教に於ては、耶穌を道徳要素を含め大宗教家よりも以上の者として觀念せしこも明也。保羅の基督教、約翰の基督教にして、もし全く基督教の基督教と異りたりしとせば、其の時代に存在せん蓋なかりしなり。

基督教は希臘哲學と接觸せし時代に當りては、希臘哲學は全く二元論に陥り、人心の神と合一せんことを切望する要求自ら顯はれたりき。新プラトニオン説は之に應ぜんせしも能はざりき。基督教は希臘人が求めし神人の合一てふことを與へ得べしと宣言しつゝ、此の無業に現はれ出でたり。然れ共猶太教を修正したる教のみにては、此の要求に應ずること能はず。人格たる基督、神の子にして又人の子たる基督に於ける信仰に依りて此に應ずるを得たりき。基督教は希臘世界に入りて、希臘の學問及び其の思想形式

テツツエル

二種の關係を生じぬ。即ち一方に在りては、基督教は希臘の學問及び思想形式の感化を受けたなり。基督教は希臘哲學の求めしものを與へしものなれば、哲學の用語や其他を取り、之に福音の意義を充たせたり。他方に在りては、基督教は斷然希臘化せらるること拒みたり。基督教の神人合一觀、耶穌の人格に由る神人合一の觀念は全く希臘思想を超越した形に化せんせし努力行はれたりき。アウグスティヌスの如き、サベリウス説の如き、哲學説としては福音の「光輝」よりは寧ろ道理の整然たるものありき。然れ共基督教は之に降るを肯ぜざりき。基督教の經驗は終にニカヤ信條に凝集せられ、此に基督教は餘りに大にして哲學説として立つるを得ざることを説き、特別無比の天啓にして人智の發見に非ざる事を示したりき。

テツツエル ヨハン Tetzzel, Johann

人名 一四五〇乃至一五一九 同市の天主教僧、教團事務者。ライプツェルの人。同市の大學にて神學及び哲學を學び、一四八九年ドミニコ派に入り、説教者として多少の成功あり。一五〇二年法王より定期教團事務の委託せられ、終生之に従ふ。一五二二年ワルムにて人の妻を誘惑高淫して死刑に宣告せられたりしが、終身禁錮に減刑せられ、次で特赦せらる。一七七年法王は彼を全獨逸教團事務委員とし、且檢査官となす。此の任務を少しの遺憾もなく遂行し、未だ犯さざる罪に對する教團事務をまで實りて大なる噴弄を招く。ルーテル此の書の害を知らりて及んで、公然テツツエルに反對する説教を始めるや、テツツエルは異火燃やし笑列の聲勢を示しつゝ之に答ふ。ルーテルが九十五箇條又をテツツエル

テート

ベルヒ教團の門に掲げし後は、羅馬にても直ちにテツツエルの不適任を認め、テツツエルを解任する事まで必要となりしが、彼はマルティンが己れの過失罪科を皆な知りたりと覺るや恐怖すること一方ならず、幾何もなく死亡せり。

テート アルチバルド カムベル Tait, Archibald Campbell

人名 一八一八—一八二一 英國カンバーリーの大監督。エザンバラに生る。一八三四年牛津パリオール、カレワザのフェロニーとなり、四二年アルノルドの後を襲ふてラグビーの校長となる。四九年カリスブルの「テイーン」五六年倫敦の監督となり、六九年カンターベリーの大監督に任ぜられ、以て其死に至る。

テート ネーハム Tate, Natham

人名 一六五二—一七一五 愛蘭の詩人、詩篇翻譯者。ダブリンに生る。神學博士フェリスフル、テートの子。ダブリンのトリニチ、カレワザにて教育を受け、倫敦に行き、一六九〇年柱冠詩宗とせらる。神學博士ニコラス、アレクシーと共に「ゴデビデの詩新譯」を著して名を残す。アレクシーは一六五九年愛蘭のアランドンに生れ、一七二六年死したる人なり。テートは倫敦リチャモンド及びサルレーにて教給を得「エーネイド」翻譯をも公にせり。詩篇翻譯中にては何れの部がテートの筆に屬するやは不明なれど、彼の方が詩人として優りたるが如し。一六九五年二十篇を出し、餘をば九六年に出し、後屢々改正重版せらる。九六年王より諸教會團に用ふるを許され、九年には倫敦監督より推薦せられ、以前のステールホルド及びホプキンス譯詩篇を刊行し、近頃まで英國教會に用ひられしが、同教會内にて讀書試大等に多く用ひらるるに至りて、此の詩篇翻譯は其の用を

テの部 タトス

成行けり。之に就てはローヌとモントゴメーリは活氣なしと評し、監督ワイルヘルム・フットルは譯者を乾燥の詩篇作者と評せしが、詩篇を忠實に譯して之を詩的ならしむることは至難の業に屬することなれば、テート等は蓋し成功したるものなり。中には詩的の風韻も十分に存せり。一七〇三年「新譯道加」を著す。蓋し「テートのみの翻譯にして「テ、テウム」主の新、信條、十誡、聖書又は新約聖書の語句の翻譯を含めり。又好著なり。

テトス Titus

人名 亞利比亞ホストラの監督、マニカイ教攻撃者。イエロノモスの書に依れば、アレンスの朝に死す。其の傳は詳ならず。昔教者ユリアヌス彼れに書を贈りて、彼が異教徒に暴を加へしを責めしに對し、彼は之に答へて相争へり。此の書翰は三六二年のものにて、アンテオケにて書かれたり。されどテトスが初代教會にて非常に尊敬を受けし最大原因は、其のマニカイ教に反對せる著作によりり。イエロノモス之を記し、彼を其の時代の教會著述者の大なるものとなし、ソゾメノスも亦彼を有名の人物となせり。彼は同書にて二元の思想すべからざるを論じ、善惡は唯だ道徳界に於ける區別なるを説き、プラトニシの世界論より立論せり。原本三冊ツリアヌスの拉丁語譯となりて保存せられ來りしが、後希臘語原本も現はれ、出版せられたり。

テトス Titus

テトスは保羅の傳道的同伴者にして、保羅は常に愛と信任を以て之を記したれ共、其の書翰中稀に彼の名を記すのみにして、使徒行傳中には更に其の名を記載せず。之に由りて説をなす者、テトスを以て保羅の伴侶たりし或者の又の名となし、或はテモテ、或はシラス、或はユスト(徒十八の七)と同一視する者あれ共、

テトス

之を承認すべき確證なし。テトスの名は拉丁なれ共其生地は不明なり。クレテの人も云ひ、コリント人も云ひ、又はイエロノモスの産也といふものあれ共、異邦人も(加二の三)と云ふの外確證なし。思ふに保羅によりて改宗せし者ならん(多一の四)而して保羅改宗後十四年の頃テトスはアンテオケに滞在しけるが、保羅は彼を携へてエルサレムに登りたり。此時異邦人の割禮の問題に就て争論起りたりしが、保羅は強割禮に反對して、遂に彼をして割禮を受けしめざりしが如く見ゆ(加二の一四)。テトスは保羅が加拉太書を書きし際彼と共に在りしが(加二の三)彼が哥林多前後書を書く必要の起りし迄はテトスの名は記されざりき。此時テトスは二回又は三回コリントに往きたりき。即ち彼は哥林多の書がたる前保羅の要求に依り(哥後十二の十八)其の書(哥前)を携へて往きたりき。然るに彼れ既にコリントを去りし後保羅に對して劇烈なる反對起りしかば、保羅は又エペソより彼を遣はして此種局を處せしめたりしが如し。而して彼れ其任を全ふして歸り來りしかば、保羅は喜に堪えず(哥後二の十四、七の十一—十五)更に書翰(哥後)を認め之を携へて三たびコリントに往かしめたり。次にテトスの事を記せるは提多書に於て也。此書に依れば、保羅は羅馬に於ける其最初の囚獄より放された後テトスと共に東方に向ひ、クレテに上陸し、其處にて諸邑を教化せり。然るに保羅は長く其處に留ること能はざりしが故に、テトスを留めて長老を任命し教會の組織を完成せしめたり。然るにクレテには痛くテトスに反對する者ありしかば、彼は書を認めて事情を保護に逼じ、且其助言を求めたり。於是保羅は彼に書を贈りて長老の任命、教會の組織を完成すべく、又

提多書

提多書 The Epistle to Titus

提多書

テの部

提多書

ありしセナス及びアゴロに託し、此書を贈り、ニコポリスに來れし意を通じたりしなるべし。彼がクレテに往きたりしは何れの時なりしや、又此書を書き贈りたりしは何時の頃なりしや明ならず。此地に於る教會の組織の尙未だ進歩せざりし時なりしや云へば、比較的早き時代なりしならんと思はるべし。使徒行傳には之と符合すべき時機を見ざる。故に提多書に於る羅馬に於る羅馬より一たび教されたりし後クレテに往き、又此書を書き贈りたる者也と信ぜらる。

【此書の内容】 此書は初めに記者自己の使徒たる職權を主張して挨拶の語を述べたる後(一)の(一)四)先づ適當なる教師を任用するの必要を論じ(一)の五)十六)次にテトスの力を極めてクレテの信徒に教ふべき基督教の性格の真相を略説して(二)の(一)三)の(十一)結論に及べり(三)の(十二)十五)適當なる教師を任用するの必要に關しては、先づ監督たる者は正教を以て人を勧め、且反對者を排けざる可らざる者なれば、高尚なる道徳的性格を有する者ならざるべからざることを述べ(一)の(五)十九)次に此等の反對者の事に及び、彼等は不從順にして空論を唱へ、人を欺き、利を貪り、眞理を棄て、奇しき談話を以てし律法に心を寄する者也との事を述べたり(二)の(十一)十六)基督教の性格の真相に關しては、先づ基督教者相互の關係に就て、老人、老婦、青年、少女、僕たる者に、神の道徳の徳をせざらんため、又基督教者のために己の身を捨て、我儘を以ての罪より善事を行はしめんとなすべし故に、正教に合へる生活を爲すべきことを教へよと説き(二)の(一)十五)次に基督教徒と外界との關係に及び、神の慈愛は我儘

をして、嫉妬怨恨の舊生活を棄て、眞の新生活に入らしめ、以て高尚にして有益なる生活の模範となし給ひたれば、執政と權威ある者に服し、且凡ての人に對して柔和なるべきことを教へよと述べ(三)の(一)八)テトス一人に對しては、愚なる辯論を避け、異端を唱へ分れを起す人を一再警めて遠くべしと云へり(三)の(九)十一)斯くて終りに彼は自己のニコポリスに往き冬を過すべければ、テトスの愛に來り會せんことを、クレテに在る彼の徒に對する助言を述べ、問安の語を以て此書を結べり(三)の(十二)十五)。

此書は提多書と全くと、其愛する弟子に教訓を與へんとて書きたる私書にして、教會にて公に讀ましめんとて書きたる者に非ず。又此書の最も重きを置きたるは、健全なる教訓の結果として生ずべき性格及び有用なる生活也。

【此書と他の書との關係】 此書は直接に舊約を引かれ共、書中數ヶ所に其舊約を使用せり。又耶蘇の教訓と見るべき者なきに非ざれ共、直接福音書に依りたるに非ず。其最も近似せるは保羅最初の書翰にして、同一なる言語の使用せらるる者あり。提多書と最も深き關係を有すれ共、殊に提多書は其目的、其結構を同くし、且同一の言語甚だ多し。提多に記せる教會の禮拜及び制度に關する記事は、本書に比すれば一層精密にして、且其組織一層複雑なる點より見れば、或は兩教會の狀態に成りたるが如しと雖も、此相違は或は兩教會の狀態及びテトス二人の境遇の相違に歸するを得べきを以て何れとも云ひ難し。

【クレテの状態】 (一) 異端 此書に記載せる異端を唱ふる教師は半ば猶太人、半ば異邦人にして、

提多書

提多書

猶太人の方重要な地位を占めたりしが如し。彼等は頗る勢力あり、正教に反對し(二)の(九)テトスの權威に從はず(一)の(十)十五、三の(十)空論を唱へ、人を欺き、汚利を貪り、教ふべからざる事を教へて全家の信仰を亡ぼし(一)の(十一)十二)自ら神を識ることを其行は之に云れり(一)の(十六)彼等の教訓は愚なる辯論、系圖、律法の紛争(三)の(九)十)猶太人の奇しき談、人の立てし律法(一)の(十四)に過ぎず。彼等は又レビの清潔律に重きを置きたりしが如し(二)の(十五)故に此書に記せる異端の中には第二世紀に起りたるノストラク教の形跡更に之れなく、何れも猶太教的要素を含める者として解説するを得べし。即ち清潔に關する問題は、耶蘇がパリサイ人を叱責したりし同一の問題にして、自ら神を識ることを云ひて其行の之に展れり云ふは、異邦人よりも寧ろ猶太人に似合はしく、奇しき談若くは系圖と云へるは思ふに族長時代の物語に關係したることなるべし。

(二) 教會の組織 テトスのクレテに於る地位は、テトスのエペソに於る地位と同一なりしや否明ならざれ共、彼は保羅の代理人として此處に在り、會衆を管理するの權威を有し(一)の(五)長老を立て、異端を排斥し、聞かざる者を遠く(二)の(十五)三の(十)正教を傳へ、基督教の性格を發揮せしむべきことを命ぜられたり(二)の(一)十五) 然れ共彼の地位は永久的なりしや、一時的なりしや明ならず。一)の(五)三の(十二)より察すれば、彼が使徒の代理人なりし權威は單に一時に過ぎざりしが如し。永久の制度として彼は各色に長老を立てべきことを命ぜられたり。此長老は監督と同一なりしが如し(一)の(五)一七) 保羅は愛に監督の道徳的資格を示せり。此書の記す處に

テの部

提多書

依れば、監督の職は正教を以て人を勧め(二)の(九)猶太人を懇切に待らひ、他教會の信徒を歡迎し、又教會の財政を掌るに在りしが如し。執事、女執事、及び童女に關しては此書何事をも記さず。

【作者の問題】 此書の作者に關する外部の證據は提多書と略同じ。即ちイレニウス、テラチウ、アモス、亞歷山のクレメント及びアラトイアン聖徒は之を保羅の書翰也として引用せり。マチアヌスは提多書を拒否せしに拘はらず、此書の保羅の作たるを承認したれ共、マシオン及びバシオテスは之を排斥せり。拉丁及びスリヤ譯の聖書には之を敢て、ユスチアヌス及びテオフィラスの書中には此書翰中の言語と均しき者を發見すべし。書中の一)四)には明に保羅の書翰たることを述べ、三)の(十二)十四)には含蓄的に之を示せりと雖も、此等前後の文字は之を其本文より離し去るを得べし。然れ共書翰全體の調子、教訓、及び狀態は保羅の作也とするも矛盾する者あるを見ず。即ち作者が自己の教訓及び希望を固執する事、異端を唱ふる教師に對する峻酷なる調子、倫理的推論より俄に教義的前提に移ること、希臘の詩を引き、舊約の言語を使用せる事、深く自己の罪惡を感ずる事(三)の(三)等は保羅的也。又此書の教義、即ち聖き人には萬物皆潔しと云へる(一)の(十五)凡ての人に救を賜ふ神の恩恵に於たりと云へる(二)の(十一)基督教者のために己の身を捨て、我儘を諸の罪より離し出したりと云へる(二)の(十四)義しき功に依らず、神の憐愍に従ひ重生の洗と聖靈に由て新にする事を以て我儘を救へりと云へる(三)の(三)の(五)は保羅の早き書翰の思想と相同じ。而して又クレテに起りし異端及び教會の組織なる者も、之を提前に比すれば單純なりとの事は既に述べたるが如

し。此等の事に依りて之を見れば、此書を以て保羅の生時に成りたる者也となす事尙も妨なしと雖も、此處に二箇の困難あり。其一は書中保羅が他の書翰に於て用ゐたることなき數多の言語を用ゐたることに於て、二は書中提多書に見ゆるが如き比較的後代に屬する新語句を有する事也。是れ此書が保羅の作に非ざるの疑を起したる所以にして、若し之を保羅の作也とすれば、云ふ迄もなく其晩年に書きたる者なること明也。又もし之を保羅の作に非ざれば、保羅の精神を有する後記の、保羅書翰の斷片を用ゐて此書を作りたりと爲さざる可らず。マッセル、フエルト、ハルナツク、クレメント等の批評家は、此説を採用し、保羅書翰の斷片と認むべき者と然らざる者との區別せり。然れ共此等の區別は一)一)四)及び三)の(十二)十三)を除きては、確實の根據あるに非ずして單に推測に過ぎず。故に此書の作者に關しては今日尙未だ何れとも確定し難し。

【此書の價值】 作者の何人たるに拘はらず、提多書と同じく此書の價值は之がために増減すべからず。教會制度に關しては別に提前に加ふる者なしと雖も、猶太教的の勢力あり、異教の反對尙強かりし基督教發達の初代に在りて、如何に基督教會が組織せられたりしやを示すことには、其歴史的價值甚だ大也。又教訓に關しては此書別に新なる發達を示すこと雖も、基督を以て「大なる神」と同一視したる(二)の(十三)と、洗禮を以て「重生の洗」と云ひし(三)の(五)とは共に注目すべき文字也(參考書に於ては「提多書」の條を見よ)。

國に出でたる詩人の中最も大なるもの一人にして、桂冠詩宗ウォルヅワルスを死して後アラウニンクと共に其後繼者たるべき候補者に推されたりしが、多少の勳賞の後奧論は彼に桂冠を授け、彼は欽定詩宗に擧げられし。此決定に對する時、好評なりしといは「Mr. Macdonald」に對する時の好評なりしといふ。彼は少時より多方面にして、其作せし處一様ならず。一方に山野の風物に關係せる物語歌あれば、他方には幽玄深遠なる哲理に關係せる歌の作あり。又一方に古代の詩歌より翻譯せる詩歌あれば、他方には寫景狀物を主としたる作あり。其他尋常の抒情歌あり、又純然たる劇詩ありて、其受容の量の大なる衆詩人に傑出せり。且彼は序を逐つて進歩する點に於て亦他詩人に優り、第二期の作は初期の作よりも進歩し、第三期の作は第二期の作よりも更に進歩し、第三期第四期と年を逐ひて益々精緻高妙の域に赴き、才華頻りに顯發せり。繪畫的にして音響的なることは詩技の上乗にして、詩人の理想とする處なれ共、能く此理想に達し得るものは極めて少く、而して成熟期のテニソンは實に能く之に達したり。而して又英國の詩壇古來名家に乏しからずと雖も、自ら詩人の天賦と自己の天才とを意圖し、十年一日の如く忠實、熱心、眞摯、難曲に其職に盡せし者未だ曾てテニソンの如き者之をあらす。理想の高きことに於て、精勵せらるることにして、他技詩に入りしことに於て、テニソンは實に英國の詩人中古今獨歩也と稱せらる。

テニソンが其生涯の大部分を通じて哲學上の問題に深き興味を有し、之を以て其詩的感興の一大源となしたりしは殊に注目すべき點也とす。彼の創作に在るや其友と謀りて、哲學研究の俱樂部を設け、

テニソン

テニソン

テニソン Alフレッド Tennyson, Alfred, Lord 一八〇九—九二 英國の詩人。イェンコンシアのソメレスビーに生る。英

テの部

提多書

テの部

テニソン

テニソン

テベリアの海。テムブルオテモ

アラス以後の哲学者及び神の人格、惡の起源、倫理的觀念の由来等の問題を研究せりといふ。而して彼は引續き哲學諸問題の研究に熱中し、基督教信仰の根本問題研究のため組織せられたる『大英國哲學會』の創立者の一人にして、又常に之に出席し、當時の有名なる哲学者、神学者、科学者及び文學者等と交りて其研究を共にしたりといふ。左れば彼が作に宗教道徳等の哲學的問題に關する彼の思想の影の寫さるゝは當然の事也といふべく、吾人は先づ『二流の心の告白』に於て彼が詩人としての經歷を初むるに方り、先づ其心を觸ましたりし哲學上の懷疑の寫さるゝを見るべし。之に少くおくれ出でたるは『二の聲』にして、此處には人生の價值に關する彼の思想を示せり。彼は又『美術殿』に於て當代の弊を評しし出世間熱の諷刺を諷刺し、眞善美の相關を説きて、世間と出世間との關係を歌ひ『高き凡神論』に於て實在の根本的性質並に有限無限との關係を示し、『In Memoriam』に於て、彼は神及び靈性不滅の苦痛の秘義、及び知識の起源性質發達等に就きて或は論議し或は冥想し、一種の雄大な哲學を構成せり『アソーサー王物語』に於ては靈肉の争闘、神、人及び不朽の靈性を説き『アプロファンダ』に於ては靈魂の先在と人格とに關する彼の思想を示し『老耆者』に於ては不可説的唯物的思想に反對し、信仰の範圍と價值とを示し『絶望』に於ては冷なる神學と無神論的不可説論的哲學を罵り『約束』に於ては當時の哲學的傾向が日常の行爲に及ぼす關係を論じ『無罪』に於ては靈魂不滅を論じ『進化論者』に於ては『絶望』等には人類進化の終極を論じてり。彼が斯くの如く哲學に興味を有したりし所以は、彼が元來反骨的人なりしに由れりとも、彼

が當時の思想界に浸透したりし情状に對して苦悶せざるを得ざりしことは、又彼をして一層哲學的ならしめたりき。當時科學の驚くべき進歩に伴ふて唯物論流行し、現象を説明するに單に其必然的接觸に依らんとして、又進化説は人間を以て單に自然の一部となし、哲學は感覺論と超絶論とに依りて代表せられ、宗教界にも亦聖書の權威と傳説とに關する從來の信仰を破らんとするの新運動起り、斯くして懷疑不信の風一世を風靡せんとするの有機ありしかば、彼は神、人及び靈魂不滅等に關する信仰の理由を熱心に講究し、以て有力なる慰藉と奨励とを社會に與へんとしたりき。彼は性來保守的にして、其教へられたる基督教の信仰を離棄せんとする傾向強かりしが、之と共に盲目的獨斷説に安んずる能はずして、其信仰に合理的基礎を與へんと欲したりき。彼は斯くして人類思想の最も深大なる問題に熱心なる興味を與へ、其研究の結果を其巧妙なる詩に賦へり。要するに彼が終生の理想は神を畏れ精進向上を推奨するに在りき。而して彼は自ら此理想を實行し、詩人中の君子人となり、而して世に深大なる感化を與へたりき。

テニソン

トマス Tenison, Thomas

嘗に擧げられ、九五年ウィリアム三世不在中は命ぜられて司法總の地位にも立ちしが、之にては餘り技術を顯はさず。教職召集會議上院議長たるに及び、其の下院が高派教會主義者にて先づ革命を喜ばざるに對し、彼は『岩の如き』テニソンと呼ばれし程強硬に之に抵抗す。又教會の改革を謀りしが、是には多く成功せざりき。其を命ぜる圖書館を立つ。アンの朝にも事へしが其職は依然困難なりき。

テベリアの海 The Sea of Tiberias. ガヨリヤの海の別名。『ガヨリヤの海』の條を見よ。

テムブル Temple Society. 獨逸の宗教的團體。一八五四年ウィルヘルム・テムブルにて創立せられ、六八年バレスナナに移り、ハイファ、ワッファ、サロナ、及びエルサレム近傍に植民せり。彼等は農夫の團體にして基督の再來を望めり。

テムブル Temple, Frederick. 人名。一八二二—一九〇二 英國カンタベリーの大監督。イオニア島に生る。牛津大學に學び、パリオル、カレッジのフェロー及び講師となる。後ハクスロウのネレル院の總理に任ぜられ、且同時に視學官となる。五八年ラグビー學校の校長に擧げられ、其間熱心なるグラッドストーン黨となる。六九年エキセテルの監督、八五年倫敦の監督となり、九六年ペンソンを襲ふてカンタベリーの大監督となり、好評あり。『宗教と科學との關係』其他著はす。

テモテ Timothy. 人名。テモテは使徒保羅の信任せし友にして、ルステラ又はテモテの農なりき(徒十六の一、廿の四)。父は希臘人、母は猶太

テの部

テモテ

テモテ

提摩太前書

人なりしが如し(提後一の一五)。能辨見たる彼は普通の希臘人を與へられしも、其が意義は宗教的なる母に取て意に通へる者たりしならん。彼は母より舊約聖書の教育を受けしが(提後三の十五) 割禮には與らざりき。保羅が第一回の傳道旅行に於てルステラに到着せし時、青年テモテは彼によりて改宗せられ、基督教徒となりたり(哥前四の十四—十七、徒十四の廿二) 第二回の傳道旅行に於て、テモテはルステラ並にイコニウ地方の信者間には一般に知られたる弟子なりき。保羅はテモテの有爲なる青年なるを見て、バルナバ若くはマコに代りて傳道旅行の伴侶として彼を携へんことを希望せり。提前一の十八、四の十四、提後一の六の言葉が此の場合に關する事也とせば、保羅は彼の決心に依りて助力を受けたりき。斯くてテモテは導かれて保羅に來り(徒十五の卅) 長老等は彼の上に手を置き、保羅は彼を聖職に任じ、彼は人々の前にて其信仰を告白し(提前六の十三) 斯くの如くして彼は正式に聖職に就きたりき(提後四の六、徒十九の廿二)。思ふに彼は『傳道者』(Evangelist) たる名稱を負ひたりしなるべし(提後四の五)。然れ共提前二の六に依れば彼は保羅及びシラスと共に『使徒』(Apostle) と稱せられたりき。保羅の計畫は先づ猶太人に道を傳播するにありしが、テモテは純粋なる猶太人に非ずして、割禮に與らざりしを以て、猶太人の反對を受けたりき。故に保羅は彼に割禮を授けたりき。テモテ今や保羅の子として忠實なる伴侶となり(提二の廿二) テモテニテモテの活動者となり(提前二の廿二) テモテに伴ひ、保羅のアヘンセスに往きし後、尙其處に留まりしが、彼に促されてアヘンセスに往き、テモテニテモテの道に迷ひし時、彼等を援助せんが爲め其處に

赴き、難道を齎らしてアヘンセスに歸りしに、保羅は既にコリントに去りたる後なりしかば、之を追ふてコリントに往き保羅に逢ひ、テモテニテモテの狀況を語り、彼に斯なる生氣を與へたり。彼は保羅及びバルナバと共に帖撒羅尼加前後の兩書に署名せり。思ふに彼は此兩書の筆記者なりしなるべし。此の後テモテは保羅と共に第三回の傳道旅行に於てエペソに在りて巡遊せられたる(徒十九の廿二) 彼はエペソに在りて將來の準備をなしたりしが如く、彼は再びエラスマス及び他の兄弟等と共に傳道旅行に上り(哥前十六の十一) マケドニヤを経てコリントに遣はされたり(哥前四の十七)。此の旅行は哥林多前書の書かると少し前の事にして(四の十七) 其の目的はコリント人を以て保羅の基督に關して教へたることを回想せしめんが爲めなりき。保羅は其の結果に就て感ずる所あり、テモテを親切に受けんことを願ひ乞ひたりしが(哥前十六の十、十一) 果して其の結果不成功にして、テモテの使命を必要とせずに至れり。此の後テモテは保羅と共にマケドニヤに行き、哥林多後書には其名を列れ、又保羅と共にコリントに在りて活動したりき。保羅の最後のエルサレム行にはテモテも之に伴ひ、又トロアスに於ても彼と共にありき(徒廿の四、五)。彼は思ふにエルサレムの旅行を全ふせしならんも、使徒行傳中には再び彼に就て記載する所なし。彼は哥羅西、腓利門、腓利比等の書翰に保羅と共に其名を列したるを見れば、保羅が因はれて羅馬に在りし時、彼と共に羅馬に在りしこと疑なく、而して保羅はテモテを腓利比の教會に遣はさんことを望みたりき(提二の十九—廿四)。此後の事に就ては明らかならざれば、教會書翰を以て眞實也とすれば、保羅は其釋放後東方に於てテモ

テモテを會合し、マケドニヤに往きし時テモテを留めてエペソの教會を管理せしめたり(提前一の三)。テモテの事業は保羅の不在中に代りて教會を治め、異端を抑へ、禮拜を行ひ、教會の規律を正すことなりき。保羅は其歸りの或は遅延せんとことを慮り、提摩太前書を贈りてテモテを教へ、勵まらせたりしが、或ならずして保羅は再び因はれて羅馬に送られたりしかば、彼は提摩太後書を書きテモテに贈り、屬言を贈ることを勿れと告げ、且マコと共に羅馬に來りて保羅を助けよと云ひおくれり。テモテの因はられたるは思ふに此時の事なるべし(來十三の廿三參照)。テモテはテモテよりも弱く、且危機に處するの才能乏かりしが、保羅の彼に對する愛情は寧ろテモテに對するよりも深かりしが如し。テモテは漢語く(提後一の四) 身體虛弱(提前五の廿三) 怯懦にして(哥前十六の十) 自辱の念乏しく(提前四の十二) 幼少の時の態を棄て、又基督のために恥を忍ぶの必要ありとせられたり(提後二の廿二、一の八)。然れ共彼は保羅の忠實なる模倣者(提後三の十) 眞の子(提前一の二) 伴侶(羅十六の廿一) 等と稱せられたり。教會の傳説は彼を以て其殉教の死を述ぐるに至るまでエペソ教會の監督なりしとせり。希臘教會にては一月廿二日、拉丁教會にては九月廿七日を以て其死を紀念せり。

提摩太前書 The First Epistle to Timothy. 後書及び提多書の三書翰は、教會上の指導を與へんことを目的を以て書かれたる者なるが故に、教會書翰と稱せらる。此三書は何れが最初に書かれたる者なりや明ならず。學者の中には提前を以て最後の書翰也とす者あり。又提多を以て最初の者也とす者あり。

テの部 提摩太前書

者おけて一致せず。
 【歴史的地位】 此書の記す處に依れば、保羅はテモテと共にエペソに在りしが、テモテをエペソに留めて、獨り自らマケドニアに往きし後此書を書き贈りたるが如し。思ふに保羅はマケドニアに往き、時過ぎて後、テモテよりの書翰、若くは其他の方法に依りてエペソに於ける教勢の盛衰を喜ぶべき者に非ざるを知らざるべし。テモテは實に「信仰に依れる保羅の眞子」にして、過去の経験は彼の信仰の勇士たるを願はし、預言と長老會の按手禮とに依りて教職の務を得たり（一の二、一八、四の十四、六の十二）。然れ共彼は年尚少く（四の十二）身體虛弱にして屢々疾病に罹り（五の廿三）且尙もすれば人に欺かれ易き傾を有せり（五の七、六の十一）而して保羅は速にエペソに歸らんことを欲すれ共、或は遲滞することあらんことを恐れたり（三の十五）。故に彼は初めテモテに命じたりしことを一層莊重に教へ、彼が教會に在る各種の人々を教導處理するに方りて必要な教訓を與へ、又是等重要な教訓を度に関する指導を與へんが爲めに此書翰を成して、之をテモテに贈れる也。此書の目的は即ち三の十五に云へるが如く、テモテをして「如何にして神の家の中に行ふべきを知らしめんがため也」。

【此書の内容】 此書に記せる論旨は一ならず、故に之を精密に分解せんことは困難なれ共、尙之を三部に區分することを得べし。即ち第一（一の一二）は緒言にして、初めに挨拶を述べたる後（一の一二）先づテモテをエペソに留めたりし所以を語り（一の三―十一）次に過去の大きな罪あるにも拘らず、保羅を選びて傳道の大任を與へ給ひし神の恩恵を感謝し（一の十二―十七）終りに過去の預言を回想する（一の十五、六の十四―十二の十三、一の十二―提後一の三、二の七―一の十一、三の七―二の廿六、四の一―三の一、四の十四―一の六、五の十三―三の七、五の廿一―四の一、六の十一―二の廿二、六の十二―四の七。此書と羅馬書及び哥前書との類似は、後人が此等の書を用ひて此書を書きたりとするが、又は保羅自ら同一の思想を此書に顯はしたるなり、次に依りて解説し得べく、提多及び提摩テの類似は、同一の記者が大抵同時に之を書きたりとするが、又は或る記者が此等の書を用ひて此書を書きたりとするがに依りて解説し得べし。

【エペソ教會の狀態】 (一) 異端、此書に記載せる異端を唱へたる教師の何人なりしや今日より之を知ることは難し。保羅がテモテに向ひ、教職の責任を擔むべきことを勧め（三の一二）罪を犯せる長老を警しむべきことを命じたるを見れば（五の廿一―廿五）此等の教師の中には保羅と其使徒たる職權とを攻撃したる者もありしなるべし（一の二、一、廿、二の七）。彼等は基督教の中心なる論の主意に背き（一の六）自己の真心を棄て（一の十九、四の二）其自ら語る處の事を知らず（一の七）神を敬ふことに依りて利を得んとし（六の五―十）妄りなる無益の談と辯論とに心を寄せ（一の四、六の廿）熾然、争闘、毀謗、妄疑の有様を顯したり（一の六、四の四）。彼等教訓の主意如何となれば、先づ彼等は律法の教師とならんことたりしといふ（一の七）思ふに彼等は律法の價值を暴棄大にし、福音の恩恵を忘れたる者なるべし。又彼等は辯論を生ずる奇談と極りなき系圖に心を寄せたりしといふ（一の四、四の七。此言語の意義明らかならず。故に之を以てノストラクテ

提摩太前書

と、よき真心を棄てて信仰を亡へる者あることを思ふことに依りて、信仰よき真心を以て善戦を戦ふべしとのことをテモテに勧めたり（一の十八―廿）。第二（二の二―六の二）は此書の木論にして、更に之を二部に分つべし。即ち二の二―四の五は教會一般の生活に關し、四の六―六の二はテモテ一人に對する個人的忠告に關す。教會一般の生活に關しては、先づ神は凡ての人を救はんことを望み給ふが故に萬人の爲に祈禱すべく、殊に王及び權威を有する者の爲めに之を爲すべしとの事を述べ（二の二―七）次に教會に於る男女の地位に及び、男は何れの處にても祈るべく、女は虚飾を去り善行を以て飾となし、凡ての事順ひて靜に道を學ぶべしとの事を説き（二の八―十五）最後に監督、執事及び女執事を選ぶに方りて、其職の責を思ふて選擇を慎むべしとのことを述べ、而して此の如き規律の必要なる所以に及び、是れ神の家に於て高尚なる道徳的生活を保有せんがため也、神の家は活神の教會、真理の柱と基也と云ひ、然れ共此真理に背きて虚偽の教訓を傳ふる者顯はるべしとの事を警告せり（三の二―四の五）。テモテ一人に對しては、先づ自己の教訓行為に關し、彼が其教へられたる道に忠實にして、益なきを以て人に輕ざらんとせざる、身を以て信者の模範となるべしとの事を勧め（四の六―十六）次に老人、少年、老婦、少婦、童婦、長老及び奴隷を取扱ふ道を述べ、テモテを指導せり（五の二―六の二）。第三（六の三―廿）は結論にして、保羅は更に異端を傳へ、基督教の善言と神を敬ふことに加ふ教を棄つる者を排斥し、テモテに向ひて、此の如き人々に違はざり、善しき事と神を敬ふ事と信仰と愛と

提摩太前書

を、よき真心を棄てて信仰を亡へる者あることを思ふことに依りて、信仰よき真心を以て善戦を戦ふべしとのことをテモテに勧めたり（一の十八―廿）。第二（二の二―六の二）は此書の木論にして、更に之を二部に分つべし。即ち二の二―四の五は教會一般の生活に關し、四の六―六の二はテモテ一人に對する個人的忠告に關す。教會一般の生活に關しては、先づ神は凡ての人を救はんことを望み給ふが故に萬人の爲に祈禱すべく、殊に王及び權威を有する者の爲めに之を爲すべしとの事を述べ（二の二―七）次に教會に於る男女の地位に及び、男は何れの處にても祈るべく、女は虚飾を去り善行を以て飾となし、凡ての事順ひて靜に道を學ぶべしとの事を説き（二の八―十五）最後に監督、執事及び女執事を選ぶに方りて、其職の責を思ふて選擇を慎むべしとのことを述べ、而して此の如き規律の必要なる所以に及び、是れ神の家に於て高尚なる道徳的生活を保有せんがため也、神の家は活神の教會、真理の柱と基也と云ひ、然れ共此真理に背きて虚偽の教訓を傳ふる者顯はるべしとの事を警告せり（三の二―四の五）。テモテ一人に對しては、先づ自己の教訓行為に關し、彼が其教へられたる道に忠實にして、益なきを以て人に輕ざらんとせざる、身を以て信者の模範となるべしとの事を勧め（四の六―十六）次に老人、少年、老婦、少婦、童婦、長老及び奴隷を取扱ふ道を述べ、テモテを指導せり（五の二―六の二）。第三（六の三―廿）は結論にして、保羅は更に異端を傳へ、基督教の善言と神を敬ふことに加ふ教を棄つる者を排斥し、テモテに向ひて、此の如き人々に違はざり、善しき事と神を敬ふ事と信仰と愛と

テの部 提摩太前書

の十五、六の十四―二の十三、一の十二―提後一の三、二の七―一の十一、三の七―二の廿六、四の一―三の一、四の十四―一の六、五の十三―三の七、五の廿一―四の一、六の十一―二の廿二、六の十二―四の七。此書と羅馬書及び哥前書との類似は、後人が此等の書を用ひて此書を書きたりとするが、又は保羅自ら同一の思想を此書に顯はしたるなり、次に依りて解説し得べく、提多及び提摩テの類似は、同一の記者が大抵同時に之を書きたりとするが、又は或る記者が此等の書を用ひて此書を書きたりとするがに依りて解説し得べし。

【エペソ教會の狀態】 (一) 異端、此書に記載せる異端を唱へたる教師の何人なりしや今日より之を知ることは難し。保羅がテモテに向ひ、教職の責任を擔むべきことを勧め（三の一二）罪を犯せる長老を警しむべきことを命じたるを見れば（五の廿一―廿五）此等の教師の中には保羅と其使徒たる職權とを攻撃したる者もありしなるべし（一の二、一、廿、二の七）。彼等は基督教の中心なる論の主意に背き（一の六）自己の真心を棄て（一の十九、四の二）其自ら語る處の事を知らず（一の七）神を敬ふことに依りて利を得んとし（六の五―十）妄りなる無益の談と辯論とに心を寄せ（一の四、六の廿）熾然、争闘、毀謗、妄疑の有様を顯したり（一の六、四の四）。彼等教訓の主意如何となれば、先づ彼等は律法の教師とならんことたりしといふ（一の七）思ふに彼等は律法の價值を暴棄大にし、福音の恩恵を忘れたる者なるべし。又彼等は辯論を生ずる奇談と極りなき系圖に心を寄せたりしといふ（一の四、四の七。此言語の意義明らかならず。故に之を以てノストラクテ

提摩太前書

思辨的議論及び其發出の教義を指せる也と爲す者あり共、之を以て律法に關する教訓と並べ叙するを見れば、猶太族長の時代の物語より生ずる空論の意也と解する方可なるが如し。次に彼等は殊に智識を重じたりしが如し（六の廿）。殊に智識を重するは猶太教のラビ又然りし難し（路十一の五十二、約七の四十九、羅二の廿）是れノストラクテの特色なれば、之をノストラクテ教に通用する方可なるに似たり。又彼等は物質を以て惡となし（四の四、五）婚姻を禁じ、食を斷ず（四の三）又飲酒をも禁じたりしが如し（五の廿三）保羅は此の如き禁慾主義を以て「惡鬼の教」也と云へり。猶太教の中にも斯る禁慾主義なきに非ず、エッセネ派の如きは其最も著き者なれば、保羅は或は之を指せるやも知るべからずと雖も、是れ又ノストラクテの特色なれば、寧ろ當時教會に其萌芽を發したりしノストラクテ教に通用する方可なるべし。左れば此書の所謂異端とは或は猶太人、或はノストラクテの教師、必ずしも之を一に限るを要せず、死に角無益なる辯論に耽り、又不當なる禁慾主義を強ふんとしたりし者なりし也。

(二) 教會組織 當時エペソの教會は既に一の教會として組織せられ、神の家又は「活神の教會」として記され（三の五、十五）其會員は「兄弟」四の六、信者（四の十二、五の十六、六の二）及び「聖徒」五の十、として記されたり。彼等は禮拜のため集り、男女共に教へ、又は祈ることを得たりしが如し（二の八―十二）禮拜は誦讀、勸勉、教訓（四の十三）願告、祈禱、懇求、感謝より成れり（二の一、五の五。使徒は教會の上に最上權を有し、其勤め（二の一）と其希望（二の八）とは權威を有せり。神の彼に託して彼等に教へしめ給ふ眞の教訓は福音

提摩太前書

勸勉と柔和さを慕ひ、信仰の善戦を戦ひ、永生を取らるべしとのことを勧め、祝福を以て一たび之を結びしが（六の三―十六）更に世の富める者に教ふべき教訓を述べ、再びテモテに向ひて、妄なる益なき談及び智識と偽り稱ふる辯論とを避くべきことを勧め、以上を分辯に依りて之を見れば、此書主要の教訓は倫理的、精神的にして、道徳、教養、眞理は此書の體なるを知るべし。但し此書は徹頭徹尾個人的にして、其儘之を公衆の前に讀ましめんとの目的を以て書かれたる者也と信じ難し。然れ共此書に記せる主要の教義が、何れの世何れの教會にも適用すべき者なるは論なし。

【此書と聖書の他の書との關係】 此書が舊約を淵源として引用したるは僅に一回に過ぎざれ共（五の十八―廿五の四）其言語を使用せるは一再び止まらず。又之より直接に引用したるには非ざれ共、福音書殊に路加傳中の言語と頗る類似する者あり（四の八―路十八の廿、五の五―路二の廿七、五の十八―路二の七等の如し）。然れ共其最も近似せるは保羅の書翰にして、一の二―路十六の廿六、一の五―路十三の九、一の八―路七の十六、一の十一―路十三の十、一の十七―路十六の廿六、二の五―路三の廿、一の十二―哥前七の廿五及び十五の十、四の四―哥前四の廿、五の十八―哥前九の九、一の十一―哥後四の四等の如し。更に深き關係を有するは、提多及び提後にして其間の類似は最も著し（一の一、十一―多一の一、三、二の六―二の十四、三の二―四の一、六―一の三、二の六―二の十五、四の十二―二の七、十五、五の十三―一の十一、六の二―一の五、六の二―二

テの部

提摩太前書

提摩太前書

提摩太前書

如く、牧會書翰も近世に至る迄保羅の書きたる者として承認せられたりしが、第十九世紀の初に至り、ロット、エー、アール、シュニツドが一たび提前に疑を挟みてより以來、此等の書翰は甚しく攻撃せられ、今日に至るも學者の説尙未だ一定するに至らず。提前の保羅の書翰なることは、イレニウス、テラチウス、アマス、亞歷山のクレメント及びアラトリアン聖經明に之を云ひ、拉丁及びギリヤの聖書會同の之を認せり。然るにマテアスは提後及共之を排斥し、マルシオン及びパソアスは提後及び提多を併せて悉く之を排斥したり。然れ共彼等が之を排斥したりしは批評の結果に非ずして、テラチウス、アマスの云ふ處に依れば、私人の書翰なりしがため也。云ひ、イレニウスの云ふ處に依れば、彼等が此等の書翰中に記載せられたる教訓を好まざりしが爲なりしといふ。兎に角此等の異端派の人々を除きては、第二世紀中頃より以後、此等の書翰が保羅の書翰として一般に承認せられ、且自由に引用せられし事疑なし。

然れ共此書の作者を以て保羅となすの困難は、内容に在り。此書の内容を驗すれば、保羅以後の記者が、當時發達しつゝありし異端に對し、基督教の倫理及び正統教義を辯護せんとの目的を以て、保羅が自ら書きたる書翰の断片を用ひて此書を編みたるには非ずやと思はるゝ節あり。是れ此書の作者に對する疑の起りし所以にして、其疑の要點左の如し。

(一) 此書の歴史的地位、使徒行傳に記載せられたる保羅一生の事蹟と符合せず。此書の記されたは、記者の云ふ所に依れば、保羅がテモテをエヘソに留め、自らエヘソよりマケドニアに往きたりし時也(一の三)。然れ共是れ果して何れの時なりしや。保羅が

初めてエヘソに往きたりし時は、エヘソよりリスリヤに往きたりしが、マケドニアには往かざりしを以て見れば(徒十八の十九-廿一)其時の事に非ざりしは明也。保羅が第二回にエヘソに往きたりし時は、長く其地に留り、他の場所にも往きたりしが、此書の示す處に依れば、エヘソ教會は當時既に永く存在したりしが如し。去れば此書の事に非ざるべし。又エヘソに於て騒擾起り、保羅之がために此處を去るに至りし時に非ず。何となれば此時保羅はエヘソを去りてマケドニアに往きたりしが、彼は既にテモテ及びエラストの二人をマケドニアに遣はしたりし(徒十九の廿二)。而して彼が希臘より亞細亞に歸りし時又テモテを伴ひたりしを見れば(徒廿の四)。此間に於て吾人は此書に云へるが如く、テモテのエヘソに留りたる時を發見すること能はず。且保羅がエヘソより連れ、マケドニアに在りし時テモテも亦彼と共に在りし(哥後一の二)。去れば此時テモテはエヘソに遺さること能はず。又徒廿の廿九、卅の言より之を察するに、此時エヘソの教會には未だ異端を唱ふる教師あらばに現出せざりしが如し。然るに此書には此等の教師の現出せること其感化を明に示すを見れば、此書を以て之れより以後の作也となさるべからず。此の如く吾人は使徒行傳中に記載せられたる保羅の生涯中には、此書の記されたりと認むべき適當の時機を發見すること能はず。然れ共此一事を以て此書の保羅の作なることを全然否認すべからず。何となれば使徒行傳は保羅一生の歴史を記したるものに非ず。獄中の書翰と稱せられたる彼の書翰より推定するに、保羅は果して紀元六十四年を以て此世を去りたりしや其疑はし。彼は腓利門書に於て彼がために寓所を備へんことを求めたるを

テの部

提摩太前書

提摩太前書

提摩太前書

る者も、論旨の相違より來れる者にして、現出也との明瞭あるに非ず。又此書中に用ゐられたる語句の中には『我佛の望なるイエス』(一の二)、『正理』(一の十)、『信すべし』(一の十五等)、『信仰と善き真心』(一の十八)、『我佛の教主なる神』(一の三)、『時至らば證すべし』(一の六)、『信仰の奧義』(一の九)、『救度の奧義』(一の十六)、『善き教の道』(一の六)等の如き現出の者を見ゆる者あり。是亦此書の保羅の作ならざる證として批評家の指摘する處なれ共、此書の保羅の他の書翰より後に書かれたる者ならば、保羅の作なること否に關せず、明なる事實なれば、多少斯る語句の混入せる者ありとて、必ず保羅の作に非ずとも断定し難し。故に文字語句の上よりのみにては未だ此書の果して保羅の作なるや否やを何れにも断定し難し。

(二) 此書の中に顯はれたる教會制度は保羅以後に屬せりとの理由に依り、此書の現出なるを主張する者あり。此書が教會の頗る發達せる時代に成りたる者なることは此書を讀む者の均しく感ずる所也。即ち此書には種々なる教職の稱を以て既に定りたる者の如く記載し、監督の職を以て顧ふべき務也と云ひ(三の二)新に教に入りし者を監督となすべからずと云ひ(三の六)又監督を其稱に録することば六十歳以上なるべしと云ひ(五の九)且タキスチアンなる意の中にも既に道を離れたる者ありし事を記載せり(五の十二、十五)是等は何れも教會組織の既に頗る整頓したりし時代に關すこと難し。新約時代の如く教會の發達頗る迅速なりし時に方りては、必ずしも之を以て保羅を距ること甚だ遠き時代に置くを要せざるべし。教會制度に關する此書の言語は、新約の他の書に比すれば比較的詳細にして、且一層の重

書と進行せる言語あり。即ち長老(徒十四の廿三、廿一の十七、雅五の十四)監督(徒廿の廿八、腓一の二)執事(腓一の二)女執事(羅十六の一)の如し。保羅は初めより或る種の教職を設け(羅前五の十二、哥前十二の廿八)且秩序に従はずして語るを禁じ、次序に従て行ふべしとの事を命じたり(哥前十二の十四)。左れば彼が後に至り、此書に見るが如き制度を發達するに至りしは、必ずしも不自然也といふべからず。寧ろ此の如き書翰の書かれたるは、當時未だ一定せる制度ありしを以て、按手禮を受け、長老及び執事となりたる者に要する資格を示さんためなりしと論ずるを得べし。且此書は預言に重を置き、未だ監督と長老との間に區別を設けざりしが如し。果して然りせば此書に示せる教會制度が稍や後代に屬する者なるは明なれ共、之に依て直に第二世紀以後の作也とも斷言し難し。故に教會制度の上よりの議論も、此書の作者の保羅たることとを何れにも断定し難し。

(四) 此書に顯はれたる宗教的生活にも亦均しき發達の跡あるを發見すべし。此書の中心教義は素より保羅的なれ共、之を保羅の他の書翰に比すれば律法の價值、及び善行(此處此書に四回、提多に三回、保羅の他の書になし)の必要に一層の重を置き、宗教を以て敬虔(此書に八回、提後、提多に各一回、保羅の他の書になし)若くは敬神と同一視し、又最も端莊を重ぜり。此等の事實は疑もなく此書の稍や後代に屬する者なるを證する者なれ共、保羅の書翰にも亦其教訓の之を均しき方向に向て發達しつゝある跡なきに非れば(哥前六の二、羅三の卅一、七の十二、加一の八、五の六、廿二、廿三、弗二の十)之に依て直ちに此書を保羅の作に非ずとも斷言し難

ければ(廿二節)思ふに彼は纏繞を釋されて先づコロサイに往かんざりたりしなるべし。又始之と同時に記したる腓利比書には、更に進でマケドニアに往かんとの希望を述べたり(二の廿四)。思ふに彼はコロサイよりエヘソに往き、エヘソよりマケドニアに往かんざりたりしなるべし。此は素より彼の希望に過ぎざれ共、彼は實際紀元六十四年以後尙生存し、一度羅馬の獄を出で其希望せるが如き旅行をなし、後再び捕へられて羅馬に送られ獄に投ぜられ、此書及び他の二書を書きたりしなるべし。此は單に想像のみに非ず。アラトリアン聖經中にも、保羅が四班牙に旅行せし事を以て吾人に知られたる事實の如く記載し、羅馬のクレメントも亦保羅の四班牙に往きたりしと假定すべき言語を記載せり。兎に角今日多くの批評家は保羅の一たび被されて四班牙地方に傳道したりしを信ぜり。故に使徒行傳中に記載せる保羅の傳中に於て、此書の書かれたる適當の時を發見すること能はずと雖も、尙保羅の生涯中には此書の書かれたる時あるを知るべし。故に此一事を以て此書の作者の保羅なりや否やを何れにも断定すること能はず。

(二) 第二は此書の文體にして、此書の筆者は保羅の他の書翰の文體より異りたる文體を用ひて此書を書きたりとて、此書の保羅の作なるを否む理由となす者あり。即ち此書には保羅特有の言語數多、而して保羅が他の書翰に於て用ふることなき數多の言語を用ひたりとて、批評家の中には此等の言語の目錄を作れる者あり。作者が此書に於て用ひたる言語が、保羅が他の書翰に用ひたる言語と異なる者ありとの事は眞實なれ共、用語の相違は同一書翰中の前後に於てさへ之を認むるのみならず、其所謂相違な

るべし。

(五) 此書の保羅の作たるを否む他の理由は、書中に記載せる異端を以て、保羅以後に發達したる形跡ありとすに在り。此の如くパルは此書の所謂『辯論』と題する著書を指せる者也と云へり。然れ共ホルツマンは是れノストラク教の一定せる分派を指せるに非ず、唯ノストラク教の萌芽を指せるに過ぎずと云へり。此書の所謂異端なる者は遠くとして其教を明示せず、其の示したる危險は單に宗教上の智識、辯論を以て敬虔なる心と生活とに代用せんとしたる點に過ぎず。且記者が直接に異端と唱ふる教師を攻撃せずして、唯彼等の説に欺騙せらるべからずとのことを警告したるのみなるを見れば、第二世紀以後に發達したる異端の状態也といふより、寧ろノストラク教の尙未だ發達せざりし時の状態也といふを可とすべし。左れば此點より此書の保羅の作なるを否み難し。

以上は則ち此書の作者に對する非難及び之が解説にして、之を保羅となすも、なきも共に困難あるを免れず。既に云へるが如く此書の文體、教訓、此書に記載せる教會政治及び異端なる者、保羅の他の書翰と異なる者あるは明なる事實なれ共、又之を第二世紀以後の産物也ともなし難し。ユウリッヘは、此書に顯はるる處に依れば當時の基督教は全く俗化せりと云ひて、此書の保羅の作なるを否みたる共、基督教の俗化は既に哥前書及び弗書に於て之を見るべし。又他の批評家は此書中に希臘、羅馬の思想の基督教と結合せる者あるを發見し、之に依て之を第二世紀以後に置かんざり共、希臘、羅馬の思想が基督教の中に入りたるは保羅の時代にして、必ず

テの部

提摩太前書

しも第二世紀以後の事也といふ可らず。モファットは此書の作者は保羅の弟子にして、彼は保羅の書翰に熟識し、其思想を妥に再現したる也云へり。此書の中心教義が保羅的にして、初代教會の之を保羅の書翰として受領したりとの事は既に云へるが如し。此書果して保羅自己の作なりや、若くはモファットの云へるが如く其弟子の作なりやは、此書に於て教會制度、其權威、其教訓等に置きたる重要な、果して保羅の生時に在り得べきことなりや、又保羅は過去の奮闘を忘れ、新に迫り來れる危險の中に在りて、既に揚文たる基礎に重を置き、禮拜の方法、教職の資格等を嚴密になすことによりて高尚なる道徳的生活を實踐し得べしと思惟したりと想像し得べきや如何に存す。此點より考ふれば書中保羅の作と認むべき點多の點あるに拘はらず、之を以て保羅の弟子の作也となす方解し易きに似たり。然れ共作者が大體にテモテに向ひて『爾年少を以て人に輕ぜらるる勿れ』と云ひ(三の十二)預見の定を爲すことなき、少しして偏り行ふこと勿れ』と命ずるが如き(五の廿一)又其疾病に言及して、水を飲むことなく、葡萄酒を用ゆべしと云ふが如き(五の廿三)保羅自己の作なるを思はしむる者なきに非ず。要するに此書の作者は之を保羅自己とすも、又之を晩出の者也とするも共に困難あるを免れず。於是保羅の作たるを主張せんとする者は、晩出の者也と思はるる部分(例之三の十一、十三の如き、若くは二の十一、十五、五の十一、廿二の如き)一般的性質を有する部分(之を以て後人の附加したる者也となして之を削り、之を以て保羅の作に非ずとなす者は、書中個人に關する語句、例之一の四、十二、十六、二の七の如き部分)を以て既に存在せる書翰より借り來れる者也とな

提摩太後書

せり。然れ共此の如くならずことによりて凡ての困難を解説すべからず。且書中を此の如く區分するも確實なる根據あるに非ずして、單に推測に過ぎざれば、此書の作者に關しては今日尙未だ容易に何れとも斷言し難し。

【此書の價值】 作者の何人たるに拘はらず、此書の價值は甚だ明也。先づ第一此書は提摩太より提後より明に、按手を施し、教職を任免する權能は、唯獨り使徒の代表者の有すべき者なることを示せり。此書は保羅の作ならば是れ即ち保羅の有したるも、吾人は之に依て當時の教會が之を以て保羅の意見なりしと信じたりし事を知るべし。此書は又宗教の最も高尚なる倫理的、靈的觀念は教會の組織制度と一致する者にして、内的生命と外的組織とは矛盾する者に非ずとの事を説する者也。且此書は教會制度、教職の資格及び職務に關する最初の手引草といふも可也。後世等の主意に關する議論は多く萌芽を發に發せり。

【參考書】 註釋にはエルクワット、アルフォルト、ウエニス(スベーカーカス、コンメンタリー)、プラムメル(エキスポジタス、パイアル)、ベルナルド(銀橋聖書)、ハムフレース(銀橋聖書)、マイヤル等あり。總論にはホルツマン、マンゴルト、ユウリヤ、ヘルツァン、サレモン、ウァイブス等あり。此外ハルナツクの『タロノロジー』、マツヤフエルトの『使徒時代に於ける基督教史』、モファットの『歴史的新約聖書』等を見るべし。

提摩太後書 The Second Epistle to Timothy. 新約全書教會書翰中の一書。nothy. 經名。此書の記す處に依れば、保羅は此

提摩太後書

書を書きたりし時は、羅馬の獄に在り、而して彼は既に久しく囚人となりたりしが如し(一の八、十六、十七、二の九)。然れ共彼は何處に於て、又如何なる狀態の下に捕へられたりしや明ならず。彼はテマス、クレステンス、テトス、テキコ、エラスト、トロピモ等と共に小亞細亞及び希臘地方を旅行し、トロアスにてアレキサンデルに構まされ急遽其地を去り(四の十三、十四)亞細亞にて其助を得んと期待したりし人々に背かれ(一の十五)エレストスにてトロピモ病のため留まり(四の廿)エラスト、コリントに残れり(同上)。思ふに彼は是より其他の人々と共にニコポリスに向ひ、其地又は羅馬にて捕へられたりしならん。斯くてテマスは彼を棄て去り、クレステンスはガラタヤに、テトスはデルマテヤに、テキコはエペソに往き、彼が此書を書きたりし時は唯ルカのみ彼と共に在りき(四の十、十二)彼の審判は既に初まり(四の十六、十七)彼は死の宣告の時近きに在るべしと期せり(四の七、八)。故に彼は亞細亞人の信徒なるマシゴロ屋々彼を慰め(一の十六、十七)又羅馬の信徒も多少彼と共に在りし(四の廿)心願る寂寥の感に堪えず、唯ならず愛子テモテ及びマコを思ひ出せり。思ふに此時テモテはエペソに在りたりしなるべし。於是彼は此書をテモテに贈り、務めて速に來るべしと云ふこと、マコを伴ひて共に來るべきこと、及びトロアスに立寄り彼が曾て遣り來りし外衣及び書物を携へ來れどことを申し送りたり(四の九、十一、十三)。然れ共彼はテモテの元來性情なること、其旅行の危險なること、及びテモテの到着前或は死の宣告を受けることあらんことを慮り、一方に於て、眞理を教ふるに足る人を選んで之に傳道を行はしむべきことを勧め、他方に其身に迫る危險を

テの部

提摩太後書

【此書の内容】 此書先づ初めに挨拶の言を述べ(一の一、二)テモテ過去の愛情と信仰とを感謝し、再び彼を見んとの希望を叙し(一の三、五)本論に入りて先づ保羅の地位に基きて勸をなし(一の六、二、十三)次にテモテの地位に基きて勸をなし(一の十四、四の八)終りに個人的使命を述べ、問安の言を以て之を結べり(四の九、廿二)。保羅の地位よりは、テモテが保羅の按手に依りて與へられたる神の靈の性質を思ふて、其職を復び職にせんこと(一の六、七)死に勝ち生命と靈魂不朽の眞理を明ならしめし神の力と恩恵を思ひ、又保羅が神に於る信仰を以て苦を忍びたりしことを思ひて、テモテも亦大膽に苦を忍ぶべきこと(一の八、十二)聖靈に依りて、其託せられたる眞理を守るべきこと(一の十三、十八)基督に在る恩恵に堅くなるべきこと(二の二)忠信にして人を教ふるに其開きし所の教訓を託すべきこと(二の二)及び死より離りたる基督の福音と、彼と共に死なば彼と共に生くべしとの信すべき話を思ひ、基督の精兵卒の如く苦を忍ぶべしとのこと(二の三、十三)を述べ、テモテの地位よりは、主として彼に與へられたる教訓の性質に基き、信徒をして無益なる争論をなすこと勿らしむべきこと(二の十四)自ら安らなる益なき論を避け、眞の道を正しく教へんことを務むべきこと(二の十五、廿一)少年の態を棄て靈的性質を追求すべきこと(二の廿二)愚なること無學なる辯論を避くべきこと(二の廿三、廿六)異端を避くべきこと(三の二、九)其教へられたる教訓に忠實なるべきこと(三の十一、十七)及び忍耐と、眞面目と勇氣とを以て其義務を盡すべきこと(四の二、八)を述べ、個人的使命に及

提摩太後書

びて、自己の終焉近きに在り寂寥の感に堪えざれば、マコを伴ひて速に來るべきこと、主は過去に於て彼を守護し給へば將來に於ても彼に信頼せりとの意を述べ、問安の語を以て此書を終り(四の九、廿二)。此書は徹頭徹尾個人的私書輪にして、公に教會に於て讀まるべき目的を以て書かれたる者に非ず。【聖書の他の書との關係】 書中極めて明に舊約の聖なることを述べたれ共(三の十五、十七)直接に舊約を引きたる處なし。羅馬及び哥前使と類例の語少からざれ共、其故意に擧げたりと見るべきは(一の廿三、二の十七、四の六) 提前二の七、一の十一、六の十一(一の廿二)のみ。使徒行傳に記せる保羅の言と類似せる者あり共、之を引用せりといふ程近似せず。

なる者も、提前及び提多に記せる者と異なる者に非ざるを知るべし。(其餘參照) (二) 教會組織 此書は提前及び提太の如く教會の組織及び制度に重を置かず。テモテは保羅の代理人にして、彼より受けたる教訓を守り(一の十二、十三、二の二、八、三の十、十四)之を以て人を教導し(二の十四以下) 又人を督し戒め勸むるの任を有す(四の二) 彼は保羅の按手に依り、此事業をなすべき靈的資格を與へられたり(一の六) 彼の事業は『職』として記され、彼れ自らは『傳道者』として記さる(四の五) 彼は保羅の處に來れその命を蒙りたり共、又再び此地に歸り來るべきことを預定せるが如し(三の一、六、四の三、五) 而して彼の不在中彼は忠信にして人を教ふるに足る人を選び、其任を之に託すべきを命ぜられたり(二の二) 此書に依りて見ればテモテの地位は永久的にして、且地方的なりしが如し。

提摩太後書

【作者の問題】 此書が保羅の作なる外部の證據は提前と略同し。而して内部の證據は提前及び提多より比較的強し。テモテを以て年少、怯懦にして愛情に富めりとなすは、他の書に依りて知る處と同じく、一の十五、十八、二の十八、四の十一、十六、十九、廿一に記する處は偽作也と信じ難し。又此書の作者が其同業者に對する愛情、其受けたる親切に對する感謝、自己の棄てられたるを歎く感ずること、之がために祈れること、深く自己の使命の重要なことを思ふこと、自己の教訓と苦難とに訴ふること、主の保護と末日の應報とを確信すること等は保羅的にして、此書の教理即ち神の恩恵、基督の死に勝ちて甦れること、及び勇氣を以て苦痛を忍ぶの必要等に重を置くことも亦保羅の作なるを證すべし。又此書

テの部

テラビム

テルノテルス

テルチ

に記せる教會の組織、及び異端に關しても保羅の作
たるを否むの理由となすに足る者なし。唯吾人をし
て保羅の作に非ざるべしとの疑を起さしむる者は、
此書の文體にして、此書にも亦提前及び提多と同じ
く、保羅の他の書翰に於て見る能はざる言語、及び
精や後代に關する語句あり。故に今日の批評家の中
には、之を以て保羅の弟子が、保羅書翰の断片を集
めて作りたる者もなき者あり。又之を以て第二世
紀の作者の偽作也となす者あり。提前の批評に對す
る議論は又此處にも之を應用すべし。もし此書にし
て保羅の書也とせば、使徒行傳に記したる保羅の生
涯には之と符合すべき時機なきを以て、吾人は保羅
が「たび羅馬の獄より救されたる後再び捕へられた
り」との語を假定せざるべからず。

【此書の價值】 此書の價值は教理及び教會制度に
關する點に非ずして、歴史的、個人的なる點に在り。
若し之を保羅の作也とせば、使徒行傳以後の保羅の
生活、即ち彼が羅馬の獄より出で、傳道旅行をなし
たりしこと、一たび別れたるマコと再び調和せしこ
と、再び捕へられて羅馬の獄に繋がれたる事を示す
最良の記録たるべく、もし保羅の作に非ずとも、
此等の事實は尙信實するを得べし。然れ共最も大切
なるは此書に記せる保羅及びテモテの基督教教師た
る性格にして、此書は「羊の爲めに其生命を棄つる
善き牧者」の書翰也といふべく、吾人は愛に理想的
基督教教師(保羅)及び基督教教師(テモテ)の模範を
見ることを得べし。(參考書に就ては「提摩太前書」の
條を見よ)。

テラビム Teraphim. (c. 7-11) 靈名
言語の形状よりすれば複数なれ共、其語源明らからず。
一般に家の守護神也と想像せらる。(創世一の十九、

母前十九の十三、十六)此語の舊約に記されたる場
合を見るに、何れも魔術又は卜筮をなす時に之を用
ひたりしを示す者に非ざるはなし(結廿一の廿一に
於て殊に然り)。其形人の像に於たりて造られたる
者なりしが如しと雖も、實物大のものなりしや(母
前十九はかく解せらる)又は小さきものなりしや(創
卅一はかく解せらる)明ならず。猶太の註釋家の中
には、テラビムは初め木乃伊の人頭なりしを、後文
化の進むに及び木又は金屬に鑄めたりし者なるべし
と想像せる者あり。ハウラニア人の中には斯る人頭
を卜筮をなすに用ゐるの風ありと云へば、或は然り
しならん。ヨシア王はテラビムを禁じたりしが、伴
四時代には再び其使用せらるを見る(亞十の二)。

テルエル アマルナ Tell-el-Amarna.
【地名】 中部埃及ニル河の地に於て、メムフ
イスミデスとの間に在り。アメンホテプ四世の建
てたる神殿及び宮殿の遺址を有す。一八八七—一八八
八年中に古昔の埃及人の巴比倫、アッシリア及び其他
の東方國民と往復せる通信を有す。フインデルス、
ヘトヴィーは一八九一—一九〇二年更に遺址を掘發檢査
せり。テル、エル、アマルナ等と稱するは即ち此地に
於て發見せる右の土碑也。

テルステーゲンゲルハルト Tersteegen,
Gehard. 【人名】 一六九七—一七六九 編
譯ルテオドモド教會の神學者、又讚美歌作者。普魯
士ライオン地方モイユスに生れ、同市の拉丁學校にて
教育せられ、一七二三年シュルハイムの商家に奉公
し、同地に信仰振起運動者ワイエルヘルム、ホフマ
ンと相知る。自己の從へる商業は宗教生活の發達に
妨となることを感じ、一七九一年之を棄て、イオン業を

cryptone haereticorum 等は一般教會的なり。Axi-
nations, De testamento animae, De pallia, Aiver-
sar Heremopolim, 等は年代不明なり。辯證書中にて
「アポロゲチコス」は一九七七年セブチオス、セウエ
ロスの治世中に著し、羅馬の執政官に呈したるも
のにして、古來異教徒の非難に對して基督教及び信
徒を辯護したる書中の最良のもの。實に古代教會の
實といふべく、初に宗教自由をば人間の奪ふべから
ざる權利として論ぜり。教義書中にては「ア、プレス
タリブチナネ」最も重要な事、「アドウェルソス、マ
ルキオネム」五冊は二〇七一年乃至二〇八一年に書かれ、
論争書中の最も入念にして最も熟慮なるもの。知識
主義の何なりしが理解するに非常な價ある材料なり。
道徳的著書「パチエンチア」及び「スベタタタ
ヨス」又興味多く「アデイクチア」及び「デ、ウイ
ルギニナス、ウエラントイス」又讀むべきものとせ
らる。彼の全集はエーレン之を出版せり(一八五三
—一八五五)又「ニカヤ以前の基督教文庫」中の四冊は
彼の著作を集めたる者也。其他チアンデルの「基督
教建設史」附録として翻譯せられたる「アンチダノ
キチクス」(一八五一)「フアローラの「教父傳」卷一
(一八八九)等を見よ。

テルレル ウィルヘルム アブラハム
Teller, Wilhelm Abraham. 【人名】 一
七三九—一八〇四 獨逸唯理派神學者。ライプチヒ
にて生れ、同市にて教育を受け、神學を修め、五五
年大學にて講義を給む。六一年ヘルムネットの神
學教授に任ぜられ、六四年「基督教信仰の教科書」を
公にし、唯理主義の主張をなせしに拘はらず大なる
感動を興ふ。絕對の權威を揮ひ居りし組織をば彼は
全く無視し、罪の領分を惠の領分との二欄に教義の

學び、淋しき小屋に住みて退隱生活を過り、其の時
を勞働と祈りに分ち、其の利益のみならず母より譲
られたる財産をも貧者に散しぬ。二四年以後は一層
廣く活動し説教し、又文學に従ひ、所々を巡行し、
租關及びウエストフリアの各地を訪ひ、秘密集會
を開き、小團體を造りぬ。又佛蘭西神學者ラハディ
ー、ギオン夫人、ルグイニニー其他の文書を翻譯
し、自ら又「聖なる人々の一代記抄」「精神的断片」
「眞理の途断り」及び美はしき讚美歌を著す。「サン
ス、スーチ」の哲學書に就ての思想」はフイードリヒ
二世に深き印象を興へたりと言ふ。

テルチリアヌス Tertullian. 【人名】
第三世紀の基督教の拉丁語に於ける著者。一五〇
年カサブルタゴに生れ、二二〇年より二四〇
年迄の間に同地に於て死す。其の傳は詳ならず。父は亞
非利加に於ける羅馬守備隊の將校たりしが、性質過
激の人なりしが如し。テラチウオスは善き教育
を受け學者たり、希臘語にても多くの書を著せし
が、其は今日には傳はらず。彼の重要な研究は法學
に在りしものゝ如く、法理の議論は其の研究の非凡
なるを示せり。何時基督教に改宗せしかも、如何に
して改宗せしかも明ならず。されど其の急激にして
全人格を一變したるものなりし事は、後年の著書に
悔改をば必ず斯くの如き者と思へるにて推知せら
る。有妻の人なりしもカサブルタゴの教會にて長老とな
り、二四羅馬を訪ひ、奢侈腐敗の教會内にまで侵入
せるを目撃して、木山主義反對の刺激を受け、二〇二
年頃より反對運動の首領、説明者となり、所謂離教
者となりぬ。死する前加特力教會に歸りたりと唱ふ
る者あれど、テラチウオス派の其後までも存せ
しを見れば、此の説は眞ならず。斯く木山とは離れし

テの部

テルチ

テルレル

テラサ

も彼は異端とは異ひ、殊にノスマチヤ派と争へり。
此等の教義に關しては彼はテラチウオスの師、アラ
キスチオスの先輩、拉丁神學の祖なり。
著書は概して大ならざれども數多し。時代の神學の全
面に亘れり。即ち異教に對する辯證、異端に對する
論争、政治論、戒規論、道徳論等に於て時代の宗教
生活の活潑なり。教會史研究者に無限の興味を供す。
文書の性質は一體に嚴格にして實際的なれど、生命
と新鮮の氣に富めり。拉丁語を用ひて其の思想を現
はさんとしたるためとして流滑する點もあれど、
一體に明確銳利にして讀者に命令する趣あり、讀者
に懇諭するの趣なし。機智あり、調劑あり、時には
諷刺あり、法律的的嚴密ありて常に獨創的なり。希
臘神學と交渉密なれど思想全く獨立し、木山主義を
智識主義と對立するが如く彼の神學はオキゲヌスと
對立せり。オキゲヌスは其の唯心主義を知識主義と
て述べれば、テラチウオスは其の實在主義を殆
く唯物主義の境まで推し進め在り。彼はプラトニ
シテ的前世存在説やピタゴラス的の轉生説を否定
し、遺傳的の繼承説を取り、人の肉體と靈魂は同
時に生ずと説き、形而上學及び聖書より魂の屬身的
なるを論ぜり。希臘哲學をば幾も知識主義をば罪と
したり。西方教會神學の源頭となり、獨逸哲學者等
も彼を無視せざりし所以は實に此の實際的なる心實
の教を所々謂ふべし。其文書の著作時に明ならず。
De resurrectione carnis, Adversus Praxean, De co-
rominibus, De fuga in persecutione, De monogamia,
De jejuniis, De pudicitia. 其他は木山主義時代に屬
し。Apologeticus, De patientia, De oratione, De-
lapiano, Ad uxorem, Ad martyres, 及び De prae-

諸材料を分類別し、此の區別に通過せらるるものをば
悉皆除却せり。神の教義に就ては自然宗教に就き及
び、三位一體の事をば除去去り、遺傳的にテラチウオ
「コントラティクチオ、イン、アドエクト」を呼びぬ。
大學に於ける地位は多少危ふくなりしが、恰も伯林
政府よりスプレー河時ケンの管理長兼同地方高等
教職會議員に任ぜられたり。七二年「哲學的全書」を
著し、字の語學的説明ならで其の哲學的説明を
試む。彼は希臘兼希伯來的の眞實をば新約
聖書の理解に新光明を得べしと信じて之を試み、例
之「天國」てふ語の如き希臘兼希伯來的特殊の意味
にては、單に新宗教といふに外ならずといふ事など
を明にす。八八年の政府命令は再び彼の地位を危ふ
し、且シュルツェの審問に於ける其の投票の故に由
て、三ヶ月の停職及び精神病者養育院閉閉に宣告せ
らる。されど九二年には尙唯理主義の完全なる主張
「完全の宗教」を公にするを得たり。此書にて基督教
は當初より唯だ道徳の宗教なるまでは已まざる教
義をなし來りたるものなりと論ぜり。

テラサ Theresa, St. 【人名】 一五一
五—一八二 西班牙の見神者。舊カスチヤのアゲイラ
に生れ、一五三四年生地のカメル徒僧院に入り、
六一年よりカメル徒の宗派改革の業を始め、アゲ
イラに於てカメル徒の僧院を設く。是等を一名テ
ラサ徒とも稱す。テラサは生存中尼庵十七、僧院十
五を設く。其の著書は神學的熱情的なり。一五八七
年サラマンカ出版より始めて諸版あり。全體の佛蘭
西譯四冊あり。

テロール アイザック Taylor, Isaac
【人名】 一七八七—一八六五 英國の神學的著
者。ヤッフォのレーゲンハムに生る。父は銅版

テの部

テローロ

彫刻師たりしが、後非國教會教師となり、小兒向の書...

テローロ

人名

一七八一—一八一六 英國の一般浸禮派新結合の...

テローロ

派新結合を造り、此にて其の能を十分に發揮し、ハ...

テローロ

人名

一八〇三—一八七六 加那太の長老教會教師...

テローロ

テローロ

人名

ナサニエル ウィリアム Taylor, Nathaniel William, D.D.

テの部

テローロ

由實質に存すると共に、他方には人に於て罪を避け...

テローロ

に依歸する者なり。(六) 自然的能力は實在する力...

テローロ

大監督ロードに受を賜はれて、一六三六...

テの部

ディオ

ディオ

ディオ

り。アンテオケには異教徒、猶太教徒、基督教の異端徒のなかり互に相争ひしが、而も正統教會に對しては一種に攻撃の態度を取りしを、ディオドロスは此の喧嘩の中を裁骨の如く影の如き姿にて徘徊し、大なる精力を以てプラトーン派、ホルフロス派、マニカイ教徒、アポリナリウス派等と論争し、彼等の恐るる所、教會の尊敬する所となりぬ。然れども彼がアリウス派のアンテオケにて勢力を増せる時に、正統派に合して其の信仰を固持し、凡ての秘聖禮拜に列り、其の禮拜の出來ざるに至りては毎日に信徒を訪ひしにも拘はらず、又三八一年のコンスタンチノーブル會議がマルソの一監督に過ぎざりし答をキキアの大都監督に任命し、皇帝布令中にも彼を凡ての正統派問題に解答を與ふる諸監督中第一位のものと記せるにも拘はらず、死後僅に五十年にして異端の名を蒙りしは甚だ奇に見ゆることなり。然れども原因はネストリウス論争に在り。彼はアンテオケ派の傾向に一致して、基督に於ける人性を限なく重じ、亞歷山派の唯心的説明に反對し、アポリナリウスの論争して基督に於て神人兩性存する説を唱へ、神の子は家の如く衣の如くしてダビデの子に住むとて神人を二つに分離したり。此説は勿論長く基督論の思想を満足せしむる能はず、亞歷山のクリオスは既に四三二年に彼を其弟子モプスエスチアのテオドロスの文書を否認せしが、同文書は四九九年いよく實際の否認を受けた。テオドロスの著作は他の點にも趣味多し。神の存在に就て宇宙論的論證を起したるは彼を嚆矢とす。彼は又永久の刑罰説に反對したり。聖書解釋に就てはアンテオケ派の説を唱へたり。

Alexandria. **人名** 又大ディオニシウスとも呼ばる。オリゲネスの弟子、二三二年ハラタラスを繼いで問答學校の長となり、二四七年監督となり、二五〇年アキナス遺書に依て捕へられしが、クテアリアスと同じく逃れしも、而も彼は後に至り迫害時代に『降格』せし者を陪待せず、却て之を寛待し、其の友人同職者に向つて之を慰諭せり。柔和親切の人にして、其の監督となりしは異端者洗滌に關する論争に於てノヴァチアヌスの分離の時仲保者たりしが故なり。ゲアレリアヌス迫害の時二五七年追放せられしが、二六〇年カリエヌスの布令にて歸還を許さる。監督在職の晩年其の市に騷擾、虐殺、疫病、飢饉等にて瘡日なかりき。彼はオリゲネスの弟子中の傑出者にして、ネオスの再興せし基督千年統治説に反對す。福音書と約翰黙示録との批評的比較の如きは古亞歷山派の説の標本なり。サマリヤ説にも反對せしが、之は成功せず。殆ど異端と認められんとせしを羅馬のディオニシウスに書を送りて免るゝを得たり。其の文書の残れるは断片に過ぎず。

sius the Carthusian. **人名** 天主教の著作者。一四〇三年今の白耳義リムブルグなるリエウの教領内のカルツシアに生る。ケルンにて神學、哲學を學び、一四二三年レムレンデのカルツシア僧院に入り、一四七一年同所にて死す。其の智識の如きを誇りて厳格なる隱者的苦行に堪へ、其の頭腦の如きを誇りて百以上の著作をなし、又神のインスピレーションと天啓を受けしを誇りて、之に依て世人の尊崇を博し、『ドクトル・エクス・マテリヤ』と呼ばれ、帝王と親しみたり。然れども宗教改革起りし時に對する嚴酷とする目的を以て、其の著を一五三〇一六年に印刷するや何の効果も之に依て現はるゝことなかりき。

ディオニシウス **アレオバギタ** Dionysius Areopagita. **人名** 希臘雅典の市民、アレオ山の議員の一人、使徒行傳十七の三十四に、保羅に依て基督教に改宗せしとある人なり。ユウセピウスの歴史に依れば、雅典最初の監督は彼なりしと云ふ。稍や降りて存せし傳説によれば、彼は殉教の死を遂げしと云ふ。五三三年ユスチニアヌスの召集せし正統派及びセゲエロス派協議會にて、彼は他の文書と共にディオニシウス文書を引きてカルタド會議に反對せしに、正統派は曾てアマナシウスもクリオスも同文書を引きたることなれば、其時存在せしと見る能はず、證據とする價なしと論ぜしに、彼はテオドロスがマルソのディオドロスとアプスエチアのテオドロスに對する書中中之を引けるを論じ、多分亞歷山圖書館にて其の寫本を見たるならんと言へり。文書は『天國に就て』教會國に就て神の名に就て神學に就て十書翰の五書にして、何れも同一手に成れり。此文書の事の出つ

テの部

ディオ

ディオのディ

ディオスのディキ

るは以上の會議の時を始めとするが、五一三年よりアンテオケ教長たり一性論者たりしセゲエロス自身も之を引き、五二六年より同地の正統派教長たりしエフライムも之を引き、第六世紀にはヨアキム、スタトポリタヌス、第七世紀には『告白者』マキシモス其の註解を著し、第十三世紀にバキメレスは之を意譯し、希臘教會にては多少其の出所に就て疑ひも一體に之を尊重せり。西方教會にては大テオドロスに之を引きしも、其の名高くなりては東帝ミカエラ、スタムメレルが八二七年一冊を以て教皇王に贈りしに由る。ヒルテニアンは此のディオニシウスと聖デニースを同一人なりと稱へて非常に有名となり、ヨアキム、スコトス、エリザナは先王シャルルの命に依り之を拉丁語に譯し、自ら又深く感化を受けたり。西方教會にてはディオニシウスは神學主義の師とせられ、聖イタールのユーゴ、アルベルトス、マカヌス、トマス、アグイナス、ディオニシウス、カヤツシアヌス等は之に依て精神を鼓吹せらるゝ所少からず。以太利文藝復興時代のプラトーン派やダンテやミルトンやウォン、コレットや皆な彼に負ふ所多し。然れども批評學進歩し、ワレンチウス、ゲアラアエラヌス等の現はるゝに至り、此のディオニシウスと使徒行傳の同名者とは同一人なりといふ説は破られ、従つて文書の使徒的權威は破壊せられ、内容に於ても五三三年のコンスタンチノーブル會議以前の文書に絶えて其の引かれざる事と、文體華麗にして使徒時代文書に類なきと、第四世紀までは存せざりし神學用語の用ひられ居ると、發達したる教會儀式政治の事に説き及ぼせること、後代の事や人に關する語句、例之イダナチウスの殉教や哲學者亞歷山のタレメンスの事などの仄かに見ゆること、古よりの傳説

に訴へあること、其等の點より推して天主教神學者等まへ反對を許し、イニシテの主張するに於てはアラオ山のディオニシウスの作ならずと至るに至れり。然らば何人が何の世に之を著せしや。パウラムカルテントリシウスが第三世紀に亞歷山の人之を書けりと言ひしより、或はワニスコットの第六世紀の初エテラサの著せりといふに至るまで種々の説現はれしが、其の哲學的神秘的思想が後代の新プラトーン説と相合へるより見れば、或はプロテクトルスの作にはあらぬが、プロテクトルは四八五年に死にし人にて時代も相合へりと言ふ説多し。

ディオクテリスに關する書 The Kithabo Diogenis. **書名** 第二世紀に書かれたる神學論の一にして、初代教會の最も貴重なる遺物也と思考せらる。此書の特徴は作者の信仰の最も單純にして、精巧なる思辨なきに在り。ディオクテリスと稱する教育ある著名の異教徒の基督教に關する疑問に答へたるものにして、作者は基督教的生活及び教義の大體を示したるのみにして、其の深き奧義を示さず。作者の何人なるや不明ならず、之を以てユスチヌスの作也とす者あれ共、此書の作者が異教の神を以て人の手にて造れる偶像に過ぎずと云ひ、又猶太教の神より出でたることを否めるが如きは、ユスチヌスの見と異れり。

ディグビー 『サー』ケネルム Digby, Sir Kenelm **人名** 一六〇三—一六五五 英國の哲學者。バッキンガムシャーのゴトハルストに生れ、新教の教育を受けしが、一六三二年巴理にて天主教に歸す。二一年牛津を卒業の後、父の曾て受けし如く士爵に叙せられ、チャールズ一世より種々の

高き地位に任ぜらる。三八八年英國に歸りては王黨に與みし、議會の命により投獄せられしが、佛國王母の請に依て免され、四三年佛國に退き、テカルトと交はり『身體の性質に就て』アリストテレス派制度『靈魂に就て』等を著す。クロムウェルと私交ありしに依て英國に住むを許され、王朝回復の時倫敦に歸り、王會の第一回會議の時其の一員たり。以上の外『宗教選擇に就て』の簡潔な書翰集『レリヤミアイキに就て』神に拘束することに就て『同情の力に依て傷の癒やさるゝ事』等の著あり。

ディーステル **ルドウイヒ** Fohn Ludwig von **人名** 一八二五—一八七九 獨逸の舊約聖書解釋自由派の神學者。ケーニヒスベルク、柏林及びボンにて教育を受け、一八五一年ボンに私教授となり、五八年神學特別教授となり、六二年ゲーッフルドの正教授となる。六七年エナに、七二年ナウエンゲンに聘せられ、同地に死す。最良の著は『基督教會に於ける舊約聖書の歴史』(一八六八)なり。

ディッキンソン **ジョンナサン** Dickson, Jonathan **人名** 一六八八—一七四七 米國長老派の神學者、プリンストン、カレッジの最初の總理。マサチューセッツ州ハーティールドに生れ、一七〇六年エール大學を卒業し、〇八年ニウヘルシー州エリザベスに居を定め、六七個の教會にて規則正しく説教し、教會を造る永續的の勢力となりしのみならず、初めヒラデルヒア大會にても、後にニウヨルク大會にても、常に首領者たり。嚴しきカゲイン主義にして又ウエストミンスター告白の固守者たりしを、一七二七年大會にて記名の問題起りし時には信條告白を以て拘束するの非を唱らせり。

テの部

ディック

彼は一七四五年福音大衆の組織を成らしめたる首動者の一人にして、又アディド、ブレナード及び印...

ディック

人名 一七六四—一八三三 蘇格蘭の神學者...

ディック

人名 一七七一—一八五七 蘇格蘭の基督教...

著者は『神學講義』にて多年間諸神學校教科書とせらるる『インスピレーション論』等あり。

ディブモスコディテロー

『天體』四五年『實際的天文學』現はる。何れも盛に世に行はれ諸國語に譯せられ、最後のものは如きは...

ディブモスコ

人名 三〇八一 三九五 盲人ディブモスコと稱せらる。...

ディテロー

人名 一七一—一八四 佛蘭西の哲學的批評家...

マニカイ教反對の希臘語文書の断片等なり。

ディーベロディル

五一年第一巻を、七二年終巻を出せり。其の中途五九年には發行禁止せられ、同著者タルンペア及び...

ディーベンブロック

人名 一七九八—一八五三 獨逸の天主教高僧...

のなることを否定し、其中の基督教に關する預言は、所謂メソヂヤ的の出來事及び其預言に接近せし未來...

テの部

ディーン

ディーン

職名 元來羅馬の兵士十人を一組とせる decanus と稱する者...

四 獨逸の神學者、東邦學者、ウエルテメハセのイェリゲンに生る。一八四八年ワルテルムベルヒ...

デウエッテ

デウエッテ

英國地方教會のディーンは監督の任命せる教職にして、監督管區内の教職及び信徒の生活、行爲を監視するを以て其職務とす。

一八二〇年伯林の新設大學に招かれ、同僚シュライエルトと共に、信仰と科學との一致すべき神學上の『善き日』を來らるるために盡力せり。

テの部

デウエツ

然れども、ウエツは時事に趣味を有すること深
く、エランゲンの一學生カール、ルドヴィヒ、サ
ンドが自由主義の正面の敵たりしアラダスト、フォ
ン、コッペンホーを殺せしことあるや、サンドの母
に書を贈り、人を殺し又自らを殺せし罪行をば大く
非難しつつも、向下手人の動機に關する嫌疑を排し
て、根底に於ては純粋なる愛國心の致す所なりと辯
論し、之がために一九九年十月より大學を解任せら
れたり。テ、ウエツはライマールに行き、無事の時
を用ひてレーテルの書翰集五冊を編しぬ。此のみに
ても彼は僅に一の學者に伍するを得べし。二二年始
めて『テオドル』一名疑ふ者の聖別』といふ小説を
作る。之にはトールク『疑ふ者の聖別』を以て
りて答へたり。二九年第二の小説『ハインリヒ、メ
ルタム』を作る。共に世に行はるゝ事少なりし
も、好著にして時事に關する有益の思想に充てり。
二二年期せずしてパーセルに招かれ、生を終るまで
在任し、同大學發達のために盡す所多く、初め反對
せし者も全く彼に心服するに至れり。倫理學四書、
『宗教、其實質、顯表、及び人生に於ける感化』等は
同大學に於ける講演なり。説教をもなして五冊の説
教集あり。四六年『聖書歴史』を出せしが終らずし
て已めり。有名なる『新約全書明説註』は三六年
に始め、四八年に完成す。簡單明白の確證を以て
著る。

子女教育のための一會社をパーセルに設立し、自家
に希臘の一小堂を引き取りて之を養ひたり。グスマ
フス、アドルフス會パーセル支部も彼の設立せし所
にして、彼は之を『プロテスタント教會擁護者同盟
會』と命名せり。
彼の哲學、神學は『宗教及び神學に就て』(二一年)
に最も善く現はる。其の説の根底はカントの批評論
の有神論なれど、一見ヤコビの宗教を感情とする説
に傾き居れり。彼は知識と信仰を嚴に區別し、前者
は唯だ有限物に關係して能あれど、無限を捉ふるに
は感情の形となれる信仰、即ち敬神、熱心、謙遜等
に依らざるべからずとせし、無限は認知的に有限に顯
現せり、歴史的顯現の全體は永遠の超五官的思想が
自己を發表したる記號なり、奇蹟は理性には一の十
字架なれど、記號として其の意味を示せり。教義は
理性にては解すべからざれど、直覺に訴へ来るもの
なり、何となれば對象が記號なる時觀念の方法は唯
だ直覺に依るのみなればなり、故に見ての宗教
觀念は情動的なり、超自然主義は此の可解的なるもの
に上、情動的に昇ることによて存在すと言へり。
テ、ウエツは明に道徳的神學者なりき。彼は基督
の人格の美と其の教の力を強く説きたり。

大に成功し、遠方より人々を引き寄せたり。五三年
ギルベルト、テンネットと共に委員として大英國に
遣はされ、プリンストン大學の資金を募り四千磅以
上を得、滯英中絶の所人民は其の説教を傾聴せり。
五九年ウエツは、エドワーズを繼いでプリンスト
ンの總理となり、死して同地に葬らる。説教には非
常に多量なる準備をなしたる人なり。説教集存す。
デウエツ ツ トマス ウィリアム ラ
イス David, Thomas William Rhys
人名 一八四三 英國の東邦學者。ウェル
スターに生る。一八八二年倫敦大學のバイ語及び佛
教文學の教授に任ぜられ、八七年王家亞細亞教會の
書記及び圖書館長となりしが、一九〇五年辭してマ
ンチェスター大學の比較宗敎學教授となる。『佛敎』
(一八七八年初版、八九年第十八版)、『錫蘭の古代貨
幣及び度量衡』(七七)、『佛陀誕生物語』(八〇)、『佛敎
の聖經』(八一)、『暹羅の佛敎』(八一)、『佛敎
の聖經』(九九)、『佛敎の印度』(一九〇三)及び『英國及
び外國に於ける東邦學の研究』(〇五)等を著す。
デウエツ ツ David, Jc 人名 六
〇一死 ウェルスターの聖者。其の傳は神學的の物語
に包まれて明ならず。スミス及びウエイス字書の中
にチャールズ、ホールが神學的分子を去りたる彼の
傳を録する所に依れば、デウエツは少時十年間聖
書を研究し、後に僧院を立つ。後の聖アグスティン會堂
は之が記念たる者なり。彼は神學に精しく、正統派に
推されて其の退隱所を出で、ブレフィの會議にてヘ
ラヤウス説に反對し、其の驚く可き成功によてア
ンチエス教會の長に選ばれる。後またヘラヤウス説擁護の
ために會議を召集し、大に成功して『勝利の會議』の
名を得たり。彼は又其までアスクに在りし大監督官

條例。デウエイス

デウエツのデウエツ

在途をメネグイアに遷せり。是れキヤン人の進入
によて追はれ、對岸のケルト人之間密なならんため
に此に移りしものならん。其の人格は清潔にして熱
誠あり。其の監督的統治も使徒的の性格と結果とを
有したり。

デウエツツン アンドリウ ブルウス

Davidson, Andrew Bruce 人名 一八
三二一九〇二 蘇國の希伯來語學者。アマール
ンシヤのキルクセルに生れ、アマールン大學にて
教育を受く。一八六三年エヤンバラのニワ、カレツ
アの希伯來語教授に任ぜらる。彼は希伯來語研究
の上に及ぼしたる感化は頗る大也。彼は又舊約改譯
委員の一人なりき。其最初の著書は『希伯來語發音
法の概略』(六)とす。次に『約百記の文法的、說
明的註釋』第一卷(六)を出す。第二卷以下は終に
世に出でず。然れ共編纂聖書書中の『約百記』(八
八)は之が缺を補ふに足れり。此書は近年に出でた
る約百記註釋中最良のもの也。其外『希伯來語文典初
歩』(七四年初版、八八年第九版)、『希伯來語文典初
七』、『以賽亞書註釋』(テンブル聖書叢書中、一九〇二)
『舊約の預言』(一九〇四)等の著及び『The Call of
of God』(一九〇三)并に『Waiting Upon God』
(一九〇四)を題する二部の説教集あり。

デウエツツン サミュエル Davidson, Samuel

人名 一八〇六一九九 愛國の聖
書學者。ケレスウエーターに生る。一八三五年ベル
ファストのロヤル、アカデミカル、インスチテュー
ションの聖書批評學教授となる。校長老派を去りマン
チエスターのランカシャー、インデペンデント、カレ
アアの聖書文學及び東邦語教授となりしが(四二)五
七年之を辭せり。聖書の經文及び解釋に關する著書

の『新約聖書註釋』(三卷、四八一五一、二卷、六
八)、『舊約聖書註釋』(二卷、六二)等の著あり。彼
は又舊約改譯委員の一人なりき。

デウエツツン ランデル トマス

Davidson, Randle Thomas 人名
一八四八 カンタベリーの大監督。蘇國エジンバ
ラに生れ、初めハロウにて學び、後牛津のトリニ
チ、カレッジにて學ぶ。大監督テート(一八七七
一八二)に續て大監督ペンソン(八二二三)の秘書た
り。ウインザルの『アイン』及びウイタトリア女
皇附の説教者(八三一九)ロチエスターの監督(九
一五)及びウインチェスターの監督を歴て、一九
〇三年カンタベリーの大監督に任ぜられ、現に其
職に在り。其著書の中には『大監督テートの傳』(一
八九一)及び『基督教徒の機會』(一九〇四)等あり。

デウエー マティアス ビロー Davy, Matyas Hinc

人名 一五〇〇頃一五四
七 ウンガリアの宗教改革者。トランシルヴァニア
のデヴァの村落に生れ、一五二三年タラコウ大學に
學ぶ。二七年には羅馬教會の僧として埔里にて活動
す。二九年ウエツツンセルヒに行き一年半はセル
セルの家に入る。歸りて先づオーフェンにて新敎義
を説き、次でカシヤウにて之を説き、二つの小冊子
『デ、サンクトルム、ドルミチオネ』を發行して官僚
禮拜の非を論じ、五十二條を擧ぐ。當時ウンガリア
には尙活版あらざりければ二書は原稿にて回布せら
れたり。エルワウの監督トマス、スツアラハツィー
は此に於て彼を描へ、初めリカバに、次にフレシア
ルヒに、最後に維納に禁錮す。されど間もなく召され
て又新敎義を説き、再び捕へられ三二年より三四年
まで入獄。復た免されてナグステイ伯の保護の下

にウエツツンに定住し、改革を唱ふ。三七年またウエ
ツツンセルヒを訪ひ、パーセルに遷り『アエスプタチオ
』を著はし、又『ケンシユライ』の反駁を著はす。『ケ
ンシユライ』はウンガリアのフランシスコ派の長に
してソルボンの會員たるクレゴア、スチエスア
が彼の五十二條に對して加へたる駁論なり。サレ
アルに歸りて此に印刷所を起し『オルトグラフイア』、
ウンガリカを出す。之をウンガリアに於ける印刷物
の嚆矢とす。彼は又他のウンガリア改革者ヨハネ
ス、シルゲエスタルの建てたる學校にて教へぬ。然
るに此の運動は一五四〇年土耳其人の侵入に依て中
止となり、彼は東西に脱る。四二年歸りてナグスア
イの親族にして同じく新敎徒たるゲアレクシヤン、
テレク伯の保護の下に、アラレクシヤンに住めり。瑞
西に在りし日ウエツツンアミーの晩年説を知りて之を
取りしかば、歸國後は公然之を唱へ、ルーテル等
イッチンセルヒ改革者を厭ひて之を罵りぬ。晩年學
校用宗教敎科書をウンガリア語にて書きたり。又通
俗の讚美歌をも作りぬ。

デカポリス Decapolis 地名 『十邑』の
義にして、パレスチナの中ヨルダン河の兩岸にある
十の繁榮なる市邑を包める地方をいふ。十邑とはス
トゴリス、ヒッゴス、ガダラ、ヘフ、ヒラアルヒ
ヤ、ゲラサ、アイオン、カナタ、ラハナ及びダマス
コなれ共、其中六邑は全く荒廢し、其餘殘存せる者
も僅に邑の名を有するに過ぎず。聖書に三たび記さ
る(太四の廿五、可五の廿、七の卅一)。

デカルト Descartes, René 人名 一五九六一一六五〇 佛蘭西の哲學者。
又レナトス、カルテシウスとも云はる。ウーレーヌ
のラ、ヘーに生れ、初めラ、フレシヤのイエスイ

テの部

デウエツ

デウエツツン。デウエー

デカポリス。デカルト

テの部

デカルト

学校にて教育を受け、ナッソーのモリスに事へ、次で...

デキオス

でデカルトの回轉説すたり、更にホップス及び...

デサイのデデル。デナリ。デニー

一般的なることにて第一回のものにして、基督教徒は...

デサイブルス オフ クライスト The Disciples of Christ...

デテルライン ヨハン クリストフ Doe-derein, Johann Christof...

デニー 聖 Denis, St. 人名 巴理の最初の監督...

デナリ Denarius. 金貨貨幣の條を見よ。

に彼は當時猶太人間に猛烈なりし黨争に於て自ら...

テの部

デニソン晩餐事件。デボラのデミウ

デムプロ。デメトリ

デモタリ

伴ひて来り、巴理にて苦められ、三人共に首を...

デニソン晩餐事件 The Denison Eucharistic Case...

デボラ Deborah. 人名 以色列士師時代の女傑...

デミウルノス Demijurge (dyjucyja) 人名...

テの部 デニソン晩餐事件。デボラのデミウ

の手イデアを取り、他方の手に非有を取り、第一に...

デムプスタル ヴンデン Dempsker, John 人名...

デメトリオス Demetrius. 人名 猶太歴史に著しき三人のストア王の名...

に彼は當時猶太人間に猛烈なりし黨争に於て自ら...

デモクリトス Democritus. 人名 前

テの部

デュヴェアジエ

四六〇頃一三五七頃 希臘の哲学者。トラキヤのア...

デュヴェアジエ

人名

Duvergier De Hauranne, Jean 人名 一五八一—一六四三...

デュトア

しが、其業を遂て専ら中世の歴史を研究し、初めア...

デュトア

人名

Dutoit, or Dutoit-Mem-bri, Jean Philippe 人名 一七二一—...

デュブリア

賞官となる。されど革命後悉く之を辭せしが、三七...

デュブリア

人名

Dubourg, Anne 人名 一五三一—一五九 佛蘭西の改革主義神学者...

テの部

デュブレシー

を追放に處せしに、アランド、シャムアルの方は...

デュブレシー

人名

Du Plessis-Mornay (Philippe De Mornay, Saigneur du Plessis-Mornay) 人名...

デュブレシー

教徒軍隊に従はんことをしに落馬して病みて已み、六...

デュベア

するものを列せざる紙面を與へて即夜修正を命じ、...

デュベア

人名

Dubois, Jacques 人名 一五五九—一六一八 佛蘭西天主教の...

テの部

デュムラン

る點を著しく撤回したるは可なれど、著者をば異端と
して取り調べぬ。而して其の免さるるや僧侶等は懸
慮し、其の家を掠奪しテ、ムランは逃去せり。其
より後彼は一生諸國を流浪す。六四年巴理に歸りて
『トレント會議の決議に就て』を著せしに、議會は
其の意見を賞讃せし其の書を否認し、彼を禁錮し、
ワヤン、デルブレーの靈力に依て免さるるを得たり。
死後僧侶等は彼が羅馬教會へ復歸せしと言ふと雖も
其證なし。

デュムラン

人名 一五六八一—一六五八 佛蘭西改
革教會の論争者。ノルマンシアの境ビエローに生
れ、巴理及びセダンにて教育を受け、銀橋及びライ
アンにて學び、ライアンにて初め古語教授、後哲學
教授せらる。一五九九年按手禮を受け、シャール
ントンの牧師となり、以てアンリ四世の姉妹アルボ
ンのカサリン附牧師となり、佛蘭西改革教會の激
なる論争者として立ち、當時の習に従ひ一六〇二年
カサリン及び天主教徒たる其の夫の前にて天主教
學者バルマ、カエーと對論して明に勝利を得。次に
イエスイトのゴットンと同派の教義及び道徳に就て
論争して一層世の耳目を引き、更に又イエスイトの
ゴナチエと變化體説を闘はし、ドミニコス派のゴ
エフネーとも争へり。此等の議論をば何れも印刷
出版せり。されど其の傑作は『信仰の盾』なり。佛
蘭西改革教會に現はれたる此の種の書の最も完備せる
ものにて、尙多量の價値あり。彼は又王の告白師た
るイエスイトのアーヌークスの改革教會攻撃を反駁
せる辯證論を著しし。去れど彼の矛を向くる所は
單に羅馬教のみならず、改革教の諸分派にも向け、
殊にレオンストラニ派に對して甚しかりき。此を以

デュラン

てアンリ四世死後教會の危機たる時に、彼とセダン
の神學教授ティレニコとの間に論争起り、一六一七
年まで相和せず、同年に至りてグイトレ大會議にて
デュムランは凡ての改革教會諸派の同意し得る協同
條文の編纂委員に擧げられたり。されど其の頃
そのもとより困難なりし自己の地位は愈々覆らん
せり。彼は早くより英國のウィニムス一世と交り、王
のために辯護の書を著し、又凡ての改革教會を合
同せんことを王に建議せり。一九年王に書を贈りて
其の女婿特權侯を助けんことを乞ひしに、書翰發
見せられ、イエスイトより叛逆罪として訴へられん
とせし、逃れてビュイヨーン侯領たりしセダンに隠れ、
神學教授として比較的平穩に餘生を終れり。法王主
義の遺蹟『ミサの批評』等は此の時期の著にして、
後者は英蘭諸語に譯せられ批評極めて正確なり。

デュラン

人名 第十四世紀の煩瑣學の (Durand of St.
Pourcain) Durandus de Sancio Pourcaino)
終にサン、アアセーの村落(今のビュイ、ド、ド
ム縣内)に生れ、極めて少き時クレアモンのドミニ
コス派に入り、巴理聖マリア病院にて學び、麗王ロ
リアを總會議に訴ふる調印者の一人となり、巴理大
學にて教へ、カレメンヌ五世にアグイヨンに招かれ
て法廷講師及び聖宮教官となり、一三二八年
ヨハネス二十世よりビュイ、エン、ヴェレーの監
督、二六年モリスの監督せられ、三四年死す。
其の文書は原稿のまま巴理國民圖書館に殘れるもあ
り。印刷されたるもあり。重要なものは『スタタムス
シノアイ、アニキエンス、オライヤネ、ユリスア
イタチオヌム』及び『トラクタタムス、ア、スタタム、
アニマルム』等なり。彼は『果斷博士』と呼ば

デュリー

る。人間理性より以上に人間の權威なし、故に人間
權威の前に理性を屈せば、自ら動物に墜落したるな
りと唱へて、斷平として動かざりしに由る。故に此
の説の結果として信仰と知識、神學と哲學とは相分
離せることとなり。アンセルムスの格言 *credo me
intellego* (知らんために信ず)と *quodro intelligere
me credo* (信ぜんために知らん)を欲す)は煩瑣
主義の骨髄となれる者なれども、彼の否定せし所。
神學と哲學とは全く無關係なりとは彼の主張なり。
然らば神學の内容を單に信仰とせば、神學は學問と
いはるべきかといふ問に對しては、彼は大體に否と
答へ、神學を神に就ての學問とするトマス派より離
れて、神學の主眼たるべき者は人なり、聖書は人な
して其の善行に由て天に到らしむべき實際的の助
なりと言へり。

デュリー

聖禮典に關しては、彼は禮典が効力を内含すること
を否定し、唯だ神の立てたる善の條件なり、故に利
益は禮典より來らず、神より來る、又禮典は何等精
神的の品質を受容者に與ふるものに非ず、唯だ神人
の關係に神の印證を授けず外ならず、而して禮典に
二種あり、狹義の者と廣義のものとなり、結婚の如
きは後者に屬すと論じ、當時の變化體説をば非聖
書的にして不合理なるものとし、寧ろ變體こそそ
稱ふべけれ、麵包の材料が變じて基督の内となりた
るなればなりと言ひ、斯くて第十六世紀改革者等
のために途を開けり。

デュリー

人名 第十七世紀の新教徒調和計劃者。多くは蘇格蘭に生
れしと言ひ、ホイトロッグのみは獨逸に生れしと言
ふ。蘇に生れて兩親に携へられ獨逸に移住したるもの
と如し。普蘭士エルビンに於ける英國商人團の牧

デュリー

辯證論に關する著者あり。
人名 一八五〇 獨逸のアッ
スィヤ學者。フランツ、アエリッハの子にして、一八
七七年ライプツィヒ大學、九三年アレクサンドリア大學、九
九年柏林大學のアッスィヤ學教授となる。アッス
ィヤに關する著書數多あり。一九〇二—四年の冬
『Babel und Babel』と題せる講演を獨逸皇帝ヴィル
ヘルム二世の前に於て爲したりしが、彼は此講演に
於て、一八五五年セントス博士の公にしたりし巴
比倫楔形文字碑文中に、巴比倫の諸神はマルドク
神と同一也との文字あり、而して又其碑文にマルドク
神は權力を有する者として、ニヒトと呼ばれ、戰
神として、子ルカレと呼ばれ、主宰者として、夜を照
らす者として、シンと呼ばれ、正しき者として、サマ
ムと呼ばれ、雨の神として、アッドラと呼ばるる者
あるに基きて、初代の巴比倫人は唯一神の信者なりき
と論じせり。此講演は皇帝自ら之に異論を唱へし
り、少々の動搖を學者間に惹起し、教授ヒルブレ
ヒトは『余が過去十五年間の研究の結果余は斷然斯
ること有り得べからざるを確言せざるべからず、
以色列人の信仰は決して死と死の臭氣との滿る巴
比倫諸神の出獄より生ずること能はず』と云ひ、其
他の學者も亦大抵之と同様なる説を唱へ、アエリッ
ハに反對したりき。

デュール

人名 一八二九—一八九五
英國會衆派の神學者。倫敦に生る。一八五三年パー
ミンガム市カールスレーン、チャペルの代理牧師
となりしが、五九年同教會の主任牧師となり、此處

テの部

デューリー

師たり。一六二八年瑞典王グスタフス、アドルフス
に書を贈り、此の好機に乗じて新教諸教會の平和を
來すに盡力せんことを請へり。其より新教諸教會の
調和を一生の事業とす。彼は之に就てダンチヒの牧
師等の賛成を得、彼等の書を齎らして英國に行き、
カンタベリー大監督トマス、ローを賛成者に加
へ、三一年獨逸に歸り、瑞典王の推薦を受けてヘッ
セ、ハナウ、宮廷領其他の神學者等を説き、獨逸、
和蘭の諸大學と通信し、三三年英國に再渡し、大監
督ロードと會見し、モルトン、ホル、タゲエナン
ト諸監督の宣言を得(後之を出版す)歸りてフラン
クフルトに於ける新教諸州の會合に列し大なる賞讃
を得、また英國に行きチャールス一世の賛成を得、
推薦書を持ちて大陸に歸り、三五年より四〇年迄和
蘭、獨逸、瑞典、丁抹諸國を訪ひて有らん限りの機
會に依て説く所あり、到る所に同志を得たり。中に
就きヘルムスネットのカリクストスは最も熱心なり
き。三九年中にはトマス、ローに自著『教會平和總
論』を呈す。四一年また英國に行き、議會に向ひ新
教會合同を公共祈禱の願として勧め、又時に及ん
で新教徒の世界會議を開かんことを請願す。同年
『教會平和紀念』を著して英國王及び牧師並に蘇格
蘭の長老に送ふる所あり。間もなくハーグに於ける
英國皇族の附屬牧師とせられ、次でロッテルダム
英國教會牧師とせらる。英國に於ける内亂は見てデ
ューリーの計劃を破壊せしが、而も彼は決して能ま
ず、ウェストミンスター神學者會の會員となりて平
和の成立に勉め、獨立教徒に就て議論し、四四年に
は著作して同徒を驅逐まで忍容すべきを論ず。四
七年『教會政治の撰』を出し、四九年議會の推薦
にてホイトロッグの監督の下に聖ヤコブ圖書館長と

デーリツ

せられ、五〇年『改革圖書保存者』其他を著す。
王の處刑には抗議し、長老教徒と同意見となり、之
がためプリンより、長老教義のプロテスタント味なる
神學者と嘲げらる。彼は之に答へて自ら不變確立
一心なる調和者と稱し、共和政時代に其の中庸
的靈力を續け、種々の場合に會衆派と長老派の牧師
等を一所に集め、其同異を比較し、互に相合同せん
ことを謀れり。之を以て倫敦に於ける兩派の諸大學
長や牧師等の連名せる宣言書成り、クロウエルの
助をも得ず、彼は同じ目的のため諸教會に向つて
發足せしことありき。五四年『福音書』交に關す
る誠實なる辯證』等を著す。王朝回復後は司法大
臣ハイドとマンチエスター伯に依て尙此の事を勉め
しが、効なきに於て大陸に行き、六二年アムステル
ダム及びフランクフルトにて種々の書を著し、ヘ
ッセ公妃ソフィアの保護の下に同地にて死せしが如
し。

デーリツ

人名 一八一三—一九〇 獨逸の神學者、第十
九世紀に出でたる最大希伯來語學者の一人。ライプ
ツヒに生る。一八四六年ロストック大學、五〇年エル
ランゲン大學、六七年ライプツィヒ大學の教授となり、
其死に至る迄ライプツィヒ大學に在り。哈巴各書、約
百記、詩篇、箴言、雅歌、傳道之書、以賽亞書、及
び『創世紀』の註釋は何れも學者間に尊重せられ、
概し英譯せらる。『聖書心理學の系統』も亦著者の名
あり。彼の批評學上の地位は溫和保守派とも稱すべ
し。彼は『ペール』と共に舊約聖書中の重なる書の改正
希伯來語原文を出版せり。其新約聖書の希伯來譯は
古典の中に算入せらる。一八七七年初版を出し、九
一年には第十一版に達せり。彼は又希伯來書及び

デーリツ

人名 一八五〇 獨逸のアッ
スィヤ學者。フランツ、アエリッハの子にして、一八
七七年ライプツィヒ大學、九三年アレクサンドリア大學、九
九年柏林大學のアッスィヤ學教授となる。アッス
ィヤに關する著書數多あり。一九〇二—四年の冬
『Babel und Babel』と題せる講演を獨逸皇帝ヴィル
ヘルム二世の前に於て爲したりしが、彼は此講演に
於て、一八五五年セントス博士の公にしたりし巴
比倫楔形文字碑文中に、巴比倫の諸神はマルドク
神と同一也との文字あり、而して又其碑文にマルドク
神は權力を有する者として、ニヒトと呼ばれ、戰
神として、子ルカレと呼ばれ、主宰者として、夜を照
らす者として、シンと呼ばれ、正しき者として、サマ
ムと呼ばれ、雨の神として、アッドラと呼ばるる者
あるに基きて、初代の巴比倫人は唯一神の信者なりき
と論じせり。此講演は皇帝自ら之に異論を唱へし
り、少々の動搖を學者間に惹起し、教授ヒルブレ
ヒトは『余が過去十五年間の研究の結果余は斷然斯
ること有り得べからざるを確言せざるべからず、
以色列人の信仰は決して死と死の臭氣との滿る巴
比倫諸神の出獄より生ずること能はず』と云ひ、其
他の學者も亦大抵之と同様なる説を唱へ、アエリッ
ハに反對したりき。

テの部

デンク。傳道

に其最善の事業を爲せり。八七年瀛洲に遊び、八九

年其紀行を出版す。此外『週日説教』(一八六七)、『十

誡』(一八七二)、『罪論』(一八七五)、『基督の交り』

(一八九一)、『基督教の教義』(一八九四)、『基督及び未

來生活』(一八九五)等の著書あり。彼は又一八七四

年『英國讃美歌集』を編輯せり。

デンク ヨハン又はハンス Lantke, Joh

hann or Hans 人名 宗教改革運動の障礙

となりし人。初めハイデルの一學校長なりしが、一

五二三年エロラムハイデルの推薦によりメレンス

ルヒに移り、聖セバルドス學校長となりしが、直ち

にトマス、ミューンツェル及びアナトラスト派より

得たる思想を宣傳し、二四年市を逐はれ、二五年又

アウグスブルヒより逐はれ、二六年ストラスブルヒ

より逐はれ、二七年カールスより逐はれ、後エコ

ラムハイデルの勢力によりハイセルに歸るを許

され、二七年疾病にて死す。ヘッセルと共に舊約

預言書を翻譯せしが價值ある書なり。

傳道 Missions 事蹟 人類は救済を要

し、神は凡ての人を救はんことを欲し給ふ、故に福

音は萬民に宣傳せられざる可らずと新約聖書の教

訓にして、耶穌は此真理を其最後の命令に寓し『偏

く世界をめぐりて凡ての人に福音を宣べ傳へよ』と

云へり(可十六の十五、廿八の十九)。且傳道の事

業は教會の死活に關する事業にして、傳道の精神振

ひ起りて教會は愛に初めて活動し、以て健全なる發

達を遂ぐるを得べし。是れ教會擴張の歴史と傳道の

歴史と相照る可らざる所以にして、基督教が『傳道

の』宗教』と呼ばるる理由も亦愛に在り。左れば

基督教は初めより傳道を以て起り、傳道に依りて

擴張し、以て今日に至りたる次第にて、傳道の消長

は常に教會の消長と相伴へり。

【使徒時代より宗教改革に至る】使徒時代に於て

は此傳道の精神顯る處にして、全教會は即ち一箇の

傳道會社と稱すべく、宣教師の数は素より多から

ざりし其熱心感ゆるが如く、信徒全體亦奉て之を

助けたり。左れば此時代に於ける基督教の傳播は順

る運にして、紀元一百年には既にメソポタミヤ、小亞細亞、

希臘、羅馬、亞歷山及び巴比倫に傳はり、恐らくは四

班牙及び英國にまで波及せり。第二世紀には福音は

エテツサ、敘露、メデヤ、パトリスヤ、モリタ

ニア、獨逸及び英國に達し、佛蘭西には有力なる教

會設立せられ、亞歷山にてはアンタヌス(Anthemius)

最初の宣教師に長たり、一九〇年には最初の宣教

師印度に送られたり。而して當時迫害頗る甚しか

りしに拘はらず、基督教は第三世紀に至り引續き

て進歩し、二五〇年には基督教徒の數羅馬帝國臣民

の廿分の一を占むに至り、アルメニヤは基督教を

採用して國教となすに至りたり。第四世紀にはア

イオケラチオン帝の背馳なる迫害ありしと雖も、コ

ンスタンチン帝改宗するに及びて、基督教は三四

年を以て遂に羅馬の國教となるに至れり。三八一年

テオドシウス帝は異教を廢して其殿堂を撤し、其財

産を沒收せり。ウルフラス(Ulrich)は聖書をゴス

語に翻譯して彼等の間に道を傳へ(三一八一—三八八)

彼の事業は四〇四年クリスチヌスに依りてコンス

タントノーブルに建てられたる宣教師に於て教育

せられたる人々に依りて繼續せられたり。又此世紀

に於てはアビシニヤ教會初めて建設せられ、イペリ

アン人全く基督教に改宗せり。第五世紀に於ける傳

道界の光明と稱すべきは聖パトリック(Saint Patrick)

にして、彼は愛爾蘭を教化し、且次の四世紀間に於て佛

傳道

は常に教會の消長と相伴へり。

【使徒時代より宗教改革に至る】使徒時代に於て

は此傳道の精神顯る處にして、全教會は即ち一箇の

傳道會社と稱すべく、宣教師の数は素より多から

ざりし其熱心感ゆるが如く、信徒全體亦奉て之を

助けたり。左れば此時代に於ける基督教の傳播は順

る運にして、紀元一百年には既にメソポタミヤ、小亞細亞、

希臘、羅馬、亞歷山及び巴比倫に傳はり、恐らくは四

班牙及び英國にまで波及せり。第二世紀には福音は

エテツサ、敘露、メデヤ、パトリスヤ、モリタ

ニア、獨逸及び英國に達し、佛蘭西には有力なる教

會設立せられ、亞歷山にてはアンタヌス(Anthemius)

最初の宣教師に長たり、一九〇年には最初の宣教

師印度に送られたり。而して當時迫害頗る甚しか

りしに拘はらず、基督教は第三世紀に至り引續き

て進歩し、二五〇年には基督教徒の數羅馬帝國臣民

の廿分の一を占むに至り、アルメニヤは基督教を

採用して國教となすに至りたり。第四世紀にはア

イオケラチオン帝の背馳なる迫害ありしと雖も、コ

ンスタンチン帝改宗するに及びて、基督教は三四

年を以て遂に羅馬の國教となるに至れり。三八一年

テオドシウス帝は異教を廢して其殿堂を撤し、其財

産を沒收せり。ウルフラス(Ulrich)は聖書をゴス

語に翻譯して彼等の間に道を傳へ(三一八一—三八八)

彼の事業は四〇四年クリスチヌスに依りてコンス

タントノーブルに建てられたる宣教師に於て教育

せられたる人々に依りて繼續せられたり。又此世紀

に於てはアビシニヤ教會初めて建設せられ、イペリ

アン人全く基督教に改宗せり。第五世紀に於ける傳

道界の光明と稱すべきは聖パトリック(Saint Patrick)

にして、彼は愛爾蘭を教化し、且次の四世紀間に於て佛

事案にして、此事業は道が後に至りて初めて効果を

奏したり。其二は佛蘭西プロテスタント教徒の計劃

に成れるアラウロ領地に於ける傳道にして、一五

五六年カルグインの選定せる數人の宣教師は此處に

送られたりしが、其事業は全く失敗に歸したり。【第

十七世紀に於ける傳道】第十七世紀の狀態

は、改革時代の狀態より更に新教徒の傳道に不利

なり。此は英國及びチテラランドに於ても一般に

然りしが、獨逸に於ては三十年戦争及び無益なる神

學的論争の爲めに全く實際的傳道の精神を萎縮せし

め、其害甚しかり。然れ共斯る際の方立て、

暗黒なる天上に數點の星光輝かざるに非ず。ルーベ

マットの七人の法學者は深く傳道の必要を悟り、且東

邦教會の復興を企てんとしたりしが、其中の一人な

るヘッセル、ハイリゲン(Peter Heilig)は一六三三

年自らアビシニヤに往き、新約全書をアムカル語に

翻譯せり。獨逸教會に向て初めて最も強く傳道の必

要を説きたるは、エルンスト、ホン、ウェルツ(Christian

von Wedel)にして、彼は一六六四年二冊の書を著し

し、其第一冊に於て、吾人基督教徒は福音を專有す

るの權利ありや、吾人は多くの神學生を有し乍ら、

之を他の葡萄園に働かしめざるに可なる事なりや、

吾人は自己奢侈のためには多分の金銀を消費し乍

ら、福音宣傳のためには之を寄附せんことを思はざ

るは可なる事なりやとの問題を提出せり。彼は又他

の書を著して各大學には傳道科を設け、東邦語、

異教徒を改宗する方法及び地理の三科を教授すべし

とのことを論じたりしが、彼の議論は少しも世の顧

みる所とならず。彼は和蘭のフョナルに於て按手禮

を受け、三萬六千馬克を傳道のために募給し、ダッ

チ、ギニアに往き其處にて死せり。彼の純潔なる動

機、熱心及び犠牲は傳道史上に於て永遠に記憶せら

るべき者也。彼に次ぎて獨逸の教會に異教民傳道の

義務を熱心に説きたりしが、ハッマン(Hawemann)

ダンハウエル(Daunhauer)、クリスチヤン、メタ

ワネル(Christian Wernle)及びスウェーデン(Grahn)

なれ共、ウェルツの理想的計劃を宣べて一般教會の

贊助を得たりしが、ルシヌス(Luthe)也。哲學者

ライプニッツも傳道的思想に動かされ、支那を以て

ルーテル派宣教師の往くべき適當なる傳道地也と

し、此思想を柏林科學學校の憲法中に加へたり(一

七〇〇)。

第十七世紀に於て海上權は英國、和蘭及び丁抹に移

りたりしが故に、異教民傳道の門戸は斯くしてプロ

テスタント教徒のために開けたり。葡萄牙の東印

度領地を奪ひたりし和蘭人は熱心に傳道的活動を

開始し、ライデンに宣教師養成を目的とせる學校を

設立し、馬來半島、南印度及び錫蘭に盛に傳道せり。

其傳道歴史の詳なる事は明ならざれば、錫蘭に於て

は第十七世紀末に三十萬のペンナロー人洗禮を受

け、シヤガラに於ても十萬の受洗者ありしといふ。

然れ共此等の受洗者は多くは有名無實の信徒に於

て、主の祈及び十誡さへ知らざる者少からざりしと

いふ。和蘭人は又アラウロにも傳道したりしが、一

六六七年領民の中止せられしと共に傳道事業も亦廢

止せられたり。

英國に於ては第十七世紀の政治的宗教的論争、北米

印度人の中に於ける最初の傳道的活動の機會とな

り、新英州に殖民したりし清教徒は此方面に向て或

る働きをなしたり。敬虔なるロコン、エリオット

(John Eliot)は印度人傳道のために其一身を献げ

(一六四六)初めて新約全書を其土語に翻譯したり。

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

傳道

</

テの部

傳道

メーロウズ (Mearns) 及び他の人々は、エリサ...

傳道

(August Hermann Franke) 實に之が嚮導者なりき。

傳道

十年記念會を開きたりしが、現今此派の南北亞米利...

テの部

傳道

代(第十九世紀前半)第二期種時代(一八五〇—一八...

傳道

にして聖書及び基督教文學を甘國の異なる印度語及び...

傳道

に至りしも、一八五〇年迄は改宗者殆ど皆無なり...

テの部

傳道

も亦尙未だ充分ならざりしが、其信仰も多くは外形に止まりたりき。...

傳道會社。傳道之書

特力教團全體に三十箇の傳道會社組織せらるるに至れり。...

傳道之書

Yeastより來れり。此書は賢王の口に置かれたる人生及び社會に關する冥想を記せる者にして、...

テの部

傳道之書

たりしかども、此も亦一時にして永遠の満足を得る。...

傳道之書

上の格言を掲ぐ。思ふに此は困難の之に依りて幾分免れ得べきを示せる者なるべし。...

傳道之書

一十五) 神の諸の作爲を究めんとして凡ての人の努力は徒爲に歸せり。...

トの部

丁抹

は多少法王を助けたる者も之れありしが、概して論ずれば、丁抹の空気が羅馬教會に取りては陰りに冷にして、法王の権力は充分此處に及ぶこと能はざりき。改革的衝動は丁抹教會の中に發生したる者に非ずして、獨逸より來りたる者なりしが、忽ちにして全國に普及し、一五三六年のコーペンハーゲン會議に於て羅馬教會を離し、其宗教權及び俗權を納めて之を國王に歸し、又其財産を沒收して國王及び貴族の間に分配したりしが、一人を除くの外監督は皆之に調印したりき。宗教改革の時代は丁抹人生活の諸方面に於て新生面を開きたりしが、不幸にして寛容の精神は長く繼續せざりき。佛蘭西レフォーム教會に屬するプロテスタント教徒は罰を避けて此國に來りしが、彼等は無類にも追ひかへされ、一五八〇年には『フォアミューラ、コンコルディア』の體本を國內に入らざる者は死刑に處せらるべしとの勅令さへ發せられたりき。然れ共第十七世紀に至り、丁抹は最も嚴酷なるルーテル主義の教會を發達したりき。而して此教會は信仰倫理を有したりしが、思想はなかりき。斯くて第十八世紀に至り敬虔派獨逸より入り來れり。此派の人々は熱心度過ぎて規律を行ふこと頗る嚴にして、劇毒を閉じ、文學を禁じ、毎日曜日二回教會に出席すべきことを命じ、之を犯す時は賞罰に罰金に掛り、富者には料金を課する等の事を爲せり。然れ共彼等は堅信禮を行ひて丁抹の社會に道徳的要素を入れ、又新實業家を輸入して宗教的熱心を鼓吹せり。彼等が與へたりし印象の如何に深かりしかは偏理派との衝突に依りて明也。偏理派も亦外國より輸入したる者なれ共、此は獨逸より來りたるに非ず、第十八世紀の末佛蘭西より來れり。

丁抹

其中の極端派は教會を公共的倉庫として使用し、牧師を農業及び經濟學上の講師として用ゐんとしたれ共、斯る金は素より嘲笑を以て迎へられたるに過ぎず、其中の溫和派は高尚なる趣味と該博なる科學的精神とを有し、教會及び學校に於て一時勢力を振ひたりき。而して偏理派は第十九世紀の半に至り遂に全く其勢力を失墜したりしが、是れより先き大學教授にして偏理派の代表者たるクラウゼンと稱する者あり、丁抹教會の教師として頗る勢力ありしが、ゲルントワイツは其教職を停止せられたりしが、(一八二七)而かも之れよりゲルントワイツ派なるもの起り、一八四〇年にはゲルントワイツを復職するの止むを得ざるに至れり。一八五〇年には丁抹人は多く此派に屬し、ゲルントワイツの死する前既に其弟子等が教會及び學校に於て重要な地位を占め、其勢力頗る盛なるに至れり。(ゲルントワイツの條參照) 斯くて丁抹教會は諸種の變遷を経たれ共、其憲法は一五三六年コーペンハーゲン會議に於て議決せられたる第三世紀開始と變化なきなりき。當時『福音的ルーテル教會』は『國教會』と稱せられ、其他の宗派を許さず。此憲法はクリスチャン五世の時(一六七〇-一八九九)に至り更に確認せられたりしが、一八四九年六月自由なる憲法に代るに至れり。之に依れば、福音的ルーテル教會は『人民の教會』と稱せられ、國家を維持することとなりたる共、其他の宗派の自由を許し、且宗教に關したりし政治上社會上の制限を撤去したり。一八五五年には教區の範圍を撤して、教會員の關區の教會に入るを許し、一八六八年

トインビー

には國教會の中に自由教會を建つるを許せり。又一八七六年の安息日に關する法律に於ては、日曜日及び祭日には午前九時より午後四時迄の間に家の内外に於て業務を爲すを禁じたれ共、日曜日の夜には社交的集會を開くを許したり。國民の多數(殆ど九分九厘)はルーテル派即ち國教會に屬し、其他はバプチスト派、レフォルム派、猶太教等に屬す。

トの部

トインビー アルノルド Tonbee, Arnold 人名 一八五二-一八三 英國の社會經濟學者。倫敦に生る。一八七八年牛津バリオル、カレッジの講師となる。社會状態を改良せんことを心し、之がため諸種の計劃を立てしが、其感化諸種の慈善協會に及べり。『産業上の革命』(一八四)は其講演及び論文を集めたるものなれ共、一八三三になしたる『進歩及び貧窮』と題する二の講演は此書中に入らず。七五年カン、バルツトと協同し、貧民を救済せんことを、倫敦のホロイトチャペルに住したりしが、過勞のため病を得て死せり。バルツト及び其他の人々は彼が志を遂げて早世せるを痛し、其志を繼ぎて東倫敦改善の事業をなさんため、一八四四年ホロイトチャペルに會館を建て、彼を記念せんため之をトインビー館と名けたり。牛津、劍橋兩大學の教授、學生等資を供して之を維持し、又其卒業生の或る者は自ら發に住みて東倫敦の貧民と其生活を共にせり。

トウイス

ウィリアム Twiss, William

トの部

時

時

時

時

時

時

時

時

時

時

時

時

時

時

時

時

時

時

時

時

時

時

時

時

時

時

時

時

時

時

D. D. 人名 一五七五-一六四六 英國ウエストミンスター神學者會議の最初の議長。バーグシャのスピーン・ハムランドに生る。牛津のニウ・カレッジのフェローたり。一六〇四年神學博士となり、ウェーリス一世の女の附屬教師となり、歸りてニウ・カレッジの司牧となる。ウインチェスターの受給教職に招かれたる後、英國國教會の地位に屬すべしと請はれし事あり。又フリースランドのフランクフルトの神學教授に招かれたるも、之に應ぜずして留任せしが、内亂起りて巴むなくニウ・カレッジを去れり。彼は獨逸人の子孫にして嚴密なるカレッジ主義者たり。前記の如く、説を奉じ、學問博く思辨の才秀たり。議會よりウエストミンスター會議の最初の議長に擧げらる。されど斯かる地位には適せざりき。『オベラ』三冊を著しアルミニウスに反對して有名なり。又『第四誡の道徳』惡の器に對する神の愛の豐富と惡の器に對する絶對的憎賞との調和』を著し、其の骨を聖マテオ福音書の下に投棄せられし一人なり。

續きたりしは太陽年の一年即ち三百六十五日也。故に祭司典記者は最古の時代には純然たる太陽年行はれたること推定に基き、斯くは記したる也。斯く此記事は古代に於ては純然たる太陽年行はれたること傳説を示せる者にして、太陽年に改めんとしたりし場合在りては、尙猶太の年は多少太陽年なりしを見る。古代の亞利比亞人はマホメットが三百五十四日の太陽年を改めたりし以前に在りては、三百六十五日の太陽年を用ゐたりき。太陽年が早くも希伯來曆に影響したりし事は、祝節が一方に於ては一定せる太陽月に於てせられ、他方に於ては太陽年の一定せる季節に一致したりしことに依りて明也。純然たる太陽年に於ては過越節は昔四年の間に四季を一巡せざる可らざることを、斯ることは猶太曆に於てなし難きこと也。尤も如何にして之を改めたりしやは明ならず。太陽曆にては毎年十日又は十一日の端數生するを以て、之を何とせざるべからざる。ことなれ共、聖書には何處にも閏月のことを記さず。尤も閏月を置くることは巴比倫に於ては最も古くより知られたりき。巴比倫の年は一ヶ月三十日の太陽月より成り、僧侶は必要の場合に閏月を設けたりき。思ふに古代の猶太に於ても亦此方法を採用したりしなるべし。

學者は秋の新年も春の新年と共に併因以前也と云ひ、又秋は曆年なるより寧ろ經濟年也との説を唱へたれ共、ノックは、農民に在りては經濟年が曆年と一致せざるべからずと云へり。兎に角經濟年が秋に初まりたりしことは、秋の收穫祭を記すに『年の終り』と云へる語を使用せるに依りて明也(出廿三の十六、廿四の廿二)。又洪水の物語に於て洪水の初を以て二月十七日に在りせざるは、秋の降雨なる事實に依り、新年が秋に在りしことを證す。安息年も亦秋に初まり(利廿五の九)王の年も亦曾て秋に初まり。而してエレミヤが猶太歴史の出來事をアバド子孫治世の年代と同一に記せる事(耶四十六の二)も亦同一の結論に達するを見る。然れ共秋の新年のみならず、春の新年も亦併因以前に起りたりしが如し。王等が再び戰を初むることを記すに『年歸りて』なる語を用ゐたること(母後十一の一、王上廿の廿二、廿六、代下廿六の十)は年の初が春に在りしことを示す。祝節の順序も亦然り。即ち最古の文書(出廿三の十四、十六)に在りてもエホバ典(出卅四の十八、廿二)及び申命記(十六の一、一十七)と同じく、祝節は過越節を以て初まり、過越節を以て終れり。月に新なる名の附せられたるは巴比倫の影響に依ること明にして、年の初が全く秋より春に變へられたるは併因時代なること疑なげれ共、既に其以前に於てニサンの月は年の初と爲りたりき。『モセアス』が『モーモ』はニサンを以て其祝節の初月とすべしと命じたり。此は彼が此月を以て以色列人を埃及より導き出せしがためにして、斯くて此月を以て年の初としたり』と云へるは誤に非ず。

(一)月 (Months) 希伯來の月は始より終りまで

時 聖書の Time in the Bible

(一)年 (The Year) 概して云へば猶太の年は太陽年にして、太陽年の季節に一致せしめんと企てなされたるを見る。大洪水の最初の記事の記者(祭司典)は最古の希伯來年を以て十二の太陽月、三百五十四日を有せる純然たる太陽年となしたりしが如し。創七の十一及び八の十四は、洪水は此年の二月十七日に初まり、翌年の二月廿七日迄即ち一年と十一日間續きたり記せり。此計算は蓋し太陽年を太陽年に換算したるより起りたるものなるべし。其の次第はモセアス人種一般の傳説に依れば、洪水の

トの部 時

太陰月にして、新月より次の新月に至るを以て一月とす。聖書に記されたる月の名に三箇の異れる者あり。即ち迦南名、数字名及び巴比倫名是也。(一) 迦南名 迦南名の中に殘存せるは四箇あるのみ。此等の名は凡て氣候及び經濟的狀態より來れる者也。
 アビブ (Abib) 熟したる糧の義にして、第一月を指す (出十三の四)。
 フ (Chislev) 花の月の義にして、第二月を指す (王上六の二)。
 エタニム (Ethanim) 潤滑なき流の月の義にして、第七月を指す (王上八の二)。
 アブ (Aban) 雨月の義にして、第八月を指す (王上六の八)。
 (ロ) 俘囚時代に至り此等の迦南名は廢れ、数字を以て一月二月とやうに呼ばれるに至り。王上六の一、廿八、八の二、哈一の二、一、二、一、七、七の二等に見ゆるが如し。
 (ハ) 巴比倫名 俘囚以後巴比倫名希伯來語に用ゆるに至り。此等の名の聖書に見ゆるは、十二箇の中七箇のみ也。
 ニサン (Sivan, Eabdek = Xanthikos) 三四月の交に當る。巴比倫の「動」又は「出立す」となる動詞より來る。宗教曆最初の月也。(二) 一、二、三の七)。
 イヤル (Iyar, Ayrathos) 四五月の交に當る。聖書には記されず『メシナ』にあり。語源は確かならざれ共、思ふに『聞く』語より來り、シヴァス (Sivas, Aitaros) 五六月の交に當る。(帖八の九)。

時

サムム (Sammum, Tammuz, Kislew) 六七月の交に當る。(帖八の十四)。
 アブ (Ab, Ab, Ab) 七八月の交に當る。聖書には記されず『メシナ』にあり。
 エタル (Etar, Elul, Tarsis) 八九月の交に當る。(尼六の十五)。
 ナシヤ (Nisan, Tishri, Yriqgator) 九十月の交に當る。聖書には記されず『メシナ』に在り。
 シメバト (Sibath, Shebat, Epatros) 十一月の交に當る。(帖一の七)。
 キスラック (Kislev, Kislew, Ahrizak) 十一月の交に當る。(帖七の二、尼一の二)。
 テイス (Teis, Teath, Ahrizak) 十二月の交に當る。(帖一の七)。
 アデル (Adar, Apatros) 二三月の交に當る。(帖一の七)。
 (三) 週及び日 (Weeks and Days) 七日を以て一週 (Sabbath) とす。太陰月より來りたる者なる事明也。何となれば週の循環は月の盈虚と略は其時を同すれば也。其間に多少の相違を生ずることあれ共、有史時代に入りては新月の週初めと相一致せるの形跡を認めざれば、此は希伯來の週に影響せざりしなるべし。アッスリヤ人及び巴比倫人は七日を一週とすことを知り、且月を以て週を初めたりしが、希伯來の週は一年を通じて規則正しく循環せり。毎週安息日即ち聖日として新月に代り重要視せらるるに至りて殊に然り。ノワツは以色列人は思ふに巴比倫人より週を借り來りしなるべしと云

時

ひ、又古代の希伯來人は十日を以て一週となしたる形跡ありと云ひたれ共、後説は頗る疑はし。フライゲルは、安息日を以て終れる七日一週の制度は巴比倫より起れり云へるシェラウアル。セリス及び其他のアッスリヤ學者の説に同意するは困難なること非ず、斯く天地創造物語に週を豫想せり、換言すれば週は創造の日より生じ來れるに非ず、創造の日より生じ來れる也云へり。然れ共又希伯來の週は必ずしも巴比倫より來れりといふを要せずと論ずる學者あり。何れが是なるを知らず。新約に於ては週は *oikomenos* と名づけられ、週の日は數へられ、特殊の名を有せり。
 巴比倫人は日晷に依りて日 (D) を等分し、又之を分秒に分つことを知り、西利亞人も亦同一知識を有したりしが如しと雖も、俘囚以前の以色列人が此等の知識を有したりし形跡は之を認むるを得ず。以色列人と巴比倫人の間に存したる最も重要な相違は、前者は日晷を以て一日の初とし、後者は日出を以て一日の初となしたること也。日晷より日晷迄を一日とすことは、律法の勝利と共に全然猶太的方法となりたれ共、アラブス、アヘニア、アス及びケル人の中にも此風行はれたこと未だ行はれず、單に之を夕、朝及び日中とす。『出』十九の八、『黄昏』(朝廿四の六十三)、『曉』(十九の十五)、『日の熱き時刻』(十八の二)等と云へり。日を何時に分つに至りしは過ぐ後世の事にして『メシナ』には一日を十二時に分ちたり。之れより以前夜を三時に分つ風あり(哀二の十九、士七の十九、出十四の廿四、母前十一の十一)。此風は紀元第一世紀頃迄繼續したりしが、之を四時に分つ羅馬風も亦行はれた

トの部 特赦の年

るを見る(可十三の廿五)に『夕夜中鳴鶴鳴時早長』とあるを見よ。是れ夕の六時より朝の六時に至る時也。安息日即ち主の日の條參照。又紀元に就ては其條を見よ。
特赦 Dispensation. 術語 教會の權威を有する者に依りて或る種の義務の赦さるることなす。羅馬教會に在りては、特赦の權は多くの場合に於て法王のみを有す。インノーセント三世以前に在りては、監督及び州の宗教會議も特赦の權を有したりしが、法王の時以後は監督は唯法王の代理者としてのみ之を有することを得る。こととなり。通常の場合に於ては、監督は破門の宣告、按手禮を受くる能はざる條件等を特赦することを得べし。又監督は斷食、婚姻に對する故門の特赦を與ふる權を有することあり。英國教會に於てはカンターベリーの大監督婚姻の特許を與ふ。彼は又廿三歳以下の者の執事の按手禮を受くることを許可し得べし。監督は凡て其管區内の教職の一教會區以上を牧する、ことを許可し得べし。
年 聖書 The Year. 『時』條を見よ。
トッド ジョージ・トッド (人名) Todd, James Henthorn, J. D. (人名) 一八〇一—一八六九 愛蘭の古學者。ダブリンに生れ、同市トニニー、カレッジを出で其フェローとせられ、一八三八年と四年とにドンネラン講演者とせられ、四九年勸定教授となり、五二年大學圖書館長となり、六四年聖パトリック教會の唱歌隊長となり、又五年間愛蘭王立學校の長を兼ねたり。但し其及び聖保羅の文中基督の教に關する預言聖約翰論議に於ける預言聖パトリックの後繼者及びアラマの大監督等の歴史的小傳二冊『聖パトリックの一代』と傳

トッドのトビット書

道等を著し又愛蘭古學者として著る。
トッド ジョージ・トッド (人名) Todd, John, D. D. (人名) 一八〇一—一八七三 米國會衆派の牧師。ゲエモン州ラトランドに生れ、一八二二年エール大學を卒業し、四年間アンドグアット神學校にて學び、二十七年より三年迄マサチューセッツ州グロートンにて、三六年までワラレホア市第一會衆教會にて、七二年迄ヒットフィールドにて牧師たりしが、國民一般より尊敬せられ、其の多くの著書は著しく讀まれたり。『小兒のための講演』二集は傳、希羅其他の諸語に譯せられ、又盲人のために凸字版にて印刷せられ、シエラレオンにては解放せられし奴隷の教科書として用ひられたり。其他『學生要覽』、『インタクス、レム』、『日曜學校教師』、『單純なる小品集』、『未來の國』、『基督信徒のための暗示』、『思想』、『婦人の權利』、『日曜國』等あり。
トッド ヘンリー ジョージ・トッド (人名) Todd, Henry John (人名) 一七六三頃—一八四五 英國教會の教職、古書出版者。牛津を一七八六年卒業し、倫敦にて教會の司長となり、一八〇三年ラマヌス宮の原文書保存掛となり、一八二〇年スティーヴンゲットの司長、三〇年ホルツの受給教授、三二年グランドランドの大執事、女王附牧師となる。モルトン、スパンサー、ウォンソン字書を出版し『カンターベリー、テイーンの事』、『聖書の英國欽定譯及び翻譯者』、『アライアン、アレルト小傳』二冊、『大監督フランマ』、『傳』二冊、『英國欽定譯聖書實錄』等を著せり。
トビット書 The Book of Tobit. 書名 舊約經外聖書中の一書。俘囚時代に於ける敬虔なる家庭の生活を叙歌的に描出せる者也。希臘語、拉丁語、スリヤ語、カルデア又はアラマイック語及び希

トビット書

伯來語にて書かれたる者各數種あり。現存せるアラマイック語の寫本は稍や晩代に成りたる者にて、且直接に原本より取りたる者に非ずと雖も、此書はアラマイック語にて書かれたる者也。
 此書の物語の大要を記せば左の如し。ナフタリの支派に關する猶太人にトビットと云へる者あり。敬虔にして猶太の禮節を守ること、定まれる什一税を納むること、に注意深かりしが、其妻アナ及び其子トビアスと共に、シャルマセルのために擧げせられ、ニチベに携へ去られたり。彼はニチベに往きてもモレの律法を堅く守り、異邦人の食するものを食せざりしが、一時王の食膳方を命ぜられしことありき。彼は曾てメアアに旅せし時、ラゲにてガマエルと名くる猶太人に十セントの銀を貸したりき。斯くてメナタリアがユダより歸りし時、トビットは王の怒に觸れて殺されたりし猶太人を救ひしことより、王の不興を蒙りたりしが、其姪アモカルの懇求に依りてエサルハドン王は又彼を其位に復せしめたりき(一)。メナテオストの視能にトビットはトビアスを遣はし、彼と共に食すべき實しき猶太人を伴ひ來らしめんとしたりしに、トビアス歸り來りて、街上に一人の猶太人倒れ居れり告げしが、トビットは直ちに起ちて往き、之を匿し夜に入りて之を葬れり。斯く彼は死者に關して汚れたりしが、庭に一夜を明したりしに、雀群彼の眼に糞して、彼は爲めに盲目となりたり(二)。(一)。(二)。(三)。(四)。(五)。(六)。(七)。(八)。(九)。(十)。(十一)。(十二)。(十三)。(十四)。(十五)。(十六)。(十七)。(十八)。(十九)。(二十)。(二十一)。(二十二)。(二十三)。(二十四)。(二十五)。(二十六)。(二十七)。(二十八)。(二十九)。(三十)。(三十一)。(三十二)。(三十三)。(三十四)。(三十五)。(三十六)。(三十七)。(三十八)。(三十九)。(四十)。(四十一)。(四十二)。(四十三)。(四十四)。(四十五)。(四十六)。(四十七)。(四十八)。(四十九)。(五十)。(五十一)。(五十二)。(五十三)。(五十四)。(五十五)。(五十六)。(五十七)。(五十八)。(五十九)。(六十)。(六十一)。(六十二)。(六十三)。(六十四)。(六十五)。(六十六)。(六十七)。(六十八)。(六十九)。(七十)。(七十一)。(七十二)。(七十三)。(七十四)。(七十五)。(七十六)。(七十七)。(七十八)。(七十九)。(八十)。(八十一)。(八十二)。(八十三)。(八十四)。(八十五)。(八十六)。(八十七)。(八十八)。(八十九)。(九十)。(九十一)。(九十二)。(九十三)。(九十四)。(九十五)。(九十六)。(九十七)。(九十八)。(九十九)。(一百)。

トの部

トビット書

が、其間に生れたる娘にサラと云へる者あり。曾て七歳夫を死ねたりしが、彼等は何れも新婚の夕死したりき。此はアサモアアスと云へる鬼の王を殺したる也。然るにサラは夫を殺したりとて罵られしかば、彼も亦死なんことを願へり(三の七十五)。斯くて此二人の祈は聞かれ、天使ラファエルは彼等を救はんとして遣はされたり。トビットは其最期に近づきたるを思ひ、ガバエルに貸したる金を取り返さんため、其子トビアスをラゲに遣はさんとし、長き道を行くに與へたり(四章)。トビアスはラゲに往く道案内を求めたりしに、天使ラファエル、アザリヤスといふ者も来て來り案内せんことを請へり。トビアスは我をガバエルの許に伴ひ往つば相當の報酬を與へんと云ひ、ラファエルと共に其愛犬を伴ひメデアに向ひて旅立せり(五章)。其途上トビアスはナゲヨス河に浴したりしに、大魚來りて彼を呑まんことをし、彼は之を捕へ、且ラファエルの勸めに従ひ、後日の薬用に供せんとして其心臓、肝臓及び肺臓を取りて之を貯蔵せり。斯くて彼等はエタパタナを過り、ラゲエルの家に宿りたりしが、トビアスはサラと結婚せんことを請へり。是より先きラファエルはトビアスにサラより惡魔を驅逐すべき法を教へたりしが、トビアスはサラとの婚姻は夜の前に成りたり(七章)。ラゲエルは又厄厄の來らんことを慮り、其夜中に新郎を擧るべき臺を掘りたりしが、魚の心臓と肝臓とを笑きし時アサモアアスは其臺に依りて埃及び過れ去りたりしに、ラファエルは彼を追ひ往き其處に彼を縛したり。而してトビアスとサラとは終夜共に祈り、平安に其夜を過せり(八の十一)。エドナは深く之を喜び、ラゲエルは神に感謝して、十四日續ける饗宴を設けて結婚を祝せり(八の十一、十二、十三)。

トビット書

一、ラファエルはラゲに往き、薪に封じたるよなる箱をガバエルより取り返し、婚禮に來りて新婚新郎を祝福せり(九章)。饗宴終りて後ラゲエルはトビアスと其妻とを二子に送り、且其富の半を彼等に與へたり(十の七、十二)。アンナは此間終日街に出で、其愛子の歸り來るを望み、其眼にはトビットがトビアスを遠方に送り出せしことを罵り狂へり(十の十五)。斯くて見よ、トビアスはアザリヤスと歸り來りしかば、アンナは喜び走りて之をトビットに告ぐ。トビアスは不思議なる魚の膽汁を取りて、之を其父の眼に注ぎたりしに、白き薄皮剥け露らて其眼また見ることを得たり。而してトビットとアンナとはサラを喜び迎へ入れたり(十一)。此に於てトビット父子は厚くアザリヤスに報ひんとて、其所有の牛を與へんとしたりしに、アザリヤスは其妻を願はして天に歸れり(十二、十三)。十三章にはトビットの感謝の歌を記し、十四章にはトビットとサラと其子孫に告げを與へ、且彼等が二子へ去りてメデアに往くべきを勸めたりし事を記せり。斯くてトビアスはトビアスの死後メデアに往き、ラゲエル及びエドナの臨終を見るを得たり。而してトビアスは老年まで生存し、ニテベの没落を見たりといふ。此書が歴史的事は久しく信ぜられたる處にして、初めて之を疑ひたるはル・テール也。書中の記事が古代の知識ある人々に信じ難き者に非ざりしは明也。例之天使顯現は創十八を少しく敷衍したる者に外ならず。惡魔に憑りたりしといふ當時の一般に信ぜられたる處也。氣氣に依り惡魔を驅逐する、是は、當時の醫學の承認したりし處にして、ロキヤトニ、トビアスは「カスウイニ」より鰵魚の肝臓の油を以て、眼を醫し、其毒と胆汁は角質白班を治するの効あり

トブラダイ

この事を引けり。此書の歴史的性质を承認するも、書中歴史的誤謬ある(例之ナフタリ及びセパルンを換したるはナハラスビセル(前七三四)にして、シヤルマテセルに非ず、又セナカリアはシヤルマテセルの子に非ずして、サレゴンの子也、及び此書一の四にトビットを以てエロガムがダビデの家に叛きたりし時小童なりとなしたるが如き是也)地理的誤謬ある事(例之ナゲヨス河をニテベエタパタナとの間に置きたるが如き、又ラゲスエタパタナより二日程となしたるが如き是也)。亞歷山大王はエタパタナよりラゲス迄軍を進むるに十日を要したりしと云ふ)及び書中の思想の時代に屬する事等を見れば、此書が自ら主張するが如く前第七世紀に書かれたる者に非ざるは明也。此書の書かれたる時日に就ては諸説あれ共(一)書中作者がソロモンの神殿より其壯觀に於て劣りたる神殿の時代、即ちヘロデ王以前に住みたりしことを證する者ある事(二)血族結婚法は前第二世紀以前に廢絶せられたる事(三)死者を葬る義務に重を置きたるは、アンナオカス、エトリアスが死者を埋葬せしめて放棄したりしより起りたりと思はる(四)異邦人との婚姻を排斥する必要尚存在したりし事(五)書中メサヤの希望なく、光明に滿てる終末論なきは、アンナオカス追慕以前に書かれたる者の如く思はる事、及び(六)書中の牧師的倫理的調子が前第一世紀頃書かれたる他の書に類似せる事等より、前第二世紀頃書かれたる者也と一般に推定せらる。

トブラダイー Augustus Montanus

人名
Toplady, Augustus Montanus
一七四〇—一七八 英國の讚美歌作者。サレリーのフアンナムに生る。一七五五年愛蘭の一農舎にて靈

トの部

トマス

性を醒まし、五八年神恩の教義に就て明白なる見解を有するに至れりと云ふ。六二年按手禮を受け、六八年より終生アボンシヤのブロード・ヘム・ホーリーの司牧たりき。一七七四年「アルミニウス説の非難」より英國教會を離脱す。を公にし、又政教集を出し「福音雜誌」に寄稿す。其の全集は所謂時代を抜き進み、論争に最も正直なるを示せり。彼の才は非常に早成にして、一七五九年十九歳の時に「聖書の詩」百五十六頁をダブリンより出した。中に非常に尊ぶべき讚美歌少からず。一八六〇年のセザイヤ版はトブラダイーの讚美歌全句を採りたる最初の版なり。彼の才と熱誠とは何人も疑ふ能はず。チャールズ、ウエズレーと同時代に相並びて讚美歌界の明星なりき。兩者は凡ての點酷似し、唯ウエズレーは感情的なる點優り、トブラダイーは教義的なる點優れるを異れり。神の預定に就てウエズレーはアルミニウス説を取り、トブラダイーはカルゲイン説を取りしため、他の點は悉く一致せしに拘はらず、兩人は其の間柄甚だ善からざりき。有名なる「ちこそ」の原稿我身を圍め(Behold of myself for me)はトブラダイーの作歌なり。

トマス

トマス・アクイナス(又アクイノのトマス) Thomas Aquinas (or Thomas of Aquino) 人名
一二二五又は一二二七 七四 有名なる煩瑣哲學者、羅馬教會の辯護者。以太利ナポリより遠からぬアクイノ附近のロツカ、シツカ城に生る。家は貴かりしが、五歳にしてカシノ山の僧に托せられ、十歳にしてナポリに行き、十六歳にしてドミニコ派に入る。家族は之に反對せしが、法王インノセント四世の干渉に由り其の志を貫くを得たり。一二四五年ケルンに送られアルベルトス、マアムスの教育を受け、師より注意せられてアリストテレーの哲學及びアラオ山のアオクシオ文書を研究す。四八年巴理の神學士とせられ、同年ケルンにて講義をなし、更に巴理に歸り、學生の大群衆に講義す。法王ウァレノス四世は屢々高僧とせんせしむるを辭し、クレメンヌ四世の法王位中(六八年迄)は羅

トマス

馬、ボロニヤ、巴理にて教授す。七二年法王の命でカルロス王の顧問に由り、ナポリに於て教授す。晩年は重に「スムマ・テオロギヤ」の著作に從事せり。キオン會議に赴かんとして途中に死す。一三二三 法王ヨハニス二十二世より聖者とせらる。アクイナスは唯に聖者を得べき生涯と事業とを有せる人なりき。彼は敬虔にして、俯仰の味あれ共決して飾りなく、著書講義の前者は祈りなせり。キイ九世は屢々彼に政事を謀りぬ。彼の勤勞は無量なりき。一五六七年には法王ピロリス五世を教會の博士としてアクアスチヌス、イェロニムス、アマロジウス等と列せしめ、一八七九年レオ十三世は全世界の天主教神學校に命じて、彼の宗教及び哲學的教訓の基礎に依り彼の著作を取るべきを勸め、彼の政治説をば社會を保つに適當する者と言へり。彼は特に「天使的學者」と呼ばる。

トマス

神學に於てアクイノのトマスは或點に於て煩瑣哲學の絶頂に達したる者なり。彼は神學を哲學以上に置かんせしが、之と共に理性を用ひて知られ得る宗教真理と、唯だ天啓に依りのみ知らるべきものを區別することに依り、神學と哲學とを調和せんとしたり。教會の信條は彼には絶対の真理なりき。されど教會の教師の議論は唯だ信條して可なるものとして用ひ、他の煩瑣哲學者よりは多く聖書を引きたり。此は唯だ自己の説の用に供したるまでなりき。聖書の解釋に就ては文字通りの解釋を取りしが、教會の權威より獨立せる自由解釋をば試むる能はざりき。神の存在に關するアンセルムスの終局的證明は彼の許さざりし所、彼は因果論及び目的論より之を試み、且曰く、理性は神ありと證すれ共、其の性質をば發見する能はず、神は睿智にして意志なり、第一原

トマス

因なり。思想と意志とは神の存在格より離すべからず。神は絶対的統一なり、單純なり。三位一體は眞なり。されど神の中の三位の區別を發見するは理性の能くせざる所なり。世界は神よりの分出なり。されど神の活動的意志に原因す。神の活意は活知に外ならず。此は又第一原因として働ける神の實質に外ならず。世界は始めありしならん。されど此は論ずべからず。知るべからず。選びと罰とは神の命令に在ることなり。凡ての物皆神の攝理の中に在りて、終局的の目的を達せんとすべしなり。選びと罰との數は預め定まれるならん。されど罰は神の活動的行動に非ず、其の成るに委せある事なり。神は罪の原因に非ず、神は唯だ惡を有す。人は自己の意志に由りて墮落せしなり。亞利比亞哲學者の或く所と異り、第二原因は影響を與ふるものなり。神は第二原因を介して働けり。意志には功罪の二傾向の何れをも選び得るの力あり云々。

論じ、聖職の題包と葡萄酒が基督の肉と血に化するを主張し、直に教訓の効力を論じ、其の効力は之を受くる者に依らず、教會の意志權威に依りて生ずとす。此は生者のみならず死者にまで及ぶと論じ、來世論に於ては煉獄及び聖徒の仲保の教義を説き、肉體の復活と未來の祝福とを説き、復活せる肉體は現在の肉體と異なり爪に至るまで同一なりと云へり。トマスは倫理學者として大なりき。ネアンデルはアリストテレスに次ぐ倫理學者なりと云へり。去れど彼は此點に於ても教會の子なりき。彼は當時の教會の思想に従つて多くの無用の小事を詳論せり。されど此の小事の方面には頗る控へ目に論じて大なる問題を深切に明白に論明せること多し。アタイナスの死後其の神學に就ては争論起り、ダンス、スコラス反對の首領たり。ドミニコ派はアタイナスに與ひ、此派をトマス(トマス派)と呼び、フランシスコ派はスコラスに與ひし之をスコラスト(スコラス派)と呼べり。其の教義の相違せしに非ず、唯だ其の教義の立て方相違せしなり。スコラスには神學に實際的學問なり、アタイナスには思想的學問なり。論争は第十八世紀まで續けり。フランシスコ派のデ、ラダの「トマス派とスコラス派の論争」に記す所によれば、兩派の相違點八十六ありと云ふ。其の大なる相違は神の知り得べき事、神の屬性の區別、原罪、基督の功等に關するものなりき。マリア無垢胎に就てはトマスは肯定し、スコラスは肯定す。イエスイトはトマスに反對せしが、西班牙にてはサラマンカ、コイムブラ、アエカラの諸大學にトマス説行はれたり。羅馬教會は長くとトマスを徳とし、プロテスタント徒も其の文學的大才に感服したり。

トマスの福音。トマスの幼時の福音

トマスの著書の中なるは若き時の「ロムアニアのハトロスの宣言の註釋」(Compendium theologiae)、「Summa de veritate fidei catholicae」、「Summa totius theologiae」にして、註釋は舊約の一部及び保羅書翰、殊に福音書に關するもの價値あり。文書は全集とせられ居れり。英譯及び佛譯とされるものも多し。

トマス ア ケムビス 「ケムビス」の條を見よ。

トマス福音書 The Gospel of Thomas.

福音書 新約經外福音書中の一書。ヒッポリタスの書中に「トマス福音書」の福音書より引用せり。稱する「我を求むる者は七歳以上の小兒の中に我を發見すべし、何ぞなれば第十四のイオンの中にかくされたる我は顯はさるべければ也」(隠へる一語を載す。オウゲンも「トマスの福音書」に就て語り、ユラセビウスは此書を異端書の中に列せり。ユラセビウスのタリロスは福音書の中に「マニカイ教徒の書きたる「トマスの福音書」を數へ、此書は使徒の書きたる者に非ずして、マニの弟子の書きたる者は讀む可らずと云へり。マニカイ教徒の福音が「トマス福音書」如何なる關係を有したりしや明ならず。「トマスの幼時の福音」が「トマス福音書」の手に成りし者なるは確かなれ共、もし此二書全く獨立せる者也とせば、一が基督幼時の物語より成り、他が小兒に關し基督の云ひたりしと稱する言を記せるは寧ろ奇異也とせざる可らず。「トマスの福音書」の條參照)。

トマス幼時の福音書 The Childhood Gospel of Thomas.

福音書 新約經外福音書中の一書。此書は基督幼時の不思議なる物語を記せる者にして、初代基督教會にて廣く讀まれたる者也。現

トマス

今にては福音書と云はず、一般に「幼時の福音書」(Infancia sui christi)と稱せらる。此書は元來ノスタック派の用ひたりし福音書にして、ヒッポリタス及びオウゲンの言及せる者同一なること疑ふ可らず。現形に於ては此書はノスタック派の手に成りたる長き福音書より抜抄せる物語を編輯し、ノスタック派を著したる者著きたる者なること明也。書中尙ノスタック的思想の形跡を存す。幼童なる基督が驚くべき奇蹟を行ひ又彼が不可思議なる智識を有したりと云へる物語は、彼等が之に依りて基督は此世に關する者に非ず、故に幼童として人類の制限及び發達以外に在り、幼童乍ら尙人の教師を教導するの智識を有したりと云へる其特殊の説を維持せんとして作りたる者也。ヒッポリタスの引用せる一句(トマス福音書)の條を見よ。は蓋しノスタックの語を基督の口に置きたる者也。此書現形に於ては第三世紀より以前に成りたる者に非ず。

トムソン ジョセフ パーリー Thompson, Joseph Parish, D. D., LL. D.

人名 一八一九—七九 米國の牧師、神學者、ヒラデルヒアに生る。一八三八年エール大學を卒業し、四〇年按手禮を受け、四五年より紐育市アロードウェー、メナタル教會の牧師たり。七一年病の故に辭し獨逸に行き柏林にて死す。一八四三年五人の紳士と共に「ニウ、インデペンダー」誌を起し、四八年にはレオナード、ペーコン、ジョシヤ、リッゲット、リチャード、エス、ストルスの諸博士と共に週刊「インデペンデント」を起し宗教政治に關して大なる感化を與ふ。トムソンは十四年間其の編輯に就て重なる責任を負ひたり。此の外に彼は尙多くの著作をなし九十種に及びしが「基督の言に於

トムソン

ける其の神學」國民としての合衆國各衆國に於ける國家と教會」等はその大なるものなり。教會三十二年間彼は説教者として其の非凡の能を顯はせしが、而も其の業に忠にして曾て説教の聖職を造ることを志し事なし。基督のため成功し、其教會は福音中にて最大にして最も知力の進めるものとなりぬ。彼は又外國宣教學に力を盡し、慈善及び社會事業にも同情せり。奴隸制度の廢止には彼の功ありて甚だ多きに居れり。廢止主義尙其に對し、一般に不人望を極め、宗教新聞雜誌すら之に反對せし時、彼は他人の敢てせざる所を斷行し、自己の教會との關係をも政治との關係をも一切無視して、教會に極力議論したり。同時代の人に彼は此の主義を以て思想界を感化したる人はなしと信せらる。南北戦争の間には一般の自由と共に合衆國の維持を主張し、身を以て之のために盡し、衛生民團の委員として北軍訪問中健康を害し、七一年教會を辭して外國に遊ぶの已むなきに至れり。曾て埃及に遊びし時、一八五三年より埃及學に興味を抱き、ローマの一生と時代とに就て大著作をなさんと企て、柏林に行きしも之に費するのために、何時までも中止の心はなかりしも、彼の性質は活問題に無頓着なる能はざりしものから、獨逸に諸方面の事情、米國の制度の辯護と米國思想の説明を促すを覺え、乃ち之に従ひ歸りて獨逸を離れ歸國せられたり。彼は一人にして何等の爵位勳章等たりしも政治家學者等其周圍に集り、年々米人禮拜堂に招かれて感謝演説をなせり。七三年の冬にはコネルニウス誕生四百年祭に當り、米國地理學協會を代表してトルンに行き、柏林に在りしアカシス、ブライアント、ペーアード、テローレルの記念會にても演説せり。萬國法改正協會の會には常に

トラ Trach. 術語 希伯來語「律法」の義「律法」の條を見よ。

トラクテリヤン Tractarian. 「牛津運動」の條を見よ。

トラフニチ Trachonitis. 地名 聖書中路三の一にのみ記さるる所の地名にして、分封の君ヒッパの領地なりき。トラフニチは元來希羅語のトラコン(岩石多き土地の義)地方の義にして、ダマスコの東南岩石多き地方を指すの名也。

トラピスト派 The Trappists. 僧派名 一四〇年ベルシェのロトバ伯(Count Rotrou)の立てたるシトー派僧院より起る。此の僧院は「ノートル、マム、ド、ラ、メーソン、アム」を稱し、温氣多き不健康地の谷間に在り、廣く石途にて之に造す。此を以て「ラ・トランプ(黒石)の名ありき。此の状態にて第十七世紀の中頃まで續きしが、其時僧院は十歳の少年たりしドミニコ、アルマンド、ジャン、ル、ブーアイヤエ、ド、ランセーの手に落ちたり。此人精神的の才ありしも、一時肉慾に耽り居

トラクトラコトラビ

